

⑧群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第222集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第47集

白倉下原・天引向原遺跡Ⅴ

—甘楽パーキングエリア地内遺跡の調査—

奈良～江戸時代本文編

1 9 9 7

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

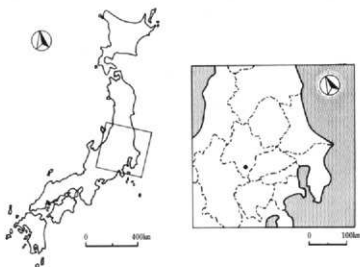
資料	財文化埋藏馬群助 保管團藝香謝	01-321 57
99- No.0218	平成11年4月8日	1(5)

群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第222集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第47集

白倉下原・天引向原遺跡V

—甘楽パーキングエリア地内遺跡の調査—

奈良～江戸時代本文編



1 9 9 7

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団



郷川流域を中心とした群馬県の地形（南から）（郷塚邸氏県文化財保護課職員原画）



遺跡を南から望む



遺跡地の現況と周辺の地形（北から）



天引C区出土鉄鐔



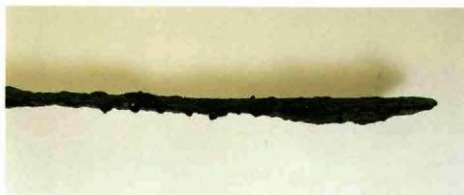
火 舎 (天引38住10)



〔福天寺〕墨書土器 (天引89住2)



軒丸瓦 (天引89住10)



白倉B区36号住居出土の鋸



【新井】白倉B区95住15 墨書



【上奥】天引33住4 墨書



【高瀬】白倉B区谷124 刻書



【牛】白倉B区谷161
へら書き



【午】白倉B区6溝5 墨書

本遺跡出土の文字資料



暗文土師器 (白倉B区谷53)



天引B区5号土坑出土墨書土器 (可)



白倉C区22号住居出土土器



11世紀の皿



遺構外出土の青磁と白磁 (P.L10 1~6)



縄文時代の石器・石製品（補遺）



縄文時代の装身具とその素材（補遺）



弥生時代の玉類（補遺）

序

関越自動車道藤岡ジャンクションから分岐して長野・新潟に向かう上信越自動車道は、平成8年11月に長野市まで開通するところとなりました。この高速自動車道は、群馬西部の藤岡市から富岡市にかけては鍋川が形成した河岸段丘と、それに連なる美しい丘陵上を走ります。

この河岸段丘や丘陵上には、数多くの遺跡が分布することで知られています。その一つである甘楽郡甘楽町の白倉下原・天引向原遺跡も、上信越自動車道建設にかかわる発掘調査によって旧石器時代から中・近世以降に至るまでの各時代の遺構・遺物が発見され、古代から連綿と続く人々の営みを知ることができます。

本遺跡の発掘調査による成果は、既に旧石器時代から弥生時代編として『白倉下原・天引向原遺跡』Ⅰ～Ⅲ刊行し、古墳時代後期編として『白倉下原・天引向原』Ⅳの刊行に努力しております。『白倉下原・天引向原遺跡』Ⅴはその後に続く、8世紀以降の遺構・遺物を中心とする奈良・平安時代編として報告いたします。

本書では、多数の住居跡や掘立柱による建物跡の他に、古代寺院跡、「新井・午、福天寺」などの地名や寺院の存在を示す墨書土器、鋸、鉄鐮などのめずらしい資料を掲載しています。

白倉下原・天引向原遺跡の最終の報告書となる本書が刊行されることにより、研究者をはじめ、社会教育・学校教育に広く活用され、この地域の歴史を解明する上で一助となれば幸いと存じます。

また、発掘調査・整理事業を進めるにあたって、日本道路公団・群馬県教育委員会・甘楽町教育委員会をはじめとして、関係された諸機関の皆様の暖かいご援助・ご協力に厚く感謝し、序といたします。

平成9年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 **小寺弘之**

例 言

- 1 本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「白倉下原・天引向原遺跡」^{しらくくしほら たまひむかひら}（事業名称原西Ⅰ、原西Ⅱ、原西）の発掘調査報告書である。
本書は白倉下原・天引向原遺跡の奈良時代以降を取り扱っており、「白倉下原・天引向原遺跡」Ⅴとして本文編、写真図版編、遺物観察表編の3分冊となっている。「同」Ⅰは旧石器時代編、「同」Ⅱは縄文時代編、「同」Ⅲは弥生～古墳時代編として既に刊行されており、本報告書Ⅴとともに、「同」Ⅳ古墳時代後期を取り扱った報告書が刊行される。
- 2 白倉下原遺跡は群馬県甘楽郡甘楽町大字白倉字下原地内、天引向原遺跡は同大字天引字向原地内に所在し、遺跡名は大字名と小字名を採用している。
- 3 本遺跡の発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
- 4 実際の発掘調査は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された、関越自動車道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台に所在）が担当した。
整理事業は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（勢多郡北橋村大字下箱田に所在）が担当した。
- 5 調査期間及び担当者（職名はその年度における職名を示し、必要に応じて現職を記した）。

(1) 発掘調査

調査期間	平成元年4月1日～平成3年8月20日
調査担当者	右島和夫（平成元・2年度 専門員） 藤巻幸男（〃元年度 主任調査研究員） 飯田陽一（〃2・3年度 主任調査研究員） 内本真琴（〃元年度 調査研究員、現群馬県立前橋工業高等学校教諭） 小島達夫（〃元・2年度 調査研究員、現エクスアドル日本人学校教諭） 小林裕二（〃2年度調査研究員、現群馬県立前橋西高等学校教諭） 木村 收（〃2年度 調査研究員） 亀山幸弘（〃3年度 調査研究員、現伊勢崎市立北小学校教諭） 櫻井美枝（〃3年度 調査研究員） 関口博幸（〃元年度 調査研究員、現安中市立第二中学校教諭） 大橋初子（旧姓飯塚）（〃元・2年度 調査研究員、現群馬県社会福祉課）
嘱託員	外山政子（〃元・2・3年度 現法政大学修士課程在学中）

(2) 整理事業

整理期間	平成6年4月1日～平成9年3月31日
整理担当者	藤巻幸男（平成8年度）、木村 收（平成6～8年度）

- ### (3) 事務
- | | |
|-----------|----------------------------------|
| 常務理事 | 邊見長雄（平成元～4年度）、中村英一（平成5～7年度）、菅野 清 |
| 事務局長 | 松本浩一（平成元～3年度）、近藤 功（平成4～6年度）、原田恒弘 |
| 管理部長 | 田口紀雄（平成元・2年度）、佐藤 勉（平成3～5年度）、蜂巣 実 |
| 調査研究部担当部長 | 神保脩史（平成元～7年度）、赤山容造（平成8年度） |
| 調査研究部担当課長 | 岸田治男（平成6・7年度）、平野進一（平成8年度） |

総務課長	斎藤俊一（平成6年度）、小淵 淳
総務課	国定 均（平成6・7年度係長代理、平成8年度係長）、笠原英樹（平成6・7年度係長代理、平成8年度係長）、須田朋子（主任）、吉田有光（主任）、柳岡良宏（主任）、高橋定義（平成6・7年度主事）、宮崎忠司（平成8年度主事）、非常勤嘱託員 大澤友治

関越自動車道上越線調査事務所

所 長	高橋一夫（平成元・2年）、阿部千明（平成3年4月～11月 故人） 松本浩一（平成3年12月～平成4年3月）、吉田 肇（平成4・5年度）
総括次長	片桐光一（平成元年度）、大澤友治（平成2・3年度）
次 長	徳江 紀（平成元・2年度）
庶務調査課長	依田治雄（平成4・5年度）
課 長	鬼形芳夫（平成元・2年度）、依田治雄（平成3年度）
庶務課	係長代理 宮川初太郎（平成元・2年度）、主任 国定 均（平成元年度）、主任 笠原秀樹（平成2・3年度）、主任 吉田有光（平成4・5年度）

6 報告書作成関係者

編 集	藤巻幸男、木村 收
本文執筆	宮崎重雄（V-4）、木村 收（I、II、III-1、2、VI-1、2、5、VII-3）、鶴バロ・ラボ（V-1、2、VII-4、5）、藤巻幸男（上記以外）
遺構写真	発掘担当者
遺物観察	観察表 藤巻幸男と黒澤はるみ（白倉C区を除く）、木村 收（白倉C区） なお、土器の年代観については中沢 悟、坂口 一、神谷佳明、桜岡正信（当事業団専門員）の意見によるところが大きいが、最終的な責任は編集者にある。また、出土文字資料の釈文を中心に、白倉C区については高島英之氏（群馬県教育委員会文化財保護課）に、他の地区については関口功一氏（群馬県立前橋南高等学校）にご教示いただいた。
保存処理	関 邦一（当事業団技師）、土橋まり子（当事業団非常勤嘱託員）、小村浩一、小沼恵子、萩原妙子（当事業団補助員）
遺物写真	佐藤元彦（当事業団技師）
整理補助	平成6～8年度 高橋裕美、渡部あい子、狩野芳子、清野幸子、若海美奈子（旧姓林） 狩野弘子 平成6年度 長岡和恵、平成6・7年度 高瀬真由美、平成8年度 山田キミ子（以上原西 平成6・7年度、平成8年度 原西I） 黒澤はるみ（嘱託員）、笠井初子、狩野君江、田中のふ子、大澤亜矢子、加藤和子、横尾智子（以上平成8年度 原西II）
木器実測及びプレバート作成	平成5年度 高橋真樹子、高橋節子、五十嵐由美子、伊東博子（当事業団補助員）
器械実測	平成6～8年度 長沼久美子（当事業団嘱託員）、伊藤淳子、千代谷和子、岩瀬節子、南雲光子、光安文子、萩原光枝、立川千栄子（当事業団補助員）

7 委託関係

遺構図全体測量	鶴三陽測量（一部）、鶴シン技術コンサル
全体図素図	鶴シン技術コンサル

白倉C区を除く小形土器実測 前橋文化財研究所

航空写真 前青高館、前シン技術コンサル、たつみ写真スタジオ

トレース 御測研

種子、炭化材、木製品の同定と上記本文 前パレオ・ラボ

水場・池出土遺物分布図と補遺縄文～弥生土器分布図 前システム提案

- 8 石材鑑定は飯島静男氏（群馬地質研究会）にお願いした。

出土人骨及び獣骨については、宮崎重雄氏（群馬県立大間々高等学校）に本文も含め鑑定をお願いした。

- 9 出土した遺物や図面に関しては、群馬県埋蔵文化財調査センターに一括して保管してある。

- 10 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸機関・諸氏に御教示・御協力をいただいた。記して謝意を表する次第である。（敬称略、五十音順）

甘楽町教育委員会、甘楽町農業協同組合、甘楽町白倉地区と天引地区の地権者、小安和順

- 11 発掘調査従事者

飯塚弘美、牛込かね代、浦辺重代、小柏さきみ子、小山田光代、加藤あい子、加辺幸子、黒沢とき、斎藤吉江、鈴木みや、関口治郎、関口とみ子、久保みち子、高木とり、谷川あさ子、長岡裕治、布瀬川はつ子、布瀬川まさ子、堀口文内、松井昭子、宮前美恵子、森田たか子、山崎章子、山崎和子、山崎丈輝、山田けさ、横山フサ、太田順子、小沢清次、小野秀雄、金田エミ子、金田和子、金田子之吉、久保初江、桜井康弘、神保賢治、関口嘉一、関口エイ、高木甚三郎、布瀬川千代松、堀越みな子、松井みよ子、向井まさ江、山田長治、吉井秀雄、堀口巖、秋山いね子、高田ウタ子、鈴木いせ、山田文子、吉田さく、吉田徳重、吉田をとの、落合和子、山崎甲子郎、設楽とめ、大河原初枝、吉田ナツ、黒沢清子、森平幸子、長岡三郎、設楽う志、安藤ハツエ、高橋弘、設楽まつ江、田中洋子、鈴木日出子、小川美佐子、己斐智子、高田文子、小沢剛、浅川啓子、井上慎也（以上、原西Ⅰ遺跡班）

岸今朝義、寺尾久吉、福田一男、折茂七郎、神保利政、仲沢一郎、三木伴次郎、吉田一二三、神保光明、塚越 進、黒沢章一郎、古館 明、田中和満、木村利雄、古館繁男、堀越伴吾、山崎 明、古口三郎、山崎常夫、浦辺保司、神保君江、千代延八重子、黒沢千代子、春山米子、加部まき江、真加部鈴枝、酒井とし子、福田とみ、黒沢フジミ、堀越美恵子、神保和子、峰岸百合子、関口いちゑ、加藤秀子、箭原慶子、白井さ津き、加部恵美子、堀越智子、田中みつ江、須田シゲ子、滝上光代、春山ふさ江、安藤さく、小林美枝子、小林さん、斎藤淑江、浦辺ふさの、神保京子、堀越よし、金田あい子、新井すみ子、清水直美、林 かつ、柿田久枝、折茂すい、関口伸江、寺尾フジ江、田村ハツ子、芝塚なみ、西みよ子、高橋時枝、富田房三郎（以上、原西Ⅱ遺跡班）





凡 例

1. 本報告書は、「本文編」「遺物観察表編」「写真図版編」の3分冊と付図からなり、遺物の観察表と遺構及び遺物写真は別冊となっている。この分冊は本文編にあたり、本文編は前半に各遺構及び遺物の説明を行い、後半に遺構・遺物図版を掲載する構成となっている。前半に用いられる挿図については☆図、後半に用いられる挿図については図☆と呼称する。
2. 挿図中に使用した方位記号の方向は座標北を指す(国家座標IX系)。また、竪穴住居跡の主軸は、カマドを有する壁に直交する住居中心線を主軸とし、カマド方位が住居主軸と大きく異なる場合には別途、カマド方位を記載した。
3. 竪穴住居の面積は、1/20の平面図上で住居のうわば線上をプランメーターで2回計測した平均値を使用した。
4. 各遺構の長さ(計測値)は、遺構のうわばを計測している。また、カマドについては、壁を掘り込んでいるものや両袖石が確認されているもののみ内側を計測して、焚口幅とした。さらに、袖石が検出された事例にのみ、床面と袖石頂部の比高を計測して焚口高とした。
5. 竪穴住居跡の遺構図の縮尺は1/60とし、カマド図については1/30となっている。その他の遺構図面及び遺物の縮尺は、各図中に表示してある。また、生活什器である甕や坏については、1/4縮尺を原則としたが、整理作業工程との関係から、白倉C区のみ、甕類1/4、坏類1/3となっている。

6. 遺物実測図中における表示は次のことを意味する。

 黒色土器、ススや油煙など
  釉薬範囲
  砥石などの研ぎ面

7. 遺構図面中における表示は、個別図にことわりがないかぎり次のことをあらわす。

 焼土
  粘土
  As-A
  As-B

● 土器、土製品 ■ 石器、石製品、礫 ▲ 炭化材 □ 鉄器、鉄滓
 白倉C区のみ ○ 縄文、弥生土器 △ 縄文、弥生石器 ★ 陶磁器

8. 遺構及び遺物の計測値について

- (1) () 内の計測値は、推定値を示す。
- (2) < > 内の計測値は、残存値を示す。
- (3) 一となっているものは、計測不可能もしくは不必要と判断したものである。

9. 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

- (1) 石器類の重量は全て残存値を示す。
- (2) 胎土中の砂粒の大きさは、> 2mm=礫、2~0.02mm=砂、とした。
- (3) 土色については、農林省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修の新版標準土色帖に基づいている。

10. 本文中の第1図に使用した地図は、国土地理院200,000分の1地勢図であり、第5図に使用した地図は、国土地理院25,000分の1地形図「上野吉井」「富岡」である。また、第4図に使用した地図は、甘泉町都市計画図(2,500分の1)を原図としている。

11. 個別遺構図において、該当する遺構を切る遺構については、うわば線のみを表現し、したば線については表現しなかった。

本文編目次

例 言

凡 例

本文編 目次

本文編 遺構・遺物図版目次

本文編 挿図・表目次

遺物観察表編 目次

写真図版編 目次

抄 録

I 発掘調査の経過	3		
1 発掘調査に至る経過	3		
2 発掘調査の方法と経過	4		
(1) グリットの設定	(2) 発掘調査の方法	4	
(3) 発掘調査の経過	(4) 整理計画と経過	6	
II 立地環境と発掘区の概要	8		
1 地理的環境	8		
2 歴史的環境	10		
3 基本土層	16		
4 発掘調査区の概要	17		
(1) 旧石器時代	(2) 縄文時代	(3) 弥生時代	17
(4) 古墳時代	(5) 奈良～平安時代	(6) 中近世以降	20
III 奈良・平安時代の遺構と遺物	23		
1 遺構と遺物の概要	23		
(1) はじめに	(2) 遺構について	(3) 遺物について	23
2 竪穴住居跡	27		
3 掘立柱建物	85		
4 井 戸	86		
5 土 坑	89		
6 溝	95		
7 寺 院 跡	96		
8 焼土遺構	105		
9 畠	105		
10 池・水場	105		

11 天引F区谷	110
IV 中・近世の遺構と遺物	114
1 遺構と遺物の概要	114
2 柱 列	114
3 土 坑	118
4 墓	119
5 溝・道	120
6 畠・水田	122
V 出土遺物の理科学的分析	123
1 竪穴住居跡出土炭化材の樹種分析	123
2 出土種実の分析	131
3 出土木製品の樹種分析	133
4 出土人骨・獣骨の分析	141
VI 成果と問題点	146
1 出土土器の遺構間接合事例について	146
2 奈良・平安時代の土地利用(竪穴住居跡分布)変遷	154
3 出土文字資料について	164
4 本遺跡で確認した古代寺院跡について	178
5 出土鉄鐔について	180
6 白倉B区36号住居出土の鋸について	182
VII <補遺> 縄文～古墳前期の遺構と遺物	184
1 縄文～古墳時代前期の土坑	184
2 縄文～古墳時代前期の遺物	184
3 縄文時代の土器分布	184
4 出土種実の分析	185
5 出土炭化材の樹種分析	186

遺構・遺物図版

図1～図307

発掘報告書抄録

付 図

本文編 遺構・遺物図版

奈良・平安時代

- 図1 白倉A区6号・13号住居跡
図2 白倉A区9号・16号住居跡
図3 白倉A区12号住居跡
図4 白倉A区18号・38号住居跡
図5 白倉A区39号・40号住居跡
図6 白倉A区49号住居跡
図7 白倉A区50号住居跡
図8 白倉A区51号・56号住居跡
図9 白倉A区60号住居跡
図10 白倉A区63号住居跡
図11 白倉A区63号住居跡
図12 白倉A区63号・69号住居跡
図13 白倉A区68号・71号住居跡
図14 白倉A区70号・75号住居跡
図15 白倉A区79号・90号・98号・119号住居跡
図16 白倉A区100号・102号住居跡
図17 白倉A区108号・118号住居跡
図18 白倉A区111号・62号・120号住居跡
図19 白倉B区1号・2号・4号住居跡
図20 白倉B区6号・8号住居跡
図21 白倉B区11号・15号住居跡
図22 白倉B区18号住居跡
図23 白倉B区19号・31号住居跡
図24 白倉B区32号・36号住居跡
図25 白倉B区39号住居跡
図26 白倉B区39号・40号・41号住居跡
図27 白倉B区44号・46号住居跡
図28 白倉B区48号住居跡
図29 白倉B区53号・57号住居跡
図30 白倉B区57号・60号住居跡
図31 白倉B区60号・64号住居跡
図32 白倉B区67号住居跡
図33 白倉B区66号・68号住居跡
図34 白倉B区68号・76号・77号住居跡
図35 白倉B区79号住居跡
図36 白倉B区80号住居跡
図37 白倉B区80号・81号住居跡
図38 白倉B区83号住居跡
図39 白倉B区83号住居跡
図40 白倉B区90号住居跡
図41 白倉B区95号住居跡
図42 白倉B区95号・92号住居跡
図43 白倉C区10号住居跡
図44 白倉C区10号住居跡
図45 白倉C区20号・24号住居跡
図46 白倉C区22号住居跡
図47 白倉C区23号住居跡
図48 白倉C区26号・27号・29号・43号住居跡
図49 白倉C区31号住居跡
図50 白倉C区49号・41号住居跡
図51 白倉C区44号住居跡
図52 白倉C区44号・51号住居跡
図53 白倉C区45号住居跡
図54 白倉C区45号・54号住居跡
図55 白倉C区46号住居跡
図56 白倉C区36号・59号住居跡
図57 白倉C区57号住居跡
図58 白倉C区63号住居跡
図59 白倉C区64号・67号住居跡
図60 白倉C区66号・70号住居跡
図61 白倉C区68号住居跡
図62 白倉C区69号・71号住居跡
図63 白倉C区73号・75号・87号住居跡
図64 白倉C区83号住居跡
図65 白倉C区92号・93号住居跡
図66 天引地区3号住居跡
図67 天引地区8号・9号住居跡
図68 天引地区14号・15号住居跡
図69 天引地区17号住居跡
図70 天引地区26号・29号住居跡
図71 天引地区27号住居跡
図72 天引地区32号・33号住居跡
図73 天引地区36号・37号住居跡
図74 天引地区38号・39号住居跡
図75 天引地区40号・41号住居跡
図76 天引地区45号・63号住居跡
図77 天引地区49号・67号住居跡
図78 天引地区64号住居跡
図79 天引地区66号・70号住居跡
図80 天引地区68号住居跡
図81 天引地区72号・75号住居跡
図82 天引地区76号・79号住居跡
図83 天引地区80号・81号住居跡
図84 天引地区82号・86号住居跡
図85 天引地区83号・93号住居跡
図86 天引地区89号住居跡
図87 天引地区92号住居跡
図88 天引地区95号・102号住居跡
図89 天引地区98号住居跡
図90 天引地区111号住居跡
図91 天引地区113号住居跡
図92 天引地区113号・120号住居跡
図93 天引地区123号・128号住居跡
図94 天引地区126号住居跡
図95 天引地区130号住居跡
図96 天引地区130号・139号住居跡
図97 天引地区133号住居跡
図98 天引地区140号住居跡
図99 天引地区145号住居跡
図100 白倉A区6・9号住居出土遺物
図101 白倉A区9・12・13号住居出土遺物
図102 白倉A区16・18・38号住居出土遺物
図103 白倉A区38・39・40・49号住居出土遺物
図104 白倉A区49・50・51・56・60号住居出土遺物
図105 白倉A区63号住居出土遺物
図106 白倉A区68・69・70号住居出土遺物
図107 白倉A区75・79・90・98・100号住居出土遺物
図108 白倉A区100・102・108・118・119号住居出土遺物
図109 白倉A区111・62・120号住居出土遺物
図110 白倉B区1・2・4号住居出土遺物
図111 白倉B区4・6・8号住居出土遺物
図112 白倉B区11・15号住居出土遺物
図113 白倉B区15・18号住居出土遺物
図114 白倉B区19・31・32号住居出土遺物
図115 白倉B区36号住居出土遺物
図116 白倉B区36号住居出土遺物
図117 白倉B区39号住居出土遺物
図118 白倉B区39号住居出土遺物
図119 白倉B区40・41・44号住居出土遺物
図120 白倉B区46・48・53・57号住居出土遺物

- 图121 白倉B区57号住居出土遺物
 图122 白倉B区57号住居出土遺物
 图123 白倉B区66・64号住居出土遺物
 图124 白倉B区66・67号住居出土遺物
 图125 白倉B区67・68号住居出土遺物
 图126 白倉B区68・76・77号住居出土遺物
 图127 白倉B区79・80号住居出土遺物
 图128 白倉B区80号住居出土遺物
 图129 白倉B区81・83・90号住居出土遺物
 图130 白倉B区90・92・95号住居出土遺物
 图131 白倉B区95号住居出土遺物
 图132 白倉C区10号住居出土遺物
 图133 白倉C区10号住居出土遺物
 图134 白倉C区20・22・23号住居出土遺物
 图135 白倉C区23・24号住居出土遺物
 图136 白倉C区26・27・28・31号住居出土遺物
 图137 白倉C区31・40・41号住居出土遺物
 图138 白倉C区43・44号住居出土遺物
 图139 白倉C区44・45号住居出土遺物
 图140 白倉C区45号住居出土遺物
 图141 白倉C区45・46号住居出土遺物
 图142 白倉C区51・54・56・57号住居出土遺物
 图143 白倉C区57号住居出土遺物
 图144 白倉C区59・63・64・66号住居出土遺物
 图145 白倉C区67・68・69号住居出土遺物
 图146 白倉C区69・70・71号住居出土遺物
 图147 白倉C区73・75・83号住居出土遺物
 图148 白倉C区83・87号住居出土遺物
 图149 白倉C区87・92号住居出土遺物
 图150 白倉C区92・93号住居出土遺物
 图151 天引地区3・8・9・14・15号住居出土遺物
 图152 天引地区17・26・27号住居出土遺物
 图153 天引地区27・29・32・33号住居出土遺物
 图154 天引地区33・36・37号住居出土遺物
 图155 天引地区38・39号住居出土遺物
 图156 天引地区39・40・41号住居出土遺物
 图157 天引地区41・45号住居出土遺物
 图158 天引地区45・49号住居出土遺物
 图159 天引地区49・63・64号住居出土遺物
 图160 天引地区64・66号住居出土遺物
 图161 天引地区66・67・68号住居出土遺物
 图162 天引地区68・70・72号住居出土遺物
 图163 天引地区70号住居出土遺物
 图164 天引地区75・76・79号住居出土遺物
 图165 天引地区80・81号住居出土遺物
 图166 天引地区82号住居出土遺物
 图167 天引地区83・86号住居出土遺物
 图168 天引地区86号住居出土遺物
 图169 天引地区86号住居出土遺物
 图170 天引地区89号住居出土遺物
 图171 天引地区89号住居出土遺物
 图172 天引地区89・92号住居出土遺物
 图173 天引地区92・95号住居出土遺物
 图174 天引地区98号住居出土遺物
 图175 天引地区98号住居出土遺物
 图176 天引地区98・102号住居出土遺物
 图177 天引地区102・111号住居出土遺物
 图178 天引地区111・113号住居出土遺物
 图179 天引地区113号住居出土遺物
 图180 天引地区120・123・126号住居出土遺物
 图181 天引地区128・130・133号住居出土遺物
 图182 天引地区133・139号住居出土遺物
 图183 天引地区139・140・145号住居出土遺物
 图184 白倉A区1号穴群
 图185 白倉A区2号穴群
 图186 白倉A区1号柱列・白倉B区1号・2号獨立柱建物
 图187 白倉B区3号・4号獨立柱建物
 图188 白倉B区5号・6号獨立柱建物
 图189 白倉C区1号・2号獨立柱建物
 图190 白倉C区4号・5号獨立柱建物
 图191 白倉C区7号・8号獨立柱建物
 图192 天引C区1号・2号獨立柱建物
 图193 天引C区3号獨立柱建物・1号柱列
 图194 白倉A区1号井戸
 图195 白倉B区1号・2号井戸
 图196 白倉C区1号・2号・3号井戸
 图197 白倉A区8号・9号・11号・12号・13号・14号土坑
 15号・19号・34号・35号・38号・40号土坑
 图198 白倉B区1号土坑
 图199 白倉B区3号・7号・8号土坑
 图200 白倉B区19号・21号・23号・26号土坑
 图201 白倉B区28号・29号・30号・32号・33号・136号土坑
 图202 白倉B区149号・151号・201号・232号土坑
 图203 白倉C区6号・7号・8号・20号・21号土坑
 136号・188号土坑
 图204 天引B区1号・2号・3号・4号・5号土坑
 图205 天引C区2号・6号・12号・13号土坑
 14号・15号・16号土坑
 图206 天引C区17号・18号・19号・20号・25号土坑
 图207 天引C区28号・30号・32号・35号・42号・43号土坑
 图208 天引C区33号・45号・49号土坑
 图209 天引C区36号・37号土坑
 图210 天引C区51号土坑
 图211 天引C区63号・64号・91号土坑
 图212 天引C区90号・101号・159号土坑
 图213 白倉B区4号・6号溝
 图214 白倉B区4号・6号溝
 图215 天引C区1号焼土遺構
 图216 天引B区浅間B 榎石埋藏品
 图217 天引F区浅間B 榎石下出土遺物平面図
 图218 白倉B区1号・白倉C区1・2号井戸出土遺物
 图219 白倉A区9・12・14・15・19号土坑出土遺物
 图220 白倉B区1・3・7・8・21・23・30号土坑出土遺物
 图221 白倉B区136・149・151・201・233号土坑出土遺物
 白倉C区6号土坑出土遺物
 图222 白倉C区7・8・20・21・136・188号土坑出土遺物
 图223 天引B区2・3号土坑出土遺物
 图224 天引C区6・7・19・25・28号土坑出土遺物
 30・32・33・35号土坑出土遺物
 图225 天引C区36・37・45・51・90号土坑出土遺物
 图226 天引C区91号土坑・1号焼土遺構出土遺物
 白倉A区2号穴群出土遺物
 图227 白倉C区3号・白倉B区4号溝出土遺物
 图228 白倉B区6号溝・天引F区谷出土遺物
 图229 天引A区寺院跡出土遺物
 图230 天引A区寺院跡出土遺物
 图231 天引A区寺院跡出土遺物
 图232 白倉B区池・水堀出土遺物
 图233 白倉B区池・水堀出土遺物
 图234 白倉B区池・水堀出土遺物
 图235 白倉B区池・水堀出土遺物
 图236 白倉B区池・水堀出土遺物
 图237 白倉B区池・水堀出土遺物
 图238 白倉B区池・水堀出土遺物

図239 白倉B区池・水堀出土遺物
図240 白倉B区池・水堀出土遺物
図241 遺構外出土遺物

中・近世

図242 白倉A区1号・2号柱列全体図
図243 白倉A区1号・2号柱列建物想定図
図244 白倉A区1号・2号柱列断面図
図245 白倉A区21号・22号・48号・49号・56号土坑
図246 白倉A区36号・37号・69号・白倉B区24号土坑
図247 白倉B区137号土坑
図248 天引C区142号・天引E区1号土坑
図249 白倉A区1号・2号・4号墓
図250 白倉A区3号・5号・6号墓
図251 白倉A区7号・8号・9号・10号墓
図252 白倉A区7号・8号・9号・10号墓断面図
図253 白倉A区11号・天引A区1号・天引C区2号墓
図254 白倉A区1号・2号溝・1号道
図255 白倉A区1号・2号・10号溝・1号道断面図
図256 白倉B区7号・11号溝
図257 白倉B区1号・2号・3号・7号溝断面図
9号・10号・11号溝断面図
図258 天引A区1号道
図259 天引B区1号溝
図260 天引B区1号溝断面図
天引C区2号・7号・8号・10号溝断面図
図261 天引A区1号畚
図262 天引A区1号畚断面図
図263 天引C区1号・2号畚
図264 天引C区3号・4号畚
図265 天引C区灰かき山
図266 天引D区溜池・水田・畚全体図
図267 天引D区溜池の水口
図268 天引E区遺構全体図
図269 天引E区遺構断面図
図270 白倉A区2号柱列・36・37・48号土坑出土遺物
図271 白倉A区48・56号・白倉B区24・137号土坑出土遺物
天引C区142号土坑・白倉A区6・10・11号出土遺物
図272 白倉B区7号・天引B区1号溝出土遺物
天引C区7号溝・天引E区1号道出土遺物
図273 白倉A区3・5号墓出土遺物
図274 白倉A区6・8・9号墓出土遺物
図275 白倉A区10号墓・天引D区溜池出土遺物
図276 遺構外出土遺物
図277 遺構外出土遺物

平安時代以降

図278 天引F区浅間B榎石下出土木器
図279 天引F区浅間B榎石下出土木器
図280 天引F区浅間B榎石下出土木器
図281 天引F区浅間B榎石下出土木器
図282 天引F区浅間B榎石下・天引D区溜池出土木器
図283 天引D区溜池出土木器
図284 天引D区溜池出土木器
図285 天引D区溜池出土木器
図286 天引D区溜池出土木器
図287 天引D区溜池出土木器
図288 天引D区溜池出土木器
図289 天引D区溜池出土木器

補遺

図290 縄文時代の土坑
図291 縄文時代の土坑
図292 縄文時代の土坑
図293 縄文・弥生時代の土坑
図294 弥生・古墳時代前期の土坑
図295 縄文時代の遺物
図296 縄文時代の遺物
図297 縄文時代の遺物
図298 縄文時代の遺物
図299 縄文時代の遺物
図300 縄文時代の遺物
図301 縄文時代の遺物
図302 縄文時代の遺物
図303 縄文時代の遺物
図304 縄文時代の遺物
図305 縄文時代の遺物
図306 弥生・古墳時代前期の遺物
図307 弥生・古墳時代前期の遺物

本文編挿図目次

第1図	白倉下原・天引向原遺跡位置図	1
第2図	グリッド配置図	5
第3図	御川流域の地質図	9
第4図	周辺遺跡と遺跡	12
第5図	周辺の遺跡	13
第6図	基本層序	16
第7図	奈良・平安時代の全体図	25, 26
第8図	白倉A区奈良・平安時代住居全体図	31
第9図	白倉B区奈良・平安時代住居全体図	32
第10図	白倉C区奈良・平安時代住居全体図	33
第11図	天引地区奈良・平安時代住居全体図	34
第12図	奈良・平安時代の遺構分布図	87, 88
第13図	奈良・平安時代の土坑分布図	89
第14図	奈良・平安時代の土坑全体図①	90
第15図	奈良・平安時代の土坑全体図②	91
第16図	奈良・平安時代の土坑全体図③	92
第17図	天引A区寺院跡全体図	97, 98
第18図	天引A区寺院跡に伴う遺構群	99
第19図	天引A区寺院跡断面図①	100
第20図	天引A区寺院跡1号溝	101
第21図	天引A区寺院跡1～3号溝ら込み	102
第22図	天引A区寺院跡断面図②	103
第23図	天引A区寺院跡4号溝ら込み	104
第24図	白倉B区各全体図	106
第25図	白倉B区谷土層断面図	107
第26図	白倉B区池	108
第27図	白倉B区池断面図	109

本文編表目次

表1	周辺の遺跡	14, 15
表2	竪穴住居跡一覧表	28-30
表3	奈良・平安時代竪立柱建物一覧	85
表4	奈良・平安時代土坑一覧	93-95
表5	中近世土坑一覧	118
表6	中近世墓一覧	119
表7	中近世溝一覧	120
表8	中近世溝一覧	122
表9	出土炭化材樹種同定一覧	129, 130
表10	遺構別出土樹種一覧	130
表11	出土種実一覧表	132
表12	F区製品別樹種同定表	138
表13	D区製品別樹種同定表	138
表14	出土木製品の樹種同定結果	139, 140
表15	天引C区2号墓出土土器	144

付図目次

付図1	水場・池遺物出土状態①
付図2	水場・池遺物出土状態②
付図3	水場・池遺物出土状態③
付図4	水場・池遺物出土状態④
付図5	水場・池遺物出土状態⑤
付図6	水場・池遺物出土状態⑥
付図7	水場・池遺物出土状態⑦
付図8	水場・池遺物出土状態⑧
付図9	水場・池遺物出土状態⑨
付図10	水場・池遺物出土状態⑩
付図11	水場・池遺物出土状態01
付図12	水場・池遺物出土状態02

第28図	白倉B区1～3号水場と出土遺物	111, 112
第29図	白倉B区1～3号水場断面図	113
第30図	中・近世の遺構分布図	115, 116
第31図	白倉A区中・近世遺構分布図	117
第32図	住居間接合①	148
第33図	住居間接合②	149
第34図	住居間接合③	150
第35図	住居間接合④	151
第36図	住居間接合⑤	152
第37図	住居間接合⑥	153
第38図	8世紀前半の遺構分布図	157
第39図	8世紀後半の遺構分布図	158
第40図	9世紀前半の遺構分布図	159
第41図	9世紀後半の遺構分布図	160
第42図	10世紀前半の遺構分布図	161
第43図	10世紀後半の遺構分布図	162
第44図	11世紀の遺構分布図	163
第45図	出土文字資料集成①	170
第46図	出土文字資料集成②	171
第47図	出土文字資料集成③	172
第48図	出土文字資料集成④	173
第49図	出土文字資料集成⑤	174
第50図	出土文字資料集成⑥	175
第51図	出土文字資料集成⑦	176
第52図	出土文字資料集成⑧	177
第53図	寺院関連の出土遺物	179
第54図	出土した鉄葬	181
第55図	白倉B区36号住居出土土器と想定復元図	183

表16	白倉A区7号墓出土土器	144
表17	白倉A区9号墓出土土器	145
表18	白倉B区7号溝出土土器	145
表19	竪穴住居時期別一覧表	155
表20	竪穴住居面積時期別一覧表	156
表21	カマド位置時期別一覧表	156
表22	出土文字資料の種類と器種	164
表23	文字の種類と内訳	165
表24	遺構別出土文字一覧	166
表25	出土文字資料一覧	167-169
表26	布目互出土遺構一覧	178
表27	県内出土の古代器	182
表28	出土種実一覧表 (補遺)	186
表29	古墳時代前期住居跡出土炭化材 (補遺)	190
表30	出土炭化材樹種同定一覧表 (補遺)	191

付図13	黒浜式土器分布図 (補遺)
付図14	清磯 (b) 新式土器分布図 (補遺)
付図15	清磯 c 式土器分布図 (補遺)
付図16	勝坂 II 式土器分布図 (補遺)
付図17	勝坂式終末期土器分布図 (補遺)
付図18	加曾利 E 3 式土器分布図 (補遺)
付図19	加曾利 E 4 式土器分布図 (補遺)
付図20	称名寺 I 式土器分布図 (補遺)
付図21	称名寺 II 式土器分布図 (補遺)
付図22	堀之内 1 式土器分布図 (補遺)
付図23	堀之内 2 式土器分布図 (補遺)
付図24	弥生時代中期土器分布図 (補遺)

遺物觀察表編目次

遺物觀察表

住居

奈良・平安時代

白倉A区6号住居出土遺物	1	白倉B区76号住居出土遺物	37
白倉A区9号住居出土遺物	1	白倉B区77号住居出土遺物	37
白倉A区12号住居出土遺物	2	白倉B区79号住居出土遺物	38
白倉A区13号住居出土遺物	3	白倉B区80号住居出土遺物	38
白倉A区16号住居出土遺物	3	白倉B区81号住居出土遺物	39
白倉A区18号住居出土遺物	3	白倉B区83号住居出土遺物	39
白倉A区38号住居出土遺物	3	白倉B区90号住居出土遺物	40
白倉A区39号住居出土遺物	4	白倉B区92号住居出土遺物	41
白倉A区40号住居出土遺物	4	白倉B区95号住居出土遺物	41
白倉A区49号住居出土遺物	5	白倉C区10号住居出土遺物	43
白倉A区50号住居出土遺物	6	白倉C区20号住居出土遺物	44
白倉A区51号住居出土遺物	8	白倉C区22号住居出土遺物	44
白倉A区56号住居出土遺物	9	白倉C区23号住居出土遺物	44
白倉A区60号住居出土遺物	9	白倉C区24号住居出土遺物	45
白倉A区63号住居出土遺物	10	白倉C区26号住居出土遺物	45
白倉A区68号住居出土遺物	11	白倉C区27号住居出土遺物	46
白倉A区69号住居出土遺物	12	白倉C区29号住居出土遺物	46
白倉A区70号住居出土遺物	12	白倉C区31号住居出土遺物	46
白倉A区75号住居出土遺物	13	白倉C区40号住居出土遺物	47
白倉A区79号住居出土遺物	13	白倉C区41号住居出土遺物	47
白倉A区90号住居出土遺物	13	白倉C区43号住居出土遺物	47
白倉A区98号住居出土遺物	14	白倉C区44号住居出土遺物	48
白倉A区100号住居出土遺物	14	白倉C区45号住居出土遺物	48
白倉A区102号住居出土遺物	14	白倉C区46号住居出土遺物	49
白倉A区108号住居出土遺物	15	白倉C区51号住居出土遺物	50
白倉A区118号住居出土遺物	17	白倉C区54号住居出土遺物	50
白倉A区119号住居出土遺物	17	白倉C区56号住居出土遺物	50
白倉A区11号住居出土遺物	17	白倉C区57号住居出土遺物	51
白倉A区62号住居出土遺物	18	白倉C区59号住居出土遺物	52
白倉A区120号住居出土遺物	18	白倉C区63号住居出土遺物	52
白倉B区1号住居出土遺物	18	白倉C区64号住居出土遺物	52
白倉B区2号住居出土遺物	19	白倉C区66号住居出土遺物	52
白倉B区4号住居出土遺物	19	白倉C区67号住居出土遺物	53
白倉B区6号住居出土遺物	20	白倉C区68号住居出土遺物	53
白倉B区8号住居出土遺物	20	白倉C区69号住居出土遺物	53
白倉B区11号住居出土遺物	21	白倉C区70号住居出土遺物	54
白倉B区15号住居出土遺物	22	白倉C区71号住居出土遺物	54
白倉B区18号住居出土遺物	22	白倉C区73号住居出土遺物	54
白倉B区19号住居出土遺物	23	白倉C区75号住居出土遺物	55
白倉B区31号住居出土遺物	23	白倉C区83号住居出土遺物	55
白倉B区32号住居出土遺物	24	白倉C区87号住居出土遺物	55
白倉B区36号住居出土遺物	25	白倉C区92号住居出土遺物	56
白倉B区39号住居出土遺物	26	白倉C区93号住居出土遺物	56
白倉B区40号住居出土遺物	29	天引地区3号住居出土遺物	56
白倉B区41号住居出土遺物	29	天引地区8号住居出土遺物	57
白倉B区44号住居出土遺物	30	天引地区9号住居出土遺物	57
白倉B区46号住居出土遺物	30	天引地区14号住居出土遺物	57
白倉B区48号住居出土遺物	31	天引地区15号住居出土遺物	58
白倉B区53号住居出土遺物	31	天引地区17号住居出土遺物	58
白倉B区57号住居出土遺物	32	天引地区26号住居出土遺物	58
白倉B区60号住居出土遺物	34	天引地区27号住居出土遺物	59
白倉B区64号住居出土遺物	34	天引地区29号住居出土遺物	59
白倉B区66号住居出土遺物	35	天引地区32号住居出土遺物	59
白倉B区67号住居出土遺物	35	天引地区33号住居出土遺物	60
白倉B区68号住居出土遺物	36	天引地区36号住居出土遺物	60

奈良・平安時代	天引地区37号住居出土遺物	60
	天引地区38号住居出土遺物	61
	天引地区39号住居出土遺物	62
	天引地区40号住居出土遺物	62
	天引地区41号住居出土遺物	63
	天引地区45号住居出土遺物	63
	天引地区49号住居出土遺物	64
	天引地区63号住居出土遺物	64
	天引地区64号住居出土遺物	65
	天引地区66号住居出土遺物	66
	天引地区67号住居出土遺物	66
	天引地区68号住居出土遺物	67
	天引地区70号住居出土遺物	68
	天引地区72号住居出土遺物	68
	天引地区75号住居出土遺物	69
	天引地区76号住居出土遺物	69
	天引地区79号住居出土遺物	70
	天引地区80号住居出土遺物	71
	天引地区81号住居出土遺物	71
	天引地区82号住居出土遺物	72
	天引地区83号住居出土遺物	73
	天引地区86号住居出土遺物	74
	天引地区89号住居出土遺物	75
	天引地区92号住居出土遺物	76
	天引地区95号住居出土遺物	76
	天引地区98号住居出土遺物	77
	天引地区102号住居出土遺物	78
	天引地区111号住居出土遺物	79
	天引地区113号住居出土遺物	79
	天引地区120号住居出土遺物	81
	天引地区123号住居出土遺物	81
	天引地区126号住居出土遺物	81
	天引地区128号住居出土遺物	82
	天引地区130号住居出土遺物	82
	天引地区133号住居出土遺物	83
	天引地区139号住居出土遺物	84
	天引地区140号住居出土遺物	84
	天引地区145号住居出土遺物	85

その他

奈良・平安時代	白倉B区1号井戸出土遺物	85
	白倉C区1号井戸出土遺物	85
	白倉C区2号井戸出土遺物	85
	白倉A区9号土坑出土遺物	86
	白倉A区12号土坑出土遺物	86
	白倉A区14号土坑出土遺物	86
	白倉A区15号土坑出土遺物	86
	白倉A区19号土坑出土遺物	86
	白倉B区1号土坑出土遺物	86
	白倉B区3号土坑出土遺物	87
	白倉B区7号土坑出土遺物	87
	白倉B区8号土坑出土遺物	87
	白倉B区21号土坑出土遺物	87
	白倉B区23号土坑出土遺物	87
	白倉B区30号土坑出土遺物	87
	白倉B区136号土坑出土遺物	87
	白倉B区149号土坑出土遺物	87
	白倉B区151号土坑出土遺物	88
	白倉B区201号土坑出土遺物	88
	白倉B区233号土坑出土遺物	88
	白倉C区6号土坑出土遺物	88
	白倉C区7号土坑出土遺物	88

奈良・平安時代	白倉C区8号土坑出土遺物	89
	白倉C区20号土坑出土遺物	89
	白倉C区21号土坑出土遺物	89
	白倉C区136号土坑出土遺物	89
	白倉C区188号土坑出土遺物	89
	天引B区2号土坑出土遺物	89
	天引B区5号土坑出土遺物	89
	天引C区6号土坑出土遺物	90
	天引C区7号土坑出土遺物	90
	天引C区19号土坑出土遺物	90
	天引C区25号土坑出土遺物	90
	天引C区28号土坑出土遺物	90
	天引C区30号土坑出土遺物	91
	天引C区32号土坑出土遺物	91
	天引C区33号土坑出土遺物	91
	天引C区35号土坑出土遺物	91
	天引C区37号土坑出土遺物	91
	天引C区45号土坑出土遺物	91
	天引C区51号土坑出土遺物	91
	天引C区90号土坑出土遺物	91
	天引C区91号土坑出土遺物	92
	天引地区1号焼土出土遺物	92
	白倉A区2号柱穴跡出土遺物	93
	白倉C区3号溝出土遺物	93
	白倉B区4号溝出土遺物	93
	白倉B区6号溝出土遺物	93
	天引F区谷出土遺物	94
	天引A区寺院跡出土遺物	95
	白倉B区池・水堀出土遺物	96
	遺構外出土遺物	96
中・近世	白倉A区2号柱列出土遺物	108
	白倉A区36号土坑出土遺物	108
	白倉A区37号土坑出土遺物	108
	白倉A区48号土坑出土遺物	108
	白倉A区56号土坑出土遺物	109
	白倉B区24号土坑出土遺物	109
	白倉B区137号土坑出土遺物	109
	天引C区142号土坑出土遺物	109
	白倉A区6号溝出土遺物	109
	白倉A区10号溝出土遺物	109
	白倉A区11号溝出土遺物	109
	白倉B区7号溝出土遺物	109
	天引B区1号溝出土遺物	109
	天引C区7号溝出土遺物	110
	天引E区1号道出土遺物	110
	白倉A区3号基出土遺物	110
	白倉A区5号基出土遺物	111
	白倉A区6号基出土遺物	112
	白倉A区8号基出土遺物	112
	白倉A区9号基出土遺物	112
	白倉A区10号基出土遺物	113
	天引D区溜池出土遺物	113
	遺構外出土遺物	114
奈良・平安時代	天引地区出土木器	116

補遺

縄文時代の遺物	119
弥生・古墳時代の遺物	124

奈良・平安時代	天引地区66号住居出土遺物	141
	天引地区67号住居出土遺物	141
	天引地区68号住居出土遺物	141
	天引地区70号住居出土遺物	141
	天引地区72号住居出土遺物	141
	天引地区75号住居出土遺物	141
	天引地区76号住居出土遺物	141
	天引地区79号住居出土遺物	142
	天引地区80号住居出土遺物	142
	天引地区81号住居出土遺物	142
	天引地区82号住居出土遺物	142
	天引地区83号住居出土遺物	142
	天引地区86号住居出土遺物	142
	天引地区89号住居出土遺物	142
	天引地区92号住居出土遺物	143

奈良・平安時代	天引地区93号住居出土遺物	143
	天引地区95号住居出土遺物	143
	天引地区98号住居出土遺物	143
	天引地区102号住居出土遺物	143
	天引地区111号住居出土遺物	143
	天引地区113号住居出土遺物	144
	天引地区120号住居出土遺物	144
	天引地区123号住居出土遺物	144
	天引地区126号住居出土遺物	144
	天引地区128号住居出土遺物	144
	天引地区130号住居出土遺物	144
	天引地区133号住居出土遺物	145
	天引地区139号住居出土遺物	145
	天引地区140号住居出土遺物	145
	天引地区145号住居出土遺物	145

写真図版編目次

P.L. 1	航空写真 (昭和22年米軍撮影)
P.L. 2	造路周辺航空写真
P.L. 3	飛騨区合成航空写真
P.L. 4	航空写真 現況と周辺地形 (南東から) 調査区全景 (南から)
P.L. 5	白倉A区・B区全景
P.L. 6	白倉B区・C区全景
P.L. 7	天引地区全景

奈良・平安時代

P.L. 8	白倉A区6号・9号・12号住居
P.L. 9	白倉A区12号住居
P.L. 10	白倉A区13号・16号・18号・38号住居
P.L. 11	白倉A区38号・39号・40号・49号住居
P.L. 12	白倉A区50号・51号・56号住居
P.L. 13	白倉A区56号・90号・63号住居
P.L. 14	白倉A区63号・68号・69号・70号住居
P.L. 15	白倉A区71号・75号・79号・90号・98号・100号住居
P.L. 16	白倉A区109号・102号・108号・118号・119号住居
P.L. 17	白倉B区1号・2号・4号・6号住居
P.L. 18	白倉B区6号・8号・11号・15号住居
P.L. 19	白倉B区18号・19号・31号住居
P.L. 20	白倉B区32号・36号・39号住居
P.L. 21	白倉B区39号住居
P.L. 22	白倉B区40号・41号・44号・46号・48号住居
P.L. 23	白倉B区53号・57号住居
P.L. 24	白倉B区57号・60号・64号住居
P.L. 25	白倉B区64号・66号・67号・68号住居
P.L. 26	白倉B区76号・77号・79号住居
P.L. 27	白倉B区79号・80号・81号・83号住居
P.L. 28	白倉B区83号住居
P.L. 29	白倉B区83号・90号・92号住居
P.L. 30	白倉B区92号・95号住居
P.L. 31	白倉C区10号・11号・20号・22号住居
P.L. 32	白倉C区23号・24号・26号・27号・29号・31号住居
P.L. 33	白倉C区29号・31号・40号・41号・43号住居 44号・45号・47号・64号住居
P.L. 34	白倉C区38号・45号・46号・51号住居 54号・55号・57号・63号住居

P.L. 35	白倉C区44号・46号・54号・56~59号住居 63号・64号・66号・68号住居
P.L. 36	白倉C区68号・69号・70号・71号・75号住居
P.L. 37	白倉C区83号・87号・92号住居
P.L. 38	天引地区3号・8号・9号住居
P.L. 39	天引地区14号・15号・17号住居
P.L. 40	天引地区17号・26号・27号住居
P.L. 41	天引地区27号・29号・32号住居
P.L. 42	天引地区33号・36号・37号・38号・41号住居
P.L. 43	天引地区37号・38号・41号住居
P.L. 44	天引地区38号・39号・40号・41号住居
P.L. 45	天引地区45号・49号・63号住居
P.L. 46	天引地区63号・64号住居
P.L. 47	天引地区66号・67号・68号住居
P.L. 48	天引地区68号・70号・72号住居
P.L. 49	天引地区75号・76号・79号住居
P.L. 50	天引地区80号・81号・83号・86号住居
P.L. 51	天引地区83号・86号・89号住居
P.L. 52	天引地区89号・92号住居
P.L. 53	天引地区92号住居
P.L. 54	天引地区95号・98号住居
P.L. 55	天引地区102号・111号・113号住居
P.L. 56	天引地区113号・120号・123号・126号住居
P.L. 57	天引地区126号・128号・130号住居
P.L. 58	天引地区133号・139号住居
P.L. 59	天引地区140号・145号住居
P.L. 60	白倉A区6号・9号・12号・13号住居出土遺物 16号・18号・38号住居出土遺物
P.L. 61	白倉A区38号・49号・50号・51号住居出土遺物 60号・63号住居出土遺物
P.L. 62	白倉A区63号・68号・69号・70号住居出土遺物 90号・100号住居出土遺物
P.L. 63	白倉A区100号・102号・119号住居出土遺物 白倉B区1号・2号・4号・6号・11号住居出土遺物
P.L. 64	白倉B区11号・15号・18号・19号住居出土遺物 31号・32号住居出土遺物
P.L. 65	白倉B区36号住居出土遺物
P.L. 66	白倉B区39号・40号・41号・44号住居出土遺物
P.L. 67	白倉B区46号・48号・57号住居出土遺物
P.L. 68	白倉B区57号・60号・64号住居出土遺物

- P.L. 69 白倉B区66号・67号・68号・76号住居出土遺物
77号・79号・80号住居出土遺物
- P.L. 70 白倉B区80号・81号・83号・90号・92号住居出土遺物
- P.L. 71 白倉B区92号・95号住居出土遺物
- P.L. 72 白倉C区16号・20号・22号住居出土遺物
- P.L. 73 白倉C区23号・24号・26号住居出土遺物
- P.L. 74 白倉C区31号・40号・41号・43号・44号住居出土遺物
- P.L. 75 白倉C区44号・45号住居出土遺物
- P.L. 76 白倉C区45号・46号・51号・54号住居出土遺物
56号・57号住居出土遺物
- P.L. 77 白倉C区57号・63号・64号・66号住居出土遺物
67号・68号・69号住居出土遺物
- P.L. 78 白倉C区69号・70号・73号・75号・83号住居出土遺物
- P.L. 79 白倉C区87号・92号・93号住居出土遺物
- P.L. 80 天引地区3号・14号・15号・17号住居出土遺物
26号・27号住居出土遺物
- P.L. 81 天引地区32号・33号・37号・38号住居出土遺物
39号・40号住居出土遺物
- P.L. 82 天引地区41号・45号・49号住居出土遺物
- P.L. 83 天引地区63号・64号・66号出土遺物
- P.L. 84 天引地区66号・67号・68号・70号住居出土遺物
72号・75号・76号住居出土遺物
- P.L. 85 天引地区79号・80号・81号・82号・83号住居出土遺物
- P.L. 88 天引地区86号・89号住居出土遺物
- P.L. 87 天引地区89号・92号・95号・98号住居出土遺物
- P.L. 88 天引地区98号・102号・111号住居出土遺物
- P.L. 89 天引地区111号・113号・120号・123号住居出土遺物
126号・128号住居出土遺物
- P.L. 90 天引地区128号・130号・133号住居出土遺物
139号・140号住居出土遺物
- P.L. 91 白倉A区1号柱穴群
白倉B区1号・2号・3号・5号・6号獨立柱建物
- P.L. 92 白倉C区1号・2号・5号・7号・8号獨立柱建物
柱穴群・天引C区1号獨立柱建物
- P.L. 93 天引C区3号獨立柱建物・1号柱列
白倉A区1号并井
- P.L. 94 白倉B区1号・2号・白倉C区1号・2号・3号并井
- P.L. 95 白倉A区8号・9号・11号・12号・13号土坑
14号・15号・19号土坑
- P.L. 96 白倉A区34号・35号・38号・40号土坑
白倉B区1号・7号土坑
- P.L. 97 白倉B区3号・19号・21号・23号・24号土坑
26号・28号・29号土坑
- P.L. 98 白倉B区30号・32号・33号・136号土坑
149号・151号・201号土坑
白倉C区6号土坑
- P.L. 99 白倉C区7号・8号・21号・136号土坑
天引B区1号・2号・3号土坑
- P.L.100 天引B区4号・5号土坑
天引C区1号・2号・6号・12号土坑
- P.L.101 天引C区13号・14号・15号・16号・17号土坑
18号・19号・20号土坑
- P.L.102 天引C区25号・28号・30号・32号・33号・35号土坑
- P.L.103 天引C区36号・37号・43号・45号・49号土坑
51号・63号・64号土坑
- P.L.104 天引C区90号・91号・101号土坑・白倉B区4号溝
- P.L.105 白倉B区4号溝
- P.L.106 白倉B区6号溝・天引B区浅間B堰石埋設溝
- P.L.107 天引A区寺院跡
- P.L.108 天引A区寺院跡1号溝・1号・2号・4号落石込み
- P.L.109 白倉B区池
- P.L.110 白倉B区池
- P.L.111 白倉B区池下包含層

- P.L.112 白倉B区水堀
- P.L.113 白倉B区谷土層断面・天引F区浅間B堰石下

中・近世

- P.L.114 白倉A区1号・2号柱列
- P.L.115 白倉A区21号・22号・48号土坑
- P.L.116 白倉A区36号・37号・49号・56号土坑
- P.L.117 白倉A区69号・白倉B区137号・天引E区1号土坑
- P.L.118 天引C区142号土坑
白倉A区1号・2号・3号・4号基
- P.L.119 白倉A区4号・5号・6号基
- P.L.120 白倉A区7号・8号・9号・10号基
- P.L.121 白倉A区11号・12号・天引A区1号・天引C区2号基
- P.L.122 白倉A区1号道
- P.L.123 白倉A区1号道・1号・3号・5号・6号溝
- P.L.124 白倉A区10号・11号溝
白倉B区1号・2号・3号・8号溝
- P.L.125 白倉B区9号・10号溝
天引A区1号道・天引B区1号溝
- P.L.126 天引C区2号・7号・8号溝
天引A区浅間A堰石下基
- P.L.127 天引C区浅間A堰石下基・浅間A堰石灰かき山
天引A区浅間A堰石灰かき山
- P.L.128 天引D区浅間A堰石下田畠
- P.L.129 天引D区湖池
- P.L.130 天引D区湖池・田畠
- P.L.131 天引E区・畠・1号道・1号・2号・3号溝

奈良・平安時代

- P.L.132 白倉B区1号并井出土遺物
白倉A区9号・12号・15号・19号土坑出土遺物
白倉B区1号・21号・201号・233号土坑出土遺物
天引A区2号・9号・天引B区2号土坑出土遺物
- P.L.133 天引B区5号土坑出土遺物
- P.L.134 天引B区5号土坑出土遺物
天引C区6号・7号・19号・25号・28号土坑出土遺物
30号・32号・33号・35号・36号・37号土坑出土遺物
45号土坑・37号・83号住居出土遺物
- P.L.135 天引C区83号・86号住居・51号土坑出土遺物
- P.L.136 天引C区90号・91号・142号土坑出土遺物
白倉A区2号柱穴群出土遺物
- P.L.137 白倉B区4号・6号溝出土遺物
天引F区浅間B堰石下・天引A区寺院跡出土遺物
- P.L.138 天引A区寺院跡出土遺物
- P.L.139 白倉B区池・水堀開通出土遺物
- P.L.140 白倉B区池・水堀開通出土遺物
- P.L.141 白倉B区池・水堀開通出土遺物
- P.L.142 白倉B区池・水堀開通出土遺物
- P.L.143 白倉B区池・水堀開通出土遺物
- P.L.144 白倉B区池・水堀開通出土遺物
- P.L.145 奈良・平安時代遺構外出土遺物
白倉A区2号柱列・36号・37号・48号土坑出土遺物

中・近世

- P.L.146 白倉A区48号・56号土坑出土遺物
6号・10号・11号溝出土遺物
白倉B区24号土坑・7号溝・天引B区1号溝出土遺物
天引C区7号溝・天引E区1号溝出土遺物

- 白倉A区3号・5号・6号墓出土遺物
P L. 147 白倉A区8号・9号・10号墓・天引D区池出土遺物
中近世遺構外出土遺物

奈良時代以降

- P L. 148 中近世遺構外出土遺物
白倉A区12号・60号・63号住居出土こも編石
49号・50号住居出土こも編石

奈良・平安時代

- P L. 149 白倉A区51号・108号住居出土こも編石
白倉B区12号・39号・48号・83号住居出土こも編石
天引地区76号住居出土こも編石

中・近世

- P L. 150 白倉A区7号・8号・9号・10号墓出土人骨
P L. 151 天引C区2号・白倉A区3号墓出土人骨
白倉B区7号溝出土馬歯

奈良・平安時代

- P L. 152 天引F区出土木器
P L. 153 天引F・D区出土木器

中・近世

- P L. 154 天引D区出土木器
P L. 155 天引D区出土木器
P L. 156 天引D区出土木器

縄文時代

- P L. 157 補遺出土遺物
P L. 158 補遺出土遺物
P L. 159 補遺出土遺物

奈良・平安時代

- P L. 160 炭化材樹種電子顕微鏡写真
P L. 161 炭化材樹種電子顕微鏡写真
P L. 162 炭化材樹種電子顕微鏡写真
P L. 163 炭化材樹種電子顕微鏡写真
P L. 164 炭化材樹種電子顕微鏡写真
P L. 165 炭化材樹種電子顕微鏡写真
P L. 166 炭化材樹種電子顕微鏡写真
P L. 167 出土した大型植物化石

奈良時代以降

- P L. 168 出土木材顕微鏡写真
P L. 169 出土木材顕微鏡写真
P L. 170 出土木材顕微鏡写真
P L. 171 出土木材顕微鏡写真
P L. 172 出土木材顕微鏡写真
P L. 173 出土木材顕微鏡写真

縄文～古墳時代中期

- P L. 174 大型植物化石
P L. 175 炭化材樹種電子顕微鏡写真
P L. 176 炭化材樹種電子顕微鏡写真
P L. 177 炭化材樹種電子顕微鏡写真
P L. 178 炭化材樹種電子顕微鏡写真
P L. 179 炭化材樹種電子顕微鏡写真

抄 録

1 発掘調査区の概略

今回の発掘調査区は、群馬県甘楽郡甘楽町大字白倉・天引に所在する。発掘調査は、1989年4月1日から開始され、1991年8月20日をもって終了した。発掘調査区は県西部地域を東流する鍋川によって形成された河岸段丘の上位段丘面に立地する。遺跡名称は白倉下原遺跡、天引向原遺跡と2つ使用されているが、調査区は連続している。発掘調査区においては、旧石器時代から中近世以降の土地利用痕跡が重層的に検出されている。本書では、おおよそ8世紀以降の遺構と遺物が対象となり、奈良～江戸時代編として報告する。

2 遺構数量 (本報告書に掲載されたものに限る)

奈良・平安時代

竪穴住居跡150軒 掘立柱建物17棟 土坑71基 溝2条 寺院跡1カ所 水場と池1カ所 畠1カ所

奈良・平安時代竪穴住居跡時期別内訳

	白倉 A 区	白倉 B 区	白倉 C 区	天引 地区	合 計
8世紀前半	12軒	6軒	2軒	7軒	27軒
8世紀後半	4軒	3軒	5軒	4軒	16軒
9世紀前半	4軒	9軒	4軒	1軒	18軒
9世紀後半	2軒	14軒	5軒	8軒	29軒
10世紀前半	2軒	0軒	12軒	7軒	21軒
10世紀後半	2軒	1軒	4軒	5軒	12軒
11世紀	1軒	0軒	1軒	15軒	17軒
時期不明	4軒	1軒	1軒	4軒	10軒
合 計	31軒	34軒	34軒	51軒	150軒

中近世

柱列2列 土坑12基 墓15基 溝26条 畠7カ所 田1カ所

3 まとめ

奈良・平安時代

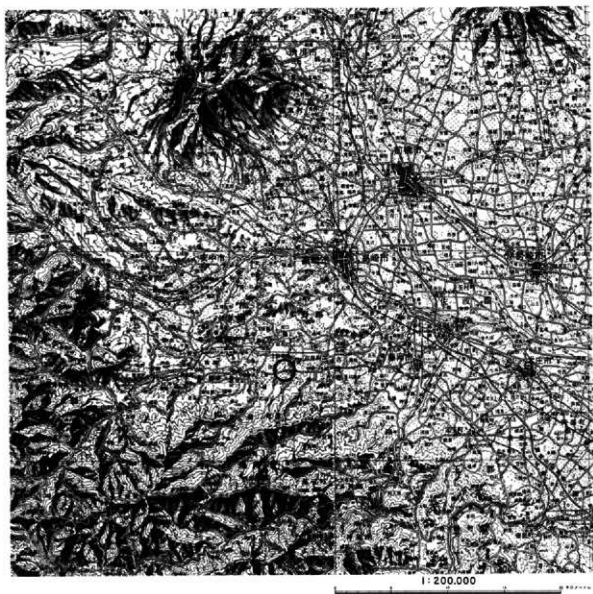
竪穴住居跡は、土器編年から見た場合には、弥生時代後期樽式期以降11世紀に至るまで連続と検出されており、8～11世紀もその例外ではない。しかしながら、一律の分布を示すのではなく時期及び調査区による検出数の増減や、集中が見受けられる。特筆される遺構としては、寺院跡や水場(後に池に改修)がある。

遺物においては、当該期の土器を中心に多くの遺物が出土している。その中で特筆すべきものとして、土器に記された文字資料141点(新井・午・福天寺など)、銀1点、鉄錘4点、鉄鍋や火倉の破片などがある。特に、文字資料は、古代「新屋郷」や御牧「新屋牧」研究に一石を投じる資料となるであろう。

中近世

生産跡を中心に検出されている。中世の遺構として明瞭なものは少なく、焼けた骨片を伴った土坑1基に止まるが、青磁や白磁の破片が調査区内から出土している。近世は、As-Aの灰塚き山の下から畠が見つまっている。また、墓も複数検出され、その中の1基は頭部に摺鉢を被せた状態であったことが確認されている。

白倉下原・天引向原遺跡Ⅴ



第1圖 白倉下原・天引向原遺跡位置圖

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経過

関越自動車道上越線（上信越自動車道）は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道として、日本道路公団によって建設される。起点を東京都練馬として新潟県上越市まで総延長280km（内練馬～藤岡間は関越自動車道新潟線と併用）である。平成5年3月27日開通した藤岡インター～佐久インター間は約69kmで、群馬県藤岡市（5.6km）、吉井町（6.3km）、甘楽町（4.3km）、富岡市（11.6km）、妙義町（2.5km）、松井田町（19.5km）、下仁田町（5.3km）、長野県佐久市（11.9km）の各市町を通過する。

群馬県藤岡市～長野県佐久市間の基本計画は昭和47年に策定され、同54年建設大臣により日本道路公団が施行命令を受けている。同56年群馬県藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・下仁田町（東部）・松井田町（東部）、同57年松井田町（西部）・下仁田町（西部）・長野県佐久市までの路線が発表された。関越自動車道上越線全体にかかる埋蔵文化財の取り扱い及び調査経過は次のとおりである。

昭和49年度 藤岡市～下仁田町間に存在する埋蔵文化財について、群馬県教育委員会は県企画部幹線交通課に対し文化財保護法の遵守、国・県・市町村の指定文化財をさげ、文化財に関係する事項は県教委文化財保護課と協議すること等の考え方を示した。

昭和55年度 県教委文化財保護課は路線通過地周辺の埋蔵文化財包蔵地の調査を行い、その結果は同年3月藤岡～松井田間、同年11月松井田～下仁田間について、「関越自動車道上越線関連公共事業調査報告書」として群馬県（企画部交通対策課）より報告された。

昭和59年度 建設工事の具体化に伴い、路線内の埋蔵文化財についてより具体的な調査の依頼が道路公団より県教育委員会にあり、県教委文化財保護課は包蔵地の詳細分布調査を行った。

昭和60年度 県教育委員会は分布調査の結果、包蔵地を濃い分布地、淡い分布地、試掘調査を必要とする地域に区分し、発掘調査必要面積を約100万㎡と想定し、55遺跡を認定した。（後の試掘により52遺跡に変更）そして、埋蔵文化財発掘調査にかかる基本方針を次のように策定した。

- ① 発掘調査終了年度を昭和65年度末（平成2年度末）とする。
- ② 群馬県埋蔵文化財調査事業団を中核機関とし、対応できない部分に調査会方式を導入、関係市町村には進捗状況を考慮しながら協力を求める。
- ③ 事業団の出張所（上越線調査事務所）を開設し、整理事業も併せ行う。
- ④ 機関別対応面積は次のとおりとする。

埋文事業団 約76万㎡ 富岡市以東を受け持つ。
面積は変動の可能性あり。

調査会 約22万㎡ 妙義町・下仁田町・松井田町。面積は変動の可能性あり。

なお、調査実施方法は次のとおりである。

日本道路公団東京第二建設局は群馬県教育委員会に調査の依頼を行い、年度毎に委託契約を締結する。県教育委員会はそれを受け、群馬県埋蔵文化財調査事業団及び、各遺跡調査会等に再委託のかたちで委託契約を締結し、調査を実施する。

昭和61年度 4月、埋文事業団上越線調査事務所を吉井町南陽台3-15-8に設置し、4班15人体制で発足。調査を開始する。以後、6班22人体制（昭62）、9班36人体制（昭63）、12班45人体制（平成）、12班45人体制（平2）。平成2年度までに一部を残し発掘調査は終了した。

整理事業は昭和63年度より併行して実施していたが、平成3年度からは本部においても整理事業が始まった。上越線調査事務所は平成5年度末をもって閉鎖され、その後本部で整理事業を行い、本年度をもって全事業が終了した。

2 発掘調査の方法と経過

(1) グリッドの設定

白倉下原・天引向原遺跡の発掘調査部分は甘菜パーキングエリアと西方の本線部分よりなる。建設工事用測量杭のS T A-153~158が、ほぼ発掘調査範囲に該当する。この範囲内を覆うことができるように、白倉下原遺跡と天引向原遺跡で異なった国家座標を原点としてグリッドを設定した。具体的には、第2図を参照して欲しいが、調査区北東端の国家座標 $X = 26950$ 、 $Y = -79540$ を白倉下原遺跡の座標原点、 $X = 26950$ 、 $Y = -79320$ を天引向原遺跡の座標原点とし、5m四方のグリッドを設定した。グリッドは北東コーナーの杭を基準にして、南方向及び西方向に1、2、3、...と両者に共用数字で呼称した。前述したように、白倉下原地区と天引向原地区では国家座標原点が異なるため、同じグリッド番号が両方の地区に存在することになった。グリッド番号をもとに遺構の位置などを検索したりする場合などには、必ず地区を確かめて欲しい。

(2) 発掘調査の方法

発掘調査対象地は、高速道路の本線部分にあたる東西に長い西側部分と、甘菜パーキング予定地にあたる広大な東側部分からなっている。前者は甘菜町大字白倉下原の一部であることから「白倉下原遺跡」とし、後者は甘菜町大字天引向原の一部であることから「天引向原遺跡」と呼称して調査を進めてきた。しかしながら、この2つの遺跡名称をあたるほどには各時代における様相が異なっているわけではなく、時代によって2つの地区の土地利用は似ていたり、異なっていたりするのが実態であった。また、各時代の土地利用も、当然のことではあるが発掘調査区内に収まるわけでもなく、例えばある時代の集落遺跡の範囲が、異なった時代の集落遺跡の範囲とは異なっていると考えたほうが自然であろうし、溝や道などを考えた場合、遺跡名称に反映される範囲がどこまでかも不明となってしまう。

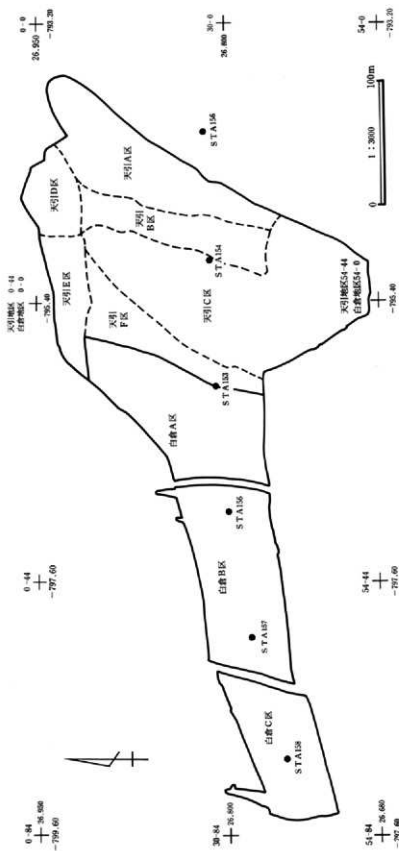
今回の報告では、2つの「遺跡」について、発掘

調査区の西寄りを「白倉下原遺跡」、東寄りを「天引向原遺跡」としてはいるが、現実には地区としての意味合いしかもっていないことを確認したい。

さて、白倉下原遺跡は、発掘調査区内をちょうど3等分するように2本の町道が南北に通っていた。そこで地区内を東から順に「白倉A区」、「白倉B区」、「白倉C区」と小区分した。遺構名称は各区分ごとの通し番号として、「白倉A区21号住居」、「白倉B区8号土坑」といった具合に呼称することとした。一方、天引向原遺跡は、舌状台地や谷地などの地形をもとにA~F6つの小区分を行なった。遺構名称については、竪穴住居跡については「天引向原地区」全体の通し番号とし、土坑などの他の遺構については各区分ごとの通し番号として、「天引59号住居」、「天引A区6号土坑」といった具合に呼称することにした。各地区の範囲は第2図「グリッド配置図」を参照して欲しい。

いささか前置きが長くなってしまったが、以下に調査方法について述べていきたい。

発掘調査は、おおむね最初にバックフォアによって表土を除去したのちに、杭打ち(外部委託)、遺構確認、個別遺構調査、航空写真(全体図作成を兼ねて外部委託)といった流れですすめられた。調査期間との関係で重機を使用したわけだが、多くの情報が表土中に含まれていたであろうことを考えると、残念でならない。個別遺構調査にあたっては、遺構確認の段階で相対的に新しい想定された遺構から調査を行い、一定範囲において弥生時代以降の調査が終了した段階で、縄文時代の遺構調査を行ない、旧石器時代試掘(結果によって本調査)を行っている。遺構内の遺物取り上げについては、これも調査期間との関係で完形に近い土器や大形の遺物については出土位置を記録したが、他の遺物については任意となってしまうものが多い。遺構図は原則的に1/20の図面を作成し、必要に応じて(例えばカマド図など)1/10の図面を作成した。全体図(素図)については、1/100図面作製を、ほとんど外部委託した。



第2図 グリッド配置図

Ⅰ 発掘調査の経過

(3) 発掘調査の経過

本遺跡は調査対象予定地が65,000㎡あまりに及ぶ広大なものであることと、試掘調査の結果から平成元・2年度の2ヶ年を費やし、2つの調査班（事業名称を取って原西Ⅰ班・原西Ⅱ班とした）で現地調査に望むこととした。実際に調査を進めると、予想通り各時代の諸遺構が数多く発見されたのに加えて、旧石器時代の本調査や、年次の途中で工事工程との関係から緊急に他遺跡への調査の応援も何度あり、調査期間を第2年次終了後、1班分のみ残して平成3年度も調査を継続して実施し、最終的には平成3年8月20日に終了した。

以下、各年度毎の調査の経過を簡単に跡付けてみたい。

平成元年度の発掘調査 当該年度の調査は、白倉地区から開始した。原西Ⅰ班が白倉A区を、原西Ⅱ班が白倉B・C区を担当した。

A区では、主として古墳時代後期の住居跡が寸分の隙間もないほどに数多く発見され、これに調査の大半を費やした。A区を担当していたⅠ班は、10月から翌年2月まで調査を休止し、当時急を要していた中瀬瀬観音山遺跡の調査に出向いた。

一方、C区を担当したⅡ班によって進められていた調査では、A区と同様に古墳時代後期以降の住居跡が数多く確認されたが、それとともに縄文時代や弥生時代の諸遺構も数多く確認された。遺構面の状況からすると、現在の耕作土を除去した状態で弥生時代以降の各遺構が確認できるので、まず平安時代から順次時代を遡るように調査していった。住居跡の大半を占める古墳時代後期以降のものは、遺存状態がよく出土遺物も豊富であった。12月に入ると調査地点をB区へと移動させていった。B区の調査は、工事工程との関係から、北側1/3を先行させた。

平成2年度の発掘調査 当該年度は、上越線全域における調査の最終年度にあっていたため、まさしく分・秒さざみのめまぐるしい調査工程の中で1年間が進んだ。基本的には、原西Ⅰ・Ⅱ班が合体して白倉B区から天引地区へと調査を進めていった。

白倉B区の水場（後に池に改修）も、この年度に調査されている。その間、一時的に矢田遺跡班、多比良遺跡班が調査に加わり、さらに2月からは調査の全工程を終了した内匠遺跡班、井出遺跡班が合流した。白倉B区の調査は、前年度の後半に引き続いて調査区の南側2/3が対象となった。この範囲で確認された遺構の主体をなすのは、古墳時代後期から平安時代にかけての整穴住居跡と縄文時代前期から後期にかけての住居跡・土坑であった。

これらの調査を9月中に終了させると、引き続き、白倉A・B区の旧石器の調査を行った。

11月いっぱい白倉地区の調査が完了したのをうけて、調査の主力を徐々に天引地区へと移動させていった。それ以前に実施していた遺構の分布状況の確認作業により、調査区の南寄りに極度の密集部分があることが明らかになっていた。そこで遺構の分布の希薄な北半分をまず終了させ、終わり次第、南側へと及ぼしていくことにした。

調査を進めてみると北半分には、点々と弥生後期・古墳前期の住居が確認されたのに加えて、平安時代の小規模寺院跡のかすかな痕跡が発見されたのが目立った程度であった。

南寄りの部分では、弥生時代後期から平安時代にかけての住居跡が、折り重なるように確認され、遺構の範囲確定や遺物の帰属決定に手間取った。2月以降、調査地には、担当者と作業員の人波と足の踏み場もないほどの住居跡でごった返し、本来の原西Ⅰ・Ⅱの担当者は、その交通整理と調査の記録化に走りまわった。

平成3年度の調査 天引地区の南寄りでは調査未了となった部分のため1班が残ってこれに当たった。本報告に関わるものとしては、南端寄りに分布していた住居群の調査であった。また、調査を始めつつ中途になってしまった遺構も数多く存在していた。これらの調査は、6月いっぱいではほぼ終了することができた。残りの2ヶ月の期間は、東側の斜面部に密集していた古墳時代後期の粘土採掘坑の調査と最終的なチェックの作業にあてた。

(4) 整理計画と経過

白倉下原・天引向原遺跡では、発掘調査終了時点で出土遺物量から約10年の整理期間が算定された。その後、発掘調査担当者の協議によって、報告書は時代別の編集方針をとることで合意し、それを受けて、本調査区の報告書は平成4年度から整理事業が開始された。既に、平成4～5年度においては、旧石器時代～古墳時代中期の遺構及び遺物を対象とした整理が3班各2年行われ、『白倉下原・天引向原遺跡』I旧石器時代編、『同』II縄文時代編、『同』III弥生～古墳時代編（5世紀まで）の3冊が刊行されている。また、平成5年度において6世紀以降の木器実測とプレパレート作成及び写真撮影が、木器班を中心に行われた。

さて、6世紀以降の遺構・遺物については、平成6年度1班、平成7年度1班、平成8年度2班の体制で整理事業を実施し、平成8年度末には『白倉下原・天引向原遺跡』IV古墳時代編（6～7世紀を対象）と『白倉下原・天引向原遺跡』V奈良～江戸時代編の2冊が刊行される予定である。

平成6年度の整理 1班で整理事業を行ない、白倉C区の遺構・遺物の整理を行った。同区出土土器の接合復元作業を行い、写真撮影の後に実測遺物の選定を行った。実測は機械実測を併用し、終了後トレースを外注した。その後、遺構図面修正及び出土遺物の位置を図面にし、遺構図トレースを外注した。継続して、写真図版と遺物観察表の作成や竪穴住居跡事実記載を行った。1月以降は白倉B区出土土器の接合復元を開始し3月に至った。

なお、年度末に来年度及び再来年度整理計画を見直したところ、本年度のペースで整理を行った場合、遺物量が多いことから再来年度2冊の報告書刊行は困難であることが予想された。そこで、より一層の努力を行うとともに、本年度末～来年度においては、大量の遺物実測を外部発注することによって報告書刊行にむけて万全を期することとした。

平成7年度の整理 1班で整理事業を行った。昨年度からの継続である白倉B区出土土器の接合復元

から始まって、白倉A区、天引地区の土器接合復元を行った。各地区の土器接合復元が終了した段階で随時、石器・石製品についても分類を行い、遺物写真撮影を行った。接合復元が終了した土器については、地区と数量がまとまった段階で壺や甔といった大形品と坏などを中心とした小形品に分けて、大形品については、機械実測を行い、小形品については実測を外部発注した。遺物の接合復元は、なんとか年度内に行うことができた。

平成8年度の整理 原西1班と原西II班の2班体制で整理を行った。各班における整理事業について概述したい。

原西1班 竪穴住居跡の図面修正及び出土遺物の位置を図面にし、していった。白倉C区を除く6世紀以降の竪穴住居跡軒数は約260軒で、10月末まで行った。その間も含め、随時、遺物実測図面と住居跡図面トレースを外部委託し、併せて竪穴住居跡遺構図版と写真図版を作成した。その後、全体図等を作成し、原西II班が作成した竪穴住居跡出土遺物図版と写真図版及び竪穴住居跡以外の遺構・遺物図版と写真図版を組み合わせていった。

原西II班 機械実測を終了した大形土器実測素図の修正と金属器実測を、およそ8月まで行ない、観察表を作成していった。その後、竪穴住居跡以外の全ての遺構図面修正を行い、遺物及び遺構トレースを外注した。その後、遺物図版及び遺物写真図版と竪穴住居以外の遺構図版及び写真図版を作成した。その後、原西1班が作成した竪穴住居跡図版と同写真図版を組み合わせていった。

なお、平成6年度以降の整理作業を行う過程で、既刊報告書に掲載すべきであった遺漏事項が確認された。その中で、5世紀代に含まれることについては『白倉下原・天引向原遺跡』IVに掲載し、それ以外は『同』Vに〈補遺〉として掲載した。Vに掲載した〈補遺〉の中には、既刊本において約束した遺構外出土縄文土器分布や弥生時代の管玉などがある。残念ながら縄文時代遺構外出土土器分布については、時間的制約から掲載できなかった。

II 立地環境と発掘区の概要

1 地理的環境

白倉下原・天引向原遺跡の発掘調査区は、群馬県南西部に位置する富岡市街地東方の、甘楽郡甘楽町大字白倉・天引岡地内に所在する。発掘調査区は鍋川によって形成された上位と下位の二つの河岸段丘面のうち、高位の段丘面である上位段丘面に立地している。

鍋川は群馬・長野県境の八鳳山麓に源を発し、途中下仁田町本宿付近で、同じく群馬・長野県境の荒船山麓に源を発する市野堂川と合流した後、富岡市、甘楽町、吉井町、藤岡市の群馬県南西部地域を東に流れ下り、その後高崎市阿久津町付近で利根川の一支流である烏川へと合流する。鍋川を上流に遡っていくと、内山峠を越えて長野県佐久市へと抜けることができ、古くから中部地方と関東地方とを結ぶ交通の要衝的機能を持った地域である。

鍋川右岸（南岸）一帯には上位段丘面と下位段丘面の二段の河岸段丘が形成されているが、特に富岡市東部から藤岡市にかけての中下流域では、上位段丘面の発達が著しい。逆に、左岸（北岸）では上位・下位とも河岸段丘の発達はほとんど見られない。こうした経緯については、右岸地域の地盤の隆起によって、鍋川の流路が次第に南から北へと移動したことに起因していると言われる。つまり、鍋川は最初に南側から上位段丘面を形成させて、その後下位段丘を形成させながら、流路を北へと次第に移動させた結果であると捉えられている。この流路移動自体は自然史的なタイムスケールのなかで現在でも進行中であり、今では下位段丘面を10m程侵食した河床を鍋川は流れている。

上位段丘面には、北西約40kmのところに見える浅間山を給源とした、浅間室田軽石層（As-MP）をはじめとする複数の軽石層群と風化ローム層とが互層となっており、2m程の厚さで堆積している。さらに、

ローム層の下層には風化した暗褐色粘土層が堆積し、この上部には鹿兒島湾を給源とする始良Tn火山灰が1～2cmの厚さで純層ないしブロック状に堆積していることから、遅くとも22,000年～25,000年前頃には上位段丘面の形成が終了したことは確実で、さらに白倉下原・天引向原遺跡の旧石器時代の石器群がAT下層から出土していることを考え併せれば、この年代をさらに遡ることは間違いない。

これに対して、下位段丘面にはほとんどの地域でローム層の堆積が見られないことから、上位段丘にローム層が堆積している頃には、この面の何れかを鍋川が流れていたことが推測される。

白倉下原・天引向原遺跡の発掘調査区が立地するのは上位段丘面で、南側地形は丘陵地帯が続いたのち、稲倉山や牛伏山をはじめとする標高1,200～1,500m程の山地が東西に連なっており、この山地に源を発する雄川、白倉川、天引川、大沢川、矢田川、土合川などの中小河川が段丘面を開析しながら北流し、鍋川に直交するように合流している。さらに、これらの中小河川に注ぐ支谷が樹状枝に発達して、上位段丘面を東西に分断し、いくつもの舌状に延びる台地を形成している。

発掘調査区は、大きく見ると東側を天引川、西側を白倉川の中小河川によって大きく開析された上位段丘面に立地する。白倉下原地区は、東を天引向原地区の間を流れる小支谷に、西を白倉川によって画される。調査区は大部分がローム台地であるが、白倉B区の西側には谷津が検出されており、この谷津は北側に向かって台地を開析する小支谷となる。天引向原地区は東を三途川、西を小支谷によって画された台地上が主たる調査区である。西の小支谷以外にも谷津が検出されており、この2つの谷は北東部分で合わさって三途川へと連なっている。

発掘調査区の北側約900mには上位と下位の段丘面を画する比高20m程の崖線が東西に走っている。

2 歴史的環境

はじめに

白倉下原・天引向原遺跡においては、旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中近世以降の遺物及び土地利用痕跡が重層的に検出されている。そして、この中の旧石器時代から古墳時代中期（おおむね5世紀）にかけては既刊報告書に掲載されている。そこで、ここでは重複する時代も考慮して古墳時代以降の歴史的環境について述べていきたい。

ここでは周辺遺跡の図を2枚用意した。第4図が1万分の1図で、表1に示した遺跡以外にも近くの中世塔婆や重要と思われる小字などをとともに、地形を理解してもらうために用意した。図5は通常の5万分の1図で範囲を広げた周辺遺跡図である。そして、第5図に対応するように周辺遺跡の表を（表1）作成したので利用してほしい。

さて、周辺地域における古墳時代以降の土地利用は当然のことながら地形に大きく規定される部分が少なくない。第5図で示した遺跡分布は現代の開発との関連を如実に示しているが、それだけではなく地形との関連で一定の傾向を示している。当遺跡も含む鍋川上位段丘上には多くの遺跡がマッピングされている（例えば1～21など）が古墳群や集落遺跡、城館址が主体となる傾向が強い。それは、当遺跡を中心とした周辺地形と遺跡分布を示した第4図からも読み取れよう。鍋川上位段丘面以外に、下位段丘面右岸の鍋川に近接した部分にも古墳群及び集落遺跡が多く分布している（29～36など）。ここは、鍋川の自然堤防による微高地となっている。

さて、田畠などの生産跡であるが、近世のものは別として、それより古い時代の検出例は少なく、特に水田は甘菜条里遺跡（22）の第3～5調査区（第4図参照）と長根羽田倉遺跡（4）において浅間B軽石（1108年）に覆われた水田が検出されたに過ぎない。ちなみに甘菜条里遺跡は、その名が示すように条里地割がつい最近まで残っていた場所である。この条里地割がどこまで溯るかは不明であるが、甘

菜条里に代表される鍋川下位段丘面が古代にまで溯る生産跡であった可能性は指摘できよう。このような微高地の存在や地割は昭和22年米軍撮影の航空写真（写真図版編P L 1）からも読み取ることができる。

それでは、時代ごとに述べてみよう。

古墳時代 集落遺跡は鍋川上位段丘面上と下位段丘面の鍋川右岸縁辺で多く分布する。この中で前期の集落遺跡は、当遺跡（1）以外には神保富士塚遺跡（3）、西原遺跡（11）、や福島鹿嶋下遺跡（33）、福島駒形遺跡（34）などと多くない。

中期になると神保富士塚遺跡と西原遺跡を除く上記の遺跡以外では下小塚遺跡（20）で住居跡が見つかる。特にこの遺跡では、当遺跡でも出土した高坏脚部を再利用した羽口が少なくとも12点出土しており注目されよう。また、甘菜条里遺跡（22）の20調査区（第4図）でも竪穴住居跡が見つかるが、ここは鍋川上位段丘直下の下位段丘面にあたり、集落検出例が少ない立地である。おそらく微高地であったと思われる。

後期（便宜的に7世紀も含める）になると集落遺跡は増加し、さらに6世紀は検出住居跡数が最大になるとと思われる。後期の竪穴住居跡は当遺跡以外に多数存在するため、詳しくは表1を参照して欲しい。また、表に示すことはできなかったが、当遺跡の北側にある麻場城跡周辺（第4図参照）では、おそらくこの段階の竪穴住居跡のソイルマークが多く見受けられる。丸山遺跡（20）でも同時期の竪穴住居跡が検出されていることから、当遺跡から北側900m段丘面境までは同期の集落遺跡が広がっていた可能性があろう。

古墳時代中期以降、この地域ではいくつかの特徴ある事象が認められる。まず、滑石を用いた石製模造品や白玉を製作した遺跡が多く認められることである。それは、鍋川上流の雄川や大沢川で原石が採集されることに起因するが、このような遺跡は当遺跡以外に神保富士塚（3）、笹（21）、甘菜条里（22）、福島鹿嶋下（33）、福島駒形（34）の各遺跡が該当し

よう。他に、木の葉形環の分布と、土師器製作技法の共通性があげられる。

古墳は集落遺跡と似た場所に立地し、大半が後期以降の群集墳である。比較的新しい古墳調査例の中で注目されるものとして、片山1号墳(25)の粘土椀と副葬品、大山1号古墳(30)から出土した船載品の椀、しの塚古墳(36)で見られた墳丘全面葺石などがあげられよう。

また、方形周溝墓は当遺跡以外では、神保植松(2)、長根安坪(3)、天引狐崎(7)の各遺跡で見つっており、特に長根安坪遺跡では14基が調査された。

奈良・平安時代 この時代の集落遺跡では例外なく古墳時代の堅穴住居跡が検出されており、集落遺跡の立地は前代と同じである。また、当遺跡からは平安時代の寺院跡が検出されているが、麻場城趾の南西で当遺跡から500m北側あたりには同期の瓦が散布している。

生産跡としては、浅間B軽石(1108年)下の水田が長根羽田倉遺跡(4)と甘葉桑里遺跡(22)の第3～5地点で見つっている。またこの軽石下の畠は僅かながら当遺跡でも検出されている。

次に文献資料から当遺跡周辺について『群馬県史』資料編4(1985)・通史編2(1991)を参考にして簡単に触れてみよう。

10世紀前半の実用百科事典として著名な和名類聚抄では、甘葉郡に13の郷名がしるされているが、その中に新屋郷がある。また、ほぼ同時期に完成した延喜式には、上野国内に9つの御牧がありその中に「新屋牧」があり新屋郷を中心とした場所に設置されたと考えられている。この新屋郷は甘葉町大字天引字新屋周辺と推定され、この小字所在地は当遺跡の北方約200mに位置しており、新屋以外にも隣接して新井谷と新屋下の小字も見受けられる(第4図参照)。他に文献資料では国司によって作成されたとき伝来している「上野国神名帳」に「新屋明神」の名がみえる。

新屋郷が出土文字資料として最初にあらわれるの

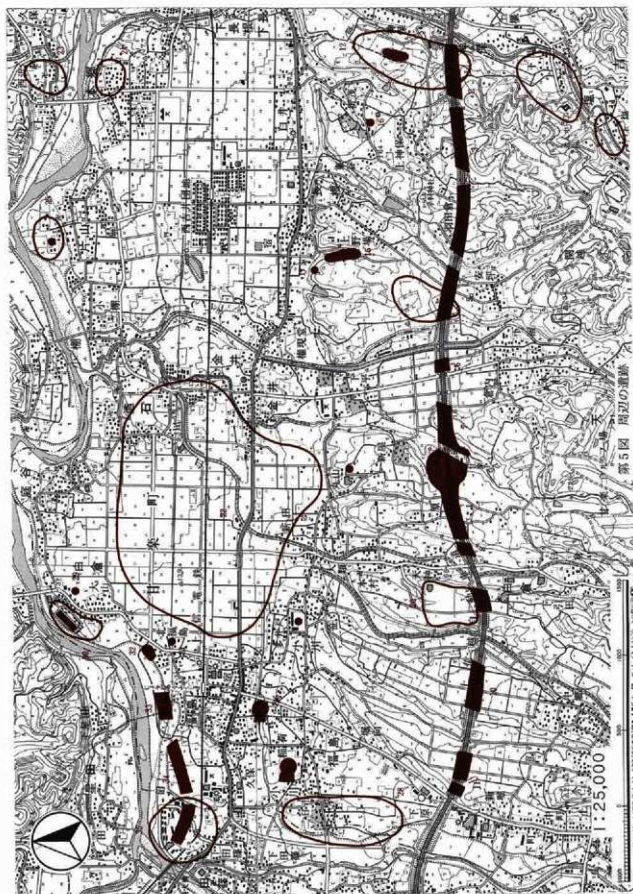
は平城京跡出土木簡であり、(表)「上野国甘葉群新屋郷□□」(裏)「上戸宋宜部猪万呂養銭□」とある。衛士の養銭に付けられたものとのことであるが、新屋郷において宮門の警備といった朝廷に直接結び付く人物が存在していたことと、上戸という経済力が注目されよう。この木簡は溝からの出土とのことで、いっしょに出土した木簡から726年～770年の年代が与えられている。8世紀のある段階で、確実に新屋郷が存在した根拠となろう。

平安時代になると当遺跡では、墨書土器などに「新井」がみられるようになる。このことから新屋郷との関連が考えよう。同様に出土文字資料の中に「午」が多数見られ、この文字が馬を意味するとすれば「新屋牧」との関係が考えられるだろう。

また、当遺跡の南方標高650mの山中に白倉神社がある。この神社は南北朝期に成立した神道集にある「白較大明神」とされ、一説には上野国神名帳にある新屋明神ではないかとされている。この神社は天狗伝承をもち、山岳信仰との拘わりが想定されるが、当遺跡の11世紀の堅穴住居跡から出土した鉄鏝も、このような背景で出土したのかもしれない。

中・近世 中世では当遺跡の北方約600mには麻場城趾が、また麻場城趾の東方約500mには仁井屋城趾がある。前者は城趾公園整備により平成元年～3年に発掘調査が行われている。この2つの城趾は台地先端に立地しており2つ1組の別城1郭という形態をとっている。2つ合わせて白倉城とよばれ白倉氏の居城であった。当遺跡の南東には、県指定重要文化財の笠付塔婆(第4図参照)がある。2カ所存在し合計4基となるが、13世紀末～14世紀初頭の紀年銘がある。板碑と同じ性格であるが笠付であることと、石材が牛伏砂岩であることに注目したい。

近世では浅間A軽石に拘わる生産跡がいくつか検出されている。多くが軽石を集めて復旧をはかった際にできた灰掻き山下での検出である。当遺跡でも灰掻き山下で畠が検出されている。



II 立地環境と発掘区の概要

表1 周辺の遺跡

番号	遺跡名	遺跡の概要など	参考文献など
1	白倉下原・天引向原遺跡	本報告書に掲載	
2	神保松遺跡	古墳時代の住居跡・土坑・方形周溝基・古墳が検出された。奈良～平安時代の整穴住居跡。また、中世城郭「榎松城」の主郭部分を調査している。明青花を出土した整穴伏拝壇など。	谷藤編1997「神保松遺跡」 朝野編1993「神保松遺跡」(以下群埋文と略)
3	神保富士塚遺跡	古墳時代前期の整穴住居跡4軒・後期住居跡32軒。奈良～平安時代の整穴住居144軒を検出。古墳時代前期の住居からヒスイ製勾玉と碧玉製の菅玉が出土している。他に江戸時代の整穴伏拝壇など。	小野編1993「神保富士塚遺跡」 群埋文
4	長根羽田倉遺跡	古墳時代後期の整穴住居跡62軒、飛鳥・奈良時代の住居跡24軒、平安時代の住居跡45軒が検出された。他に浅間B継石下の水田が見つかっている。古墳時代後期の象眼遺構から滑石製馬形や他の石製模造品が出土している。	鹿沼編1990「長根羽田倉遺跡」 群埋文
5	長根安坪遺跡	古墳時代の方形周溝基14基と後期古墳15基。古墳～平安時代の整穴住居跡49軒が調査された。	菊池編1997「長根安坪遺跡」 群埋文
6	天引口明塚遺跡	2基の古墳が調査された。他に3基の古墳の存在が伝えられているが、現在は崩壊され細地化されている。	古島編1992「神保下塚遺跡」 群埋文所収
7	天引狐崎遺跡	古墳時代の方形周溝基4基と後期古墳2基が調査された。他に整穴住居跡1軒が検出された。他に谷地部から不組の遺構。	衣井編1996「天引狐崎遺跡」II 群埋文
8	天神I遺跡	古墳時代後期の整穴住居跡6軒が検出。	松田編1994「天神I遺跡他」 山崎考古学研究所
9	天神II遺跡	古墳時代後期の整穴住居跡18軒と同時期の小畿治2軒。木の塚形環出土。	同 上
10	松葉慈字寺遺跡	古墳時代後期の整穴住居跡51軒と奈良～平安時代の整穴住居跡19軒。	同 上
11	西原遺跡	古墳～奈良～平安時代の整穴住居跡30軒。他に壱(中世)が検出された。	同 上
12	神保古墳群	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳群圏内では63基をあげている。	1938「上毛古墳群」群馬県
13	塩I古墳群	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳群圏内では10基をあげている。	同 上
14	塩II古墳群	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳群圏内では12基をあげている。	同 上
15	折茂東遺跡	古墳時代前～後期と平安時代の整穴住居跡が検出されている。	『折茂東遺跡』1987吉井町教
16	西馬場・長根宿遺跡	古墳時代前期と平安時代の整穴住居跡及び奈良時代の遺物集積地点。	1987「西馬場・長根宿遺跡」 吉井町教育委員会
17	悪行寺古墳	直径40mの大型円墳。墳丘より古式土師器が採集されている。	
18	安坪古墳群	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳群圏内では44基をあげている。	1938「上毛古墳群」群馬県
19	丸山遺跡	古墳時代後期の土師器が甘葉町古代館に展示。	小安和順氏より御教示
20	下小塚・下小塚II南小塚・三ツ俣	弥生時代～平安時代の集落遺跡。出土遺物が白倉下原・天引向原遺跡と大変にかよっている。	同 上
21	笠遺跡	弥生時代後期～古墳時代の集落遺跡。滑石製模造品が多数出土。	
22	甘葉寺里遺跡	24の調査区に別れて調査されている。3～5調査区ではAs-B下木田が検出。20～23調査区では弥生時代後期～平安時代の整穴住居が検出されている。	小安編1984～1989「甘葉寺里遺跡」
23	岩崎古墳群	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳群圏内では6基をあげている。	1938「上毛古墳群」群馬県
24	本郷古墳群	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳群圏内では21基をあげている。	同 上
25	片山古墳群	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳群圏内では7基をあげている。また、群集墳とは別に中期初頃の小型前方後円墳が平成3年に調査され粘土板が検出。	
26	天恩塚古墳	笠原宿南古墳の北東400mに位置し、整穴系の主体部と思われる。	1981『群馬県史』資料編編3
27	笹森塚古墳	甘葉地域最大の前方後円墳で全長100mで周溝をもつ。円輪型覆穴式石室をもち、6世紀後半の築造である。	
28	二日市古墳群	現在20基程の円墳が残る。5世紀後半頃からの築造が考えられる。	
29	大山鬼塚古墳	円墳で方形石棺を伴う。5世紀後半と推定。遺物は東京国立博物館蔵。	1981『群馬県史』資料3
30	大山古墳群(西大山遺跡)	古墳の周堀4基が調査され、1号古墳から5世紀後半の船載品の「くつわ」が出土。他に平安時代の刻歯土器。浅間A継石下の溝と獨立柱建物1棟。	小安編1996「西大山遺跡」 甘葉町教育委員会
31	青木原I・II中輪遺跡	古墳時代後期と奈良～平安時代の整穴住居20軒が調査された。	長谷部編1983「青木原I・II中輪遺跡」 甘葉町教委

番号	遺跡名	遺跡の概要など	参考文献など
32	福島椿森遺跡	中世の土坑墓3基と竪立柱建物数棟と樺列。浅間A軽石を含む溝とピット。	平成8年 群埋文調査
33	福島鹿嶋下遺跡	古墳時代前期から後期前半にかけて17軒の竪穴住居が検出された。焼失住居が3軒。滑石製品の工房跡から数千点におよぶ多量の白玉や米製品が出土。	
34	福島駒形遺跡	古墳時代前期～後期にかけての竪穴住居跡34軒を調査。石製模造品や白玉の製作を行った住居2軒がみつかった。他に、同時期の竪立柱建物。7世紀前半と考えられる古墳1基。	1995『年報』14 群埋文
35 ・ 36	塚原古墳群 ・ 田窪塚原遺跡	7基の円墳を調査した。すべて円墳で、この内1基は周面のみであったが、他は主体部の調査を行っている。4号墳とした「しの塚古墳」は墳丘全面を瓦石でおおった両袖形横穴石室をもつ古墳である。 この古墳群は、塚原古墳群とよばれ、20基ほどの円墳から成っている。7世紀代の築造が考えられる。 発掘調査では、浅間A軽石下の田島も検出されている。	1996『年報』15 群埋文

3 基本土層

白倉下原・天引向原遺跡は鍋川右岸の上位段丘面に立地している。上位段丘面では基本的に表土層(耕作土)、ローム層、粘土層、礫層の堆積が認められる。表土層中には、1783年(天明3年)に噴出した浅間A軽石(As-A)、1198年(天仁元年)に噴出した浅間B軽石(As-B)を含んでいる。しかし、純層での堆積は確認できなかった。

第I層 黒褐色土層(表土層) 耕作土である。攪拌された浅間A軽石を多く含んでいる。浅間A軽石は純層では認められないが、灰掻き山直下で検出された晶粒の軟間では純層で堆積している。浅間B軽石は台地部では認められなかったが、谷部では堆積している部分もある。また、浅間C軽石の堆積はいずれの部分でも認められなかった。

第II層 暗褐色土層 漸移層で、白倉B区とC区の遺構確認面である。縄文時代の遺物包含層でもある。なお、第II層は、白倉B区とC区では存在するが他の地区では、その後の土地利用によって大半が消失していた。

第III層 明黄褐色ローム層 白倉A区及び天引地区の遺構確認面である。堅く締まるローム層で、浅間板鼻黄褐色軽石(As-YP)を多く含む。

第IV層 黄褐色ローム層 III層に比較してやや軟質で、粘性を持つ。浅間白糸軽石(As-SP)の可能性のある白色の軽石を含む。

第V層 黄褐色ローム層 浅間板鼻褐色軽石(As-BP)をブロック状に含む。

第VI層 明黄褐色軽石層 明黄褐色を呈する浅間板鼻軽石(As-BP)の純層で、堅く締まる。

第VII層 灰褐色軽石層 灰褐色を呈するAs-BPの純層で、堅く締まる。

第VIII層 暗褐色ローム層 粘性のあるローム層で下半部ではAs-MPを少量含んでいる。

第IX層 明赤褐色軽石層 明赤褐色を呈する浅間室田軽石(As-MP)の純層である。

第X層 灰白色軽石層 IXと同じAs-MPの純層であるが、粒子は細かい。水成作用によって色調が変化し、下半部では一部粘土化している。

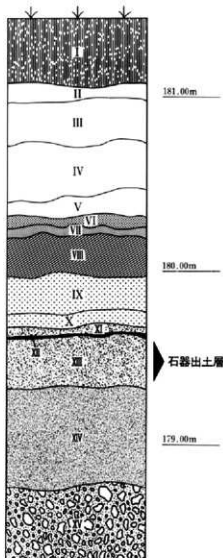
第XI層 暗褐色粘土層 堅く締まる粘土層。

第XII層 乳白色火山灰層 始良Tn火山灰(AT)の純層である。非常にきめ細かいガラス質の粒子である。

第XIII層 暗褐色粘土層 堅く締まる粘土層で、石器包含層である。平均2cm程の小礫を多く含む。

第XIV層 青灰色粘土層 きめ細かい粒子で構成される。

第XV層 礫層 礫は比較的小型のものを主体とし礫種は結晶片岩とチャートを主体とする。



第6図 基本土層

4 発掘調査区の概観

ここでは、時代別に発掘調査区内を概観したい。調査区内については、時代別に5冊の報告書が刊行されるわけで、詳細はそちらに拠られたい。

(1) 旧石器時代

この時代の具体的な内容は、『白倉下原・天引向原遺跡1』（1994）に拠られたい。

旧石器時代の調査は、縄文時代以降の調査が終了した段階で、ローム層が確認されている部分に対して行われた。基本的には調査区ごとに2×4mの試掘坑を設定し、文化層が確認された場合には本調査を行った。結果的には、表土下約2mの部分に堆積する始良Tn火山灰（AT）層直下から文化層が確認され、白倉A区・白倉B区・白倉C区で各1カ所・天引地区で2カ所の合計5カ所で本調査を行った。

白倉A区では、舌状台地から6カ所のブロックが環状ブロック群を構成して検出されている。403点の

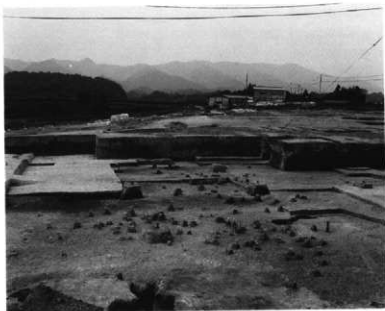
石器類が出土し、ナイフ形石器・台形椽石器・局部磨製石斧などが出土している。

白倉B区では、平坦な台地上から4カ所のブロックが環状ブロック群を構成して検出されている。120点の石器類が出土し、出土石器は白倉Aとほぼ同じ器種が出土している。

白倉C区では、谷頭部から40m程奥に入った台地上から、台形椽石器などが3点出土している。

天引地区では、舌状台地の先端部（天引A区）と台地の奥部分（天引C区）を調査した。舌状台地の先端部では、13カ所のブロックが環状ブロック群を構成して検出されている。268点の石器類が出土し、ナイフ形石器・台形椽石器・楔形石器などが出土している。台地の奥部分では、小規模なブロック1カ所から、台形椽石器など10点が出土している。

整理作業によって、石器群の母岩と多数の接合資料が確認され、石器製作技術を考察するための基礎的なデータと集落研究を行う上での基礎的なデータを呈示することができた。



白倉A区旧石器遺物出土状態

II 立地環境と発掘区の概要

(2) 縄文時代

この時代の詳細は『白倉下原・天引向原遺跡』II (1994) に拠りたい。

縄文時代は、前期中葉黒浜式期から後期前半堀之内2式期までの遺構と遺物が主体を占めている。検出された遺構の内訳は、竪穴住居跡43軒、竪穴状遺構1基、埋壘12基、土坑290基である。以下に、時期ごとの様相について概述していきたい。

前期 黒浜式期の住居3軒と諸磯式期の住居5軒が検出されている。黒浜式期では、有尾式土器も多く出土しており、白倉C区を中心に70基近くの土坑が検出されている。諸磯式期は、ほとんどが諸磯b(新)式期に帰属し、前後の時期の遺物は極めて少ない。また、遺構分布は、黒浜式期とは異なり、調査区全体に遺構が散在する状況が見受けられる。

中期 勝坂II式期の住居4軒、勝坂式終末期の住居14軒、加曾利E3式期の住居7軒、加曾利E4式期の住居2軒が検出されている。この中で、勝坂式終末期の土器群は、今後の当該期の編年研究に寄与するであろう良好な資料である。勝坂式期の遺構は、

白倉A区と天引C区に別れて検出されているが、加曾利E式期の遺構は、白倉B区を中心に検出される傾向をもつ。加曾利E4式期の住居の中で、1軒は柄鏡形状を呈するものと思われる。

後期 称名寺式期の住居4軒と堀之内1式期の住居4軒が検出されている。遺構の残存状態が悪いものもあるが、敷石住居及びその系譜をひくものが多いのが特色であろう。傾向として、称名寺式期の敷石住居は、全面に配石が施されるのに対して、堀之内1式期に入ると、柄部を中心とした部分的な配石に変わるようである。この時期は、白倉B区に遺構が多く分布する傾向が見受けられた。堀之内2式期は、住居は検出されなかったものの、13基の土坑が白倉B区を中心に調査された。とりわけ、白倉B区6号土坑からは、トチノキの炭化種実がまとめて出土している。年代測定も併せて行い、土器の年代観に近い測定値を得ている。

なお、『白倉下原・天引向原遺跡』Vの報告書において遺構外出土土器時期別分布を付図として掲載している。



白倉B区26号住居(敷石住居)址

(3) 弥生時代

この時代の詳細は『白倉下原・天引向原遺跡』Ⅲに拠りたい。弥生時代は、竪穴住居跡59軒と土坑33基及び方形周溝墓2基が検出されている。

竪穴住居跡59軒の各地区ごとにおける内訳は、白倉A区の2軒、同B区の4軒、同C区の16軒に対して、天引地区は37軒と圧倒的に多い。これらは、すべて弥生時代後期樽式期に属しており、樽式土器およびその系譜に連なる土器を伴っている。樽式4段階区分（4段階は、樽4式あるいは樽式系土器と呼ばれ、古式土師器が伴する段階）を用いれば、検出された竪穴住居跡は、全て樽1～3式期（段階）に帰属する。この時期区分をもとにして、住居の分布傾向を見ると、広い地域の中にまんべんなく集落が継続的に形成されていくのではなく、各時期ごとに古地箇所を変えている点特徴的である。すなわち、第1段階は白倉C区、第2段階は白倉B区および天引地区、第3段階は天引地区に分布の顕著な集中傾向が認められる。

このうち、白倉C区で確認された第1段階の住居

15軒では、いずれからも磨製石鏃の製作に関わる遺物類が出土している。これらすべての住居がまったくの同時期に存在したとは言い難いが、極めて接近した時期の所産であることは間違いない。おそらく磨製石鏃の製作を専門的に行っていた集落であったと思われる。

白倉B区の東寄りにある第2段階の4軒の住居も、適当な間隔をおいて一箇所に集中しており、集落の1単位を反映している可能性が高い。

一方、天引地区での第2段階以降の展開過程を見ると、集落の中心は常にその南寄りの地域に進んでいることがわかる。古墳時代前期以降の集落域が北寄りにあるのと対照的であり、興味深い点である。

土坑の大半は、中期前半の限られた時期に集中し、白倉B区及びC区において群をなしている。形態は袋状を呈し、貯蔵穴であった可能性が高い。

白倉C区で検出された2基の方形周溝墓は、樽3式よりも後出する時期と思われる、この時期の竪穴住居跡は、検出されなかった。



天引C区弥生時代住居址

II 立地環境と発掘区の概要

(4) 古墳時代

古墳時代については、『白倉下原・天引向原遺跡』
III (1994) 及び『同』IV (1997) に分かれて掲載さ
れている。原則的には、カマドを持たない炉の段階
(おおむね5世紀前半以前) が同『III』に、カマド
を持つ段階(おおむね5世紀後半以降) が『同』IV
に分かれることになる。ただ、白倉A区において堅
穴住居跡北側が破壊されていた3軒(5世紀前半)
については、『同』IVに掲載してしまった。

この時代では、堅穴住居跡193軒と他に粘土探掘坑
が67基とまとまって検出されている。

堅穴住居跡は、4世紀代(S字状口縁台付甕の段
階)においては、弥生時代終末期の分布を踏襲する
かのように天引地区だけで検出されている。5世紀
に入ると天引地区とともに白倉地区にも少数検出さ
れる。そして、6世紀に入ると、天引地区ではあま
り検出されず、白倉地区において多量に検出され、
7世紀段階では、逆に検出数も減少する。単純に時
期別の堅穴住居跡軒数だけ比べれば、4世紀22軒、

5世紀20軒、6世紀101軒、7世紀30軒となり6世紀
代の異常さが強調されよう。さらには、時期及び地
区における堅穴住居跡の検出状況が一様ではないこ
とが確認できよう。

堅穴住居跡から出土した特殊遺物は数多いが、幾
つかを列挙してみると以下ようになる。小型仿製
鏡1点(前期)、羽口に転用された高坏脚部(中期)
1点、土鈴1点(以下後期)、木葉形坏5点、手鏡形
土製品3点、魚形(動物意匠)土製品、まとめて
出土した白玉及び未製品、特徴的な製作方法が観察
される土師器群など。

粘土探掘坑は天引地区の南東部分でまとめて検
出されているが、時期的には5世紀終末から6世紀
前半に限定される。この、粘土探掘坑からは同時期
の樹皮製曲物2点と使用時の状態を示すと思われる
梯子が3点出土している。

なお、今回7世紀を古墳時代に含めて報告するが、
便宜的な措置として理解して戴きたい。



白倉B区古墳時代後期住居址

(5) 奈良・平安時代

この時期は「白倉下原・天引向原遺跡」V (1997)に掲載される。出土遺物から想定される年代としては、おおむね8世紀から11世紀までが該当しよう。検出された遺構としては、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝(道路状遺構)、畠の存在が推定される部分、及び小規模寺院跡、水場がある。

これらのうち中心的な位置を占めているのは竪穴住居跡であり、全部で150軒が敷え上げられている。住居分布のおおまかな傾向を指摘すると、8世紀代は比較的散漫に各地区に分布していたのが、9世紀に入ると、白倉B区を中心とした部分に集中が見られる。ところが、B区には10世紀以降殆ど住居が検出されていない。また、天引地区においては、9世紀前半では殆ど住居がなかったが、9世紀後半以降11世紀に至るまでまとまって住居が検出されるようになる。これらの住居分布は、9世紀以降に創建が想定される天引地区の小規模寺院跡や、白倉B区西側の水場(9世紀後半以降池に改修)などとも絡み

あった結果として理解されよう。住居のカマド位置も、時代が下るに従って北側→東側→南西隅へと検出位置が異なるようである。また、11世紀代の住居が17軒とまとまって検出されていることも特筆すべきことであろう。

小規模寺院跡であるが、ここでは、南北約10m、東西約40mの区域を削って平坦面をつくり、そこに長辺約10m、短辺約5mの雨落溝をめぐらせている建物跡の存在が推定された。後世の削平が著しく、柱穴、礎石等はすべて失っていた。この周囲からは、上野園分寺系の瓦が出土している。この建物跡の南側に隣接する平安時代の竪穴住居跡からは、同種の瓦とともに「福天寺」と墨書された須恵器が出土し、寺院跡との関係を推定させた。

さて、出土遺物の中で、特筆すべきものとして文字資料141点(新井・午・合)や、鋸1点、鉄錘4点、鉄鍋や火舎の破片などがある。特に、文字資料は「新屋郷」や「新屋牧」研究に一石を投じる資料となる。



天引地区平安時代寺院址の削平面と溝

II 立地環境と発掘区の概要

(6) 中近世以降

明確に中世と確定できる遺構は極めて少なく、可能性のあるものとして宋銭のみを出土した墓や、焼けた骨片を伴った土坑程度である。また、生産跡としては、As-B（浅間B軽石）上の畠が1カ所検出されている。このように遺構としては少ないが中世の青磁や白磁の破片が調査区内から出土しており、生産跡や墓以外の土地利用もなされていたものと思われる。

近世の遺構としては、道状遺構がある。主な道状遺構は3条検出されているが、いずれも両脇に溝が付随していた。道状遺構のうち、2条は白倉B区内で検出されている。この場合、道幅は約5～6mで調査区を南北に分断するように全長約70m部分が検出されている。また残る1条は白倉A区の南東から白倉B区の北東部にかけて検出されており、調査区を東西に横切るようにして検出されている。道幅は約5～6mで、全長約110m部分が検出されている。道状遺構は互いに交わってはいないが、発掘調査区外に延長した場合ほぼ直行することになる。

その他の遺構は農業生産に拘わるものが多かった。天引地区では6カ所畠が検出されている。大部

分は台地の斜面部においてAs-A（浅間A軽石）の灰播き山が検出され、その下から畠が検出されている。灰播き山の存在から少なくとも天引地区の台地上においては、浅間A軽石降下時にはかなりの範囲で畠作が行われていたものと思われる。また、天引地区北側の谷津では、水田跡を調査した。また、白倉A区と天引地区で各1基、農業生産に関連すると思われる桶埋設土坑（木質は残存していなかった）が検出されている。他に、近世に関する遺構としては、墓塚が複数検出されている。その中の1基は、頭部に摺鉢（18世紀代）を被せた状態で検出された。

近代以降は、台地上については大部分が畠地として利用されたようである。今回の調査においても、時期を特定できなかった表土と同じ土壌の耕作溝を多数検出している。また、イモ穴と称される「イモ穴状土坑」もおそらくは近代以降の土地利用痕跡であろう。白倉B区を中心にして、きわめて新しい一辺2m程度の方形土坑が多数検出されたが、これは「昭和20年代にリングの苗木を植えるために掘った穴である。」と、かつての土地所有者から話を聞くことができた。



天引地区浅間A軽石の灰播き山と直下の畠址

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

1 遺構と遺物の概要

(1) はじめに

今回の調査では、多くの奈良・平安時代に帰属する遺構や遺物が検出された。遺構の多くは、発掘調査時において、掘り込みを有していたために比較的容易に検出できた土地利用の痕跡であった。それでは、今回検出できた遺構だけが当該期の土地利用痕跡であったのかというと、おそらくそうではない。

その理由の一つとして、時代は異なるが本県北群馬郡子持村黒井峯遺跡や渋川市中筋遺跡などで明らかになった平地建物の存在があげられよう。今や日本の古墳時代を代表する集落遺跡である岡遺跡は、榛名山を給源とする降下テフラによって直接被覆されていたために当時の地表面が残存しており、地面を殆ど掘りこまない平地建物の存在が明らかとなった。おそらく、当集落遺跡においても本来の地表面には平地建物が存在していたと考えるべきなのだろう。

また、当該期の遺構のいくつかは中世以降の土地利用によって消滅してしまったことも想像にかたくはない。あるいは、遺構確認面を低く設定したために表土を重機によって掘削した際に破壊してしまった遺構も存在するかもしれない。そのような目で当該期の遺構全体図(第7図)を眺めると、よくも遺構が破壊されずに残ったと思うような場所さえ存在する。

このような、発掘調査中においてはわからない、いわば目に見えない土地利用痕跡の存在を知る手掛かりとして、どのような情報があるのだろうか。その一つに、各時期において、どれだけの遺物がどこから出土しているのかという情報があるだろう。今回の報告も、このようなことを念頭において整理作業に取り掛かったのではあるが、現実には全ての出土土器の時代を分類し集計することはできなかった。

一つには、整理担当者の能力不足もあるが、縄文土器などと異なり破片の段階で世紀を特定することが困難であったことが一番の理由である。そこで、できうる最低限の情報として遺構の大部分を占める竪穴住居跡出土遺物については、観察表編の最後に住居出土遺物一覧表として示した。この表では各住居跡ごとに出土土器を縄文、弥生、古墳時代前中期、古墳時代後期、奈良、平安、中近世に分類し、他に石製品、鉄器、炭化材の出土点数を示してある。基本的に掲載してある本報告書の奈良・平安時代出土遺物に関する情報は、古墳時代後期を取り扱う「IV」の報告書中住居出土遺物一覧表にも奈良・平安時代出土土器点数として示してあるので参照してほしい。これらのデータを各時代各時期ごとの分布図として示すことができればよかったのだが時間的制約から縄文時代のみを「V」付図として提示できたに過ぎず悔やまれる。

なお、奈良・平安時代の半世紀ごとの遺構分布については、ここでは概略を記すにとどめ、具体的には図も含めて別項(VI-2 奈良・平安時代の土地利用変遷)の中で触れていくことにする。また集落遺跡の標相を具体的に明らかにするための方法の一つとして、遺構間での遺物接合を行った。接合の事実は各遺構の記載によられたいが、別項(VI-1 出土土器の遺構間接合事例について)でまとめて掲載したので併せて参照して欲しい。

また、全体図については奈良・平安時代全体図(第7図)、竪穴住居跡のみの地区ごとの全体図(第8~11図)、土坑のみを掲載したもの(第13~16図)、住居と土坑以外の遺構全体図(第12図)を作成した。必要に応じて利用して欲しい。

(2) 遺構について

今回の報告書で取り扱う当該期の遺構は、竪穴住居跡150軒、掘立柱建物17棟、土坑71基、溝2条、寺院跡1カ所、水場と池状遺構1カ所、畠1カ所であ

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

る。当然のことではあるが遺構の主体を占めるのは竪穴住居跡である。そこで、報告書の体裁は最初に竪穴住居跡の事実報告を行った後に、他の遺構についての記載を行うこととした。

竪穴住居跡の掲載は1:60でカマド図は必要に応じて1:30図を作成した。事実記載は本文編に記載し、住居遺構図、住居出土遺物図の順に掲載してある。遺物観察表と住居出土遺物一覧表は観察表編に、遺構及び遺物写真は写真図版編に掲載してある。

竪穴住居跡は時期と地区による分布のばらつきがみられる。特徴的な事例としては、9世紀前半において、天引地区に竪穴住居が殆どないことや10世紀において白倉B区で竪穴住居が殆どないことなどがあげられる。また、11世紀の住居分布は天引地区を中心としている。

他の遺構として当遺跡を特徴付けるのは寺院跡と水場（後に池に改修）がある。

寺院跡は天引A区台地東側の縁辺に位置し、眼下には三途川をのぞむ場所に選地されている。寺院の存続年代については9世紀～11世紀内の時間幅の中である可能性は高いが、細かな上限及び下限については確証がなかなか得られなかった。

水場は古墳時代から引き続いて利用されるが、9世紀の後半において石垣を巡らした池状の施設に改修される。ここからは10世紀代も遺物は出土しておらず、池状施設も短期間で廃絶されたようである。

(3) 遺物について

今回の報告においては、前述した理由により遺構外出土遺物及び他時期遺構内の古墳時代後期に帰属する遺物について積極的に資料化できなかった。遺構内出土遺物については、全ての遺物について調査時に出土位置を記録できればよかったのであるが、残念ながら任意で取り上げてしまっているものも多い。そこで、遺物観察表編中において住居出土土器一覧表中に、出土位置を記録した遺物（いわゆる点を取った遺物）を一括して取り上げた遺物の点数を遺物種類別に記載しておいた。また、出土位置を記録したものについては、図化にかかわりなく遺構の

平面図及び断面図にドットとして落とした。不十分な記載方法とは思いますが、ご寛容ください。

さて、出土土器の年代観であるが、当事業団職員の中沢悟、坂口一氏、神谷佳明、桜岡正信の各氏によるところが大きいのが、最終的な責任は編集担当にある。

遺物掲載スケールは1/4を基本としたが、白倉C区においては埴類などの小形生活什器を1/3で表現している。また、遺物の種類によって倍率を変えている。

本報告書に掲載した奈良～平安時代の土器群は8～11世紀まで連続しており、甘楽地方の編年研究を進展させるであろう資料である。それだけでなく今回の出土遺物は希少性のあるものも含め様々な研究素材を提供してくれる。それらの多くは取り上げかたの濃淡はあるが成果と問題点で取り扱っているのでも参照してほしい。具体的には、出土土器の遺構間接合、出土文字資料（新屋敷及び新屋敷並びに寺院跡関連のもの）、寺院跡関連出土遺物、鉄錐、奈良時代の鋸などで、今後様々な場面で取り上げられるであろうことを確信している。

2 竪穴住居跡

本報告書で取り扱った竪穴住居跡は150軒である。

編集の関係で、一つの住居から得られる、事実記載、遺構図、出土遺物実測図、出土遺物観察表の各データを別個に掲載している。そこで、各住居跡番号ごとに、各データが検索できるように竪穴住居跡観察表（表2）を作成し次頁以降に掲載した。この表に合わせて時代、焼失住居の可能性、面積も示してあるので利用して欲しい。また、半世紀ごとの様相については成果と問題点の中で触れる予定だが、そこには半世紀ごとの時期別一覧表（表19 155頁）と時期別面積一覧表（表20 156頁）、時期別カマド位置一覧表（表21 156頁）があるので合わせて参照してほしい。

住居選地は寺院跡と水場と有機的関連をもちながら考えられていたようである。また、11世紀の竪穴住



第7图 奈良·平安时代全体图

居跡は17軒検出されているが周辺地域で当該期の遺構がこれだけままとまっているのは珍しい。さらに、As-Bが埋没土下層中に純層として堆積している事例も少数確認されており貴重であろう。

カマド位置についても時期により大きく変わり、当初は北カマドが主体であったのが、東カマドに移行し11世紀になると南西カマドの出現となる状況が看取される。

さて、以下に個別住居跡の報告にあたって留意したことについて述べておきたい。なお、個別住居跡の記載や各キャプションについては、繁雑さを避けるために「白倉A区6号住居」のように記載する。

事実記載は項目をたてて順次記載していった。その項目は、位置、遺構及び遺物の図と写真、形状、面積、主軸方位、壁と床面、覆土、カマド、貯蔵穴、柱穴、壁周溝、遺物出土状態、床下の状態、重複、時代である。必要に応じて他に、調査に至る経過を追加し、また、他の項目で触れた内容や、検出されていない住居内施設については項目を除いて記載している。

位置については、その住居跡が検出されたグリッドの中で一つを代表させて用いた。主軸方位はカマドをもつ壁面を上にした際の主軸方位である。

カマドの計測値は袖先端部幅の焚口幅と、袖石が残っている場合にのみ焚口高を記載した。

貯蔵穴については、この名称が相応しいかは議論のあるところだとは思うが、「いわゆる貯蔵穴」として理解して戴きたい。

遺物出土状態では極力出土状態の事実を記載するように心掛けたつもりであるが不十分な点も多い。白倉C区では、出土状態にタイプA、Ba、B、Cの名称を用いて説明している。これは東京都八王子市宇津木台遺跡群IVの報文中(土井、塩野崎1984)に用いられた手法であり、詳しくはそちらを参照してほしいが簡単に抜粋すると

「タイプA 住居廃絶時にそのまま残されたと認められるもの

タイプB 住居廃絶直後から、あまり時間的隔たり

を持たずに廃棄されたと認められるもの

タイプC 住居廃絶後、かなりの時間的隔たりを持って廃棄されたと認められるもの」となりタイプBaについては、タイプBのうち「床面付近に比較的安定した出土状態を示すものは、住居が廃絶された直後に廃棄されたもの」を示している。白倉C区から住居事実記載を書き始めた関係でこの記載方法を採用したが、少なくとも点を取る調査手法が当遺跡の場合徹底しておらず、この分類基準そのものが適応できないと考えて他地区では採用しなかった。遺構内及び遺構間の接合事例は、整理作業の過程で確認できたものを全てを、住居平面図及び断面図に掲載した。また、時間の関係から図化できなかったものの接合関係が確認できた遺物については、接合資料としてアルファベットの小文字を付けて住居平面図に掲載し、器種と部位についてこの項目で補うことにした。

床下の状態は、床下土坑の有無などについて記載している。本遺跡の調査では白倉B区の一部と白倉A区、天引地区において床下の調査を行う際、最初にジョレンで床面を数cm除去し、床面下に隠れている情報の採集を行った。そこでは、居住中の生活痕跡と思われる床下土坑やカマド痕跡が現れた。そこで得た所見などをここでは記載している。床下土坑はアルファベット大文字で示し遺構平面図には破線で掘り方ラインも含めて表現している。

重複では遺構の先後関係を認定根拠も含め記載するように心掛けた。時代では、住居の時期を記載するようにした。住居の時期といった場合、住居の構築、存続、廃絶、さらに埋没時といったように、いくつものステージが存在している。今回の報告では、住居に遺棄された土器もしくは廃絶後の一番新しい段階に認定される土器から想定される時期を記載するようにした。

住居内出土炭化材は通番で表し、遺構図にゴシック体で示し、樹種については表9(129~130頁)に記載してあるので参照して欲しい。

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

表2 竪穴住居跡一覧表

白倉下原A区

住居番号	時代	遺構図	遺構P.L	遺物図	遺物P.L	観察表	一覧表	焼面積(m ²)
6号住居	9世紀後半	図1	P.L.8	図100	P.L.60	1	125	10.5
9号住居	8世紀後半	図2	P.L.8	図100-101	P.L.60	1・2	125	16.2
11号住居	8世紀前半	図18	IV-P.L.11	図109	IV-P.L.83	17-18	125	10.5
12号住居	8世紀後半	図3	P.L.8・9	図101	P.L.60-148	2	125	10.9
13号住居	9世紀後半	図1	P.L.10	図101	P.L.60	3	125	(9.5)
16号住居	8世紀前半	図2	P.L.10	図102	P.L.60	3	125	5.9
18号住居	8世紀後半	図4	P.L.10	図102	P.L.60	3	126	8.5
38号住居	10世紀前半	図4	P.L.10-11	図102-103	P.L.60-61	3・4	126	13.0
39号住居	9世紀前半	図5	P.L.11	図103	—	4	126	(9.7)
40号住居	9世紀前半	図5	P.L.11	図103	—	4	126	7.6
49号住居	9世紀前半	図6	P.L.11	図103-104	P.L.61-148	5・6	126	(11.3)
50号住居	8世紀前半	図7	P.L.12	図104	P.L.61-148	6-8	126	(18.5)
51号住居	8世紀前半	図8	P.L.12	図104	P.L.61-149	8・9	127	9.6
56号住居	8世紀後半	図8	P.L.12-13	図104	—	9	127	11.6
60号住居	8世紀前半	図9	P.L.13	図104	P.L.61-148	9-10	127	18.2
62号住居	8世紀前半	図18	IV-P.L.24	図109	IV-P.L.93	18	127	(9.4)
63号住居	8世紀前半	図10-12	P.L.13-14	図105	P.L.61-62-148	10-11	127	○ 29.0
68号住居	10世紀前半	図13	P.L.14	図106	P.L.62	11-12	127	13.3
69号住居	平安時代	図12	P.L.14	図106	P.L.62	12	128	—
70号住居	10世紀後半	図14	P.L.14	図106	P.L.62	12	128	—
71号住居	10前から11後	図13	P.L.15	—	—	—	128	—
75号住居	11世紀	図14	P.L.15	図107	—	13	128	(16.7)
79号住居	8世紀前半	図15	P.L.15	図107	—	13	128	—
90号住居	9世紀前半	図15	P.L.15	図107	P.L.62	13	128	4.4
98号住居	11世紀	図15	P.L.15	図107	—	14	129	(14.3)
100号住居	8世紀前半	図16	P.L.15-16	図107-108	P.L.62-63	14	129	14.3
102号住居	8世紀前半	図16	P.L.16	図108	P.L.63	14-15	129	9.0
108号住居	8世紀前半	図17	P.L.16	図108	P.L.149	15-17	129	16.5
118号住居	10世紀後半	図17	P.L.16	図108	—	17	129	—
119号住居	不明	図15	P.L.16	図108	P.L.63	17	129	—
120号住居	8世紀前半	図18	IV-P.L.34	図109	IV-P.L.98	18	130	—

白倉下原B区

住居番号	時代	遺構図	遺構P.L	遺物図	遺物P.L	観察表	一覧表	焼面積(m ²)
1号住居	8世紀前半	図19	P.L.17	図110	P.L.63	18	130	—
2号住居	8世紀前半	図19	P.L.17	図110	P.L.63	19	130	10.2
4号住居	9世紀後半	図19	P.L.17	図110-111	P.L.63	19-20	130	10.4
6号住居	8世紀後半	図20	P.L.17-18	図111	P.L.63	20	130	9.8
8号住居	9世紀後半	図20	P.L.18	図111	—	20-21	130	8.2
11号住居	9世紀前半	図21	P.L.18	図112	P.L.63-64	21	131	12.6
15号住居	8世紀前半	図21	P.L.18	図112-113	P.L.64	22	131	○ 6.4
18号住居	9世紀後半	図22	P.L.19	図113	P.L.64	22-23	131	13.5
19号住居	9世紀後半	図23	P.L.19	図114	P.L.64	23	131	—
31号住居	8世紀後半	図23	P.L.19	図114	P.L.64	23-24	131	16.9
32号住居	8世紀前半	図24	P.L.20	図114	P.L.64	24-25	131	13.6
36号住居	8世紀前半	図24	P.L.20	図115-116	P.L.65	25-26	132	16.2
39号住居	8世紀後半	図25-26	P.L.20-21	図117-118	P.L.66-149	26-29	132	○ 13.4
40号住居	不明	図26	P.L.22	図119	P.L.66	29	132	—
41号住居	8世紀前半	図26	P.L.22	図119	P.L.66	29-30	132	9.8
44号住居	9世紀後半	図27	P.L.22	図119	P.L.66	30	132	14.3
46号住居	10世紀後半	図27	P.L.22	図120	P.L.67	30-31	132	—
48号住居	9世紀後半	図28	P.L.22	図120	P.L.67-149	31	133	12.0
53号住居	9世紀後半	図29	P.L.23	図120	—	31	133	—
57号住居	9世紀後半	図29-30	P.L.23-24	図120-122	P.L.67-68	32-33	133	22.9
60号住居	9世紀後半	図30-31	P.L.24	図123	P.L.68	34	133	—
64号住居	9世紀前半	図31	P.L.24-25	図123	P.L.68	34	133	14.8
66号住居	9世紀前半	図33	P.L.25	図124	P.L.69	35	133	—
67号住居	9世紀後半	図32	P.L.25	図124-125	P.L.69	35-36	134	—
68号住居	9世紀前半	図33-34	P.L.25	図125-126	P.L.69	36-37	134	9.9

住居番号	時代	遺構図	遺構 P.L	遺物図	遺物 P.L	観察表	一覧表	焼	面積(m ²)
76号住居	9世紀前半	図34	P.L.26	図126	P.L.69	37	134	—	—
77号住居	9世紀後半	図34	P.L.26	図126	P.L.69	37	134	○	—
79号住居	9世紀後半	図35	P.L.26-27	図127	P.L.69	38	134	—	12.5
80号住居	9世紀後半	図36-37	P.L.27	図127-128	P.L.69-70	38-39	134	—	13.2
81号住居	9世紀前半	図37	P.L.27	図129	P.L.70	39	135	—	9.6
83号住居	9世紀前半	図38-39	P.L.27-29	図129	P.L.70-149	39-40	135	—	—
90号住居	9世紀前半	図40	P.L.29	図129-130	P.L.70	40	135	—	9.4
92号住居	9世紀前半	図42	P.L.29-30	図130	P.L.70-71	41	135	○	9.7
95号住居	9世紀後半	図41-42	P.L.30	図130-131	P.L.71	41-42	135	—	(18.5)

白倉下原C区

住居番号	時代	遺構図	遺構 P.L	遺物図	遺物 P.L	観察表	一覧表	焼	面積(m ²)
10号住居	10世紀後半	図43-44	P.L.31	図132-133	P.L.72	43-44	136	—	13.5
20号住居	8世紀	図45	P.L.31	図134	P.L.72	44	136	—	—
22号住居	10世紀後半	図46	P.L.31	図134	P.L.72	44	136	—	15.7
23号住居	9世紀後半	図47	P.L.32-33	図134-135	P.L.73	44	136	—	(20.9)
24号住居	10世紀前半	図45	P.L.32	図135	P.L.73	45	136	—	—
26号住居	9世紀前半	図48	P.L.32	図136	P.L.73	45-46	136	—	—
27号住居	9世紀後半	図48	P.L.32	図136	—	46	136	—	—
29号住居	10世紀前半	図48	P.L.32	図136	—	46	136	—	—
31号住居	8世紀後半	図49	P.L.32-33	図136-137	P.L.74	46-47	136	—	14.8
40号住居	10世紀前半	図50	P.L.33	図137	P.L.74	47	136	—	(12.8)
41号住居	10世紀後半	図50	P.L.33	図137	P.L.74	47	136	—	13.3
43号住居	9世紀後半	図48	P.L.33	図138	P.L.74	47	136	—	(10.4)
44号住居	9世紀前半	図51-52	P.L.33-35	図138-139	P.L.74-75	48	136	—	14.7
45号住居	8世紀後半	図53-54	P.L.33-34	図139-141	P.L.75-76	48-49	136	—	20.5
46号住居	9世紀前半	図55	P.L.34-35	図141	P.L.76	49-50	136	—	—
51号住居	8世紀後半	図52	P.L.34	図142	P.L.76	50	136	—	(4.8)
54号住居	9世紀前半	図54	P.L.34-35	図142	P.L.76	50	136	—	9.2
56号住居	9世紀後半	図56	P.L.35	図142	P.L.76	50	136	—	(7.6)
57号住居	8世紀後半	図57	P.L.34-35	図142-143	P.L.76-77	51-52	137	—	(20.8)
59号住居	8世紀後半	図56	P.L.35	図144	—	52	137	—	—
63号住居	9世紀前半	図58	P.L.34-35	図144	P.L.77	52	137	—	(18.1)
64号住居	8世紀後半	図59	P.L.33-35	図144	P.L.77	52	137	—	(15.6)
66号住居	10世紀前半	図60	P.L.35	図144	P.L.77	52-53	137	—	—
67号住居	10世紀前半	図59	—	図145	P.L.77	53	137	—	—
68号住居	10世紀前半	図61	P.L.35-36	図145	P.L.77	53	137	—	—
69号住居	11世紀	図62	P.L.36	図145-146	P.L.77-78	53-54	137	—	(14.8)
70号住居	10世紀前半	図60	P.L.36	図146	P.L.78	54	137	—	—
71号住居	10世紀前半	図62	P.L.36	図146	—	54	137	—	—
73号住居	10世紀前半	図63	P.L.36	図147	P.L.78	54-55	137	—	—
75号住居	10世紀前半	図63	P.L.36	図147	P.L.78	55	137	—	—
83号住居	10世紀前半	図64	P.L.37	図147-148	P.L.78	55	137	—	9.4
87号住居	9世紀後半	図63	P.L.37	図148-149	P.L.79	55-56	137	—	—
92号住居	10世紀前半	図65	P.L.37	図149-150	P.L.79	56	137	—	—
93号住居	9世紀後半	図65	—	図150	P.L.79	56	137	—	—

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

天引向原地区

住居番号	時代	遺構図	遺構PL	遺物図	遺物PL	観察表	一覧表	焼面	面積(m ²)
3号住居	8世紀前半	図66	P L 38	図151	P L 80	56-57	138		10.0
8号住居	8世紀前半	図67	P L 38	図151	—	57	138		—
9号住居	8世紀前半	図67	P L 38	図151	—	57	138		—
14号住居	9世紀後半	図68	P L 39	図151	P L 80	57	138		13.3
15号住居	9世紀前半	図68	P L 39	図151	P L 80	58	138		5.8
17号住居	10世紀後半	図69	P L 39+40	図152	P L 80	58	138		(11.4)
26号住居	不明	図70	P L 40	図152	P L 80	58	138		—
27号住居	11世紀	図71	P L 40+41	図152-153	P L 80	59	139		9.0
29号住居	11世紀	図70	P L 41	図153	—	59	139		—
32号住居	10世紀後半	図72	P L 41	図153	P L 81	59	139	○	4.8
33号住居	9世紀後半	図72	P L 42	図153-154	P L 81	60	139		(10.7)
36号住居	11世紀	図73	P L 42	図154	—	60	139		(8.8)
37号住居	11世紀	図73	P L 42+43	図154	P L 81+134	60+61	139		13.0
38号住居	10世紀前半	図74	P L 42~44	図155	P L 81	61-62	139	○	11.1
39号住居	11世紀	図74	P L 44	図155-156	P L 81	62	140		8.1
40号住居	10世紀後半	図75	P L 44	図156	P L 81	62	140		—
41号住居	10世紀前半	図75	P L 42~44	図156-157	P L 82	63	140		—
45号住居	11世紀	図76	P L 45	図157-158	P L 82	63	140	○	—
49号住居	9世紀後半	図77	P L 45	図158-159	P L 82	64	140		13.1
63号住居	11世紀	図76	P L 45+46	図159	P L 83	64	140		—
64号住居	9世紀後半	図78	P L 46	図159-160	P L 83	65	140		6.2
66号住居	8世紀前半	図79	P L 47	図160-161	P L 83+84	66	141		15.8
67号住居	8世紀前半	図77	P L 47	図161	P L 84	66-67	141		12.8
68号住居	8世紀後半	図80	P L 47+48	図161-162	P L 84	67-68	141		14.2
70号住居	平安時代	図79	P L 48	図162-163	P L 84	68	141		—
72号住居	8世紀後半	図81	P L 48	図162	P L 84	68	141		11.1
75号住居	平安時代	図81	P L 49	図164	P L 84	69	141		14.4
76号住居	8世紀前半	図82	P L 49	図164	P L 84+149	69-70	141		8.6
79号住居	10世紀後半	図82	P L 49	図164	P L 85	70-71	142		(10.8)
80号住居	10世紀前半	図83	P L 50	図165	P L 85	71	142		7.9
81号住居	11世紀	図83	P L 50	図165	P L 85	71-72	142		11.5
82号住居	9世紀後半	図84	—	図166	P L 85	72	142		—
83号住居	10世紀後半	図85	P L 50-51	図167	P L 85+134+135	73	142		6.3
86号住居	11世紀	図84	P L 50-51	図167~169	P L 86-135	74	142		—
89号住居	9世紀後半	図86	P L 51-52	図170~172	P L 86-87	75	142		12.3
92号住居	11世紀	図87	P L 52-53	図172-173	P L 87	76	143	○	10.0
93号住居	平安時代	図85	—	—	—	—	143		—
95号住居	9世紀後半	図88	P L 54	図173	P L 87	76-77	143		—
98号住居	10世紀前半	図89	P L 54	図174~176	P L 87+88	77-78	143		25.7
102号住居	10世紀前半	図88	P L 55	図176-177	P L 88	78-79	143	○	5.4
111号住居	11世紀	図90	P L 55	図177-178	P L 88+89	79	143		12.8
113号住居	11世紀	図91-92	P L 55-56	図178-179	P L 89	79-80	144	○	19.1
120号住居	10世紀前半	図92	P L 56	図180	P L 89	81	144		(13.8)
123号住居	11世紀か	図93	P L 56	図180	P L 89	81	144		10.6
126号住居	11世紀	図94	P L 56-57	図180	P L 89	81-82	144		10.7
128号住居	10世紀後半	図93	P L 57	図181	P L 89-90	82	144	○	—
130号住居	11世紀	図95-96	P L 57	図181	P L 90	82-83	144		—
133号住居	8世紀後半	図97	P L 58	図181-182	P L 90	83	145		11.7
139号住居	9世紀後半	図96	P L 58	図182-183	P L 90	84	145		—
140号住居	8世紀後半	図98	P L 59	図183	P L 90	84-85	145		—
145号住居	8世紀後半	図99	P L 59	図183	—	85	145		—

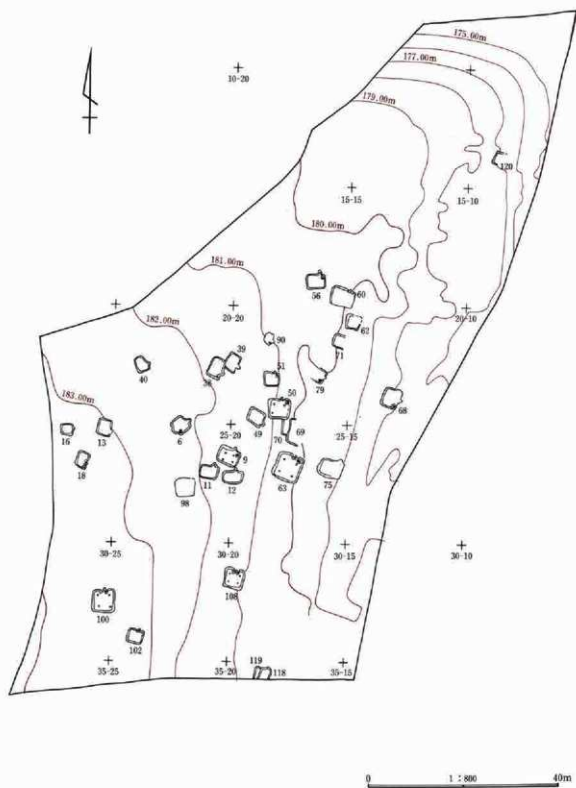
〔焼〕…焼失住居及びその可能性のあるものを○で表記。

〔—〕…該当数値がないことを表す。

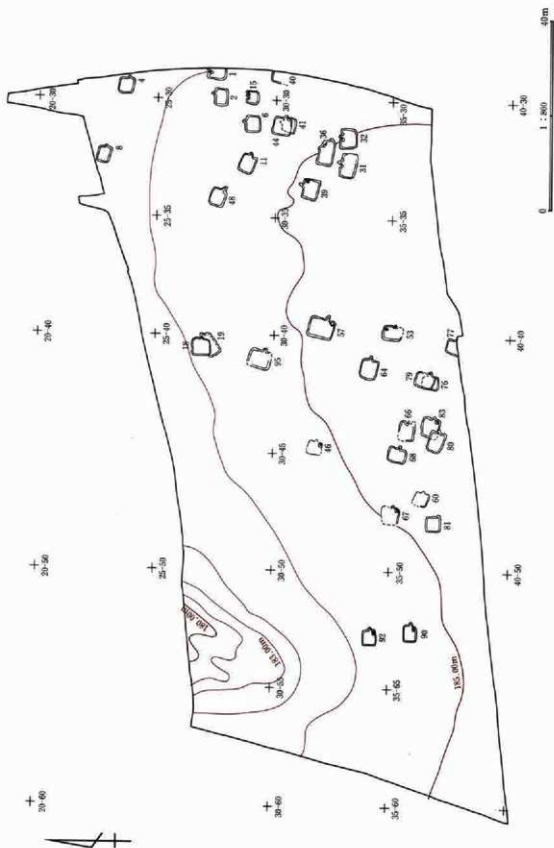
〔観察表〕…遺物観察表の略。

〔一覧表〕…遺物の一覧表の略。

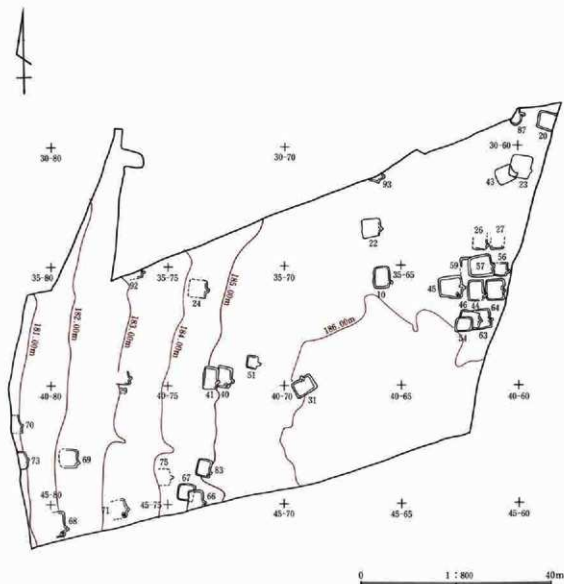
〔IV〕…「白倉下原・天引向原遺跡」IVに掲載。



第8図 白倉A区奈良・平安時代住居全体図

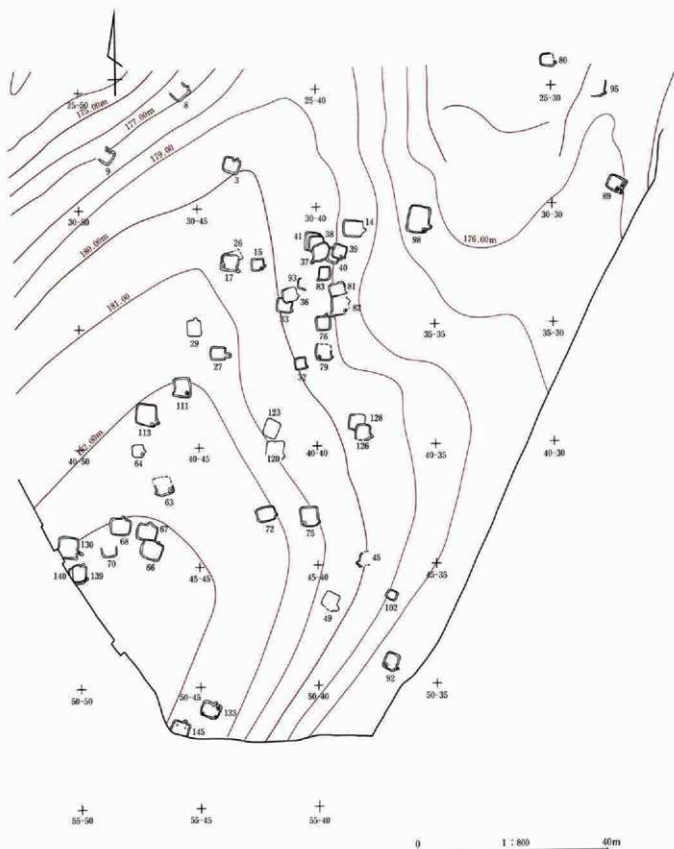


第9図 白倉B区奈良・平安時代住居全体図



第10図 白倉C区奈良・平安時代住居全体図

III 奈良・平安時代の遺構と遺物



第11図 天引地区奈良・平安時代住居全体図

白倉A区6号住居

位置 25-22他

遺構 図1 P.L.8 遺物 図100 P.L.60

面積 10.5m² 主軸方位 N-44'-E

形状 短辺2.7~長辺2.9mの隅丸方形か。南側の壁は中央が一部外側に掘り込まれる。

壁と床面 残存壁高は14~19cm。床面は最大14cmの比高がある。

カマド 北壁の中央から東に寄った位置で検出された。焚口幅は40cmである。

貯蔵穴 円形を呈す。尚、覆土及び床面の状況から考えると、この貯蔵穴は床下土坑に含めるべきであると考えられる。規模(長軸×短軸×深さ)は、64×62×17cmである。

遺物出土状態 床下土坑の出土遺物が住居覆土と接合している例が多く見受けられる。2の寛や6・8・10の高台付塊がそれにあたる。接合資料a・b・c・dは土師器の甕の胴部片である。eは須恵器の高台付塊である。(遺物観察表：1頁 出土遺物一覧表：125頁)

床下の状態 床下土坑が15基検出されている。H土坑を除くすべての土坑に、焼土粒や焼土ブロックが検出されている。また、O土坑は土層観察から住居内側から外側へ2回ほど掘り返しているようにみられる。規模(径×深さ)は、A土坑：80~65×29cm、B土坑：30~25×21cm、C土坑：37~30×6cm、D土坑：110~100×19cm、E土坑：30~27×26cm、F土坑：30~28×22cm、G土坑：105~90×11cm、H土坑：56×16cm、I土坑：20~<15>×13cm、J土坑：54~45×9cm、K土坑：83~75×19cm、L土坑：<95>~50×85cm、M土坑：80~74×24cm、N土坑：80~<60>×11cm、O土坑：122~91×25cm。

重複 7号住居(6世紀後半)→6号住居

時代 9世紀後半

白倉A区9号住居

位置 26-20他 遺構 図2 P.L.8

遺物 図100・101 PL60

面積 16.2m² 主軸方位 N-19'-E

形状 短辺3.2~長辺4.1mの隅丸長方形を呈する。壁と床面 残存壁高は9~17cm。床面は最大5cmの比高がある。

カマド 北壁の中央から東に寄った位置で検出された。焚口幅は74cmである。

貯蔵穴 隅丸長方形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、50×45×10cmである。

柱穴 4本検出され、規模(径×深さ)は、P1：18×23cm、P2：17×17cm、P3：17×25cm、P4：18×20cm。

壁周溝 東壁を除いて検出されている。

遺物出土状態 カマド壁際出土の土(3と5)は住居内に遺棄された可能性が高い。接合資料aは土師器の丸甕の底部片である。(遺物観察表：1・2頁 出土遺物一覧表：125頁)

床下の状態 床下土坑が5基検出された。B土坑は一番新しく床面には粘土が検出されている。

規模(径×深さ)は、A土坑：<94>×13cm、B土坑：108~98×16cm、C土坑：<98>×14cm、D土坑：<97>×8cm、E土坑：42~39×25cm。

重複 53号住居(6世紀後半)→9号住居→7号土坑(時期不明)・2号溝(中近世)

時代 8世紀後半

白倉A区11号住居

位置 27-21他 遺構 図18 P.L.IV-11

遺物 図100 P.L.IV-83

面積 10.5m² 主軸方位 N-12'-E

形状 短辺2.4~長辺3.7mの隅丸長方形を呈する。壁と床面 残存壁高は20~40cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド 北壁の中央より東側で検出された。構造物は煙道が燃焼部より傾斜を持たずに壁を掘り込んで作られている。掘り方調査の際に調査時の位置から僅かに東側に寄った部分で旧カマドの痕跡が確認された。

壁周溝 一部検出された。西壁沿いに小穴が検出されている。

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

遺物出土状態 5の刀子はカマド一括として取り上げた遺物である。完形に近い土器はないが、1の丸壺破片は廃絶時に近い遺物である。(遺物観察表: 17・18頁 出土遺物一覧表: 125頁)

床下の状態 床下土坑が4基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:100~<90>×13cm、B土坑:85~<62>×99cm、C土坑:110~95×5cm、D土坑:210~100×12cm。

重複 10号住居(7世紀後半)→11号住居 先後関係は出土土器の年代から。

備考 写真PLは手違いにより「IV」の報告書に掲載されている。

時代 8世紀前半

白倉A区12号住居

位置 27-20他

遺構 図3 P L 8・9 遺物 図101 P L 60

面積 10.9㎡ **主軸方位** N-2°-E

形状 短辺2.3~長辺4.2mの隅丸長方形。

壁と床面 残存壁高は32~42cm。床面は最大8cmの比高がある。焼失住居のため南壁中央部が焼土化している。

覆土 ロームブロックが壁際を中心に多数検出されており。あたかも火災時に投げ込まれたかのような状況である。焼失時あるいは焼失後に人為的な埋め戻しがあった可能性が高い。

カマド 北壁の中央から東に寄った位置で検出された。焚口幅は50cmである。

壁周溝 西壁と南壁の一部で検出された。

遺物出土状態 1~3の環はいずれも炭化材に覆われており、住居の生活時に伴う可能性が高い。炭化材が多く検出されているが、いずれも床面直上あるいはその近くである。ヨシ状の炭化材は部分的に編組が残存している。樹種については炭化材分析V-1を参照してほしいが、建築材はクリ材が多く、ヨシについてはヨシ属とのことである。(遺物観察表: 2頁 出土遺物一覧表: 125頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出されているが写真

以外に記録がない。

重複 10号住居(7世紀後半)・67号住居(6世紀前半)→12号住居→2号溝(中近世)

備考 焼失住居

時代 8世紀後半

白倉A区13号住居

位置 25-25他

遺構 図1 P L 10 遺物 図101 P L 60

面積 (9.5)㎡ **主軸方位** N-102°-E

形状 短辺2.8~長辺2.9mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は9~36cm。床面は最大4.5cmの比高がある。14号住居と重複する部分はトレンチ調査を行ったため壁や床面が確認できなかったところがある。

カマド 検出されなかったが恐らく東カマドと推測される。

遺物出土状態 床下土坑からの出土遺物しか図化できなかった。1の壺はB土坑、2の環(墨書「午」)はA土坑出土。接合資料a・bは土師器の壺の破片である。(遺物観察表: 3頁 出土遺物一覧表: 125)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。A土坑の覆土はロームブロックを主体としている。規模(径×深さ)は、A土坑:107~<60>×22cm、B土坑:85~<56>×15cm。

重複 14号住居(6世紀後半)・15号住居(古墳時代後期)→13号住居→13号土坑(平安時代)→1号溝(中近世)

時代 9世紀後半

白倉A区16号住居

位置 25-27他

遺構 図2 P L 10 遺物 図102 P L 60

面積 5.9㎡ **主軸方位** N-93°-E

形状 短辺2.2~長辺2.6mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は16~18cm。床面は最大2.5cmの比高がある。

カマド 東壁の中央で検出された。焚口幅は43cm、

焚口高は23cmで結晶片岩の左袖石が検出された。その他の構造材はローム質である。尚、床下の調査の際に右袖石の痕跡が検出されている。

遺物出土状態 3の甕はカマド奥壁に貼り付く状態で検出されている。(遺物観察表：3頁 出土遺物一覧表：125頁)

床下の状態 床下土坑が1基検出されている。規模(径×深さ)は、A土坑：97×50×9cm。

重複 44号住居(6世紀前半)→16号住居

時代 8世紀前半

白倉A区18号住居

位置 27-26他

遺構 図4 P L10 遺物 図102 P L60

面積 8.5m² **主軸方位** N-104°-E

形状 短辺2.3~長辺3.1mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は25~34cm。床面は最大9cmの比高がある。

カマド 東壁の中央で検出された。

貯蔵穴 楕円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、70×45×31cmである。

遺物出土状態 1の甕は出土位置から、本住居のカマドに由来するものであろう。接合資料a・bは土師器の甕の破片である。(遺物観察表：3頁 出土遺物一覧表：126頁)

床下の状態 土坑が6基検出され、規模(径×深さ)は、A土坑：93~62×14cm、B土坑：(87)~58×10cm、C土坑：37~(28)×16cm、D土坑：107~95×10cm、E土坑：60~48×10cm、F土坑：44~(38)×12cm。

重複 19号住居(7世紀後半)→18号住居→2号土坑(近世)

時代 8世紀後半

白倉A区38号住居

位置 23-21他 **遺構** 図4 P L10・11

遺物 図102・103 P L60・61

面積 13.0m² **主軸方位** N-113°-E

形状 短辺2.7~長辺4.1mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は12~17cm。床面は最大5cmの比高がある。

カマド 東壁の中央から南に寄った位置で検出された。焚口幅は51cm、焚口高は18cmで結晶片岩の両袖石が検出されたが左袖石は倒れた状態で検出された。その他の構造材は粘土である。

貯蔵穴 楕円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、85×70×33cmである。

遺物出土状態 貯蔵穴床面出土の坏(4)は住居に遺棄されたものであろう。5と6(□・合)は墨書土器。鉄製紡錘車(7)と鉄鎌(8と9)が出土している。接合資料aは須恵器の高台付埴の破片である。(遺物観察表：3・4頁 出土遺物一覧表：126頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。B土坑をA土坑が切っている。規模(径×深さ)は、A土坑：130~110×6cm、B土坑：37×24cm。

重複 39号住居(9世紀前半)・出土土器型式から→38号住居 3つの擾乱によって破壊されているが、カマド部分以外の2つの擾乱は、北側に展開する柱穴群とかかわりがあると考えられる。

時代 10世紀前半

白倉A区39号住居

位置 22-20他

遺構 図5 P L11 遺物 図103 P L-

面積 (9.7) m² **主軸方位** N-123°-E

形状 短辺2.5~長辺3.4mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は4~14cm。床面は最大14cmの比高がある。

覆土 僅かな覆土はローム質の土壌。

カマド 東壁で形状のみが検出された。

遺物出土状態 2の甕は床下土坑一括取上の土器と接合している。(遺物観察表：4頁 出土遺物一覧表：126頁)

床下の状態 床下土坑が5基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：42~40×11cm、B土坑：72~60×11cm、C土坑：106~(67)×16cm、D土坑：54~42×13cm、E土坑：74~62×15cm。

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

重複 39号住居・出土土器型式から→38号住居(10世紀前半)

時代 9世紀前半

白倉A区40号住居

位置 23-24他

遺構 図5 P L11 **遺物** 図103 P L-

面積 7.6㎡ **主軸方位** N-60°-E

形状 短辺2.0~長辺2.7mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は20~35cm。床面は最大4cmの比高がある。3号住居と重複する部分の床面は不明確となってしまった。

カマド 東壁の南寄りで見出された。焚口幅は44cmである。結晶片岩の右袖の一部と考えられる石と、砂岩の天井石が見出された。

遺物出土状態 図化した3点の土器はいずれも覆土一括取上の破片である。(遺物観察表: 4頁 出土遺物一覧表: 126頁)

重複 3号住居(7世紀前半)→40号住居

時代 9世紀前半

白倉A区49号住居

位置 25-18他 **遺構** 図6 P L11

遺物 図103・104 P L61

面積 (11.3)㎡ **主軸方位** N-118°-E

形状 短辺2.8~長辺3.9mの隅丸長方形を呈す。

壁と床面 残存壁高は40~65cm。床面は最大5cmの比高がある。

カマド 東壁の中央から南寄りで見出された。焚口幅は60cmで、結晶片岩の天井石が見出された。

遺物出土状態 4と6は壁際出土で住居に遺棄されたものと考えられる。床下土坑からも少なからず遺物が出土している(1~3の壺)。3の壺はB土坑の覆土一括取上。また、こも編石がまとまって出土している。(遺物観察表: 5・6頁 出土遺物一覧表: 126頁)

床下の状態 床下土坑が9基検出された。A土坑は検出位置から貯蔵穴であると考えられる。規模

(径×深さ)は、A土坑: 145~80×18cm、B土坑: 125~100×24cm、C土坑: 57~56×18cm、D土坑: 45~34×11cm、E土坑: 103~88×28cm、F土坑: <114> ~106×20cm、G土坑: 32~25×15cm、H土坑: 58~47×7cm、I土坑: 92~48×12cm。

重複 54号住居(6世紀後半)→49号住居→8号土坑(10世紀以降)

時代 9世紀前半

白倉A区50号住居

位置 24-18他

遺構 図7 P L12 **遺物** 図104 P L61

面積 (18.5)㎡ **主軸方位** N-6°-E

形状 短辺4.0~長辺4.4mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は41~66cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド 北壁の中央で見出された。焚口幅は65cm、結晶片岩の極めて大型の支脚が見出された。その他の構造材は粘土である。

貯蔵穴 隅丸長方形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、100×91×24cmである。

柱穴 3本検出された。規模(径×深さ)は、P1: 35×39cm、P2: 23×42cm、P3: 37×44cm。もう一本の主柱穴は薬師跡によって破壊されたと推測される。

壁周溝 部分的に見出された。

遺物出土状態 南壁際でもこも編石がまとまって出土している。接合資料aは土器の壺の口縁片である。(遺物観察表: 6・7・8頁 出土遺物一覧表: 126頁)

重複 54号住居(6世紀後半)→55号住居(古墳時代後期)→50号住居→70号住居(10世紀後半)→薬師跡

土層断面では観察していないが出土遺物や55号住居のカマドが破壊されていることから、このような先後関係と考えられる。尚、薬師跡の覆土はロームブロックを多量に含む土層で小堂の痕跡は確認されていない。この場所にあった石仏も調査時には他所に移転されていた。地元で眼病に功德のある薬師として信仰されていた石仏のようである。地主によれ

ば、石仏と隣にあった樹木も重機を用いて移転したとのことである。

時代 8世紀前半

白倉A区51号住居

位置 23-18他

遺構 図8 P L12 遺物 図104 P L61

面積 9.6㎡ 主軸方位 N-5°-E

形状 短辺2.7~長辺2.8mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は15~75cm。床面は最大19cmの比高がある。

カマド 北壁の中央から東寄りて検出された。焚口幅は50cmで、構造材は粘性の強い土壌である。袖の手前で粘土がまとまって出土している。

貯蔵穴 円形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、42×40×23cmである。

遺物出土状態 1の壁は床面直上へ覆土上層の破片が接合している。また、南壁際でも編石がまとまって出土している。(遺物観察表: 8・9頁 出土遺物一覧表: 127頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。A土坑覆土はロームブロックを主体としている。規模(径×深さ)は、A土坑: 63~55×15cm、B土坑: 55~28×19cm。

時代 8世紀前半

白倉A区56号住居

位置 19-16他

遺構 図8 P L12・13 遺物 図104 P L-

面積 11.6㎡ 主軸方位 N-2°-W

形状 短辺2.6~長辺3.7mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は18~21cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド 北壁の中央から東に寄った位置で検出された。焚口幅は65cmである。

貯蔵穴 円形を呈する。覆土中には焼土粒が多く含まれている。規模(長軸×短軸×深さ)は、63×57×13cmである。

遺物出土状態 1及び2はいずれもカマド覆土出土。(遺物観察表: 9頁 出土遺物一覧表: 127頁)

床下の状態 床下土坑が3基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑: 155~100×97cm、B土坑: 190~170×11cm、C土坑: 170~75×10cm。

時代 8世紀後半

白倉A区60号住居

位置 19-17他

遺構 図9 P L13 遺物 図104 P L61

面積 18.2㎡ 主軸方位 N-12°-E

形状 短辺3.3~長辺4.6mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は14~26cm。床面は最大8cmの比高がある。

カマド 北壁の中央から東に寄った位置で検出された。焚口幅は75cmで、その他の構造材は粘土である。

遺物出土状態 1の環は完形で、出土位置などから見て、住居廃絶の早い段階の時期と思われる。(遺物観察表: 9・10頁 出土遺物一覧表: 127頁)

床下の状態 土坑が4基検出され、規模(径×深さ)は、A土坑: 80~77×14cm、B土坑: 125~80×19cm、C土坑: 165~100×20cm、D土坑: 145~66×25cm。

重複 61・64号住居(古墳時代後期)→60号住居
備考 本住居の床面よりも64号住居の床面の方が深かったため60号住居の東壁は不明である。

時代 8世紀前半

白倉A区62号住居

位置 21-15他 遺構 図18 P L1V-24

遺物 図109 P L1V-93

面積 (9.4)㎡ 主軸方位 N-13°-E

形状 短辺2.8~長辺3.1mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は4~31cm。床面は最大9cmの比高がある。

カマド 検出されていないが北側中央部に焼土の分布が認められることから北カマドと推測される。

遺物出土状態 接合資料なし。(遺物観察表: 18頁 出土遺物一覧表: 127頁)

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

備考 写真PLは手違いで「IV」の報告書に掲載されている。

時代 8世紀前半

白倉A区63号住居

位置 27-17他 **遺物** 図105 P L 61・62

遺構 図10・11・12 P L 13・14

面積 29.0m² **主軸方位** N-17-E

形状 短辺4.8～長辺5.2mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は20～50cm。床面は最大12cmの比高がある。

覆土 ロームブロックがみられるが調査当者は消火時に投入した可能性を指摘している。

カマド 北壁の中央で検出された。焚口幅は50cm、焚口高は17cmで、結晶片岩の左袖石と砂岩の右袖石が検出された。その他の構造材は小砂石を含む灰色の粘土である。

貯蔵穴 不定形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、82×68×21cmである。

柱穴 13本検出された。規模(径×深さ)は、P1:37×52cm、P2:41×46cm、P3: <30>×46cm、P4:37×60cm、P5:42×48cm、P6:32×45cm、P7: <18>×15cm、P8:33×52cm、P9: <52>×21cm、P10:35×20cm、P11:29×12cm、P12: <44>×15cm、P13:36×37cm。P5～P8は旧住居に伴うものと思われ一括埋土であった。

壁周溝 部分的に検出された。

遺物出土状態 焼失住居であることを考えあわせると床面直上の遺物は失火時に住居に置いてあったと考えられる。また、出土状態から8は失火時には破片であり、5と12は床材であるカヤ状炭化物の上に伏せて置いてあったと考えてよいのではなかろうか。この5・8・11の出土状態は図11下に示したので参照してほしい。尚、12の蓋下で検出された炭化材分析V-1(試料No387)にあたり、ヨシ属との結果が出ている。また、7の坏は床下C土坑からの出土である。接合資料aは土師器の甕の胴部片である。(遺物観察表:10・11頁 出土遺物一覧表:127頁)

床下の状態 床下土坑が6基検出された。規模(径×

深さ)は、A土坑:50～46×8cm、B土坑:38～(36)×3cm、C土坑:65～55×13cm、D土坑:83～65×20cm、E土坑:68～53×19cm、F土坑:88～80×16cm。

重複 60・61号土坑(時期不明)→63号住居

備考 炭化材が多く検出されたことから焼失住居と推測される。炭化材の樹種については成果と問題点の分析(V-1)を参照してほしい。

時代 8世紀前半

白倉A区68号住居

位置 24-13他

遺構 図13 P L 14 **遺物** 図106 P L 62

面積 13.3m² **主軸方位** N-110-E

形状 短辺3.3～長辺3.6mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は12～19cm。床面は最大4cmの比高がある。床面は中央部が堅く締まっていた。

カマド 東壁の中央で痕跡が検出された。焚き口幅は54cmである。

貯蔵穴 楕円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、84×60×26cmである。一部に礫が壁材として用いられている。

遺物出土状態 住居の生活時に伴うと考えられる遺物は少ないが、強いて言えば貯蔵穴出土の6などは該当すると考えられる。3は墨書土器(「合」)で、9は鉄製紡錘車である。接合資料aは須恵器の高台付塊の破片である。(遺物観察表:11・12頁 出土遺物一覧表:127頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:50～48×11cm、B土坑:50～45×22cm。

時代 10世紀前半

白倉A区69号住居

位置 26-17他 **主軸方位** N-15-E

遺構 図12 P L 14 **遺物** 図106 P L 62

形状 短辺<3.1>～長辺<4.5>mを呈する。

壁と床面 残存壁高は17～20cm。床面は最大12cmの比高がある。

覆土 僅かな覆土はロームブロックを多量に含む土層である。

カマド 検出されていない。

遺物出土状態 図化した環(2)は覆土一括取上である。(遺物観察表:12頁 出土遺物一覧表:128頁)

重複 65号住居(7世紀後半)→69号住居→3号溝(時期不明) また、70号住居(10世紀後半)と重複するが、先後関係は不明である。

時代 平安時代と思われるが細別時期は不明。

白倉A区70号住居

位置 25-17他 **主軸方位** N-4'-E

遺構 図14 P.L.14 **遺物** 図106 P.L.62

形状 短辺<2.6>～長辺<2.9>mである。

壁と床面 残存壁高は4～11cm。床面は最大8cmの比高がある。

覆土 僅かな覆土はロームブロックを主体とした土層である。

カマド 検出されていない。

遺物出土状態 3号溝によって破壊されている部分も多いが図化した遺物は一定の年代的まとまりを持っているようである。接合資料aは須恵器の羽釜の胴部片である。(遺物観察表:12頁 出土遺物一覧表:128頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。A土坑の覆土は多量の焼土・炭化物を含み、B土坑の覆土はローム質の土壌である。規模(径×深さ)は、A土坑:105～85×35cm、B土坑:120～93×8cm。

重複 65号住居(7世紀後半)→50号住居(8世紀前半)→70号住居→3号溝(時期不明)・薬師跡(時期不明)また、69号住居(平安時代)との関係は不明である。本住居は50号住居を切るが50号住居の床面が低かったために先に50号を掘りあげてしまった。

時代 10世紀後半

白倉A区71号住居

位置 21-15他 **主軸方位** N-11'-E

遺構 図13 P.L.15 **遺物** 図一 P.L.—

形状 短辺2.4～長辺<2.6>mの隅丸長方形か。
壁と床面 残存壁高は3～11cm。床面は最大10cmの比高がある。

カマド 検出されていない。

遺物出土状態 実測可能な遺物はなかった。覆土からは羽釜の破片が出土している。(遺物観察表:一頁 出土遺物一覧表:128頁)

床下の状態 床下土坑が1基検出された。覆土はローム質の土壌である。規模(径×深さ)は、A土坑:108～75×14cm。

重複 72号住居(6世紀後半)→71号住居

時代 羽釜が出土していることから10～11世紀の可能性が高い。

白倉A区75号住居

位置 27-16他

遺構 図14 P.L.15 **遺物** 図107 P.L.—

面積 (16.7)㎡ **主軸方位** N-13'-E

形状 短辺3.1～長辺<4.3>mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 東側に傾斜する場所に立地するため、東壁は検出されていない。残存壁高は17～21cm。床面は最大7cmの比高がある。

カマド 北壁の東端で痕跡が検出された。

貯蔵穴 円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、74×65×30cmである。

壁周溝 外形が確認された部分には存在している。

遺物出土状態 1・2の環は住居に遺棄された可能性が高い。(遺物観察表:13頁 出土遺物一覧表:128頁)

床下の状態 床下土坑が3基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:55～37×—cm、B土坑:45～35×—cm、C土坑:66～46×—cm。

備考 白倉A区で11世紀代の住居は、他に98号住居がある。

時代 11世紀

白倉A区79号住居

位置 23-16他 **主軸方位** N-117'-E

遺構 図15 P.L.15 **遺物** 図107 P.L.—

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

形状 短辺2.7～長辺2.1mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は10～20cm。床面は最大8cmの比高がある。西側は1号井戸によって大きく破壊されているため不明。

カマド 検出されていない。

貯蔵穴 隅丸長方形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、64×61×19cmである。

遺物出土状態 1の壁及び2の坏は破片である。(遺物観察表:13頁 出土遺物一覧表:128頁)

重複 79号住居→7号溝(時期不明)

時代 8世紀前半

白倉A区90号住居

位置 21-18他 **面積** 4.4m²

遺構 図15 PL15 **遺物** 図107 PL62

形状・壁と床面 大変残りが悪く痕跡しか検出されなかった。

カマド 位置不明

貯蔵穴 楕円形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、105×40×55cmである。

遺物出土状態 接合資料aは土師器の壺の胴部片である。(遺物観察表:13頁 出土遺物一覧表:128頁)

床下の状態 住居内に遺棄されたと思われる遺物はないようである。床下土坑が2基検出された。A土坑の坑底部には粘土が貼られていた。規模(径×深さ)は、A土坑:82～63×18cm、B土坑:100～90×18cm。

重複 87号住居(古墳時代後期)→90号住居

時代 9世紀前半

白倉A区98号住居

位置 28-22他

遺構 図15 PL15 **遺物** 図107 PL-

面積 (14.3) m² **主軸方位** N-2'-E

形状 短辺3.4～長辺3.5mの隅丸方形か。

壁と床面 痕跡しか検出されていない。

カマド 検出されていない。

遺物出土状態 円化した羽釜の破片は床下C土坑からの出土である。(遺物観察表:14頁 出土遺物一覧

表:129頁)

床下の状態 床下土坑が3基検出された。いずれの土坑もローム質土壌中に僅かに焼土を含む。

規模(径×深さ)は、A土坑:66～55×31cm、B土坑:112～98×14cm、C土坑:80～65×26cm。

時代 11世紀代の可能性が高い。

白倉A区100号住居

位置 32-25他 **遺構** 図16 PL15・16

遺物 図107・108 PL62・63

面積 14.3m² **主軸方位** N-1'-E

形状 短辺4.2～長辺4.6mの隅丸方形を呈する。

カマド 北壁の中央で検出されたが、攪乱により破壊が著しい。構造材は青灰色粘土である。尚、左袖を除去した際、袖下も焼土化していたことから旧カマドの燃焼部は左袖部分にあったと考えられる。

柱穴 4本検出されている。規模(径×深さ)は、P1:73×46cm、P2:60×53cm、P3:67×38cm、P4:60×44cm。各柱穴は新・旧の2段階を有する可能性がある。

遺物出土状態 2・7・8については8世紀代の遺物であり、他の遺物は実測外も含めて個々に判断すれば7世紀代の遺物と考えられる。2・7・8の出土位置が壁際の床面直上で離れており、しかも7世紀代と考えてよい遺物と伴出していることから、8世紀に移行した段階で廃絶した竪穴住居と考えるのが妥当であろう。接合資料a・bは土師器の壺の胴部片である。(遺物観察表:14頁 出土遺物一覧表:129頁)

床下の状態 床下土坑が1基検出されている。規模(径×深さ)は、A土坑:70～65×8cm。

重複 74号土坑と重複するが関係は不明である。

時代 8世紀前半

白倉A区102号住居

位置 34-24他

遺構 図16 PL16 **遺物** 図108 PL63

面積 9.0m² **主軸方位** N-11'-E

形状 短辺2.6～長辺2.9mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は20~24cm。床面は最大5cmの比高がある。

カマド 北壁の中央から東に寄った位置で検出された。焚口幅は53cm、焚口高は65cmで構造材はロームブロックを主体とする。

壁周溝 ほぼ確認された。

遺物出土状態 図化した土器はいずれも1/2以下の遺存状況である。接合資料aは土師器の坏の破片である。(遺物観察表:14・15頁 出土遺物一覧表:129頁)

床下の状態 床下土坑が1基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:45~10×11cm。

重複 113号住居(古墳時代後期)・71号土坑(古墳時代後期)→102号住居

時代 8世紀前半

白倉A区108号住居

位置 31-19他

遺構 図17 P.L16 **遺物** 図108 P.L-

面積 16.5㎡ **主軸方位** N-13°E

形状 短辺3.7~長辺4.0mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は4~16cm。床面は最大11cmの比高がある。

カマド 北壁の中央で検出された。構造材は左袖奥には結晶片岩が用いられる。尚、右袖掘り方部分に燃焼面が確認され、旧段階のカマドが新カマドより東側に位置していたことが確認された。

貯蔵穴 検出されていないが、P10及びP9が新旧貯蔵穴と考えられる。

柱穴 13本検出された。規模(径×深さ)は、P1:60×45cm、P2:76×70cm、P3:50×70cm、P4:57×54cm、P5:〈30〉×35cm、P6:38×35cm、P7:50×66cm、P8:65×30cm、P9:38×37cm、P10:54×32cm、P11:〈26〉×19cm、P12:43×39cm、P13:43×34cm、P1~P4は主柱穴。P5~P8は旧住居の主柱穴と考えられる。

壁周溝 壁に沿って検出された。

遺物出土状態 1の壁及び2の坏はいずれも1/2以下の破片である。こも編石が南壁を中心とま

まって出土している。接合資料aは土師器の壺の胴部である。(遺物観察表:15・16・17頁 出土遺物一覧表:129頁)

床下の状態 床下土坑が1基検出された。この部分では貼り床がみられなかったことから生活時に掘られた土坑であると考えられる。規模(径×深さ)は、A土坑:147~123×13cm。

重複 108号住居→10号溝(中近世)

時代 8世紀前半

白倉A区118号住居

位置 35-18他 **主軸方位** N-13°E

遺構 図17 P.L16 **遺物** 図108 P.L-

形状 短辺2.0~長辺〈2.0〉mの隅丸長方形か。

壁と床面 残存壁高は20~28cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド 北壁の東端で検出された。焚口幅は75cmで、構造材はカマド部分から数個の結晶片岩が出土している。いずれも、袖石も含めカマド材として使用された際と考えられる。

遺物出土状態 1と3はカマド覆土からの出土である。2は覆土一括取上で出土位置は不明である(遺物観察表:17頁 出土遺物一覧表:129頁)

重複 土層断面から119号住居を118号住居が切る様子が観察されるが、両住居の床面レベルと北壁のラインがほぼ一致することや、118号住居の規模が極めて小さいことを考え合わせると1つの住居跡として考えることもできる。

時代 10世紀後半

白倉A区119号住居

位置 35-19他 **主軸方位** N-6°E

遺構 図15 P.L16 **遺物** 図108 P.L63

形状 短辺〈1.4〉~長辺〈1.9〉mの隅丸長方形か。

壁と床面 残存壁高は25~30cm。床面は最大3cmの比高がある。

カマド 検出されていない。

遺物出土状態 羽釜(?)の破片と鉄鏝を図化した。

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

他の出土遺物は古墳時代後期であった。(遺物観察表：17頁 出土遺物一覧表：129頁)

重複 土層断面からは119号住居を一括埋土した後に、118号住居(10世紀後半)が作られた状況が想定される。しかし、両住居の床面レベルと北壁ラインがほぼ一致し、118号住居の規模が小さいことを考え合わせると、両住居は1つの住居跡として考えることもできる。

時代 細別時期不明

白倉A区120号住居

位置 14-9他 **遺構** 図18 P L IV-34

遺物 図19 P L IV-98

面積 1㎡ **主軸方位** N-11°-E

形状 短辺〈1.2〉～長辺2.6mの隅丸方形か。

壁と床面 残存壁高は18～20cm。床面は最大10cmの比高がある。斜面に立地して東側に流れている。

カマド 検出されていない。

遺物出土状態 図化した環は8世紀前半に帰属する。(遺物観察表：18頁 出土遺物一覧表：130頁)

備考 写真PLは手違いで「IV」の報告書に掲載されている。

時代 8世紀前半

白倉B区1号住居

位置 27-29他 **主軸方位** N-4°-E

遺構 図19 P L 17 **遺物** 図110 P L 63

形状 短辺〈2.0〉～長辺3.6mの隅丸方形か。

壁と床面 残存壁高は28～31cm。床面は最大5cmの比高がある。

カマド 北壁の中央で検出された。半分は調査区外。

壁周溝 西壁及び南壁に沿って検出された。

遺物出土状態 カマド左袖先端出土の環(5)や北西隅出土の甕(1)は麻酔時期に近い遺物で5の環は遺棄されたものかも知れない。(遺物観察表：18頁 出土遺物一覧表：130頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。A土坑をB土坑が切る。規模(径×深さ)は、A土坑：

122～〈81〉×21cm、B土坑：120～100×36cm。

時代 8世紀前半

白倉B区2号住居

位置 27-30他

遺構 図19 P L 17 **遺物** 図110 P L 63

面積 10.2㎡ **主軸方位** N-4°-E

形状 短辺2.5～長辺3.0mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は27～42cm。床面は最大6cmの比高がある。

カマド 北壁の中央から東に寄った位置で検出された。僅かに両袖が出る。構造材は粘土質の土壌。

壁周溝 ほぼ全周すると考えられる。10号住居と重複する部分では確認できなかった。

遺物出土状態 住居廃絶時に近い土器は2・3の環である。また、紡錘車(4)は出土位置から住居に遺棄されたものと考えられる。(遺物観察表：19頁 出土遺物一覧表：130頁)

床下の状態 床下土坑が3基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：117～93×7cm、B土坑：62～〈19〉×10cm、C土坑：〈124〉～〈73〉×7cm。

重複 10号住居(6世紀前半)→2号住居

時代 8世紀前半

白倉B区4号住居

位置 29-24他 **遺構** 図19 P L 17

遺物 図110・111 P L 63

面積 10.4㎡ **主軸方位** N-102°-E

形状 短辺2.8～長辺2.9mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は35～40cm。床面は最大5cmの比高がある。

カマド 東壁の中央から東寄りで痕跡が検出された。砂岩の右袖石と結晶片岩の天井石が検出された。その他の構造材は粘土である。

遺物出土状態 6の環は出土位置から見て遺棄されたものと考えられる。また、1・4・5の甕は床下土坑からの出土で1はE土坑・4はA土坑・5はD土坑出土である。(遺物観察表：19・20頁 出土遺物

一覽表：130頁)

床下の状態 床下土坑が9基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：92～85×52cm、B土坑：107～105×30cm、C土坑：60～50×32cm、D土坑：113～85×22cm、E土坑：40～35×15cm、F土坑：73～55×31cm、G土坑：42～35×46cm、H土坑：68～65×23cm、I土坑：142～105×41cm。

重複 5号住居(弥生時代)→4号住居→1号溝
時代 9世紀後半

白倉B区6号住居

位置 29-31他

遺構 図20 P L17・18 **遺物** 図111 P L63
面積 9.8㎡ **主軸方位** N-2°-E
形状 短辺2.6～長辺3.3mの隅丸方形を呈する。
壁と床面 残存壁高は11～37cm。床面は最大5cmの比高がある。

カマド 北壁の中央から東寄りで検出された。焚口幅は50cmで、構造材は灰色粘土である。

遺物出土状態 1と2の甕はカマド覆土内からの出土であることからカマド内で使用されていたか、もしくは比較的廃絶の早い段階の遺物であると考えられる。3の坏はカマド覆土一括取上である。(遺物観察表：20頁 出土遺物一覽表：130頁)

重複 10号住居(6世紀前半)→6号住居
時代 8世紀後半

白倉B区8号住居

位置 23-32他

遺構 図20 P L18 **遺物** 図111 P L-
面積 8.2㎡ **主軸方位** N-105°-E
形状 短辺2.2～長辺3.0mの隅丸方形を呈する。
壁と床面 残存壁高は12～30cm。床面は最大5cmの比高がある。

カマド 東壁の中央から南に寄った位置で検出された。焚口幅は47cm、焚口高は20cmで、構造材は粘土である。

遺物出土状態 図化した4点の土器は壁近くの出土

であり、住居廃絶後の早い段階の遺物であろう。(遺物観察表：20・21頁 出土遺物一覽表：130頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：87～75×8cm、B土坑：167～115×14cm。

重複 9号住居(弥生時代)→8号住居→1号溝
時代 9世紀後半

白倉B区11号住居

位置 29-33他

遺構 図21 P L18 **遺物** 図112 P L63・64
面積 12.6㎡ **主軸方位** N-114°-E
形状 短辺3.0～長辺3.5mの隅丸長方形を呈する。
壁と床面 残存壁高は40～43cm。床面は最大10cmの比高がある。

カマド 東壁のほぼ中央で検出された。焚口幅は55cm、焚き口高は25cmである。

遺物出土状態 出土遺物及び残存状況から2の小型甕は本住居に遺棄されたものと考えられる。3の台付甕はカマド底面からの出土で廃絶時期に近い遺物であろう。接合資料aは土師器の甕の口縁片、b～eは土師器の甕の胴部片である。(遺物観察表：21頁出土遺物一覽表：131頁)

床下の状態 床下土坑が複数検出されたのだがA土坑しか記録化できなかった。規模(径×深さ)は、A土坑：123～112×36cm。

重複 12号住居(6世紀前半)→11号住居
時代 9世紀前半

白倉B区15号住居

位置 29-30他 **遺構** 図21 P L18

遺物 図112・113 P L64
面積 6.4㎡ **主軸方位** N-1°-W
形状 短辺2.5～長辺2.6mの隅丸方形を呈する。
壁と床面 残存壁高は8～43cm。床面は最大12cmの比高がある。

カマド 北壁の中央から東寄りで検出された。残存状況が良好で煙道も確認できた。焚口幅は38cm、焚

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

口高は24cmで、結晶片岩の左右それぞれ2つずつの袖石と天井石が検出された。また、右袖内側では、袖石以外に壁際に結晶片岩が用いられている。さらにそれを覆うように堦(4)が貼り付けてある。

遺物出土状態 4の堦はカマド構造物として用いられたと推測できる。また、焼失住居であることも係わると考えられるが、カマド右前方の坏(5・6)などは遺棄されたものと思われる。右袖脇の鉢(8)は置き台として再利用されたものと考えられる。(遺物観察表:22頁 出土遺物一覧表:131頁)

重複 10号住居(6世紀前半)→15号住居

備考 比較的大きな炭化材が床面直上から出土しており、覆土下層の状況からも焼失住居と考えられる。

時代 8世紀前半

白倉B区18号住居

位置 27-40他

遺構 図23 P.L.19 **遺物** 図113 P.L.64

面積 13.5m² **主軸方位** N-93°-E

形状 短辺3.2~長辺3.4mの隅丸方形を呈する。

尚、カマド側の壁面がカマドを挟んでずれている。

壁と床面 残存壁高は27~45cm。床面は最大13cmの比高がある。

カマド 東壁のほぼ中央で検出された。結晶片岩の支脚が出土し、その他の構造物は奥壁部に礎が用いられている。

壁周溝 掘り方調査で部分的に検出された。

遺物出土状態 2~6及び12は掘り方や床下土坑からの出土。1及び7が晩絶時に近い遺物と考えられる。6には墨書と刻書で「午」が施される。8~10は墨書土器。13の鉄鏝は一括取上で出土位置不明。接合資料aは須臾器の堦の胴部片である。(遺物観察表:22・23頁 出土遺物一覧表:131頁)

床下の状態 床下土坑が14基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:85~73×20cm、B土坑:115~103×16cm、C土坑:97~67×8cm、D土坑:62~50×11cm、E土坑:90~63×24cm、F土坑:

100~82×16cm、G土坑:85~78×25cm、H土坑:28×35cm、I土坑:60×21cm、J土坑:84~77×12cm、K土坑:70~60×21cm、L土坑:100~62×11cm、M土坑:85~60×34cm、N土坑:50~47×120cm。

重複 19号住居(9世紀後半)・土層断面より→18号住居

時代 9世紀後半

白倉B区19号住居

位置 27-40他 **主軸方位** N-58°-E

遺構 図23 P.L.19 **遺物** 図114 P.L.64

形状 短辺2.7~長辺4.9mの隅丸長方形を呈す。

壁と床面 残存壁高は22~26cm。床面は最大2cmの比高がある。20号住居と接する南壁は明瞭に検出できなかった。

カマド 東壁の中央で検出された。焚口幅42cm、焚口高は24cmで、結晶片岩の両袖石・天井石が検出された。

遺物出土状態 1・2の堦はA土坑覆土からの出土である。(物観察表:23頁 出土遺物一覧表:131頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:48~34×15cm、B土坑:<144>~118×90cm。

重複 20号住居(7世紀前半)→19号住居・土層断面より→18号住居(9世紀後半)

時代 9世紀後半

白倉B区31号住居

位置 33-33他

遺構 図23 P.L.19 **遺物** 図114 P.L.64

面積 16.9m² **主軸方位** N-14°-E

形状 短辺2.7~長辺4.9mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は26~47cm。床面は最大13cmの比高がある。尚、72号住居と接する部分の壁は明瞭には検出できなかった。

カマド 北壁の中央から東寄り検出された。右袖部分は恐らく掘り過ぎと考えられる。

壁周溝 西壁及び南壁で検出された。

遺物出土状態 8の蓋などは比較的晩絶時期に近い遺物であろう。白玉(10)は恐らく古墳時代後期に帰属すると思われる。(遺物観察表:23・24頁 出土遺物一覧表:131頁)

重複 33・35・72号住居(古墳時代後期)→31号住居
時代 8世紀後半

白倉B区32号住居

位置 33-31他

遺構 図24 P L 20 **遺物** 図114 P L 64

面積 13.6㎡ **主軸方位** N-2°-E

形状 短辺3.1~長辺3.6mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は64~73cm。床面は最大2cmの比高がある。

カマド 北壁の中央から東寄りで見出された。焚口幅は40cm、焚口高は20cmである。

遺物出土状態 4の環が比較的晩絶時期に近いと考えられる。2点白玉が出土している。(8と9)が恐らく古墳時代後期に帰属すると思われる。(遺物観察表:24・25頁 出土遺物一覧表:131頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:78~72×15cm、B土坑:75~55×15cm。

重複 33・34・72号住居(古墳時代後期)→32号住居

時代 8世紀前半

白倉B区36号住居

位置 32-32他 **遺構** 図24 P L 20

遺物 図115・116 P L 65

面積 16.2㎡ **主軸方位** N-14°-E

Aカマド主軸方位 N-16°-E

Bカマド主軸方位 N-101°-E

形状 短辺2.9~長辺5.1mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は38~41cm。床面は最大3cmの比高がある。A・B・Cの土坑及び西半分にある方形の落ち込み部分は上面に床面がなかったので住居内遺構として取り扱うこととした。調査時ではA土

坑を貯蔵穴としている。A・B・C土坑及び方形の落ち込みが床下土坑である可能性もある。

カマド 北壁と東壁でそれぞれ1つ検出されている。先後関係もしくは同時期に使われていたのか不明である。Aカマドの焚口幅は60cm、焚口高は35cm、Bカマドの焚口幅は35cm、焚口高は33cmである。

遺物出土状態 A土坑内からまともな完形個体が出土している。A土坑の性格にもよろうが遺棄もしくは生活時を示すものとしてよいのではなかろうか。また、完形の罎(19)は基部を下にして斜度で出土している。白玉(18)は古墳時代の遺物であろう。(遺物観察表:25・26頁 出土遺物一覧表:132頁)

床下の状態 床下土坑ではないが3基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:132~76×19cm、B土坑:66~52×7cm、C土坑:61~52×6cm。

重複 37号住居(6世紀前半)→36号住居

時代 8世紀前半

白倉B区39号住居

位置 31-34他 **遺構** 図25・26 P L 20・21

遺物 図117・118 P L 66

面積 13.4㎡ **主軸方位** N-10°-E

形状 短辺3.1~長辺4.2mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は32~36cm。床面は最大8cmの比高がある。

カマド 北壁の中央から東寄りで見出された。罎が鳥居状に組まれていた。焚口幅は55cm、焚口高は35cmで、結晶片岩の袖石と砂岩の天井石が検出された。罎が2個体懸けられていたが2つとも上半部はなくなっていた。また、左側の罎は遺存状態が悪く復元できなかった。左右奥壁部に罎(結晶片岩)を用いている。

貯蔵穴 隅丸長方形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、59×46×26cmである。

壁周溝 ほほ全周する。

遺物出土状態 焼失住居であり、多くの遺物が残っている。失火によるものと考えられる。遺棄された遺物としてカマドに懸けられた罎(4)や貯蔵穴周辺

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

の甕(5)・環(7・8重なって出土)や、こも編石などがある。また、大甕の破片(16)は床面直上で恐らく古墳時代のものと考えられる。出土位置及び大きさから本住居生活時に持ち込まれたものと考えられる。この甕は住居内で接合しており、44号住居(9世紀後半)の5cm×15cm程度の破片と接合する。また、48号住居(9世紀後半)覆土と同一個体である。接合資料a～eは土師器の甕の破片である。(遺物観察表:26・27・28・29頁 出土遺物一覧表:132頁)

床下の状態 床下土坑が3基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:112～96×27cm、B土坑:135～120×17cm、C土坑:121～105×18cm。

重複 189号土坑(縄文時代)→39号住居 190号土坑(時期不明)とも重複するが関係は不明。

時代 8世紀後半

白倉B区40号住居

位置 30-29他 **主軸方位** N-1°-W

遺構 図26 P.L.22 **遺物** 図119 P.L.66

調査経過 時期不明の土坑や重機による擾乱があり調査区外に大部分が存在することから恐らく本来の1/4程度しか調査できなかった。

壁と床面 残存壁高は34～46cm。床面は最大3cmの比高がある。

遺物出土状態 平安時代の遺構としたが古墳時代後期の土器片が多く、出土位置を記録した土器片をみるかぎり、平安時代の土器は1のみである。あるいは古墳時代の住居とも考えられる。1の高台付墳は墨書土器「井」か。(遺物観察表:29頁 出土遺物一覧表:132頁)

床下の状態 床下土坑が1基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:145～119×16cm。

時代 平安時代であれば9世紀後半、古墳時代後期とすると7世紀前半(3の環から)～7世紀末(5の蓋から)の年代幅を有する。

白倉B区41号住居

位置 30-31他

遺構 図26 P.L.22 **遺物** 図119 P.L.66

面積 9.8㎡ **主軸方位** N-1°-E

形状 短辺2.4～長辺3.1mの隅丸長方形を呈する。**壁と床面** 残存壁高は50～53cm。床面は最大6cmの比高がある。

覆土 ロームブロックの混入が目立つ。

カマド 北壁の中央から東寄りで見出された。焚口幅は65cm、焚口高は26cmである。上面を44号住居に破壊される。

遺物出土状態 3の環などは比較的晩絶時期に近いものであろう。また、重複する44号住居の実測遺物中1・2・7は本住居に由来する可能性が高い。接合資料aは土師器の丸甕の口縁片である。(遺物観察表:29・30頁 出土遺物一覧表:132頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:52～48×16cm、B土坑:115～100×15cm。

重複 45号住居(6世紀前半)→41号住居→44号住居(9世紀後半)

時代 8世紀前半

白倉B区44号住居

位置 30-31他

遺構 図27 P.L.22 **遺物** 図119 P.L.66

面積 14.3㎡ **主軸方位** N-100°-E

形状 短辺3.4～長辺3.6mの隅丸長方形を呈する。**壁と床面** 残存壁高は18～37cm。床面は最大10cmの比高がある。

カマド 東壁の中央から南寄りで見出された。焚口幅は45cm、焚口高は27cmで結晶片岩の両袖石・天井石が検出された。天井石は2つに割れて落ちている。その他の構造材は左袖石脇に須恵器大甕の破片が用いられている。

遺物出土状態 1・2及び7は奈良時代の遺物で恐らく重複する41号住居(8世紀前半)に由来する可能性が高い。また、一部カマド材として使用されている須恵器大甕は39号住居(8世紀後半)16と接合し、さらに平安時代の48号住居(9世紀後半)出土

の破片と同一個体であった。(遺物観察表: 30頁 出土遺物一覧表: 132頁)

床下の状態 床下土坑が1基検出された。覆土はロームブロックを主体としている。規模(径×深さ)は、A土坑: 143~99×12cm。

重複 45号住居(6世紀前半)→41号住居(8世紀前半)→44号住居

備考 39号住居16と同一個体が出土した48号住居は、本住居と同じ9世紀後半で約16m北西に位置している。

時代 9世紀後半

白倉B区46号住居

位置 32-44他

遺構 図27 P L22 **遺物** 図120 P L67

面積 <8.0>㎡ **主軸方位** N-101°-E

形状 短辺2.6~長辺2.7mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 痕跡のみ検出されておりカマド位置も含めて不明な点が多い。床面は最大5cmの比高がある。

貯蔵穴 円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、90×80×38cmである。尚、床下土坑の可能性もある。

遺物出土状態 1・2は比較的住居廃絶時期に近いと考えられる。羽釜の破片なども出土しており年代的にはまとまっている。(遺物観察表: 30・31頁 出土遺物一覧表: 132頁)

備考 白倉B区で10世紀代の住居は本住居のみ。

時代 10世紀後半

白倉B48号住居

位置 28-34他

遺構 図28 P L22 **遺物** 図120 P L67

面積 12.0㎡ **主軸方位** N-112°-E

形状 短辺2.6~長辺3.3mの隅丸長方形を呈する。カマド右袖の右側は棚状になる。また、カマドを境として壁ラインが若干食い違っている。

壁と床面 残存壁高は15~48cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド 東壁の中央から南寄り検出された。焚口

幅は38cmで、結晶片岩の右袖石が検出されている。その他の構造物材は奥壁の左右に礎を立て、さらに煙道部に礎を3個並べている。

貯蔵穴 楕円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、62×54×12cmである。蓋石のように棒状の礎が上面で検出された。

壁周溝 ほぼ全周する。

遺物出土状態 カマド右脇の棚状部分の礎や貯蔵穴上面礎はあまり類例がない。出土土器で図化できたものは少ないが1の礎は煙道部礎上面から出土しており、カマド材もしくは懸けられたものと考えられる。また、出土した大甕破片は39号住居(8世紀後半)16と同一個体で、さらにこの礎は本住居と同時期の(9世紀後半)44号住居のカマド材としても利用されている。接合資料a・bは土師器の甕の胴部片である。(遺物観察表: 31頁 出土遺物一覧表: 133頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。いずれも粘土が検出されている。規模(径×深さ)は、A土坑: 110~85×19cm、B土坑: 120~110×20cm。

重複 50号住居(6世紀後半)→48号住居

備考 44号住居は本住居の北東約16mに位置する。

時代 9世紀後半

白倉B区53号住居

位置 35-39他

遺構 図29 P L23 **遺物** 図120 P L-

面積 <9.6>㎡ **主軸方位** N-96°-E

形状 短辺2.9~長辺4.1mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は25~35cm。床面は最大10cmの比高がある。

カマド 東壁の中央で検出された覆土によって右側が破壊されている。構造物材はローム質の土壌である。

貯蔵穴 楕円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、126×125×15cmである。覆土に焼土が含まれていることからあるいは床下土坑とも考えられる。

遺物出土状態 図化した2点の土器はいずれもカマド覆土内の出土であった。比較的住居廃絶に近い

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

時期と考えられる。(遺物観察表: 31頁 出土遺物一覽表: 133頁)

床下の状態 床下土坑が1基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑: 124~116×15cm。

備考 昭和30年代のリンゴ苗保存に伴う攪乱によって大きく破壊される。

時代 9世紀後半

白倉B区57号住居

位置 32-39他

遺構 図29・30 P L 23・24

遺物 図120・121・122 P L 67・68

面積 22.9m² **主軸方位** N-104°-E

壁と床面 残存壁高は30~43cm。床面は最大6cmの比高がある。

カマド 東壁の中央から南寄りで検出された。焚口幅は50cm、焚口高は38cmで、構造材は掘り方に多量の糠が用いられている。

貯蔵穴 楕円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、70×65×20cmである。

壁周溝 ほぼ全周する。

遺物出土状態 「十」を付した刻書・墨書土器が多く出土している。また、床下土坑からの出土も多く25はA土坑、12・17・20・22はC土坑出土である。13はE土坑出土で14はC及びD土坑出土のものが接合している。1の壺はカマド出土の土器とC土坑出土の土器片が接合した事例である。また、瓦の出土も目立つが恐らくすべてカマド材と考えられる。(遺物観察表: 32・33頁 出土遺物一覽表: 133頁)

床下の状態 土坑が6基検出され、規模(径×深さ)は、A土坑: 120~118×34cm、B土坑: 124~96×26cm、C土坑: 90~88×20cm、D土坑: 68~35×12cm、E土坑: 117~(82)×19cm、F土坑: 80~73×8cm。

重複 58号住居(6世紀前半)→57号住居

備考 昭和30年代のリンゴ苗貯蔵用の攪乱に破壊されている。

時代 9世紀後半

白倉B区60号住居

位置 37-46他 **主軸方位** N-114°-E

遺構 図30・31 P L 24 **遺物** 図123 P L 68

形状 短辺(2.5)~長辺(2.9)mを呈する。

壁と床面 残存壁高は30~35cm。床面は最大6cmの比高がある。61・62号住居と重複するため、半分以上の壁面を検出できなかった。

カマド 東壁のほぼ中央で検出された。焚口幅は55cm、焚口高は35cmで、結晶片岩の左袖石が検出された。その他の構造材は奥壁手前の左右に結晶片岩が用いられていた。

遺物出土状態 2・3の坏は重なって(2が上)出土している。1の壺は出土状況からカマド材もしくはカマドに懸けられていたものと考えられる。4は黒色土器で、体部外面に墨書が施されている。(遺物観察表: 34頁 出土遺物一覽表: 133頁)

床下の状態 床下土坑が1基検出された。しかしながら平面図に記載できなかった。

重複 61・62号住居(古墳時代後期)→60号住居
時代 9世紀後半

白倉B区64号住居

位置 34-41他

遺構 図31 P L 24・25 **遺物** 図123 P L 68

面積 14.8m² **主軸方位** N-101°-E

形状 短辺2.9~長辺3.8mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は25~30cm。床面は最大6cmの比高がある。

カマド 東壁の中央で検出され、焚口幅は58cm、焚口高は70cmで、結晶片岩の左袖石が検出された。

遺物出土状態 6・7の高台付埴は遺棄されたものと考えられる。2・3の台付壺は恐らく同一個体と思われるが一方の破片は掘り方出土である。また、4・5・8・10の遺物はいずれも掘り方や床下土坑からの出土である。5はA土坑と掘り方出土の土器が接合している事例である。11は刀子で木部が残存していた。(遺物観察表: 34頁 出土遺物一覽表: 133頁)

床下の状態 床下土坑が7基検出された。A土坑は

B土坑に切られていることが土層断面から確認できた。A土坑の坑底には粘土が貼られていた。規模(径×深さ)は、A土坑:〈103〉〜〈97〉×40cm、B土坑:125〜82×16cm、C土坑:127〜104×38cm、D土坑:120〜95×17cm、E土坑:48〜32×19cm、F土坑:50〜37×24cm、G土坑:〈88〉〜〈56〉×16cm。
重複 65号住居(6世紀後半)→64号住居
時代 9世紀前半

白倉B区66号住居

位置 35-44他 **主軸方位** N-96°-E
遺構 図33 P L 25 **遺物** 図124 P L 69
形状 短辺3.4〜長辺4.6mの隅丸長方形を呈する。
壁と床面 残存壁高は45〜65cm。床面は最大10cmの比高がある。
カマド 東壁のほぼ中央で検出された。風倒木によって破壊され詳細は不明である。
遺物出土状態 1の甕は出土位置からカマド材(あるいは煙道部)に用いられたものと考えられる。接合資料a〜eは土師器の甕の破片である。(遺物観察表:35頁 出土遺物一覧表:133頁)
床下の状態 床下土坑が8基検出された。A土坑からは粘土がまとまって出土している。規模(径×深さ)は、A土坑:175〜80×24cm、B土坑:55〜49×25cm、C土坑:38〜30×20cm、D土坑:52〜44×12cm、E土坑:45〜40×64cm、F土坑:105〜85×20cm、G土坑:50〜43×28cm、H土坑:85〜〈54〉×26cm。
備考 風倒木及びリングゴ苗貯蔵の攪乱によって大きく破壊される。
時代 9世紀前半

白倉B区67号住居

位置 35-48他 **遺構** 図32 P L 25
遺物 図124・125 P L 69
面積 〈9.8〉m² **主軸方位** N-98°-E
形状 短辺〈2.3〉〜長辺3.0mの隅丸長方形か。
壁と床面 残存壁高は13〜26cm。床面は最大3cmの比高がある。

カマド 東壁の中央から南寄りで検出された。焚口幅は42cm、焚口高は28cmで、結晶片岩の右袖石が2つ左袖石が1つ検出された。その他の構造材は古墳時代の須恵器の大甕がカマド材として用いられる。この大甕は80号住居のカマド材としても同一個体が用いられている。

貯蔵穴 円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、80×75×10cmである。床下土坑とも考えられる。

遺物出土状態 カマドの項でも触れたが、カマド材として用いられた古墳時代の須恵器大甕が80号住居のカマド材として用いられている須恵器の甕と同一個体であることが判明した。80号住居3としたものがそれにあたる。この中で80号住居3①としたものは、80号住居3と接合した破片である。尚、平面図などからも明らかなように、貯蔵穴とした土坑からも同一個体が出土している。また、カマドの掘り方からも2点同一の甕が出土した。5は焼成前のヘラ書き土器「牛」、9は墨書土器「甲」である。接合資料aは須恵器の高台付甕、b・cは須恵器の大甕の胴部片である。(遺物観察表:35・36頁 出土遺物一覧表:134頁)

床下の状態 床下土坑が4基検出された。A土坑は粘土が充填される。規模(径×深さ)は、A土坑:39〜34×6cm、B土坑:137〜85×23cm、C土坑:113〜89×14cm、D土坑:70〜69×9cm。

重複 67号住居→7号溝(耕作溝)

備考 80号住居も本住居と同じく9世紀後半である。同時に存在していた可能性が極めて強い。

時代 9世紀後半

白倉B区68号住居

位置 35-45他 **遺構** 図33・34 P L 25
遺物 図125・126 P L 69
面積 9.9m² **主軸方位** N-107°-E
形状 短辺2.5〜長辺3.6mの隅丸長方形を呈する。
壁と床面 残存壁高は13〜23cm。床面は最大1cmの比高がある。
カマド 東壁の中央から南寄りで検出され、焚口幅

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

は51cmで、奥壁部に結晶片岩が用いられている。

貯蔵穴 不定形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、72×59×42cmである。

遺物出土状態 住居に遺棄されたと思われる土器は見あたらない。5の坏はほぼ完形で、住居廃絶時期の近い遺物と思われる。4の甕は掘り方一括取上の破片とカマド一括取上の破片が接合した個体である。また、3の甕は掘り方一括取上と貯蔵穴一括取上の破片が接合した個体である。6は掘り方一括取上の破片。接合資料⁹は土師器の甕の胴部片である（遺物観察表：36・37頁 出土遺物一覧表：134頁）

床下の状態 床下土坑が3基検出された。規模（径×深さ）は、A土坑：〈140〉～122×13cm、B土坑：145～114×20cm、C土坑：94～90×34cm。

時代 9世紀前半

白倉B区76号住居

位置 37-42他 **主軸方位** N-95°-E

遺構 図34 P L 26 **遺物** 図126 P L 69

壁と床面 残存壁高は10～14cm。床面は最大2cmの比高がある。

カマド 79号住居に破壊され不明。

柱穴 1基検出された。規模（径×深さ）は、P1：43×49cm。ただし、本住居に伴うものかは不明。

遺物出土状態 1は攪乱土壌中からの出土の可能性が高い。（遺物観察表：37頁 出土遺物一覧表：134頁）

重複 76号住居→79号住居（9世紀後半）

時代 9世紀前半

白倉B区77号住居

位置 38-40他

遺構 図34 P L 26 **遺物** 図126 P L 69

面積 <6.6> m² **主軸方位** N-112°-E

形状 一部が破壊されるが短辺2.4～長辺2.5mの隅丸方形を呈すと思われる。カマドを境に左右の壁面ラインは食い違うようである。

壁と床面 残存壁高は17～20cm。床面は最大13cmの

比高がある。尚、東壁の一部を調査時に掘りすぎってしまった。また、西側で厚さ10cm程度の焼土の堆積が確認された。

カマド 東壁の中央から南寄りで見出された。2つの甕（1・2）が懸けられた様子が良くわかる。左側の甕（2）の中から坏（4）が出土している。焚口幅は60cm、焚口高は32cmで、結晶片岩の右袖石が検出された。尚、左袖石と思われる隙がその位置で倒れていた。また、左袖石の痕跡として径と深さが10cmの小Pitが検出されている。

遺物出土状態 カマドの際にも触れたように2つの甕が懸けられていたことから、カマド内出土の甕と坏は本住居に遺棄されたものと考えられる。2つの甕は前方に倒れかかった状態の出土である。また、5の坏はA土坑から出土している。刀子が2点（9と10）出土している。（遺物観察表：37頁 遺物一覧表：134頁）

床下の状態 床下土坑が5基検出された。D・E土坑は小Pitである。規模（径×深さ）は、A土坑：87～75×28cm、B土坑：133～59×22cm、C土坑：103～84×53cm、D土坑：37～18×51cm、E土坑：33～28×27cm。

重複 78号住居（6世紀前半）→77号住居

備考 炭化材が部分的に検出されている。焼土の存在も考え合わせると焼失住居かも知れない。

時代 9世紀後半

白倉B区79号住居

位置 37-41他

遺構 図35 P L 26・27 **遺物** 図127 P L 69

面積 12.5m² **主軸方位** N-108°-E

形状 短辺2.6～長辺3.2mの隅丸長方形を呈する。壁と床面 残存壁高は60～65cm。床面は最大11cmの比高がある。

カマド 東壁の中央から南寄りで見出された。焚口幅は43cm、焚口高は38cmで結晶片岩の右袖石が検出された。その他の構造材は奥壁部に隙や土器片が出土しており、これらがカマド材の一部と考えられる。

遺物出土状態 2の高台付境はB土坑からの出土である。ほぼ完形個体であり本住居の構築時あるいは生活時を示す遺物であろう。(遺物観察表:38頁 遺物一覧表:134頁)

床下の状態 床下土坑が3基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:88~79×72cm、B土坑:96~70×15cm、C土坑:90~80×32cm。

重複 76号住居(9世紀前半か)→79号住居

備考 昭和30年代のリング苗に関する攪乱によって大きく破壊される。

時代 9世紀後半

白倉B区80号住居

位置 37-44他 **遺構** 図36・37 P L27

遺物 図127・128 P L69・70

面積 13.2㎡ **主軸方位** N-113°-E

カマド主軸方位 N-94°-E

形状 短辺2.4~長辺4.0mの隅丸長方形を呈する。**壁と床面** 残存壁高は38~48cm。床面は最大7cmの比高がある。北隅は重複する83号住居との関係で掘りすぎてしまった。

カマド 東壁のほぼ中央で検出され、住居主軸とずれている。焚口幅は50cm、焚口高は30cmである。結晶片岩を主体とした礫が数個用いられている。特筆事項に、古墳時代の須恵器の大甕(3)がカマドとして再利用されている。3③の破片は壁面に用いられているし、3④は煙道に用いられる。

壁周溝 ほぼ全周すると推測される。

遺物出土状態 カマドの記載でも述べたように3の須恵器の大甕の出土状態が興味深い。遺構平面図中3としたものは、この甕の同一個体と判断したものである。3②~3④は遺物実測図に対応する破片を图示しておいたので参照してほしい。また、遺物実測図中3①の破片は同じ平安時代(9世紀後半)の67号住居出土の破片である。67号住居では同様にカマド材としてこの須恵器が用いられており、3①以外の破片も多数出土している。3①と3②の接合面は新鮮であることから割られた後比較的早くそれぞれ

のカマド材として用いられた状況が想定できる。同時に存在し、しかもカマドに手を加えたときも同じであった可能性が高いのではなからうか。鉄鎌(13)や鎌(14)も出土している。接合資料a~dは土師器の甕の胴部片である。(遺物観察表:38-39頁 出土遺物一覧表:134頁)

床下の状態 床下土坑が5基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:59~44×7cm、B土坑:40~35×17cm、C土坑:142×9cm、D土坑:94~80×22cm、E土坑:37~30×27cm。

重複 83号住居(9世紀前半)→80号住居

備考 時期不明の攪乱に破壊される。67号住居とは同時に存在していた可能性が高い。

時代 9世紀後半

白倉B区81号住居

位置 37-48他

遺構 図37 P L27 **遺物** 図129 P L70

面積 9.6㎡ **主軸方位** N-99°-E

形状 短辺2.9~長辺3.0mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は16~25cm。床面は最大3cmの比高がある。

カマド 東壁の中央から南寄りで見出された。焚口幅は54cm、焚口高は28cmを呈す。

遺物出土状態 固化に耐えうる遺物が少ない。1の甕はカマド覆土出土の土器片とも接合している(遺物観察表:39頁 出土遺物一覧表:135頁)

床下の状態 床下土坑が3基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:120~104×17cm、B土坑:75~55×12cm、C土坑:58~48×10cm。

重複 87・89号住居(縄文時代)→81号住居

時代 9世紀前半

白倉B区83号住居

位置 31-43他 **遺物** 図129 P L70

遺構 図38・39 P L27・28・29

面積 <10.3>㎡ **主軸方位** N-96°-E

形状 短辺3.3~長辺3.7mの隅丸長方形を呈する。

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

壁と床面 残存壁高は14~28cm。床面は最大4cmの比高がある。北西隅の床面近くで白色粘土が検出されている。

カマド 東壁の中央から南寄りで見出された。大変残りが良く壺が2つ懸けられていたことや、内面全体に礫(結晶片岩)が用いられている様子や、煙道境に礫を用いている状況などが観察できる。また、いくつかの土器片がカマド材として用いられている。焚口幅は62cm、焚口高は37cmで、結晶片岩の両袖石と前方に2つに割れてずり落ちている天井石が見出された。図39には、カマド平面図として検出状態と上面礫を取り除いた状態2種の平面図を掲載したので参照してほしい。

貯蔵穴 楕円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、83×55×37cmである。

遺物出土状態 カマドに懸けてあった壺(1・2)は本住居の生活時を示す資料である。また、3・6・7の破片の一部はカマド材として用いられている。床下土坑出土の遺物も比較的多く、5と8の坏はH土坑から出土している。4の壺はカマド材とD土坑出土の破片が接合している。9の坏はC土坑出土の破片とカマド材が接合した事例である。接合資料aは土師器の壺の口縁片である。(遺物観察表:39・40頁 出土遺物一覧表:135頁)

床下の状態 床下土坑が8基検出されている。遺物出土状態でも述べたようにカマド材の用いられた土器と床下土坑出土土器の接合事例が4(壺)と9(坏)の2例確認されている。床下土坑の中にはカマドと密接に関係するものが存在することを示している。C土坑の床面には粘土が貼られていた。規模(径×深さ)、A土坑:65~<47>×30cm、B土坑:<82>~79×30cm、C土坑:92~84×21cm、D土坑:120~<63>×22cm、E土坑:104~90×14cm、F土坑:116~98×18cm、G土坑:105~94×20cm、H土坑:113~111×40cm。

重複 84号住居(7世紀後半)→83号住居→80号住居(9世紀後半)

時代 9世紀前半

白倉B区90号住居

位置 35-52地 **遺構** 図40 P L 29

遺物 図129・130 P L 70

面積 9.4㎡ **主軸方位** N-88°-E

壁と床面 残存壁高は10~34cm。床面は最大11cmの比高がある。住居中央部に硬化面が確認された。

カマド 東壁の中央から南寄りで見出された。焚口幅は45cm、焚口高は22cmで結晶片岩の両袖石が見出された。

貯蔵穴 隅丸長方形を呈す。結晶片岩で部分的に囲まれていたようである。規模(長軸×短軸×深さ)は、60×58×21cmである。

遺物出土状態 5の坏が比較的晩絶時期に近い遺物であろう。ふいごの羽口破片(6)と刀子破片(7)が出土するが覆土一括取上である。(遺物観察表:40頁 出土遺物一覧表:135頁)

床下の状態 床下土坑が1基検出された。坑底部には粘土が貼られていた。A土坑:93~75×25cm。

時代 9世紀前半

白倉B区92号住居

位置 35-52地 **遺構** 図42 P L 29・30

遺物 図130 P L 70・71

面積 9.7㎡ **主軸方位** N-93°-E

形状 短辺2.8~長辺3.0mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は22~35cm。床面は最大8cmの比高がある。

カマド 東壁のほぼ中央で見出された。部分的に攪乱を受けている。焚口幅は40cm焚口高は30cmで結晶片岩が奥壁に用いられている。

貯蔵穴 楕円形を呈す。底面は方形である。規模(長軸×短軸×深さ)は、62×40×25cmである。

遺物出土状態 貯蔵穴底面から出土した墨書土器「甲カ」は住居内に遺棄された遺物と考えられる。また、住居北壁の西寄りで見出された壁に貼り付くような状態の鎌(7)が出土している。墨書土器は他にも1点(6)出土している。(遺物観察表:41頁 出土遺物一覧表:135頁)

床下の状態 床下土坑が1基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:128~120×21cm。

備考 炭化材が一部出土しており、あるいは焼失住居なのかも知れない。

時代 9世紀前半

白倉B区95号住居

位置 29-41他 **遺構** 図41・42 P L30

遺物 図130・131 P L71

面積 (18.5) m²

主軸方位 N-110°-E

形状 (3.6) ~ (4.5) mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は28~34cm。床面は最大3cmの比高がある。尚、1号土坑と2号土坑は床面が確認できなかったことから住居内土坑もしくは住居とは別の掘り込みである。覆土を掘り下げている段階ではこの土坑については気づかなかった。また、北西隅については、先に22号住居(6世紀前半)を調査してしまったため、推定ラインとして表示した。

カマド 東壁の中央から南寄りで検出された。上面を耕作溝によって攪乱される。奥壁部に結晶片岩が数個検出されている。攪乱土を取り除いた段階での土層断面図をカマド図として使用している。右袖部の土は、埋め戻された土で(⑩~⑭層)で、この部分のさらに右(南)側の壁が焼け込んでいたことから旧カマドの痕跡と判断した。尚、床下から検出されたA土坑からは、焼土が多く見つかったことからカマドに由来する可能性が強く、あるいはこの旧カマドに対応する土坑かも知れない。

壁周溝 幅が狭い溝が巡る。

遺物出土状態 床下から出土した遺物が多く、特にA土坑からは図化できた遺物が多い。3の甕(図41中白丸で表現)や14の坏、さらに「新井」と墨書のある高台付埴(15)もこの土坑からの出土である。他にも墨(剣)書土器5「午」・19「新井」・7・9・14が出土している。また、遺構平面図に出土位置を示した土器でも、一括取上破片との接合が多く見受けられる。順次すると、1・3・4はカマド覆土一括出土土器と接合する。5「午」の坏は南東隅の

攪乱中から出土し、19「新井」は覆土一括取上である。他に、鉄器が2点出土している。(遺物観察表:41・42頁 出土遺物一覧表:135頁)

床下の状態 床下土坑が4基検出された。A土坑は前述したようにカマドに由来する可能性が強い。規模(径×深さ)は、A土坑:110~99×32cm、B土坑:145~(111)×22cm、C土坑:93~85×8cm、D土坑:70~37×8cm。

重複 22号住居(6世紀前半)→95号住居

時代 9世紀後半

白倉C区10号住居

位置 35-65他 **遺構** 図43・44 P L31

遺物 図132・133 P L72

面積 13.5m²

主軸方位 N-90°-E

調査経過 遺構確認の段階で、住居東辺のさらに東側で3基の土坑が確認された。114号土坑は縄文時代に帰属するが、他の2基(J土坑とK土坑)は住居との重複関係は不明ながらも、出土土器から判断する限り住居と近接する時期であった。この2基の土坑(J土坑とK土坑)は調査時の不手際によって床下土坑として扱われたが、住居プランから考えても住居に帰属するものではない。

形状 一辺が3.31~4.05mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 北側に僅かに傾斜する場所に立地し、残存壁高は0~14cmと遺存状態は良好ではない。床面は最大12cmの比高がある。また、住居中央部から北東部にかけて床面直上で粘土が検出されている。なお、柱穴は検出されていない。

カマド 住居東辺南よりの壁面を掘り込んで造られている。焚口部の左右先端には結晶片岩が据えられ、焚口幅は約40cmである。焚口部には構架体に用いられたと思われる結晶片岩が検出され、燃焼部の奥壁から右側壁部にかけて結晶片岩を主体とした礫が配置されている。また、燃焼部左側の比較的焚口に近い場所で、結晶片岩が支脚として利用されていた。カマド内からは高台付埴(20と22)が出土している。
貯蔵穴 住居内南西隅で比較的大形の掘り込みが確

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

認められたが、貯蔵穴であるかは不明。規模（長軸×短軸×深さ）は、150×98×32cmである。

壁周溝 南壁及び東壁に沿って検出された。

遺物出土状態 住居と重複関係にある（先後関係は不明）J土坑及びK土坑出土土器で図化したものは7.17.23である。また、この2つの土坑出土土器と住居覆土出土の羽釜が接合している（3と4）。ここで3と4の接合関係を目を向けてみたい。

3の羽釜はJ土坑出土の2点と住居覆土2点と住居掘り方一括で取り上げた1点が接合した羽釜である。他のJ土坑出土遺物が比較的多くまとまっていること、住居掘り方の破片が3に接合していることを考え合わせると、J土坑に遺物が廃棄されたのちに本住居が構築された可能性が強いのではなからうか。

4の羽釜はK土坑出土の2点と住居覆土の1点及び住居覆土一括で取り上げた1点が接合している。このうち土坑分の2点は大型破片で住居分は小破片であった。土器片の残存状況から考えると、本来土坑に廃棄された羽釜が住居構築時に一部破壊され住居廃絶後に流入したもののなのかもしれない。

住居覆土出土土器の中で、覆土一括の土器と接合しているのは6.11.15.16.21.25である。タイプAは、完形の10と20で、20はカマド内からの出土である。タイプBaは完形で床面から僅かに浮いた状態で出土した14である。また、24は掘り方一括出土として取り上げた2点の破片と接合しておりタイプは不明である。2も床下B土坑出土土器と覆土出土土器が接合しておりタイプは不明である。また、以上の中で取り上げなかった実測土器のタイプはいずれもタイプBである。

接合資料aは須恵器高台付埴、bは羽釜、cとdは埴の破片である。（遺物観察表：43・44頁 出土遺物一覧表：136頁）

床下の状態 床下土坑が9基検出されている。規模（径×深さ）は、A土坑：100×77×26cm、B土坑：85×42×17cm、C土坑：47×45×32cm、D土坑：46×40×25cm、E土坑73～(65)×24cm、F土坑：

(60～55)×18cm、G土坑：(70～92)×cm、H土坑：(100～115)×16cm、I土坑87～70×12cmで、A、C、D、E土坑の各坑底部からは粘土が検出されている。住居と重複関係にある土坑の規模は、J土坑82～(70)×29cm、K土坑(80)～83×15cmである。

重複 114号土坑(縄文時代)→J・K土坑(平安時代)→10号住居(本住居)

時代 10世紀後半

白倉C区20号住居

位置 29—59地

遺構 図45 P L31 **遺物** 図134 P L72

面積 <14.7> m² **主軸方位** N—119°—W

形状 一辺が約4mの隅丸長方形と思われる。

壁と床面 東側が道路であったために発掘調査できず不明な点が多い。残存壁高は10～29cmである。床面は最大11cmの比高がある。貯蔵穴と柱穴及び壁周溝は検出できなかった。

覆土 ローム質の土壌が主体を占めている。

カマド 確認できた壁面では検出できなかったことから未調査の東壁にあった可能性が高い。

遺物出土状態 実測した土器は2点と少ない。重複する21号住居出土土器と接合したのもあった。1と2はいずれもタイプBである。（遺物観察表：44頁 出土遺物一覧表：136頁）

床下の状態 床下土坑が2基検出され、規模（径×深さ）は、A土坑：70～92×23cm、B土坑：100×15cm。B土坑の底面からは粘土が検出されている。

重複 21号住居（6世紀後半）→20号住居（8世紀）

時代 8世紀

白倉C区22号住居

位置 33—66地

遺構 図46 P L31 **遺物** 図134 P L72

面積 15.7m² **主軸方位** N—85°—E

調査経過 遺構確認の後、ベルトを設定し、20cmほど掘り下げたところ、中央部において部分的に硬化面（結果的には22号住居床面であった）があらわれ

た。土層観察及び出土遺物の観察を行ったところ、当初の遺構プラン(11号住居)の内側に入り込むようにして、平安時代の住居が確認できたため、この住居を22号住居として調査し、その後、11号住居(6世紀後半)の調査を行った。そのため、本住居では壁面がセクション部分でしか確認できなかった。なお、貯蔵穴及び柱穴と壁周溝は検出できなかった。

形状 一辺が3.30~4.18mの歪んだ長方形か。

壁と床面 セクションの観察によれば、残存壁高は20cm前後であったと思われる。また、明瞭な床面は平面図中実線で囲んだ部分のみであった。

カマド 東壁の中央から南によった部分を掘り込んで造られている。

遺物出土状態 11号住居覆土出土の土器片と接合しているものが見受けられる(1と6)。タイプA及びタイプBaはなく、タイプBは1~3、5、6である。覆土一括の土器片と接合しているのは1と6で、4は覆土一括で取り上げておりタイプは不明。(遺物観察表:44頁 出土遺物一覧表:136頁)

床下の状態 掘り方は確認できなかった。床下土坑が1基検出されており、規模(径×深さ)は90~83×21cmある。坑底部からは粘土が検出されている。

重複 11号住居(6世紀後半)→22号住居

時代 10世紀後半

白倉C区23号住居

位置 31-61他 **遺構** 図47 P L32・33

遺物 図134・135 P L73

面積 (20.9)m² **主軸方位** N-100°-E

調査経過 表土を重機で除去し、遺構精査を行った段階で遺物の集中が確認され住居跡を想定して調査を行った。しかしながら、殆ど覆土はなく、明瞭な壁は検出されず、土の汚れと遺物分布範囲及び床下土坑の分布から住居プランを想定した。床面もさほど明瞭ではない。カマドは、東壁の南側によった部分が僅かに扶けるような状態であったこと、その部分の床面が一部焼土化していたことから、この場所であろう。住居に伴う柱穴や壁周溝は検出できな

かった。43号住居(9世紀後半)と重複するが、切り合い関係は不明である。

形状 おそらく、一辺が(4.30~4.80)m前後の隅丸長方形を呈すると思われる。

貯蔵穴 隅丸長方形を呈する。耕作溝によって北側を破壊される。規模(長軸×短軸×深さ)は、93×<66>×34cmである。

遺物出土状態 殆どの遺物が掘り方及び床下土坑からの出土で、タイプは不明である。タイプが特定できるのは貯蔵穴から出土した3がタイプB、4がタイプBaだけである。7と13は墨書土器「得万」で、11は風字硯で、タイプBまたはタイプCである。接合資料は全て須恵器で、a、bは甕の胴部破片、c、dは坏の破片である。13(坏)は本住居の3m北西に位置する16号住居(6世紀後半)覆土一括の土器と接合し、14(甕)は本住居と重複する43号住居掘り方一括の土器と接合している。1(甕)はB土坑内から小片に分かれて出土している。(遺物観察表:44頁 出土遺物一覧表:136頁)

床下の状態 床下土坑は6基検出されており、D・F土坑の坑底部からは粘土が検出されている。また、B土坑の底面には焼土が充填されていた。規模(径×深さ)は、A土坑:153~140×23cm、B土坑:110~70×32cm、C土坑:100~(93)×20cm、D土坑:108~105×18cm、E土坑:135~80×24cm、F土坑:130~105×20cmである。

重複 本住居と同時期(9世紀後半)の43号住居と重複するが先後関係は不明。

時代 9世紀後半

白倉C区24号住居

位置 36-73他

遺構 図45 P L32 **遺物** 図135 P L73

面積 <12.8> m² **主軸方位** N-102°-E

形状 一辺が3.50m前後の隅丸長方形か。

調査経過 表土を除去した段階で、遺構が確認されたが、西側に傾斜する場所に立地しているために、西側半分は消失していた。また、残存する東側にお

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

いても、東壁は5～8cmの壁高が確認できたが他の部分では、壁の立ち上がりを確認できなかった。覆土も僅かであったためか土層観察は行っていない。貯蔵穴と柱穴及び壁周溝は検出されなかった。

カマド 東壁のほぼ中央を掘り込んで造られている。北面で2つの礎が検出された。

遺物出土状態 図化した遺物は2点と少ない。1(羽釜)は床下土坑出土の破片と接合しておりタイプは不明である。2の瓦は、カマド材として用いられた可能性が高い。接合資料a～cは羽釜の破片であった。(遺物観察表:45頁 出土遺物一覧表:136頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出されているが、いずれも耕作溝によって一部を破壊されている。規模(径×深さ)は、A土坑:(118)～92×49cm、B土坑:92～(83)×27cmであった。

重複 120号土坑(縄文時代)・121号土坑(時期不明)→24号住居

時代 10世紀前半

白倉C区26号住居

位置 34—61他

遺構 図48 P.L32 **遺物** 図136 P.L73
面積 <4.9>㎡ **主軸方位** N-102°E

調査経過 表土を除去した段階で、カマドを中心とした落ち込みが僅かに確認できた。壁の立ち上がりが確認できたのはカマド周辺だけである。7世紀前半の25号住居の上に本住居がつくられているが、重複する部分においては床面が僅かに確認されたにとどまり、そこでは焼土や炭化物の分布が見受けられた。覆土が少なかったためか、土層観察は行われていない。カマドは東壁を掘り込んで造られ、貯蔵穴、柱穴、壁周溝は検出されていない。

遺物出土状態 タイプAは床面直上で2個体が接するようにして出土した4・5と6である。1はタイプBで、2と3は覆土一括で取り上げたためにタイプは不明で、3は重複する25号住居に廃棄された坯の可能性が高い。6には墨痕が付く。(遺物観察表:45・46頁 出土遺物一覧表:136頁)

床下の状態 明瞭な掘り方は検出されなかった。

重複 25号住居(7世紀前半)→26号住居

時代 9世紀前半

白倉C区27号住居

位置 34—61他

遺構 図48 P.L32 **遺物** 図136 P.L—
面積 <4.4>㎡ **主軸方位** N-2°E

調査経過 表土を重機で除去した段階で、住居南側部分の落ち込みが確認された。北側部分は平安時代の3号溝によって破壊され、西側で7世紀後半の25号住居と重複する。また、掘り込みが浅かったためか土層観察は行われていない。カマドは検出されず3号溝によって破壊されたと思われる。貯蔵穴等の施設も検出されなかった。

形状 隅丸長方形を呈すると思われる。

遺物出土状態 1と3は古墳時代後期のものでタイプCに、2は掘り方一括として取り上げた破片でタイプは不明であるが、本住居に由来する可能性が高い土器である。(遺物観察表:46頁 出土遺物一覧表:136頁)

床下の状態 床下土坑が1基検出されており、規模(径×深さ)は、100～94×14cmである。

重複 25号住居(7世紀後半)→27号住居(本住居)→3号溝

時代 9世紀後半か

白倉C区29号住居

位置 39—76他

遺構 図48 P.L32 **遺物** 図136 P.L—
面積 1㎡ **主軸方位** N-88°E

形状 隅丸長方形を呈すると思われる。

壁と床面 西側に傾斜する場所に立地するために西側約1/3が検出できなかった。残存壁高は最大15cm。なお、貯蔵穴は検出されていない。

覆土 掘り込みが浅く土層観察は行われていない。
カマド 西壁の中央から南側によった部分を掘り込んで構築される。右袖部では結晶片岩が出土してお

り構築材として利用されたものと思われる。

柱 穴 2本検出されている。規模(径×深さ)はP1:45×10cm、P2:26×7cmである。

遺物出土状態 1はカマド内から出土している。実測遺物はいずれもタイプBであろう。(遺物観察表:46頁 出土遺物一覧表:136頁)

床下の状態 床下土坑は1基検出されており、規模(径×深さ)は、104~90×13cmである。

時代 10世紀前半

白倉C区31号住居

位置 39-69他 **遺構** 図49 P L32・33

遺物 図136・137 P L74

面積 14.8㎡ **主軸方位** N-34'-W

形状 長辺が4.38m、短辺が3.39mの隅丸長方形。

壁と床面 残存壁高は40~42cmと比較的残存状態は良好であった。床面は最大10cmの比高がある。なお、貯蔵穴及び柱穴は検出されなかった。

覆土 ブロック状となった土塊の混入が目立つ。

カマド 北壁の僅かに東によった位置で検出された。白倉C区において奈良時代以降の竪穴住居跡では唯一の北カマドである。焚口幅は約50cmで、両袖が前方に張り出している。

壁周溝 カマド周辺を除く壁際で検出された。

遺物出土状態 3と5が出土位置からタイプBaの可能性が高く他の土器はタイプBであろう。南壁際の中央部からは、こも編石がまとまって出土している。また、磁石(7)が北西床面直上で出土している。

(遺物観察表:46-47頁 出土遺物一覧表:136頁)

床下の状態 床下土坑が1基検出されており、規模(径×深さ)は、117~95×14cmである。

重複 4本の耕作溝に破壊されている。

時代 8世紀後半

白倉C区40号住居

位置 39-72他

遺構 図50 P L33 **遺物** 図137 P L74

面積 (12.8)㎡ **主軸方位** N-100'-E

形状 一辺が3.25~4.16mの隅丸長方形を呈す。

壁と床面 西辺の大部分を41号住居に破壊される。残存壁高は4~21cmである。壁周溝及び柱穴は検出できなかった。なお、覆土の状態は不明である。

カマド 東壁の南側によった部分を掘り込んでつくられている。

貯蔵穴 南東隅で検出された。隅丸長方形を呈し規模(長軸×短軸×深さ)は、100×91×25cmである。

遺物出土状態 遺物出土量は少なかった。図化した遺物も破片資料でいずれもタイプBである。(遺物観察表:47頁 出土遺物一覧表:136頁)

床下の状態 床下土坑は2基検出されている。規模(径×深さ)は、A土坑:92~85×18cm、B土坑:45~39×41cmである。

重複 42号住居(6世紀後半)→40号住居(本住居・10世紀前半)→41号住居(10世紀後半)

時代 10世紀前半

白倉C区41号住居

位置 39-73他

遺構 図50 P L33 **遺物** 図137 P L74

面積 13.3㎡ **主軸方位** N-98'-E

形状 一辺が4.51~2.95mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 最大壁高は23cmである。6世紀後半の42号住居と重複する壁面では、壁の立ち上がりを確認できなかった。床面は堅くしまっていた。なお、壁周溝と柱穴及び貯蔵穴は検出できなかった。

覆土 自然堆積の可能性が高い。

カマド 東壁の南側に寄った部分で検出された。袖部先端間の焚口幅は38cmである。袖部などの構築材は土器片、結晶片岩、ロームブロックなどである。

遺物出土状態 1と2の羽釜は、カマド構築材として使用された可能性が強クタイプAである。3~6はタイプBである。(遺物観察表:47頁 出土遺物一覧表:136頁)

重複 42号住居(6世紀後半)→40号住居(10世紀前半)→41号住居(本住居・10世紀後半)

時代 10世紀後半

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

白倉C区43号住居

位置 31-60他

遺構 図48 P.L.33 遺物 図138 P.L.74

面積 (10.4)㎡ 主軸方位 N-67°-E

調査経過 表土を重機で除去し、遺構精査を行った段階で遺物の集中が確認され住居跡を想定して調査を行った。しかしながら、殆ど覆土はなく、明瞭な壁は検出されず、土の汚れから住居プランを想定した。床面もさほど明瞭ではない。住居に伴う貯蔵穴と柱穴及び壁周溝は検出できなかった。本住居と同時期である9世紀後半の23号住居と重複するが、切り合い関係は不明である。

形状 隅丸長方形を呈すると思われる。

カマド 東壁の南側によった部分が僅かに残るような状態であったこと、その部分の床面が一部焼土化していたことから、この場所であろう。残存状況は極めて悪い。

遺物出土状態 覆土からの出土はなく全て掘り方からの出土であった。図化した2点は掘り方一括として取り上げておりタイプは不明である。なお、掘り方一括として取り上げた須恵器の壺が23号住居覆土出土の土器片(23号住居Na14)と接合している。(遺物観察表:47頁 出土遺物一覧表:136頁)

床下の状態 床下土坑は検出できなかった。床下30cm程度までが掘り方である。

重複 本住居と同時期(9世紀後半)の43号住居と重複するが、先後関係は不明。

時代 9世紀後半

白倉C区44号住居

位置 36-61他 遺構 図51・52 P.L.33・35

遺物 図138・139 P.L.74・75

面積 14.7㎡ 主軸方位 N-88°-E

形状 一辺が2.95~4.22mの隅丸長方形を呈する。壁と床面 残存壁高は8~23cmである。北東隅では径35cm、深さ16cmのピット(P1)が検出され、南東隅では長軸60cm、深さ39cmの貯蔵穴が調査された。なお、壁周溝は検出されていない。

覆土 自然堆積の可能性が高い。

カマド 東壁の南側に寄った部分を掘り込み、両袖部から奥壁部分にローム質の土壌を主体とした構築材を用いている。燃焼部と煙道部の間に段差が見受けられる。焚口幅は約30cmである。

遺物出土状態 カマド前方から西側にかけて遺物の集中が見られる。特に1及び2の壺は、1は7点、2は1点カマド一括として取り上げた破片と接合していることから、カマドに据えられたものがその後の土地利用などによって破壊された可能性が高く、タイプB aと思われる。他の土器はタイプBであろう。完形の土器は手捏ねの甌(10)だけであった。13は砥石の転用品かもしれない。また、14(蓋)は墨書土器「右酒充」。(遺物観察表:48頁 出土遺物一覧表:136頁)

床下の状態 床下土坑は4基検出されており、規模(径×深さ)は、A土坑:106~86×21cm、B土坑:98~97×38cm、C土坑:67~54×22cm、D土坑:93~74×35cmである。この4基は平面観察及び断面観察からD→B→C→Aの先後関係が確認された。

重複 74号住居(古墳時代後期)→64号住居(8世紀後半)→44号住居

時代 9世紀前半

白倉C区45号住居

位置 35-63他 遺構 図53・54 P.L.33・34

遺物 図139・140・141 P.L.75・76

面積 20.5㎡ 主軸方位 N-88°-E

形状 隅丸の台形を呈し、各辺は約3.7~4.5m。

壁と床面 残存壁高は13~21cmである。47号住居と74号住居と接する部分の残存壁高は低い。西辺で壁周溝が検出されている。

カマド 東辺のほぼ中央で検出された。灰褐色粘土で両袖部が造られ、焚口幅は38cmである。奥壁左右の壁には結晶片岩が用いられている。右袖の右側部分において、床面から5cm程度盛り上がったテラス状の施設が検出されている。

貯蔵穴 南東隅で検出された。楕円形を呈し規模(長軸×短軸×深さ)は、76×64×44cmである。

柱穴 12本の柱穴が検出されているが、規則的な配列は認めたいことから、全てが本住居に帰属するかとは考えられない。規模(径×深さ)は、P1:29×44cm、P2:39×—cm、P3:31×67cm、P4:34×35cm、P5:28×32cm、P6:31×28cm、P7:20×22cm、P8:43×38cm、P9:21×46cm、P10:21×29cm、P11:37×33cm、P12:42×29cmであった。

遺物出土状態 住居間接合が2例確認されている。

1の丸壺は、重複する74号住居(古墳時代後期)出土の破片3点と接合しており、タイプは不明。20(須恵器壺の破片)は1.5m北東に位置する57号住居(本住居と同じ8世紀後半)出土の破片と接合しておりタイプCであるが、両住居内での出土位置が似ていることから、両住居廃絶時期が近接する可能性を示唆している。他の遺物であるが、9がタイプA、11、14、15がタイプB a、21が覆土一括で取り上げているためタイプは不明で、それ以外の土器はいずれもタイプBである。また、鉄器であるが、ほぼ完形の鎌(19)は注目し値しよう。(遺物観察表:48・49頁 出土遺物一覧表:136頁)

床下の状態 床下土坑は7基検出されており、A～D土坑の坑底部には粘土が貼られ、その中でC・D土坑は焼土が粘土に混じって検出されている。規模(径×深さ)は、A土坑:159～111×26cm、B土坑:121～109×27cm、C土坑:57～56×6cm、D土坑:69～62×5cm、E土坑:127～116×15cm、F土坑:116～109×22cm、G土坑:57～50×11cmである。

重複 47号住居(弥生時代)→74号住居(古墳時代後期)→45号住居

時代 8世紀後半

白倉C区46号住居

位置 37-62他 **遺構** 図55 P L34・35

遺物 図141 P L76

面積 <8.9> m² **主軸方位** N-98°-E

調査経過 表土を重機で除去し、遺構精査を行った

段階で4軒の住居と円形周溝遺構の重複を確認した。平面及び断面の土層観察から63号住居(8世紀前半)→46号住居(本住居・9世紀前半)→54号住居(9世紀前半)の先後関係が確認できた。円形周溝遺構の時期は不明であるが本遺構によって破壊されていることは確認できた。

形状 短辺<2.9>～長辺(4.2)mの隅丸長方形を呈する。63号住居と重複する部分はカマド部分を除いて、推定である。また、54号住居に破壊されているため、不明な点が多い。

壁と床面 残存壁高は20～40cmで、床面は最大4cmの比高がある。平面図中カマド前方の実線が囲った範囲は、床面が確認できた部分である。

カマド 東壁のほぼ中央で検出された。焚口高は19cmである。左軸石及び奥壁部に複数の礎がカマド材として用いられていた。

遺物出土状態 固化した遺物の残存率はあまりよくない。その中で、6の坏は完形に近く、出土位置からみて、住居廃絶時に近い遺物と考えてよいであろう。また、4の須恵器壺は、カマド材として用いられた可能性が高い。尚、重複関係にある住居との接合が2例確認できた。10の坏は、本住居と54号住居一括取上げの接合事例である。63号住居7も同様に本住居と63号住居一括取上げの破片が接合した事例である。いずれも出土位置が特定できないことから、先後関係などを考える材料とはならない。(遺物観察表:49・50頁 出土遺物一覧表:136頁)

床下の状態 床下土坑は北西隅で1基検出されており、規模(径×深さ)は、145～124×9cmである。

重複 63号住居(8世紀前半)→46号住居(本住居・9世紀前半)→54号住居(9世紀前半)。円形周溝遺構(時期不明)→本住居。54号住居は本住居と同じ9世紀前半である。また、54号住居は、竪穴状遺構である。調査経過をあわせて参照してほしい。

時代 9世紀前半

白倉C区51号住居

位置 39-71他

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

遺構 図2 P L34 **遺物** 図142 P L76
面積 (4.8)㎡ **主軸方向** N-94°-E
形状 短辺(2.10)~2.35mの隅丸方形を呈する。大変小さな竪穴住居である。51号住居との重複部分
は、カマドを除いて推定である。
壁と床面 残存壁高は19~30cmである。床面は最大2cmの比高がある。
カマド 東壁の中央から南に寄った位置で検出された。焚口幅は55cmと幅広く、焚口高は22cmであった。両袖石及び奥壁に結晶片岩が用いられている。
遺物出土状態 床面直上で台付き甕(1)が出土している。(遺物観察表:50頁 出土遺物一覧表:136頁)
重複 38号住居(6世紀後半)→51号住居
時代 8世紀後半

白倉C区54号住居(竪穴状遺構)

位置 37-62他 **遺構** 図54 P L34-35
遺物 図142 P L76
面積 9.2㎡ **主軸方位** N-90°-W
調査経過 重複関係にある46号住居の調査経過を参照してほしい。カマドが検出されていないことや、幅広い溝が巡ることから、竪穴住居ではなく、竪穴状遺構としたほうが適切である。形状は短辺2.3~長辺3.1mの隅丸長方形を呈している。壁と底面を観察すると、底面には幅40~60cm、深さ10~25cmの溝がほぼ巡る。残存壁高は31~50cmである。底面は最大8cmの比高がある。
遺物出土状態 一括取上げの破片が、重複する46号住居一括取上げの破片と接合している(46号住居10)。また、1(甕)の接合関係からも、46号住居との先後関係は妥当であろう。(遺物観察表:50頁 出土遺物一覧表:136頁)
重複 205号土坑(縄文時代)→55号住居(弥生時代)→63号住居(8世紀前半)→46号住居(9世紀前半)→54号住居(本遺構・9世紀前半)。円形周溝遺構(時期不明)→本遺構。
備考 重複する46号住居も9世紀前半である。
時代 9世紀前半

白倉C区56号住居

位置 35-61他
遺構 図56 P L35 **遺物** 図142 P L76
面積 (7.6)㎡ **主軸方位** N-101°-E
形状 短辺2.3~長辺<2.7>mの隅丸長方形を呈する。本住居より古い57・58号住居の方を先に調査したため、重複部分の形状は不明。
壁と床面 残存壁高は10~20cmである。床面は最大3cmの比高がある。
カマド 東壁の中央から南に寄った位置で検出された。焚口幅は34cmで、右袖上でカマド材に用いられたと思われる結晶片岩が出土している。
柱穴 1本検出された。規模(径×深さ)は、47×46cmである。検出された位置から床下土坑と考えたほうがよさそうである。

遺物出土状態 1の甕は、D土坑出土。2は墨書土器で、底部内外面に糸切り痕が確認できた個体である。この土器については残念ながら一括取上げのため、出土位置は不明である。(遺物観察表:50頁 出土遺物一覧表:136頁)

床下の状態 床下土坑は5基検出されており、規模(径×深さ)は、A土坑:99~(90)×45cm、B土坑:80~(54)×19cm、C土坑:(99)~(75)×35cm、D土坑:101~<45>×25cm、E土坑:<64>~<54>×21cmである。A・B・C土坑については、土層断面よりB土坑が新しいことがわかっている。

重複 58号住居(6世紀後半)→57号住居(8世紀後半)→56号住居(9世紀後半)

時代 9世紀後半

白倉C区57号住居

位置 36-61他 **遺構** 図57 P L34-35
遺物 図142-143 P L76-77
面積 (20.8)㎡ **主軸方位** N-82°-E
形状 短辺3.8~長辺5.0mの隅丸長方形を呈する。
壁と床面 残存壁高は14~38cmである。床面は最大12cmの比高がある。
カマド 東壁の中央から南に寄った位置で検出され

た。焚口幅は48cmである。56号住居に上面を破壊されているため、不明な点が多い。

柱 穴 6本検出されたが、本住居に帰属するか疑問である。各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:53×48cm、P2:35×34cm、P3:43×37cm、P4:56×40cm、P5:60×45cm、P6:42×60cm。

遺物出土状態 多くの遺物を図化した。遺棄されていたと思われるものは少ないが、I2(坏)などが該当しよう。床下土坑から出土したものには10や14の坏などがある。鉄製紡錘車(24)が出土しているが、一括取上げである。また、住居間接合が3例確認できた。45号住居20、64号住居3と4がそれにあたる。45号住居(8世紀後半)20は須恵器大甕の破片であるが、各住居内での出土位置が似ている。64号住居3と4は、両住居ともに一括取上げの破片である。各住居位置は、45号住居が本住居の南西約1.5m、64号住居は南東約1mで、本住居を含め3軒ともに8世紀後半である。接合資料a、b、c、d、eは、すべて土師器甕の胴部片である。(遺物観察表:51・52頁 出土遺物一覧表:137頁)

床下の状態 床下土坑は8基検出されており、規模(径×深さ)は、A土坑:124~124×15cm、B土坑:〈151〉~105×23cm、C土坑:71~57×22cm、D土坑:46~34×16cm、E土坑:130~97×17cm、F土坑:98~91×24cm、G土坑:99~76×18cm、H土坑:75~65×77cmである。A、C、D土坑は、底面に粘土が貼られていた。

重複 132号土坑(縄文時代)→58号住居(6世紀後半)→59号住居(8世紀後半)→57号住居(本住居・8世紀後半)→56号住居(9世紀後半)。59号住居との先後関係は土層断面より。

時代 8世紀後半

白倉C区59号住居

位置 35-62他

遺構 図56 P L35 **遺物** 図144 P L一

面積 〈2.8〉m² **主軸方位** N-5°-E

形状 東側を57号住居(8世紀後半)に破壊され、

南側を74号住居(古墳時代後期)と重複する。74号住居重複部分では、先に74号住居部分を調査したため、本住居は北西隅一部が検出されたにすぎない。

壁と床面 残存壁高は5~15cmである。床面は最大3cmの比高がある。

カマド 検出されていない。

遺物出土状態 図化できたのは壺(1)の破片のみであった。(遺物観察表:52頁 出土遺物一覧表:137頁)

床下の状態 床下土坑は1基検出されており、規模(径×深さ)は、107~99×21cmである。

重複 74号住居(古墳時代後期)→59号住居(本住居・8世紀後半)→57号住居(8世紀後半)。57号住居との先後関係は土層断面から。

時代 8世紀後半

白倉C区63号住居

位置 37-61他 **遺構** 図58 P L34・35

遺物 図144 P L77

面積 (18.1)m² **主軸方位** N-84°-E

形状 短辺3.6~長辺4.3mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は27~54cmである。床面は最大4cmの比高がある。46号住居(9世紀前半)との重複部分においては、本住居床面の方が低かったため、形状が確認できた。

カマド 東壁の中央から南に寄った位置で検出された。焚口幅は30cmであった。

遺物出土状態 1は床下土坑出土である。2は掘り方一括取上げの破片と46号住居一括取上げの破片が接合している。4~7は一括取上げであった。(遺物観察表:52頁 出土遺物一覧表:137頁)

床下の状態 床下土坑は1基検出されており、規模(径×深さ)は、76~65×2cmである。底面に粘土が貼られていた。

重複 55号住居(弥生時代)→63号住居→46号住居(9世紀前半)→54号住居(9世紀前半)

時代 9世紀前半

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

白倉C区64号住居

位置 36-61他 **遺構** 図59 P L33・35
遺物 図144 P L77
面積 (15.6) m² **主軸方位** N-90°-E
形状 短辺3.8~長辺3.9mの隅丸方形である。
壁と床面 残存壁高は22~42cmで、床面は最大4cmの比高がある。南東隅で粘土が検出されている。
カマド 耕作溝によって大部分を破壊され、不明な点が多い。東壁のほぼ中央で検出された。
壁周溝 東壁以外では検出された。

遺物出土状態 3と4は本住居一括取上げの破片で、57号住居(8世紀後半)一括取上げの破片と接合している。2は、カマド左袖内からの出土であるが、古墳時代の土器である。カマド材として用いた土の中に入っていたものと考えられる。(遺物観察表: 52頁 出土遺物一覧表: 137頁)

床下の状態 床下土坑は2基検出されており、規模(径×深さ)は、A土坑: 119~(90)×15cm、B土坑: 107~101×21cmである。

重複 64号住居→44号住居(9世紀前半)
時代 8世紀後半

白倉C区66号住居

位置 44-73他
遺構 図60 P L35 **遺物** 図144 P L77
面積 <12.0> m² **主軸方位** N-95°-E
形状 短辺2.7~長辺<4.3> mの隅丸長方形を呈する。南壁は発掘調査区外であるため不明。
壁と床面 残存壁高は21~27cmである。床面は最大11cmの比高がある。
カマド 東壁の南寄りで検出された。焚口幅は56cm。奥壁及び天井に用いられた礫(結晶片岩と砂岩)が多数出土している。また、カマド材に用いられたと思われる粘土が両袖位置床面直上で検出されている。
遺物出土状態 1の坏は掘り方一括と覆土一括の土器片が接合した刻書土器「大」(?)である。接合資料aは、土師器壺の胴部片である。(遺物観察表: 52・53頁 出土遺物一覧表: 137頁)

床下の状態 床下土坑は2基検出されており、規模(径×深さ)は、A土坑: 55~49×18cm、B土坑: 75~58×25cmである。A、Bともに底面に白色粘土が貼られていた。

重複 67号住居(10世紀前半)→66号住居(本住居・10世紀前半)。67号住居のカマドを本住居が破壊している。

備考 10世紀前半の2軒が重複している。
時代 10世紀前半

白倉C区67号住居

位置 44-74他
遺構 図59 P L— **遺物** 図145 P L77
面積 <8.6> m² **主軸方位** N-99°-E
形状 短辺3.0~長辺3.1mの隅丸方形を呈する。南東部分を本住居と同じ10世紀後半の66号住居に破壊される。

壁と床面 残存壁高は4~22cmである。床面は最大6cmの比高がある。

カマド おそらく66号住居に破壊されたものと思われる。東カマドであろう。

遺物出土状態 2の羽釜は覆土一括取上げの破片である。5は、ほぼ完形の耳皿で、底部には焼成前の穿孔がある。6の釘は耕作溝からの出土である。(遺物観察表: 53頁 出土遺物一覧表: 137頁)

重複 80号住居(縄文時代)→76号住居(縄文時代)→67号住居(本住居・10世紀前半)→66号住居(10世紀前半)。66号住居との先後関係は、土層断面から。

備考 10世紀前半の2軒が重複している。
時代 10世紀前半

白倉C区68号住居

位置 45-79他 **遺構** 図61 P L35・36
遺物 図145 P L77
面積 一m² **主軸方位** N-88°-E
形状 西側に傾斜する場所に立地し、半分以上を消失する。短辺<2.5>~長辺5.0mである。

壁と床面 残存壁高は最大17cmである。床面も大部分が流れていた。

カマド 東壁の南寄りで検出された。焚口幅は62cmで、カマド材に用いられた礫（結晶片岩や砂岩）が多数出土している。

貯蔵穴 円形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、83×82×26cmである。

遺物出土状態 東壁に寄った部分で出土している。

2の羽釜は掘り方一括と覆土一括取上げの破片が接合した土器である。（遺物観察表：53頁 出土遺物一覧表：137頁）

床下の状態 床下土坑は2基検出されており、規模（径×深さ）は、A土坑：182×162×23cm、B土坑：152×97×33cmである。

時代 10世紀前半

白倉C区69号住居

位置 43-79他 **遺構** 図62 P L36

遺物 図145-146 P L77-78

面積 (14.8)㎡ **主軸方位** N-90°-E

形状 短辺(3.8)～長辺(4.1)mの隅丸方形を呈する。西側に傾斜する場所に立地するため、西壁を消失する。

壁と床面 残存壁高は最大15cmである。西側1/4程度の床面は消失する。東壁及び南壁は段を有するが、この段が重複に由来するのか、あるいは本来的なものなのか、又、残存の悪さによるものなのかよくわからない。

カマド 東壁の南端で検出され、焚口幅は46cmである。カマド材に用いられたと思われる羽釜や礫（結晶片岩）が出土している。

貯蔵穴 楕円形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、71×58×32cmである。

遺物出土状態 東壁際で、上から5・2・6（坏類）が重なって出土した。住居内に遺棄されたものであろう。鉄鍬(9)が1点出土している。接合資料aは、羽釜の破片である。（遺物観察表：53・54頁 出土遺物一覧表：137頁）

床下の状態 床下土坑は1基検出されており、規模（径×深さ）は、47～40×13cmである。

重複 34号土坑と重複するが、この土坑に関しては時期不明である。

時代 11世紀。白倉C区で11世紀代の住居は、本住居だけである。

白倉C区70号住居

位置 41-81他

遺構 図60 P L36 **遺物** 図146 P L78

面積 一㎡ **主軸方位** N-83°-E

形状 西側に強く傾斜する場所に立地し、さらに西半分が調査区外であるため不明な点が多い。短辺(1.2)～長辺3.7mである。

壁と床面 東壁及びそれに直交する壁の一部が検出されたにすぎない。残存壁高は最大15cmである。

カマド 東壁の中央から南寄り検出された。焚口幅は38cmである。周囲からは、カマド材に用いられた礫（結晶片岩）が多量に出土している。

遺物出土状態 東壁際で出土している。完形に近い土器はなく、いずれも破片に近い状態である。（遺物観察表：54頁 出土遺物一覧表：137頁）

時代 10世紀前半

白倉C区71号住居

位置 45-77他

遺構 図62 P L36 **遺物** 図146 P L-

面積 一㎡ **主軸方位** N-82°-E

形状 西側に傾斜する場所に立地するため、西半分を消失する。短辺(1.7)～長辺3.2mである。

壁と床面 残存壁高は最大7cmである。西側の大部分を消失する。

カマド 東壁の中央から南寄り検出された。焚口幅は75cmと広いが、あるいは掘りすぎかもしれない。

貯蔵穴 円形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、74×70×21cmである。

遺物出土状態 東壁近くで出土している。園化した坏(1)は破片である。（遺物観察表：54頁 出土遺物

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

一覧表：137頁)

床下の状態 床下土坑は1基検出されており、規模(径×深さ)は、100～72×14cmである。

時代 10世紀前半

白倉C区73号住居

位置 43-81他

遺構 図63 P.L.36 **遺物** 図147 P.L.78

面積 1㎡ **主軸方位** N-81°-E

形状 西側は発掘調査区外で、不明な点が多い。短辺〈1.3〉～長辺3.1mである。

壁と床面 残存壁高は最大10cmである。床面は最大1cmの比高で、平坦である。また、南壁の立ち上がりは僅かであった。

カマド 東壁のほぼ中央で検出され、焚口幅は34cm、焚口高は16cmである。両袖石(結晶片岩)が良好に遺存。図化した土器は全てカマド出土。

貯蔵穴 楕円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、46×30×13cmである。上面で、蓋石状に結晶片岩が出土している。

遺物出土状態 図化した5点は、いずれもカマド出土で2は完形である。(遺物観察表：54・55頁 出土遺物一覧表：137頁)

床下の状態 床下土坑は1基検出されており、規模(径×深さ)は、154～(70)×10cmである。

時代 10世紀前半

白倉C区75号住居

位置 43-74他

遺構 図63 P.L.36 **遺物** 図147 P.L.78

面積 1㎡ **主軸方位** N-85°-E

形状 痕跡しか検出されていないため、不明な点が多い。

壁と床面 痕跡のみしか検出されなかった。

カマド 東壁の中央から南寄りで検出された。痕跡のみである。

遺物出土状態 耕作溝内からの出土が多いが、本住居に由来するものと考えた。4と5は覆土一括取上

げの破片である。(遺物観察表：55頁 出土遺物一覧表：137頁)

重複 80号住居(縄文時代)→76号住居(縄文時代)→75号住居

時代 10世紀前半

白倉C区83号住居

位置 43-73他 **遺構** 図64 P.L.37

遺物 図147・148 P.L.78

面積 9.4㎡ **主軸方位** N-104°-E

形状 短辺2.4～長辺3.3mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は10～16cmである。床面は最大9cmの比高がある。

カマド 東壁の南寄りで検出された。焚口幅は44cmで、両袖が僅かに張りだしている。右袖石と支脚は結晶片岩で、奥壁にも同種の障が用いられている。

遺物出土状態 1～5はカマド出土で、いずれも破片である。6～8は鉄器。(遺物観察表：55頁 出土遺物一覧表：137頁)

床下の状態 床下土坑は3基検出されており、規模(径×深さ)は、A土坑：106～90×27cm、B土坑：92～85×28cm、C土坑：93～73×31cmである。C土坑の底面には、粘土が貼られていた。

重複 84号住居(縄文時代)→83号住居

時代 10世紀前半

白倉C区87号住居

位置 29-60他 **遺構** 図63 P.L.37

遺物 図148・149 P.L.79

面積 <5.0>㎡ **主軸方位** N-75°-E

形状 短辺2.0～長辺〈2.2〉mで、ほぼ隅丸方形を呈すると思われる。北側は発掘調査区外で不明。

壁と床面 残存壁高は7～17cmである。床面は最大7cmの比高がある。

カマド 東カマドで、燃焼部の長さが他より長い。焚口幅は35cmで、左袖及び煙道部に結晶片岩が用いられる。

遺物出土状態 4と5が完形に近く、出土位置から

も遺棄されたものと考えてよいであろう。6は掘り方からの出土である。接合資料a, b, cは、すべて土師器甕の破片である。(遺物観察表:55・56頁 出土遺物一覧表:137頁)

重複 21号住居(6世紀後半)→87号住居

時代 9世紀後半

白倉C区92号住居

位置 35-76他 遺構 図65 P L37

遺物 図149・150 P L79

面積 1㎡ 主軸方位 N-84°-E

形状 北側は調査区外で、西側は斜面で状況が不明である。

壁と床面 残存壁高は最大7cmである。床面は最大5cmの比高がある。

カマド 東カマドであり、焚口幅は30cmである。

遺物出土状態 図化した遺物は、いずれもカマド前方の床面直上の出土であった。3～5は完形に近く、遺棄された遺物であろうか。(遺物観察表:56頁 出土遺物一覧表:137頁)

時代 10世紀前半

白倉C区93号住居

位置 31-66他

遺構 図65 P L— 遺物 図150 P L79

面積 1㎡ 主軸方位 N-95°-E

形状 住居南東隅が検出されたにすぎず、全体形状は不明である。

壁と床面 残存壁高は13～17cmである。床面は最大4cmの比高がある。

カマド 東カマドで、焚口幅は55cmであった。3は土製品の支脚で、植物が胎土中に含まれていた。

遺物出土状態 図化した遺物は、いずれもカマドに由来する可能性が高い。(遺物観察表:56頁 出土遺物一覧表:137頁)

重複 12号住居(6世紀後半)→93号住居

時代 9世紀後半

天引3号住居

位置 28-43他

遺構 図66 P L38 遺物 図151 P L80

面積 10.0㎡ 主軸方位 N-14°-E

カマド主軸方位 N-6°-E

旧カマド主軸方位 N-98°-E

形状 短辺2.7～長辺3.3mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は12～30cm。床面は最大2cmの比高がある。

カマド 北壁の東端で検出された。崩れが著しく部分的に攪乱にあっている。構造材は粘土を用いている。また、東壁で旧カマドの煙道が検出された。

壁周溝 掘り方調査の際に検出された。

遺物出土状態 1の甕はカマドに懸げられていた可能性が高い。また、6の須恵器蓋はカマド左脇中からの出土である。接合資料aは土師器の甕の破片で、bは土師器の環の口縁片である。(遺物観察表:56・57頁 出土遺物一覧表:138頁)

床下の状態 壁際が掘り窪められる。床下土坑が1基検出された。焼土ブロックを含む。覆土中からは、土師器の甕の破片が数点出土している。規模(径×深さ)は、A土坑:74～70×26cm。

時代 8世紀前半

天引8号住居

位置 25-45他 主軸方位 N-52°-E

遺構 図67 P L38 遺物 図151 P L—

形状 短辺3.2～長辺(2.8)mの隅丸長方形か。

壁と床面 西側に強く傾斜する場所に立地し、西側を消失する。残存壁高は最大46cm。

カマド 北東で検出された。痕跡のみ検出され不明な点が多い。

遺物出土状態 実測した環(1)はB土坑中から出土している。(遺物観察表:57頁 出土遺物一覧表:138頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:65～50×11cm、B土坑:100～93×10cm。

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

時代 8世紀前半

天引9号住居

位置 27-48他 主軸方位 N-36°E

遺構 図67 P.L.38 遺物 図151 P.L-

形状 短辺3.1~長辺〈2.8〉mの隅丸方形か。

壁と床面 北西方向に強く傾斜する場所に立地するために、北西部を消失する。残存壁高は最大42cm。床面は最大16cmの比高がある。

カマド 北東で検出された。構造材は粘土を主体としている。

壁周溝 部分的に検出している。

遺物出土状態 出土遺物は少なく固化した環(1)が廃絶時に比較的近い土器であろう。接合資料aは土師器の坏の破片である。(遺物観察表:57頁 出土遺物一覧表:138頁)

床下の状態 床下土坑が4基検出された。A土坑の覆土はロームブロックを主体とするが他の3基は粘土や焼土・炭化材粒子が覆土から出土しておりカマドとの関連が注目される。規模(径×深さ)は、A土坑:130~104×35cm、B土坑:50~46×12cm、C土坑:97~51×11cm、D土坑:44~38×12cm。

時代 8世紀前半

天引14号住居

位置 38-31他

遺構 図68 P.L.39 遺物 図151 P.L.80

面積 13.3m² 主軸方位 N-97°E

形状 短辺2.8~長辺4.0mの隅丸方形を呈す。

壁と床面 東に傾斜する場所に立地するため東半分において床面と痕跡のみ検出された。残存壁高は10~23cm。床面は最大5cmの比高がある。

カマド 東壁のほぼ中央で痕跡が検出された。詳細は不明である。

遺物出土状態 出土遺物は覆土の残存状況もあってか、大変少なく完形に近い遺物はない。鉄鍋(4)の破片が壁際の床面直上から出土している。(遺物観察表:57頁 出土遺物一覧表:138頁)

床下の状態 明瞭な掘り方は検出できなかった。

時代 9世紀後半

天引15号住居

位置 32-42他

遺構 図68 P.L.39 遺物 図151 P.L.80

面積 5.8m² 主軸方位 N-90°E

形状 短辺2.4~長辺2.5mの小さな隅丸方形を呈す。

壁と床面 残存壁高は9~10cm。床面は最大2cmの比高がある。

カマド 東壁の中央から南寄りで検出された。両袖が僅かに出張る形状である。焚口高は50cm、焚口幅は13cmで、結晶片岩の左袖石が出土している。支脚と思われる小さなビットが左奥で検出されている。

貯蔵穴 楕円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、55×46×11cmである。

壁周溝 ほぼ全周する。

遺物出土状態 1の坏はカマド左袖に貼り付くようにして出土している。また、3は奈良時代の所産と考えられるが、26号住居(平安時代)出土土器と接合する。1は墨書土器「吉」で、2は刻書「不」が施されている。(遺物観察表:58頁 出土遺物一覧表:138頁)

時代 9世紀前半

天引17号住居

位置 33-43他

遺構 図69 P.L.39-40 遺物 図152 P.L.80

面積 (11.4) m² 主軸方位 N-97°E

カマド主軸方位 N-115°E

調査経過 古墳時代前期の18号住居と平安時代の26号住居と重複する。いずれも本住居(17号住居)の方が新しい。カマド部分は18号住居と重複する部分で一部18号住居の調査を先行させてしまったため、不明なところ(カマド煙道部分)がある。また、本住居の床面下で検出された26号住居は、本住居と入れ子の関係に近い。出土遺物については、17号住居と26号住居と別個に取り上げたのであるが、整理時

に住居間で接合したため、とりえず17号住居と26号住居の出土遺物は一括して図化した。遺物図版が17・26号住居で通しの遺物番号となっているのはそのためである。

形状 短辺2.8～長辺(3.4)mの隅丸長方形を呈す。**壁と床面** 残存壁高は15～38cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド 住居の北東隅で検出された。焚口幅は34cm、焚口高は22cmである。遺存状態が良好でカマド前方においては袖石(両袖石ともに結晶片岩)の上に天井石が鳥居状に組まれている。右袖は通常と異なり、袖石の上にもう一つ板状の結晶片岩を置き、さらにその上に天井石をのせている。左袖は大きく張り出すが右側は壁と一体化している。袖石から内側においても結晶片岩で壁を作り煙道部入り口部では礫(結晶片岩)の上に置いて鳥居状に組んでいる。礫とともに羽釜(1)と土釜(2)が割られてカマド材として天井部や煙道の上面、下面に用いられている。

貯蔵穴 円形を呈す。南西隅で検出されている。規模(長軸×短軸×深さ)は、50×40×27cmである。

遺物出土状態 カマド材として羽釜(1)と土釜(2)が用いられている。5～7・10については重複する26号住居に帰属するものと思われる。11は墨書土器「合」で、覆土一括取上である。接合資料aは須恵器の甕の胴部片である。(遺物観察表:58頁 出土遺物一覧表:138頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。A土坑の坑底部には粘土が貼られていた。規模(径×深さ)は、A土坑:55～53×13cm、B土坑:40～35×10cm。

重複 18号住居(古墳時代前期)→26号住居(平安時代)→17号住居

時代 10世紀後半

天引26号住居

位置 33-43他

遺構 図70 P L 40 **遺物** 図152 P L 80

調査経過 平安時代の17号住居の下から検出された。プランは明瞭ではないが残存部分から方形もし

くは長方形を基調とすると考えられる。17号住居の確認面からは70cmほど下で床面となる。カマド位置も不明である。調査時の所見では、上述した状況から土坑の可能性もあると記載されている。重複関係と遺物取り上げから17号住居と一緒に遺物は掲載してあるが、そのあたりは17号住居に事実記載を参照。**遺物出土状態** 出土位置から5・6・7・10が本住居に由来する可能性が高い。10は境の高台部分を紡錘車として転用したものである。また、15号住居3と接合した破片が出土している。出土遺物の年代であるが、5は9世紀代、7は10世紀前半、15号住居3は8世紀代とばらついている。(遺物観察表:58頁 出土遺物一覧表:138頁)

重複 18号住居(古墳時代前期)→26号住居→17号住居(10世紀後半)

時代 平安時代の可能性が高いが細別時期は不明。下限は本住居を切る17号住居の年代で、10世紀後半である。

天引27号住居

位置 36-44他 **遺構** 図71 P L 40・41

遺物 図152・153 P L 80

面積 9.0㎡ **主軸方位** N-96°-E

形状 短辺2.9～長辺3.1mの隅丸方形を呈する。

カマドを境にして、壁面ラインが食い違う。

壁と床面 残存壁高は16～20cm。床面は最大9cmの比高がある。尚、住居の床面が2枚検出されている。A土坑は新しい床面に対応する土坑である。また、南壁については重複部分を一緒に掘ってしまっただけ、明瞭ではない。

カマド 東壁の中央から南寄り検出された。焚口幅は41cm、焚口高は19cmである。残存状況が極めて良好で両袖石の上に天井石が鳥居状に組まれている。特徴的な事柄として、右袖部において袖石のさらに右側に棒状礫をカマド長軸に合わせて積み上げていることがあげられる。また、燃焼部から煙道の変換部においても、礫を鳥居状に組みさらに煙道部上面を礫で覆っている。カマド右寄りで支脚が検出

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

されている。いずれの石材も結晶片岩を主体としている。カマド上面で出土した須恵器壺の底部破片(3)もカマド材として利用されたものである。

遺物出土状態 図化できた遺物は少ない。3は前述したようにカマド材として再利用されたものである。また、鉄器が2点出土している。接合資料aは須恵器の羽釜の割破片である。(遺物観察表:59頁 出土遺物一覧表:139頁)

床下の状態 床下土坑が7基検出された。G土坑中には灰色粘土が充填されていた。また、A土坑はロームブロックを主体とし、他の土坑は覆土や炭化物を含む覆土であった。規模(径×深さ)は、A土坑:85~64×24cm、B土坑:52~42×16cm、C土坑:43~(29)×10cm、D土坑:58~47×23cm、E土坑:59~53×7cm、F土坑:35~(18)×1cm、G土坑:45~(30)×11cm。

重複 28号住居(古墳時代前期)→27号住居

時代 11世紀

天引29号住居

位置 35-45他 **主軸方位** N-100°E

遺構 図70 P.L.41 **遺物** 図153 P.L.1

形状 短辺2.9~長辺3.0mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 住居の痕跡が検出されたため詳細は不明。また、24・25号住居を先行して調査してしまったため、重複部分は推定である。

カマド 東壁の南端で焼け込みが検出された。この部分が恐らくカマドであったと考えられる。

遺物出土状態 図化できなかったがC土坑から土釜の口縁部破片が出土している。土釜の出土があることから図化した皿(1)も廃絶時に近い遺物と思われる。(遺物観察表:59頁 出土遺物一覧表:139頁)

床下の状態 床下土坑が4基検出されている。規模(径×深さ)は、A土坑:68~57×40cm、B土坑:54~42×9cm、C土坑:(45)~47×10cm、D土坑:62~55×22cm。

重複 24・25号住居(古墳時代前期)→29号住居

時代 11世紀

天引32号住居

位置 36-40他

遺構 図72 P.L.41 **遺物** 図153 P.L.81

面積 4.8㎡ **主軸方位** N-87°E

形状 短辺1.9~長辺2.3mの隅丸長方形を呈する。**壁と床面** 北東方向に傾斜する場所に立地するため東壁及び南壁は明瞭でない。残存壁高は最大11cm。床面は最大15cmの比高がある。

覆土 炭化物の混入が目立つ。

カマド 東壁の南端で検出された。残存が悪く、構造等は不明である。焚口幅は35cmである。

遺物出土状態 覆土も僅かであることから、図化した遺物は廃絶時に近いと考えられる。また、重複する7号土坑出土土器との時間差があまり見られないことと、南壁が明瞭でないことを考え合わせると7号土坑はあるいは本住居に伴う施設の可能性がある。北壁の床面直上で砥石(3)が出土している。(遺物観察表:59頁 出土遺物一覧表:139頁)

重複 32号住居→7号土坑(平安時代)

備考 炭化材が2点検出されており、焼失住居の可能性はある。

時代 10世紀後半

天引33号住居

位置 34-41他 **遺構** 図72 P.L.42

遺物 図153・154 P.L.81

面積 (10.7)㎡ **主軸方位** N-100°E

形状 短辺2.8~長辺3.0mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は8~10cm。床面は最大3cmの比高がある。

カマド 東壁の中央から南寄り検出された。カマド形状がおかしいことから再度検討したところ、カマド掘り方位置及び土層から左袖部が天井部に当たると推測される。周囲の礫がカマド材として用いられたと考えられる。礫はいずれも結晶片岩。

遺物出土状態 5の高台付埴は恐らく住居内に遺棄されたものである。また、1はA・B土坑、2はB・F土坑、3と9はカマド掘り方出土の土器片と覆土

出土の土器片が接合している事例である。墨書土器が3点(4・6・8)出土しており、4(坏)の内面には「上奥」と記されている。接合資料a・bは須恵器の坏の破片である。(遺物観察表:60頁 出土遺物一覧表:139頁)

床下の状態 床下土坑が8基検出された。B・C・F・G土坑中には炭化粒が目立ち、A土坑中には焼土粒が多く含まれていた。規模(径×深さ)は、A土坑:45~42×20cm、B土坑:58~53×19cm、C土坑:108~86×30cm、D土坑:84~77×23cm、E土坑:48~45×57cm、F土坑:110~94×44cm、G土坑:70~65×25cm、H土坑:60~48×18cm。

重複 34・35号住居(古墳時代前期)→33号住居→36号住居(11世紀)

時代 9世紀後半

天引36号住居

位置 33-41他

遺構 図73 P.L.42 **遺物** 図154 P.L.1-

面積 (8.8)㎡ **主軸方位** N-84°-E

形状 短辺2.8~長辺(3.0)mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 ほとんど痕跡しか残っていないところもある。また、重複する77号住居部分は先行してそちらの住居を調査してしまったため推定となっている。残存壁高は最大11cm。床面は最大3cmの比高がある。**カマド** 検出されなかった。

遺物出土状態 出土遺物は極めて少なく図化できたのは2点のみである。(遺物観察表:60頁 出土遺物一覧表:139頁)

床下の状態 明瞭な掘り方は検出できなかった。

重複 77号住居(古墳時代前期)→33号住居(9世紀後半)→36号住居

時代 11世紀

天引37号住居

位置 31-40他

遺構 図73 P.L.42・43 **遺物** 図154 P.L.81

面積 13.0㎡ **主軸方位** N-106°-W

形状 短辺3.1~長辺3.3mの隅丸方形を呈する。**壁と床面** 残存壁高は35~70cm。床面は最大10cmの比高がある。40号住居との重複部分は先行して40号住居を調査したため推定である。また、38号住居との重複部分であるが、一緒に掘り下げてしまい、さらに38号住居との床面の方が低かったために、プランについてはあまり正確ではない。

カマド 北東隅で検出された。今回の報告で南西隅カマドは他に45・63・83・86・111号住居で確認できている。焚口幅は28cmである。構造物として粘土が用いられているが燃焼部分の構造は良くわからない。煙道の残存状態が良好で、たち割り調査を行った。断面図中、黒塗部は焼け込みが著しい部分である。

遺物出土状態 図化した遺物はあまり多くない。1の羽釜は壁際の床面直上であり、恐らく廃絶時に近い遺物と考えられる。また、4の灰軸陶器は本住居一括取上2点と重複する40号住居一括取上2点が接合した資料である。8~10はカマド覆土中からの出土である。刀子(7)と鎌(10)が出土している。

(遺物観察表:60・61頁 出土遺物一覧表:139頁)

床下の状態 床下土坑が3基検出された。A土坑底面には粘土が貼られている。規模(径×深さ)は、A土坑:67~56×19cm、B土坑:130~121×24cm、C土坑:53~52×3cm。

重複 38号住居(10世紀前半)・40号住居(10世紀後半)→37号住居 40号住居と本住居との先後関係は出土遺物の年代から推定したものである。

時代 11世紀

天引38号住居

位置 32-40他 **遺構** 図74 P.L.42・43・44 **遺物** 図155 P.L.81

面積 11.1㎡ **主軸方位** N-95°-E

形状 短辺2.5~長辺3.2mの隅丸長方形を呈する。**壁と床面** 37号住居に覆土の大部分を破壊されるが本住居の方が床面が低かったのに形状が確認できた焼失住居のため床面上に炭化材や焼土が分布する。残存壁高は69~79cm。床面は最大10cmの比高がある。

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

覆土 人為的な埋土の可能性はある。

カマド 確定しうる明瞭な痕跡はないが、南東隅の焼土は焼け込みであることからその痕跡の可能性が強い。

貯蔵穴 隅丸長方形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、71×57×25cmである。

壁周溝 部分的に検出されている。

遺物出土状態 いずれも破片で完形もしくはそれに近い状態で復元できたものはなかった。1と8はA土坑、3はE土坑、6は掘り方出土である。また、4の灰軸陶器は本住居の東方約12mに位置する。98号住居(本住居と同じく10世紀前半)出土の破片と接合している。香炉(10)の出土が注目されよう。この火舎は覆土一括取上である。接合資料a・bは須恵器の羽釜の胴部片である。(遺物観察表:61-62頁 出土遺物一覧表:139頁)

床下の状態 床下土坑が5基検出された。A土坑底面には粘土が貼られる。規模(径×深さ)は、A土坑:97~90×14cm、B土坑:124~70×19cm、C土坑:108~(82)×10cm、D土坑:62~38×17cm。

重複 41号住居(10世紀前半)→38号住居→37号住居(11世紀前半) 3軒の先後関係は土層断面で確認されている。

備考 焼失住居である。

時代 10世紀前半

天引39号住居

位置 32-39他 **遺構** 図74 P L44

遺物 図155・156 P L81

面積 8.1㎡ **主軸方位** N-112°-E

形状 短辺2.5~長辺2.9mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 東側に傾斜する場所に立地するため北東部の立ち上がりは検出できなかった。残存壁高は最大16cm。床面は最大7cmの比高がある。

覆土 浅間B軽石が埋没土中に含まれる。

カマド 東壁の南に寄った位置で検出された。結晶片岩を主に用いて袖及び内側を構築するが、あまり残存状況がよくない。支脚も検出されており結晶片

岩である。カマド部分より出土する土釜(1~3)は構造材か懸けられていたものか不明である。

遺物出土状態 カマドの記載でも述べたように1から3の土釜が、懸けられていたものが崩れたのか、構造材として用いられたのか良くわからない。しかし、3個体分の土釜が懸けられていたとは考えづらく、いずれかは構造材であると推測できる。また、鉄鐔(5)が北壁際の床面直上で出土している。覆土上面には大型礫がまともに出土している。(遺物観察表:62頁 出土遺物一覧表:140頁)

床下の状態 床下土坑が1基検出された。覆土には焼土と炭化粒を含む。規模(径×深さ)は、A土坑:65~63×11cm。

重複 40号住居(10世紀後半)→39号住居→11号土坑(時期不明)

備考 鉄鐔は他に同区92号住居で3点出土している。92号住居は本住居の南方約82mに位置し11世紀の遺構である。本住居よりも明瞭に浅間B軽石の堆積が確認されている。

時代 11世紀

天引40号住居

位置 31-39他 **主軸方位** N-113°-E

遺構 図75 P L44 **遺物** 図156 P L81

形状 短辺2.3~長辺3.1mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 39号住居に大きく破壊を受け不明な点も多い。残存壁高は23~33cm。床面は最大2cmの比高がある。

覆土 ③及び④層は人為的な埋土の可能性が強い。カマド 恐らく東カマドであろう。

遺物出土状態 住居廃絶時に近い土器は小片で固화에耐えうるものはなかった。1は上面からの出土で2は一括して取り上げた遺物である。(遺物観察表:62頁 出土遺物一覧表:140頁)

床下の状態 床下土坑が1基検出された。底面には粘土が貼られていた。規模(径×深さ)は、A土坑:105~80×30cm。

重複 40号住居→39号住居(11世紀)

時代 10世紀後半

天引41号住居

位置 32-40他 遺構 図75 P L42-44

遺物 図156・157 P L82主軸方位 N-93°-E

形状 短辺3.3～長辺3.6mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 大部分を38号住居に破壊されるため不明な点が多い。残存壁高は38～60cmである。

覆土 人為的な埋土の可能性ある。

カマド 検出されなかったが北壁面になかったことから東カマドの可能性が高い。

遺物出土状態 瓦の出土が目立つ。土器についてはほとんどが小破片で完形もしくはそれに近い状態で復元できたものはない。(遺物観察表：63頁 出土遺物一覧表：140頁)

床下の状態 床下土坑が1基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：93～(80)×22cm。

重複 41号住居→38号住居(10世紀前半)→37号住居(11世紀前半) 3軒の先後関係は土層断面で確認されている。

時代 10世紀前半

天引45号住居

位置 44-38他 主軸方位 N-73°-W

遺構 図76 P L45

遺物 図157・158 P L82

カマド主軸方位 N-93°-W

形状 恐らく隅丸長方形になろうが大部分が流れてしまいわからない。辛うじてカマド部分と焼け込んだ床面から想像するしかない。

壁と床面 残存壁高は最大11cmである。

カマド 西壁の南寄りで検出された。南西隅カマドは他に37・63・83・86・111号住居がある。良好な残存状態ではないが、右袖石及びその内側におかれた礎や支脚が確認できる。石材はいずれも結晶片岩である。また、カマド内で出土した土釜と瓦(1～4)は、カマド構造材として用いられたものと考えられる。

遺物出土状態 カマドの記載に述べたように、図化

した遺物はカマド材として用いられたと考えられる。(遺物観察表：63頁 出土遺物一覧表：140頁)
重複 5・6号粘土探掘坑(6世紀前半)→45号住居
時代 11世紀

天引49号住居

位置 47-39他 遺構 図77 P L45

遺物 図158・159 P L82

面積 13.1m² 主軸方位 N-112°-E

形状 短辺2.7～長辺3.2mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 土層断面では立ち上がりを確認できているが、実際の調査では床面の広がりから範囲を確定している。床面硬化部分があり、平面図中に実線で囲っておいいたので参照してほしい。残存壁高は土層断面から判断すると15～18cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド 東壁の南端で検出された。結晶片岩を主体とした礎で囲んでいたと考えられるが残存状態が悪く詳細は不明である。

遺物出土状態 破片が主体で完形もしくはそれに近い状態で復元できた土器はない。残存状態が比較的良好で、出土位置から住居廃絶時に近い土器として1と5の坏がある。5の坏は重複する32号土坑の覆土一括取上の土器片と接合している。4は墨書土器。10と11は重複する4号粘土探掘坑出土土器だが、本住居に帰属する可能性が強いため、一緒に掲載した。接合資料aは須恵器の坏の破片である。(遺物観察表：64頁 出土遺物一覧表：140頁)

重複 4号粘土探掘坑(6世紀前半)→49号住居 また、32号土坑と重複する。土層断面からは32号土坑の方が新しいが、前述した5(坏)の接合関係を見ると、住居の方が新しくなる。よって土坑と住居の先後関係は不明である。

備考 平面図に粘土探掘坑を加えなかったが、本住居と入れ子に近い関係である。

時代 9世紀後半

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

天引63号住居

位置 41-46他 **主軸方位** N-102°-W
遺構 図76 P L 45・46 **遺物** 図159 P L 83
形状 短辺3.0~長辺(3.4)mの隅丸長方形。
壁と床面 残存壁高は最大7cm。北東に緩やかに傾斜する場所に立地するため、北及び東壁の大部分を消失していた。
カマド 南西隅で検出された。ほとんど壊れていたもので不明な点が多い。なお、南西隅カマドは他に37・45・83・86・111号住居がある。

貯蔵穴 隅丸長方形を呈し、高さ5cmの周提部を持つ。規模(長軸×短軸×深さ)は、130×105×41cmである。

遺物出土状態 1はD土坑からの出土である。生活時を示す資料と考えられる。また、瓦はカマド材として用いられたものと推測できる。(遺物観察表:64頁 出土遺物一覧表:140頁)

床下の状態 床下土坑が7基検出された。B土坑底面に粘土が貼られている。また、D土坑は2枚の貼り床面が確認されている。規模(径×深さ)は、A土坑:55~45×40cm、B土坑:65~58×22cm、C土坑:31~30×46cm、D土坑:65~60×37cm、E土坑:30~23×54cm、F土坑:53~50×33cm、G土坑:28~26×26cm。

時代 11世紀

天引64号住居

位置 40-47他 **遺構** 図78 P L 46
遺物 図159・160 P L 83
面積 6.2㎡ **主軸方位** N-85°-E
形状 短辺2.1~長辺2.4mの隅丸方形を呈する。
壁と床面 残存壁高は14~24cm。床面は最大5cmの比高がある。尚、73号住居の中に入れ子状になって検出され、一緒に掘り下げたため実際に壁面はセクションでしか確認できていない。
カマド 東壁のほぼ中央で検出された。焚口幅(30)cmで、両袖石をもちカマド内側にも裸を貼り付けている。カマド材として須恵器の大甕(70号住居1)

を用いている。また、奥壁部分は73号住居を先に掘り下げたため不明である。支脚は左に寄って検出されている。石材は結晶片岩が多い。

貯蔵穴 楕円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、52×43×20cmである。

遺物出土状態 カマド事実記載でも述べたように70号住居1と同一個体の須恵器大甕がカマド材として用いられている。このうち70号住居1②と70号住居1③は70号住居1と接合した破片である。70号住居1と同一個体としたものは、同一個体だが接合しなかった破片である(70号住居1の実測図及び本文と遺構図を参照してほしい)。3の高台付境は、住居内に遺棄されたと考えられる。また、「合」と書かれた墨書土器が複数出土している。11~15の破片は覆土一括取上である。接合資料a・bは土師器の甕の胴部片、c・e・fは須恵器の坏の破片、dは須恵器の高台付境の底部である。(遺物観察表:65頁 出土遺物一覧表:140頁)

床下の状態 掘り方を持たないようである。

重複 73号住居(6世紀後半)→64号住居

時代 9世紀後半

天引66号住居

位置 44-47他 **遺構** 図79 P L 47
遺物 図160・161 P L 83・84
面積 15.8㎡ **主軸方位** N-22°-E
形状 短辺2.5~長辺2.7mの隅丸方形を呈する。
壁と床面 残存壁高は30~42cm。床面は最大7cmの比高がある。
カマド 北壁の中央から東寄り検出された。残存状態はあまりよくない。構造材にはロームが用いられている。
遺物出土状態 出土遺物は多いが二次的に廃棄されたものが多いようである。5の坏が比較的廃絶時期に近いものであろう。また、1の甕の破片がA土坑と掘り方から各1点出土している。7は墨書土器。接合資料a・b・cは土師器の甕の破片である。(遺物観察表:66頁 出土遺物一覧表:141頁)

床下の状態 床下土坑が3基検出されている。規模(径×深さ)は、A土坑：120×100×9cm、B土坑：88×74×29cm、C土坑：100×90×55cm。

重複 65号住居(弥生時代)→71号住居(5世紀後半)→66号住居→67号住居(8世紀前半)66号住居と67号住居は、ともに8世紀前半であるが、本住居出土土器の方が古い様相を呈していると思われる。

時代 8世紀前半

天引67号住居

位置 43-47他

遺構 図77 P L47 **遺物** 図161 P L84

面積 12.8㎡ **主軸方位** N-16°-E

形状 短辺2.7~長辺3.5mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は9~18cm。床面は最大9cmの比高がある。重複する65号住居及び66号住居部分は一緒に掘り下げたため、掘り下げた段階での壁面の様子は不明である。

カマド 北壁の中央から東寄り検出された。耕作溝に大きく破壊される。構造材には、ロームが用いられる。

遺物出土状態 2の坏は住居に遺棄されたものと考えられる。また、3・4の坏はA土坑出土の土器片と接合している。(遺物観察表：66・67頁 出土遺物一覧表：141頁)

床下の状態 床下土坑が5基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：110~95×10cm、B土坑：75~(35)×11cm、C土坑：60~57×9cm、D土坑：130~120×8cm、E土坑：72~(40)×12cm。

重複 65号住居(弥生時代)→66号住居(8世紀前半)→67号住居 66号住居と67号住居の先後関係については、出土土器の様相から推定。

時代 8世紀前半

天引68号住居

位置 42-48他 **遺構** 図80 P L47・48

遺物 図161・162 P L84

面積 14.2㎡ **主軸方位** N-4°-E

形状 短辺3.2~長辺3.8mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は25~32cm。床面は最大7cmの比高がある。

カマド 北壁の中央から東寄り検出された。焚口幅は75cmで、構造材はローム質の土壌である。

遺物出土状態 南壁際で検出した、重なって出土した8・9(坏)や西壁際の蓋(14)などは住居内に遺棄された可能性が高い。接合資料a~fは土師器の甕の胴部片である。(遺物観察表：67・68頁 出土遺物一覧表：141頁)

床下の状態 床下土坑が3基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：125~98×6cm、B土坑：80~58×12cm、C土坑：52~40×14cm。

重複 100号住居(弥生時代)→68号住居

時代 8世紀後半

天引70号住居

位置 44-49他 **主軸方位** N-3°-E

遺構 図79 P L48

遺物 図162・163 P L84

調査経過 多くの遺構と重複するがイモ穴状土坑と64号土坑を除けば、本住居の方が新しいにもかかわらず、カマドが検出されなかった。住居としたが、竪穴状の遺構とした方が適切である。67号土坑の東辺が本遺構と一致するもの偶然ではなく一体の遺構の可能性もある。

遺物出土状態 南壁際で古墳時代に作られたと思われる須恵器の大壺1が出土している。遺物実測図中1①とした部分が本遺構出土分で、64号住居(9世紀後半)からも同一個体及び接合破片70号住居1②と1③が出土している。64号住居出土分は多くがカマド材として用いられていた。また、本住居の帰属を平安時代とした根拠は似た形状の平安時代の遺構が本遺跡から検出されていることと、2の高台付境が出土したことによる。尚、重複する64号土坑覆土からは「コ」の字の裏の破片が数点出土している。(遺物観察表：68頁 出土遺物一覧表：141頁)

重複 100号住居(弥生時代)→69号住居(古墳時

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

代前期)→70号住居高、64号・67号土坑との先後関係は不明である。

時代 平安時代と思われるが細別時期不明。

天引72号住居

位置 43-42他

遺構 図81 P L 48 遺物 図162 P L 84

面積 11.1m² 主軸方位 N-73°-E

形状 短辺2.4~長辺3.8mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は11~16cm。床面は最大6cmの比高がある。カマドを境にして壁面ラインが違う。

カマド 東壁の南端で検出された。焚口幅は26cmで、構造材は粘土が用いられている。

遺物出土状態 3の坏は床面直上からの出土で住居内に遺棄されたものと思われる。また、1の同一個体の破片がB土坑からも出土し接合している。(遺物観察表:68頁 出土遺物一覧表:141頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:120~(108)×34cm、B土坑:120~85×39cm。

重複 74号住居(弥生時代)→72号住居

時代 8世紀後半

天引75号住居

位置 43-40他

遺構 図81 P L 49 遺物 図164 P L 84

面積 14.4m² 主軸方位 N-90°-E

形状 短辺3.4~長辺3.5mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 東側に傾斜するため東壁の残存が悪い。残存壁高は7~14cm。床面は最大3cmの比高がある。

カマド 東壁の南端で検出された。結晶片岩の天井石と思われる礫が前方で出土している。構造材には灰色粘土が用いられている。

貯蔵穴 円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、90×84×46cmである。

壁周溝 部分的に検出されている。

遺物出土状態 床面から10cm程度浮いた状態で礫が中央よりでまどまって出土した。出土遺物も少なく、

住居の時期判定も難しい。(遺物観察表:69頁 出土遺物一覧表:141頁)

床下の状態 床下土坑が3基検出された。このうち、A土坑とB土坑については住居プランをはみ出すことから住居には伴わない古い土坑と考えられる。A土坑:105~100×16cm、B土坑:140~100×8cm、C土坑:75~66×22cm。

重複 A・B土坑(時期不明)→75号住居

時代 平安時代(細別時期不明)

天引76号住居

位置 35-40他

遺物 図82 P L 49 遺物 図164 P L 84

面積 8.7m² 主軸方位 N-2°-W

形状 短辺2.7~長辺2.8mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は7~48cm。床面は最大5cmの比高がある。

カマド 北壁の東寄りで検出された。焚口幅は32cmで、構造材にはロームを用いている。

壁周溝 幅広の溝が巡る。

遺物出土状態 こも編石が南西隅を中心にまどまって出土している。また、4と5の坏は遺棄もしくは住居廃絶の早い段階の土器と考えられる。(遺物観察表:69・70頁 出土遺物一覧表:141頁)

床下の状態 床下土坑が1基検出された。土坑覆土は粘土である。規模(径×深さ)は、A土坑:44~40×9cm。

備考 浅間B軽石を含む土坑(攪乱)によって部分的に破壊される。

時代 8世紀前半

天引79号住居

位置 35-39他

遺構 図82 P L 49 遺物 図164 P L 85

面積 (10.8) m² 主軸方位 N-92°-E

形状 短辺2.6~長辺(3.2)mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 北東方に傾斜する場所に立地するため、北壁及び東壁の一部は検出できなかった。同様

に床面も北東部分では検出できなかった。

カマド 東壁の南端で検出された。残存状態が極めて悪い。粘土が構造材として用いられた。

貯蔵穴 楕円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、73×60×41cmである。

遺物出土状態 実測した1と3はいずれもカマド覆土一括として取り上げた破片と接合している。また、2はカマド覆土一括取上である。(遺物観察表：70・71頁 出土遺物一覧表：142頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：67～60×21cm、B土坑：60～55×15cm。

重複 40号土坑(平安時代)と重複するが先後関係は不明である。

時代 10世紀後半

天引80号住居

位置 24-30他

遺構 図83 P L50 **遺物** 図165 P L85

面積 7.9m² **主軸方位** N-100°-E

カマド主軸方位 N-132°-E

形状 短辺2.4～長辺(2.5)m隅丸方形を呈する。

壁と床面 B区の谷で唯一検出された竪穴住居だが北壁及び東壁はあまり良好な残存ではなかった。

カマド 南東隅で検出された。左内側で砥石(7)がおかれている。また、支脚の痕跡が確認された。

遺物出土状態 7の砥石はカマド材として転用されている。完形もしくはそれに近い土器は出土しなかった。1・4・6は覆土一括取上である。2と4は墨書土器。(遺物観察表：71頁 出土遺物一覧表：142頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。また、西側が掘り窪められる。規模(径×深さ)は、A土坑：92～88×33cm、B土坑：40～35×8cm。

重複 80号住居→1号溝(中近世か)

時代 10世紀前半

天引81号住居

位置 39-34他

遺構 図83 P L50 **遺物** 図165 P L85

面積 11.5m² **主軸方位** N-86°-E

形状 短辺2.9～長辺3.1mの隅丸方形か。

壁と床面 東側は床面のみの検出である。また、86号住居に破壊される部分はすべて西壁から想定したラインである。残存壁高は最大41cm。

覆土 大部分が本来の埋没土ではなく斜面上に二次的に堆積した土層である。

カマド 東壁の南寄りで検出された。焚口部の焼土と前方の灰層及び支脚(結晶片岩)だけしか検出できなかった。

遺物出土状態 図化した土器のほとんどが一括取り上げで3のみ出土位置が確定できる。(遺物観察表：71・72頁 出土遺物一覧表：142頁)

床下の状態 床下土坑が6基検出された。このうち、E土坑については位置から判断して86号住居に帰属する可能性もある。規模(径×深さ)は、A土坑：80～52×45cm、B土坑：66～60×15cm、C土坑：113～84×31cm、D土坑：90～60×6cm、E土坑：44～40×5cm、F土坑：105～100×14cm。

重複 82号住居(9世紀後半)→81号住居→86号住居(11世紀)尚、82号住居については86号住居調査の際にカマドの痕跡のみが検出された住居で、カマド位置から81号住居との重複を考えた。また、重複する86号住居は本住居と同じく11世紀代に帰属する。

時代 11世紀

天引82号住居

位置 34-39他

遺構 図84 P L- **遺物** 図166 P L85

調査経過 調査時及び整理時も含めて81号住居と重複する住居が2軒存在することが理解できた。1軒は東カマドの住居(82号住居)であり、もう1軒は南西隅カマド(86号住居)の住居である。86号住居は81号住居のカマドを破壊しており、82号住居の大部分を破壊しているものと考えられる。82号住居の

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

痕跡は唯一カマド痕跡のみであった。82号住居出土土器としたものは、それ故86号住居出土土器の中で9世紀代に帰属するものを抽出したものである。82号住居に9世紀代の土器が対応するかどうか確定ではないが、86号住居覆土土器が大きく9世紀代と11世紀代に分かれたことから、82号住居に帰属する土器が再流入した結果と考えたわけである。また、86号住居の床下土坑の中で、いくつかは82号住居に帰属するものもあると考えられる。4・5・9は墨書土器で、6は刻書土器。11～13は瓦であるが、82号住居出土として取り上げた遺物で82号住居に本来的に帰属するか不明。(遺物観察表：72頁 出土遺物一覧表：142頁)

重複 82号住居→81・86号住居 (11世紀)

時代 9世紀後半

天引83号住居

位置 32-39他 **主軸方位** N-90°-W

遺構 図85 P L 50・51 **遺物** 図167 P L 85

面積 6.3㎡ **カマド主軸方位** N-115°-W

調査経過 平面で破線で表現したカマド部分は調査時において47・48号土坑として調査した。整理の際この部分がカマドと気づいた次第である。

形状 短辺2.0～長辺2.5mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は11～23cm。床面は最大7cmの比高がある。

カマド 南西隅で検出された。前述した理由から細かな構造については不明である。遺物分布からカマド奥行部分を想定した。南西隅カマドは他に37・45・63・86・111号住居がある。

遺物出土状態 カマド部分からまともな遺物が出土している。構造材として用いられたものと考えられる。破片が主体で完形もしくはそれに近い状態のものは出土していない。13は墨書土器「合」である。また、把手状の土製品が出土している。(遺物観察表：73頁 出土遺物一覧表：142頁)

備考 南西隅カマドは大半が11世紀代に帰属するが、本住居は唯一10世紀代である。

時代 10世紀後半

天引86号住居

位置 34-39他 **主軸方位** N-97°-W

遺構 図84 P L 50・51

遺物 図167・168・169 P L 86

カマド主軸方位 N-123°-W

調査経過 82号住居の調査経過を参照してほしい。尚、本住居のカマドは調査時においては土坑として調査したが他にも同様な事例があり、本住居に伴うものと判断した。

形状 短辺<3.6>～長辺13.7mの隅丸長方形か。
壁と床面 南東部及び東壁は斜面地のため検出できなかった。残存壁高は最大27cm。

覆土 焼土及び炭化物の混入が目立つ。

カマド 南西隅で検出された。カマド材に瓦が多用される。裸も多く用いられている。南西隅カマドは他に37・45・63・83・111号住居がある。

貯蔵穴 円形を呈す。恐らく、上面は流れてしまっていると考えられる。規模(長軸×短軸×深さ)は、63×62×19cmである。

遺物出土状態 82号住居の調査経過でも触れたように本住居覆土からは本住居に由来する11世紀代の土器とともに9世紀代の土器がまともな状態で出土している。(遺物観察表：74頁 出土遺物一覧表：142頁)

床下の状態 床下土坑が4基検出された。B及びD土坑には粘土が貼られている。規模(径×深さ)は、A土坑：126～124×17cm、B土坑：58～52×19cm、C土坑：60～53×8cm、D土坑：52～53×7cm。

重複 82号住居(9世紀後半)→81号住居(11世紀)→86号住居(本住居は81号住居のカマドを破壊する。)

備考 焼失住居と重複する81号住居も本住居と同じく11世紀代に帰属する。

時代 11世紀

天引89号住居

位置 27-29他 **遺構** 図86 P L 51・52

遺物 図170・171・172 P.L.86・87
面積 12.3㎡ **主軸方位** N-114°-E
形状 短辺2.7～長辺4.0mの隅丸長方形を呈する。
壁と床面 残存壁高は28～35cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド 東壁のほぼ中央で検出された。カマド両袖の外側にテラス状の施設が検出された。焚口幅は43cm。カマド内からは構造材に用いられたと考えられる瓦が多数出土している。10の軒丸瓦の瓦当部もここから出土している。

貯蔵穴 円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、60×57×17cmである。

壁周溝 北壁に沿って検出された。

遺物出土状態 注目すべき遺物として「福天寺」の墨書がある坏(2)が出土している。本住居の北東43mに位置する寺院跡との関連が想定できよう。7及び9「道」も墨書土器である。2と3の坏には黒色付着物。15は刀子で16は施である。施には本質が残存していた。また、カマドを中心に周囲に瓦の散布が目立つ。軒丸瓦瓦当部(10)は本遺跡唯一の出土であった。接合資料a・bは須恵器の瓦の破片である。

(遺物観察表：75頁 出土遺物一覧表：142頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：110～103×31cm、B土坑：97～83×28cm。

備考 本住居を切るイモ穴状土坑及び溝は江戸時代以降である。本住居の上には浅間A軽石の灰掻き山及びびらが検出されているが、溝は灰掻き山の外側を巡るように検出されている。

時代 9世紀後半

天引92号住居

位置 49-37他 **遺構** 図87 P.L.52・53
遺物 図172・173 P.L.87
面積 10.0㎡ **主軸方位** N-117°-E
形状 短辺2.5～長辺2.9mの隅丸長方形を呈する。
壁と床面 東側に強く傾斜する場所に立地するため東壁の残存は悪い。残存壁高は12～54cm。床面は最

大4cmの比高がある。

覆土 浅間B軽石の純層が堆積している。

カマド 東壁の南端で検出された。焚口幅は31cm、焚口高は15cmで、結晶片岩の両袖が検出されている。さらに内側に襖と瓦(3)が用いられている。支脚も結晶片岩である。

貯蔵穴 円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、79×69×33cmである。底面から鉄鐔が2点(7・8)出土している。

遺物出土状態 鉄鐔3点(6～8)の出土が目目されよう。7・8は貯蔵穴底面、6は南東隅の住居外から出土している。6の位置も住居の内側として利用された空間と考えられる。また、4・5の礎は古墳時代の遺物だが、いずれも掘り方一括取り上げの破片と接合している。この区域は古墳時代の粘土探掘坑が検出されており、調査時に気づかなかった粘土探掘坑に帰属する可能性が高い。本住居廃絶を示す土器は、1・2の皿であろう。また、出土した炭化材であるが、住居北側及びに西壁でまとまって検出されている。大部分が藁状の炭化材で床面に密着して検出されたことから敷物の可能性が高いと考えられる。

床下の状態 掘り方は不定型で底面が確認できなかった。前述したように粘土探掘坑部分を掘り下げたものと考えられる。(遺物観察表：76頁 出土遺物一覧表：143頁)

重複 粘土探掘坑(6世紀前半)→92号住居

備考 焼失住居である。また、浅間B軽石の純層が堆積が確認された貴重な事例である。尚、鉄鐔は他に同区39号住居(11世紀)で1点出土している。39号住居は本住居の北方約82mに位置している。

時代 11世紀

天引93号住居

位置 33-40他 **主軸方位** N-4°-E
遺構 図85 P.L. 遺物 図一 P.L.
調査経過 古墳時代前期の住居調査時に確認された遺構ではあるが、竪穴住居かどうか検討を要す。西壁の掘り込みは確かだと思われる。

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

遺物出土状態 覆土一括として取り上げた破片に羽釜の破片と「コ」の字状口縁の壺があった。図化に耐えうる遺物の出土はない。(遺物観察表：一頁 出土遺物一覧表：143頁)

重複 77・94号住居(古墳時代前期)→93号住居→30号土坑(平安時代) 尚、56・58号土坑(時期不明)との重複関係は不明。

時代 平安時代と思われるが細別時期は不明。

天引95号住居

位置 26-28他 **主軸方位** N-111°E

遺構 図88 P L54 **遺物** 図173 P L87

形状 隅丸長方形と考えられる。

壁と床面 西側に傾斜するため西半分以上を消失する。また、重複する94号住居を先に調査したため北側の部分は不明である。

カマド 東壁の南端で検出された。焚口幅は40cm、構造材は粘土が用いられている。

遺物出土状態 カマド左前方でまとまって遺物が出土している。2の口縁部には炭化物が付着する。6は墨書土器。接合資料aは土師器の壺の胴部片、bは須恵器の高台付境の底部である。(遺物観察表：76・77頁 出土遺物一覧表：143頁)

床下の状態 掘り方形は良くわからなかった。

94号住居(古墳時代前期)→95号住居

時代 9世紀後半

天引98号住居

位置 30-35他 **遺構** 図89 P L54

遺物 図174・175・176 P L87・88

面積 25.7㎡ **主軸方位** N-105°E

形状 短辺3.5～長辺5.2mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 B区谷で検出された住居である。残存壁高は10～26cm。床面は最大6cmの比高がある。

カマド 東壁の南寄りで検出された。焚口幅は65cm、焚口高は32cmである。残りが悪いため袖石の状態などはわからない。瓦の出土が目立つ。恐らくカマド材として用いられたものであろう。また、カマド出

土遺物と住居南側出土土器との接合例が多い。住居南側部分では切石(18)なども出土しておりカマドに由来する遺物が多く見ついている。

貯蔵穴 楕円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、85×56×15cmである。

遺物出土状態 前述したように、カマド出土遺物と覆土遺物の接合事例は、カマド崩壊(どの段階かは不明だが)と関係するものであろう。また、特殊な遺物として漆紙付着土器(8)が出土している。同一個体の小片が26-26Gから出土し接合した。赤外線を用いて観察したが文字は確認できなかった。掘り方一括取り上げの破片(灰軸陶器)が本住居の西方12mに位置する。38号住居5(10世紀前半)と接合している。9は墨書土器で内外面に「合」と付されている。接合資料aは須恵器の壺の頸部片、bは土師器の壺の胴部片である。(遺物観察表：77・78頁 出土遺物一覧表：143頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：50×45×26cm、B土坑：34×32×34cm。

時代 10世紀前半

天引102号住居

位置 46-37他 **遺構** 図88 P L55

遺物 図176・177 P L88

面積 5.4㎡ **主軸方位** N-26°E

形状 短辺2.1～長辺2.5mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 床面や壁面はあまり明瞭ではなかった。

残存壁高は10～35cm。床面は最大6cmの比高がある。

カマド 検出されなかった。

遺物出土状態 二次的に廃棄されたかのような出土状態を示している。11～13は羽釜の破片であるが、線刻を有している。大きな炭化材も出土している。接合資料a・bは須恵器の羽釜の破片である。(遺物観察表：78・79頁 出土遺物一覧表：143頁)

重複 15号粘土採掘坑(6世紀前半)→102号住居

備考 焼失住居である。また、カマド痕跡がなかったことを考えると、住居以外の遺構と推測できる。

時代 10世紀前半

天引111号住居

位置 37-46他 遺構 図90 P L 55

遺物 図177・178 P L 88・89

面積 12.8㎡ 主軸方位 N-98°-W

カマド主軸方位 N-112°-W

形状 短辺3.4~長辺3.9mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 北壁に傾斜するため、北壁の残りが悪い。残存壁高は8~23cm。床面は最大6cmの比高がある。

カマド 南西隅で検出された。カマド材として瓦が多量に出土したようである。他にロームブロックがカマド材として用いられている。南西隅カマドは他に37・45・63・83・86号住居がある。

貯蔵穴 円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、54×43×35cmである。また、貯蔵穴の掘り方は方形を呈し、裏込めの様子を観察できた。

遺物出土状態 瓦の出土が目立つ。1は壁際の出土で住居崩壊時に近い遺物と考えられる。カマド材に用いられた2の平瓦は瓦当部が一部残存していた。平瓦瓦当部が出土したのは本遺跡では唯一であった。(遺物観察表:79頁 出土遺物一覧表:143頁)

床下の状態 土坑が4基検出され、A・D土坑はロームブロックを含む覆土であった。規模(径×深さ)は、A土坑:120~55×16cm、B土坑:67~65×7cm、C土坑:105~85×17cm、D土坑:95~52×14cm。

重複 112号住居(弥生時代)→111号住居

時代 11世紀

天引113号住居

位置 39-47他 遺構 図91・92 P L 55・56

遺物 図178・179 P L 89

面積 19.1㎡ 主軸方位 N-97°-E

カマド主軸方位 N-107°-E

形状 短辺3.8~長辺4.2mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は60~70cm。床面は最大10cmの比高がある。

カマド 東壁の南端で検出された。天井部に粘土が

用いられたようで、落ちた状態で検出された。支脚は結晶片岩である。

貯蔵穴 2つ検出された。1号貯蔵穴は円形を呈し規模(長軸×短軸×深さ)は、95×83×40cm。2号貯蔵穴は楕円形を呈し規模は、71×53×13cm。

遺物出土状態 失火による焼失住居と思われ完形もしくはそれに近い皿が多く出土している。そのうちの多くが遺棄されたものと考えられる。カマドからは羽釜の破片や瓦(カマド材として転用)が出土する。20と21はともに鉄製品である。8と14・15はともにI土坑からの出土である。(遺物観察表:79-80頁 出土遺物一覧表:144頁)

床下の状態 床下土坑が8基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:73~57×29cm、B土坑:95~61×26cm、C土坑:80~70×9cm、D土坑:83~75×17cm、E土坑:74~69×16cm、F土坑:140~100×19cm、G土坑:160~113×37cm、H土坑:96~80×25cm。

重複 118号住居(縄文時代)→114号住居(弥生時代)→113号住居

備考 焼失住居である。

時代 11世紀

天引120号住居

位置 40-42他

遺構 図92 P L 56 遺物 図180 P L 89

面積 (13.8)㎡ 主軸方位 N-98°-E

形状 短辺3.4~長辺(3.8)mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 重複住居との関係で、東側を除いて一緒に掘り下げたため、他の部分は土層断面等をもとにした推定である。

カマド 東壁の南端で検出された。焚口幅は36cmである。残りが悪くロームがカマド材として用いられた。

貯蔵穴 方形を呈す。規模(径×深さ)は、57×(38)×11cmである。

遺物出土状態 出土遺物はあまり多くなく、完形やそれに近い状態のものも出土しなかった。6の坏は墨書土器。(遺物観察表:81頁 出土遺物一覧表:

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

144頁)

重 複 121号住居(弥生時代)→124号住居(7世紀前半)→91号土坑(平安時代)→120号住居 各遺構の先後関係は土層断面観察に基づいている。

時 代 10世紀前半

天引123号住居

位 置 39-42他

遺 構 図93 P L 56 **遺 物** 図180 P L 89

面 積 10.7㎡ **主軸方位** N-113°-E

調査経過 痕跡しか検出されなかったため不明な点が多い。カマドも検出されなかった。

遺物出土状態 破片出土で完形に近い遺物はない。2は10世紀前半の遺物だが、他の1・3・4は11世紀代に帰属する。2が混入した可能性が強いと思われる。(遺物観察表:81頁 出土遺物一覧表:144頁)

重 複 124号住居(古墳時代後期)→91号土坑(9世紀後半)→123号住居 出土土器から、先後関係は妥当である。

時 代 11世紀の可能性が高い。

天引126号住居

位 置 38-39他

遺 構 図94 P L 56-57 **遺 物** 図180 P L 89

面 積 10.6㎡ **主軸方位** N-103°-E

形 状 短辺3.1~長辺3.3mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 東側に傾斜するため、東壁の残りは悪い。残存壁高は12~29cm。床面は最大10cmの比高がある。

カマド 東壁の南端で検出された。恐らく袖石(左)に使われたと思われる礫(結晶片岩)は、ほぼ原位置で出土している。

遺物出土状態 2の皿が壁際で出土しており、住居廃絶時期に近い遺物と思われる。鉄器が1点(4)出土している。(遺物観察表:81・82頁 出土遺物一覧表:144頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:55~43×22cm、B土坑:72~58×36cm。

重 複 70号粘土探掘坑(6世紀前半)→128号住居(10世紀後半)→126号住居 各遺構の先後関係は土層断面観察による。

時 代 11世紀

天引128号住居

位 置 39-38他 **主軸方位** N-103°-E

遺 構 図93 P L 57 **遺 物** 図181 P L 89-90

形 状 短辺3.1~長辺3.2mの隅丸方形を呈する。

壁と床面 北東方面に傾斜するため、北壁及び東壁は確認できなかった。残存壁高は最大34cm。床面は最大3cmの比高がある。

カマド 恐らく東壁の南端にあったと考えられる。

遺物出土状態 焼失住居であったことから炭化材がまとまって出土している。また、中央部を中心に完形に近い土器が出土している。これらの土器は床面から僅かに浮いた状態である。8の土釜は、小片が重複する126号住居からも出土している。126号住居が本住居を破壊した段階で126号住居分の小片が混入したものと考えてよいだろう。また、2の中に5が入れ子になって出土している。(遺物観察表:82頁 出土遺物一覧表:144頁)

重 複 70号粘土探掘坑(6世紀前半)→128号住居→126号住居(11世紀) 先後関係は各遺構の土層断面からも妥当である。

備 考 焼失住居である。

時 代 10世紀後半

天引130号住居

位 置 44-50他

遺 構 図95-96 P L 57 **遺 物** 図181 P L 90

面 積 (18.0)㎡ **主軸方位** N-98°-E

カマド主軸方位 Aカマド N-107°-E

Bカマド N-113°-E

調査経過 調査時にA・B2つのカマドが検出され、その際には、新旧関係は捉えられなかった。整理作業の段階で再度検討した際、住居南辺の屈曲状況も考え合わせて、恐らく2軒の重複住居が存在してお

り、その結果A・B2つのカマドが検出されたと考えられるに至った。カマド位置は新しいものほど、コーナーに寄ることからAカマドは旧住居に、Bカマドは新住居に帰属するのではないかと考えている。

形状 短辺3.4～長辺4.4mの隅丸長方形を呈する。
壁と床面 残存壁高は10～14cm。床面は最大3cmの比高がある。

カマド 東壁の南寄りで2つ検出された。Aカマドの焚口幅は58cm、Bカマドは65cmである。Aカマドは煙道が良好に残存する。

遺物出土状態 破片が主体で完形もしくはそれに近い状態のものはない。1の土釜が新住居(Bカマド)に由来する遺物であろう。(遺物観察表:82・83頁出土遺物一覧表:144頁)

床下の状態 床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:140～60×25cm、B土坑:70～55×30cm。

重複 132号土坑(時期不明)・133号土坑(平安時代)・134号土坑(古墳時代後期)と重複する。また、3号柱列ピット2に切られる。

備考 Aカマド(旧住居)の時期は不明。

時代 11世紀

天引133号住居

位置 51-44他

遺構 図97 P L58

遺物 図181・182 P L90

面積 11.7㎡ **主軸方位** N-15°-E

形状 短辺2.9～長辺3.5mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は30～42cm。床面は最大5cmの比高がある。

カマド 北壁の東寄りで検出された。焚口幅は46cm、焚口高は20cmで、構造材はローム質の土壌である。袖石や天井石は検出されていない。

貯蔵穴 円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、43×42×16cmである。

柱穴 3本検出されている。規模(径×深さ)は、P1:36×23cm、P2:35×30cm、P3:37×36cm。

遺物出土状態 カマド右袖部分で出土した5・8の坏や1の小型甕などは遺棄された遺物と考えられる。9は墨書土器であるが平安時代の遺物である。一括取上の破片であるために出土位置は不明だが、二次的に混入したものである。接合資料a・b・cは土師器の甕の破片である。(遺物観察表:83頁出土遺物一覧表:145頁)

床下の状態 床下土坑が3基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:92～53×20cm、B土坑:104～99×21cm、C土坑:84～75×27cm。

重複 138号住居(縄文時代)→133号住居

時代 8世紀後半

天引139号住居

位置 45-50他 **遺構** 図96 P L58

遺物 図182・183 P L90

面積 <9.4>㎡ **主軸方位** N-10°-E

形状 短辺2.5～長辺2.7mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面 残存壁高は14～17cm。床面は最大3cmの比高がある。

カマド 北壁の東端で検出された。構造材は白色粘土ブロックを主体としている。

遺物出土状態 3～5は重複する140号住居として取り上げた破片と接合している。6の坏などが出土位置から見て、本住居に遺棄されたものとして考えてよい。6は墨書土器で、内外面に炭化物が付着しており、文字の判読ができなかったが、赤外線によって「新井」であることが判明した。「新井」の墨書は天引地区では唯一の出土で、他に白倉B区95号住居で2点出土している。(遺物観察表:84頁出土遺物一覧表:145頁)

重複 140号住居(8世紀後半)→139号住居 先後関係は土層断面からも妥当である。

時代 9世紀後半

天引140号住居

位置 45-50他

遺構 図98 P L59 **遺物** 図183 P L90

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

面積 <11.3>㎡ **主軸方位** N-80°-E
カマド主軸方位 N-92°-E
形状 短辺3.2~長辺3.3mの隅丸方形を呈する。
壁と床面 139号住居と大部分を重複するが本住居覆土内で重複しているので、床面等は残存していた。残存壁高は16~26cm。床面は最大3cmの比高がある。
カマド 東壁の南端で検出された。耕作溝によって大きく破壊される。右袖石のみ検出されている。大きな礫(砂岩)の上に小礫(結晶片岩)を置いていた。また、本来左袖石もあったようである。掘り方調査時に痕跡が検出されている。

遺物出土状態 1の壺はカマドに由来するものと考えられる。また、2の坏は右袖石掘り方内で出土している。3の坏は覆土一括取上の破片で、4は写真のみの呈示であるが粘土塊である。(遺物観察表: 84・85頁 出土遺物一覧表: 145頁)

床下の状態 床下土坑が3基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:115~98×24cm、B土坑:120~95×22cm、C土坑:87~80×21cm。

重複 140号住居→139号住居(9世紀後半)
時代 8世紀後半

天引145号住居

位置 51-46他 **主軸方位** N-16°-E
遺構 図99 P L59 **遺物** 図183 P L-
形状 短辺2.6~長辺3.6mの隅丸長方形。
壁と床面 残存壁高は24~26cm。床面は最大2cmの比高がある。
カマド 北壁の中央から東寄りで検出された。焚口幅は42cm、焚口高は31cmである。残存状況は良好で両袖石が検出された。また、鳥居状に組んだ天井石が2つに割れて下に落ちた状態で調査することができた。燃焼部上面に用いられたと思われる板状の礫も出土している。カマド材はローム質土壌を主体としている。両袖石及び天井石は結晶片岩である。
貯蔵穴 円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、73×70×24cmである。
柱穴 2本検出された。規模(径×深さ)は、P1:

27×25cm、P2:35×17cm。

壁周溝 西壁及び北壁の一部で検出された。

遺物出土状態 遺棄されたと思われる遺物はない。1の壺は出土位置からカマドに由来する可能性がある。また、5の坏は重複する149号住居に由来する遺物であろう。接合資料a~cは土師器の壺の胴部辺である。(遺物観察表: 85頁 出土遺物一覧表: 145頁)

重複 149号住居(6世紀前半)→145号住居
時代 8世紀後半

3 掘立柱建物 (第12図、図184～図193、図226、表3)

掘立柱建物15棟、およびそれに関わると考えられる柱列2列、柱穴群2カ所を確認した。これらの遺構は、多少の量比は認められるものの、各地区に分布しており、総体としては住居群の分布域に沿って配置されていることがわかる。

各遺構の形態と規模は表3のとおりである。建物の種類は、1×2間が5例、1×3間が1例、2×2間が4例、2×3間が3例、2×4間が1例、不明が1例である。このうち総柱となるのは2×2間のみに2例認められ、白倉B区とC区に1棟ずつ分布している。また、白倉B区で確認された1×3間の建物は、この時期としては特異な形態であり、あるいは時代が下るかもしれない。

出土遺物が時期が特定できるものは少なく、白倉A区1号・2号柱穴群で8世紀代の土器破片が数点、白倉B区6号建物で9世紀代の土器破片が数点確認されている以外は、古墳時代以前の土器破片が少量ずつ出土しているにとどまる。奈良・平安時代の遺構を対象とする重複関係では、白倉C区7号建物と10号住居の例が唯一で、7号の上に10世紀後半の10号住居ののっている。

それでは各地区毎の様相を住居分布との関係を考慮しながら見ていこう。

白倉A区は6世紀代に集落の中心となる地区で、8世紀代までは数軒の分布が認められるが、9世紀以降は住居分布が希薄となる。ここでは柱穴群2カ所と柱列1カ所が確認されており、いずれも台地東側縁辺の地形変換点直前の位置にあり、住居が集中する地点から南側の空白部にかけて分布している。1号・2号柱穴群から8世紀代の土器が出土しており、その時期を中心とする建物があったと想定しておきたい。

白倉B区の8世紀代の住居分布は4号溝の東側に限られており、西側地区は9世紀代に多く分布するが、10世紀以降はほとんど空白となっている。4号溝の東側には小型方形タイプが1棟と大型長方形タイプ

表3 奈良・平安時代掘立柱建物一覧(17棟)

名称	形態	規模 (芯々間長さm)	備考
白倉A区1号柱列	—	東西2間(3.46m)	建物となる可能性が高い。
白倉B区1号建物	長方形	東西1間(北辺2.75m、南辺2.68m) 南北2間(東辺2.16m、西辺2.21m)	
白倉B区2号建物	長方形	東西3間(北辺4.71m、南辺4.80m) 南北2間(東辺4.27m、西辺4.31m)	
白倉B区3号建物	長方形	東西1間(北辺2.84m、南辺2.95m) 南北3間(東辺4.72m、西辺4.91m)	
白倉B区4号建物	長方形	東西2間(北辺3.69m、南辺—) 南北1間(東辺—、西辺3.08m)	中央部に柱あり。
白倉B区5号建物	正方形	東西2間(北辺3.50m、南辺2.95m)	柱穴の重複あり。
白倉B区6号建物	総柱	南北2間(東辺3.65m、西辺3.57m)	柱痕が確認できた。
白倉C区1号建物	長方形	東西2間(北辺4.27m、南辺—) 南北3間(東辺5.53m、西辺—)	
白倉C区2号建物	正方形	東西1間(北辺2.56m、南辺2.42m) 南北2間(東辺2.96m、西辺2.77m)	
白倉C区4号建物	正方形	東西2間(北辺3.05m、南辺3.17m)	
白倉C区5号建物	総柱	南北2間(東辺2.92m、西辺2.96m)	
白倉C区7号建物	長方形	東西4間(北辺7.30m、南辺7.30m) 南北2間(東辺4.04m、西辺3.97m)	
白倉C区8号建物	正方形	東西2間(北辺2.56m、南辺2.64m) 南北1間(東辺2.60m、西辺2.52m)	
天引C区1号建物	正方形	東西2間(北辺3.65m、南辺3.51m) 南北2間(東辺3.50m、西辺3.86m)	
天引C区2号建物	長方形	東西1間(北辺2.72m、南辺2.65m) 南北2間(東辺3.30m、西辺3.50m)	
天引C区3号建物	長方形	東西2間(北辺—、南辺4.45m) 南北3間(東辺—、西辺5.85m)	
天引C区1号柱列	—	東西2間(4.12m)	

タイプが近接して2棟、西側には小型方形タイプ3棟が散存している。このうち西側の5号は総柱で、他の建物とは異なった方位を示す。

白倉C区は7世紀後半が空白で、8・9世紀代は東端部のみ为数軒住居が分布し、10世紀代は西側斜面に位置する。東半の建物は大型長方形タイプ2棟と小型方形タイプ2棟があり、このうち南東隅に位置する4号は総柱小型方形タイプである。

天引地区は9世紀前半は希薄であるが、8世紀から11世紀代まで住居が分布する地区である。建物は台地平坦面に大型長方形タイプ1棟、小型方形タイプ2棟、柱列1カ所が分布する。

4 井戸 (第12図、図194～図196、図218)

本調査区で井戸が確認された地区は、白倉A区の台地東側縁辺と、白倉B区西北隅の谷頭周辺の2カ所に限られる。確認された井戸は合計6基で、白倉A区で1基、白倉B区で2基、白倉C区で3基である。

白倉A区1号井戸 (図194)

A区のほぼ中央部、21-16グリッドに位置する。台地が東側の低地へ傾斜をはじめる地点にあたる。平面形は南北方向に細長い楕円形で、大きさは長軸6.95m、短軸4.95mである。底面は広い平坦面をなし、北半部に楕円形状のやや低い部分がある。この部分は白色粘土層まで達しており、やや軟質だが、南半部の平坦面や縁辺部は、砂を含んでかなり硬質化していた。また、西側の底面縁辺に沿って礫群が2～3カ所認められた。周縁部はかなりゆるやかに立ち上がり、深さは最深部で80cmを計る。また、南側には東の低地に向かって伸びる溝が付く。溝は幅80～120cm、深さ20cmほどで、東側斜面を下る5mほどが確認できた。溝は79住(8世紀後半)と73住(5世紀後半)と重複しており、いずれも本溝が切っている。

出土遺物は覆土柱から古墳時代後期の土器片15点と平安時代の土器片2点が出土している。

以上のことから、本井戸は白倉A区の生活水として使用された水場で、底面西側縁辺に沿った礫群は使用に伴う足場と考えられる。時期は79住との切り合い関係から、8世紀後半以降に比定される。

白倉B区1号井戸 (図195、図218)

B区北西隅の谷頭縁辺部に位置する。長軸2.34m、短軸2mのほぼ円形を呈し、断面形は直線的な逆台形で、底面中央に直径50cm、深さ30cmの円形ピットを伴う。確認面からの深さは平坦面で1.13mである。底面は白色粘土層に達しており、わずかに湧水も認められるが、近年この形態の遺構を「水室」とする見解が出されており、本遺構もそれにあたる可能性が高い。出土遺物は、覆土層を中心に多量の礫、

古墳時代以前の土器片、8世紀後半の土器、瓦片などが出土している。

白倉B区2号井戸 (図195)

B区谷頭に築かれた池の中に位置する。池底面のセクションにかかって確認され、覆土中に浅間B軽石を含まないことから、池以後、浅間B軽石以前の遺構と考えられる。長軸2.16m、短軸2.08mのほぼ円形を呈し、断面形は丸みをもつV字形となる。確認面からの深さは1.3mで、底面は水場の地山にとどいている。覆土中に多量の礫を含むが土器は出土していない。池は9世紀後半以後の構築と考えられ、本遺構は池埋没後に掘削されたものであろう。

白倉C区1号井戸 (図196、図218)

33-64グリッドに位置する。C区で最も谷頭から離れたところに位置する。直径1.6mの円形を呈し、断面形はU字形で、底面に直径30cmの浅い掘り込みを伴う。確認面からの深さは1.7mである。上面に多量の礫を伴うが、これはその後の別遺構かもしれない。遺物は覆土中から8世紀後半から9世紀代を中心とする土器器・須恵器片が多量に出土している。

白倉C区2号井戸 (図196、図218)

33-59グリッドに位置する。B区谷頭の南西縁辺にあたる。約半分が現道にかかるため未調査である。確認面では直径1.7mほどの円形を呈するが、上半部が大きく崩落しており、本来は1mにみえない大きさであったと考えられる。断面形はU字形で、確認面からの深さは1.2mである。遺物は覆土中から9世紀後半代を中心とする多量の土器器・須恵器が出土している。

白倉C区3号井戸 (図196)

29-60グリッドに位置する。B区谷頭の西側縁辺にあたる。直径55mの円形を呈する小型の井戸で、断面形は長方形を呈し、確認面からの深さは1.3mである。壁面の崩落は認められない。遺物は覆土中から少量の土器器・須恵器片が出土した。

以上の白倉C区の井戸は、白倉B区谷頭にある池の廃絶に伴って掘削されたものと考えられる。



第12図 奈良・平安時代の遺構分布 (住居・土坑は別図)

5 土 坑 (第13図～第16図、表4、図197～ 図212、図219～図226)

総数71基を奈良・平安時代の土坑と認定した。本遺跡では縄文時代から近世の各種遺構が、同一面で多数発見されており、重複の頻度もはげしい。特に土坑は各期を通じて同じような形態をとっており、さらに床下土坑も加わることになる。最終的には出土遺物で判断せざるを得ず、膨大な土坑のなかから71基を選出したというのが実態である。

本期の土坑の分布も総体的には住居分布に沿った状況が見られるが、白倉C区西半部に土坑の分布がないのは、この地区が後世の削平を最も強く受けているからであろう。

各土坑の形態等は表4にまとめてある。平面形は円形のものが多いが、他に楕円形、方形、長方形のものもある。ここでは特徴ある形態の土坑に注目し、検討を加えておきたい。

A類 (白倉B区1号、同区7号・8号)

2つの方形区画が低いブリッジで連結された大型の土坑で、掘り込みは深い。8号は不定形に圪化されているが、ブリッジ部が確認面より低く、7号と一連の遺構と考えられる。2基の土坑は比較的多くの出土遺物を伴っており、いずれも9世紀後半に比定される。周辺に分布する同期の住居と較べても、

規模や出土遺物の内容にさしたる違いはない。

B類 (白倉B区28号・29号、白倉C区20号・21号)

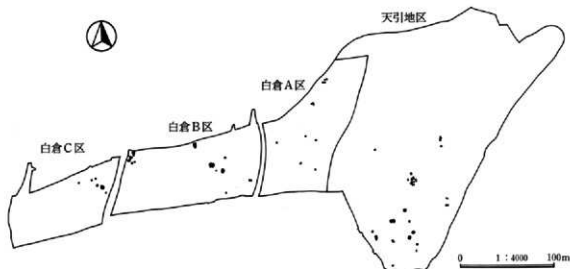
長楕円形土坑が2つ接した状態のもので、掘り込みは浅い。28・29号は白倉B区谷面の西側に近接し、20・21号はそこから40mほど西側に位置する。20・21号からは9世紀前半の土器が出土している。

C類 (白倉B区151号、天引C区33号・36号・37号・ 51号・90号・91号)

隅丸方形を呈する大型の土坑で、掘り込みは深い。36号・37号は重複しており、37号が切る。90号は長方形を呈し、掘り込みが他に較べて浅いが、その他の6基は1辺3m以上の相似性を示す。出土遺物も比較的多く、33号で墨書土器、37号で鉄弁、90号で瓦・白玉・土製紡錘車、91号で鉄製紡錘車などが出土している。出土遺物の時期は151号が8世紀前半、36号・37号が8世紀後半、33号・90号・91号が9世紀後半である。分布は151号以外は全て天引C区の台地平坦部に分布する。

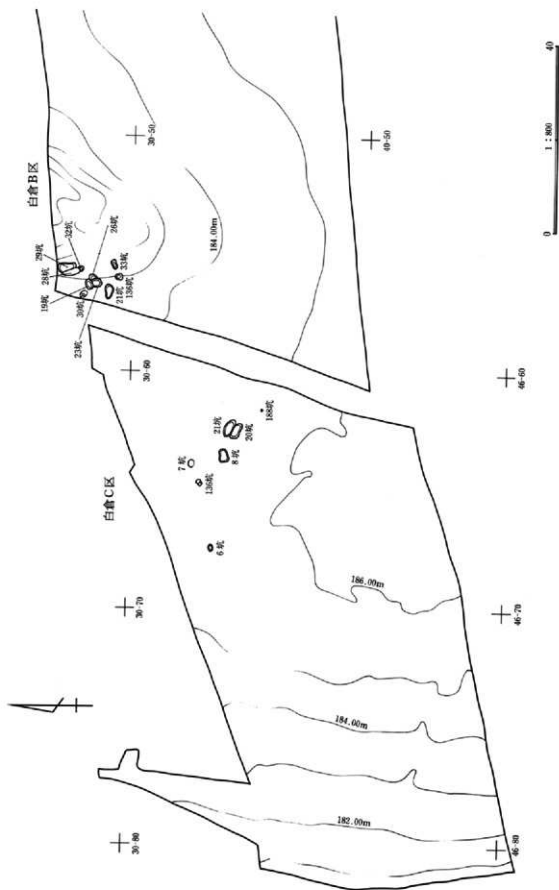
D類 (天引C区2号・15号・16号・19号・28号・30 号・63号)

長辺1.5m、短辺0.9mほどの楕円形を呈する一群である。平坦面はかなり規格化されているが、深さは28号・30号が深いタイプ、その他は浅いタイプである。いずれも天引C区に分布し、2号は北西縁辺、

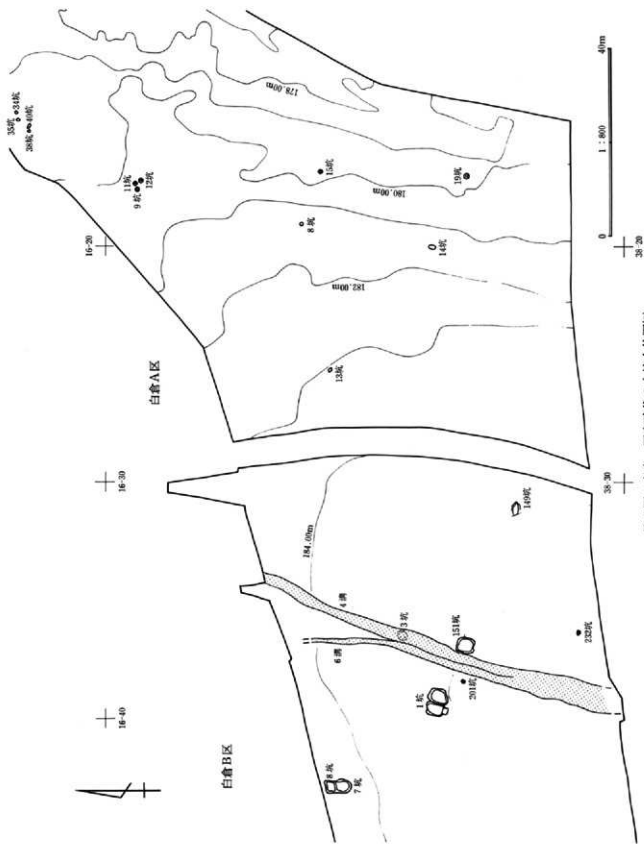


第13図 奈良・平安時代の土坑分布

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

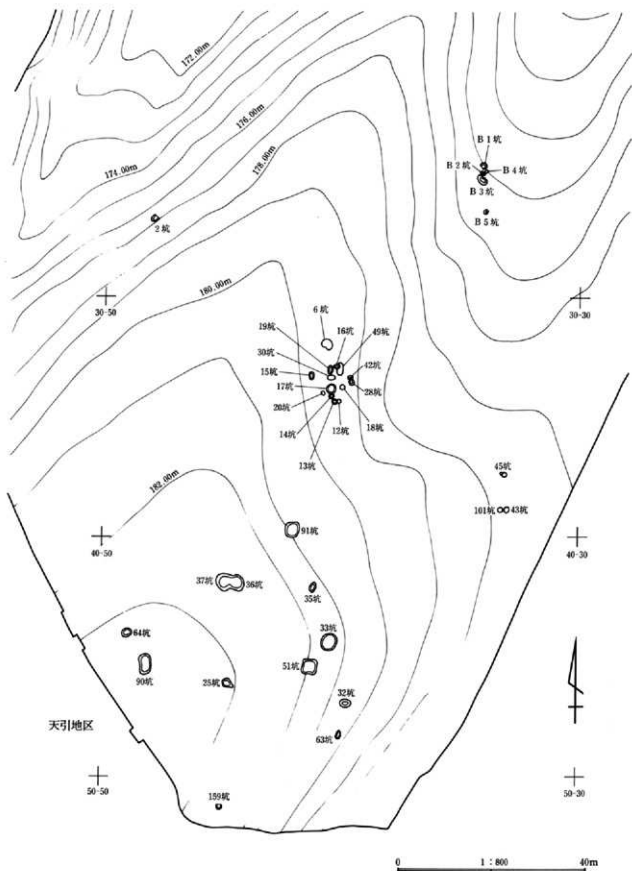


第14図 奈良・平安時代の土坑全体図(1)



第15図 奈良・平家時代の土坑全体図(2)

III 奈良・平安時代の遺構と遺物



第16図 奈良・平安時代の土坑全体図(3)

表4 奈良・平安時代土坑一覧(71基)

土坑番号	平面形	断面形	たて×よこ×深さ (cm)	重複関係	主な出土遺物、観察表	備 考
白倉A区 8号	円形	方形	—×59×12	49住、54住	平安11	底面から扁平な大型礫2点と土器片出土。
白倉A区 9号	円形	方形	82×76×46	—	古墳38、平安16(図219)	底面から土器がまとまって出土。
白倉A区 11号	不正円形	逆台形	91×72×20	—	平安8	
白倉A区 12号	不正円形	逆台形	80×63×15	—	古墳7、平安9(図219)	底面から土器がまとまって出土。
白倉A区 13号	楕円形	方形	91×49×62	13住	古墳4、平安12	
白倉A区 14号	隅丸方形	方形	—×—×40	35住	古墳1、平安2(図219)	底面から土器数片出土。
白倉A区 15号	円形	逆台形	84×73×22	69住	平安1(図219)	底面隅から環出土。
白倉A区 19号	円形	逆台形	108×97×18	—	奈良3(図219)	
白倉A区 34号	円形	U字形	54×48×81	—	古墳8、平安2	柱穴の可能性が高い。
白倉A区 35号	円形	U字形	65×61×52	—	古墳14、平安6	柱穴の可能性あり。
白倉A区 36号	円形	逆台形	70×63×25	—	古墳2、平安6	
白倉A区 40号	円形	鍋底形	101×62×17	—	古墳5、平安18	西側の小坑は別遺構。
白倉B区 1号	割張り隅丸 長方形	逆台形	568×406×101	17住を切る	縄~古2,079、平安27、瓦1、 紡錘車1、フレイク1(図220)	長軸中央の低い土橋状の高まりで 2分される。
白倉B区 3号	楕円形	鍋底形	202×162×51	—	縄~古36、平安7(図220)	
白倉B区 7号	隅丸方形	逆台形	310×246×50	—	縄~古214、平安83(図220)	8号と一連の遺構であろう。
白倉B区 8号	隅丸長方形	逆台形	270×190×47	—	縄~古162、平安80(図220)	南西隅にやや高い部分があり、図 では別遺になっている。
白倉B区 19号	長方形	逆台形	196×100×132	23坑・24坑に 切られる	縄~古80、平安12	古墳前期に同形態の土坑あり。
白倉B区 21号	たまご形	鍋底状	269×172×48	20坑、22坑	縄~古36、平安43、礫1、羽 口1、フレイク7(図220)	西側の小坑は別遺構。
白倉B区 23号	たまご形	鍋底状	—×190×39	19坑・26坑を 切る	縄~古107、平安32(図220)	
白倉B区 26号	楕円形	鍋底状	—×140×18	23坑に切られ る	古墳9、平安16	
白倉B区 28号	長楕円形	方形	350×112×36	29坑、32坑、 29坑を切る	縄~古100、平安38	
白倉B区 29号	不正隅丸長 方形	逆台形	377×—×25	28坑に切られ る	縄~古167、平安7	
白倉B区 30号	不正円形	逆台形	151×101×28	43坑	平安3(図220)	
白倉B区 32号	楕円形	逆台形	—×112×23	28坑	奈良2、平安2	
白倉B区 33号	不正長方形	方形	200×102×85	—	縄文2、奈良3	
白倉B区 136号	楕円形	逆台形	163×130×74	—	縄~古56、平安38、土鏝1、 鉄棒2(図221)	
白倉B区 149号	不正長方形	逆台形	—×160×22	32住	縄~古24、平安3、フレイク 2、礫1(図221)	東側の突出部に礫を伴う。
白倉B区 151号	隅丸方形	方形	363×342×76	4溝、切り合 い不明	縄~古1,476、平安11、瓦1(図 221)	南壁下に楕円形の掘り込みを伴 う。中央の方形坑は擾乱。
白倉B区 201号	円形	逆台形	96×81×13	—	縄~古36、平安6、フレイク 2、礫1(図221)	

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

土坑番号	平面形	断面形	たて×よこ×深さ (cm)	重複関係	主な出土遺物、観察表	備 考
白倉B区 232号	円形	U字形	90×70×103	—	—	柱穴であろう。
白倉C区 6号	突出部付楕円形	—	134×132×9	5住	縄文1、土器9(図221)	北側の突出部を中心に焼土を伴う。ほぼ完形の埴3点出土。
白倉C区 7号	不正円形	—	158×—×6	1方周溝 1竪立	土器51(図222)	埴を主体に土器を多く伴う。
白倉C区 8号	隅丸長方形	方形	265×(252)×43	1方周溝 1溝	赤生1、土器3、黒曜石1、 石弁1、砥石1(図222)	
白倉C区 20号	長楕円形	逆台形	380×184×51	21杭、130杭	土器4(図222)	
白倉C区 21号	長楕円形	逆台形	350×147×45	20杭、130杭	土器4(図222)	
白倉C区 136号	楕円形	不定形	142×105×23	1方周溝	平安18(図222)	円形土坑2基の重複の可能性もある。
白倉C区 188号	不正円形	逆台形	68×65×16	—	—(図222)	
天引B区 1号	円形	逆台形	122×—×34	—	古墳9、平安3	
天引B区 2号	円形	方形	104×89×63	—	平安15(図223)	
天引B区 3号	不正楕円形	鍋底状	260×188×104	—	古墳5、平安22	
天引B区 4号	円形	鍋底状	64×54×27	—	古墳5、平安4	
天引B区 5号	円形	U字形	76×58×68	—	平安63(図223)	柱穴状を呈し、上面から「可」墨書の埴9点が重なって出土。
天引C区 2号	隅丸長方形	逆台形	120×94×16	1杭	—	
天引C区 6号	突出部付不正円形	隅丸方形	256×231×55	—	縄～古4、平安38(図224)	
天引C区 12号	円形	隅丸方形	103×92×28	13杭	平安11	
天引C区 13号	円形	隅丸方形	85×76×18	12杭	平安10	
天引C区 14号	円形	隅丸方形	106×105×40	—	平安10	
天引C区 15号	隅丸長方形	隅丸方形	150×94×17	36住	古墳5、平安13	
天引C区 16号	隅丸長方形	隅丸方形	146×93×17	—	平安3	
天引C区 17号	不正円形	逆台形	207×186×27	—	縄～古10、平安19、瓦1	
天引C区 18号	不正円形	逆台形	120×100×48	—	縄～古4、平安17、瓦1	
天引C区 19号	楕円形	—	167×104×19	93住	古墳1、平安51(図224)	
天引C区 20号	円形	逆台形	96×90×17	59住	古墳3、平安2	
天引C区 25号	不正長方形	逆台形	208×152×50	—	縄～古19、平安3、フレイク3(図224)	
天引C区 28号	楕円形	方形	152×102×92	42杭	平安20(図224)	長軸線上南寄りに、柱穴2本あり。
天引C区 30号	楕円形	方形	145×98×47	93住	平安1(図224)	
天引C区 32号	隅丸長方形	逆台形	208×179×52	49住	縄～古26、平安41、瓦1、 フレイク1(図224)	南東隅に楕円形の浅い掘り込みを伴う。
天引C区 33号	隅丸長方形	方形	340×307×45	—	縄～古72、平安161、瓦1、 フレイク1(図224)	
天引C区 35号	楕円形	逆台形	180×143×27	—	縄～古7、平安30(図224)	

土坑番号	平面形	断面形	たて×よこ×深さ (cm)	重複関係	主な出土遺物、観察表	備 考
天引C区 36号	隅丸方形	逆台形	320×—×53	37坑に切られる	縄~古336、フレイク9、 打穿1、礫石2 (図225)	
天引C区 37号	隅丸方形	逆台形	355×—×65	36坑を切る		西壁際から鉄片出土。
天引C区 42号	円形	鍋底形	110×—×16	28坑	—	
天引C区 43号	円形	隅丸方形	104×98×23	—	平安11	西側の落込みは別遺構。
天引C区 45号	楕円形	逆台形	123×93×30	—	古墳1、平安14、(図225)	
天引C区 49号	長方形	逆台形	256×116×53	48坑、83住	縄~古9、平安13	
天引C区 51号	方形	逆台形	350×320×84	—	縄~古190、平安7、フレイク 10(図225)	西平部に2つの円形状落込みを伴う。
天引C区 63号	楕円形	方形	165×90×36	—	平安24、礎8	
天引C区 64号	たまご形	逆台形	204×164×30	70住	縄~古51、奈良5、平安6	
天引C区 90号	長方形	逆台形	394×247×45	—	縄~古70、平安16、瓦7、礎 3、フレイク3 (図225)	西壁に沿ってテラス状の段が伴う。
天引C区 91号	隅丸方形	逆台形	310×291×75	129住、123住	縄~古165、奈良1、平安352、 フレイク4、礎16(図226)	
天引C区 101号	円形	方形	107×96×38	—	平安8	
天引C区 158号	方形状	方形	—×112×41	133住	—	

63号は南東縁辺、その他の5基は北側縁辺の一方所に集中している。いずれも台地中央の平坦面からはずれた地区に位置している。出土遺物は少なく、19号と28号で10世紀前半の土器が出土している。

以上の土坑のうち、A類とC類は居住施設あるいは作業場の施設となる可能性が高い。A類とC類の分布域が異なる点は興味深い。D類は形態的には基と考えるのが妥当であるが、分布は天引地区以外に見られないことや、5基が集中する地点は9世紀後半から11世紀代まで住居も集中している点に疑問が残る。

なおその他に、9点の墨書土器が一括出土した天引B区5号土坑がある。この土坑は天引C区台地に北側から入り込んだ谷の西側縁辺にある。平面形は長軸80cmの楕円形で、深さ70cmほどの柱穴状を呈す。その上面から11点の環が重ねた状態で出土し、その内の9点に「可」の文字が墨書されていた。土器の年代は9世紀後半に比定されるが、この時期には本土坑の東側台地上に寺院が存在したと考えられ、墨書土器はそのことと関連するかもしれない。

6 溝 (第12図、図213・214・227・228)

白倉B区東平部を、南北方向より20°ほど東へ傾いた角度で直進する溝2条を確認した。東側を4号溝、西側を6号溝とした。

4号溝は上幅2~3m、深さ43cmほどで掘り込まれており、底面には溝の走行に直交する洗濯板状の凹凸が認められる部分と、幅30~55cmほどの浅い溝状の落ち込みが認められる部分とがある。このうち前者は砂混じりのいたって硬質な面を呈する。走向は微妙に湾曲は認められるもの、おおよそ直線的な走向で調査区を貫通している。

6号溝は、南側の一部を4号溝と共有し、しばらく併走した後に真北の方向へ折れ、途中で不明瞭となる。

この両溝は重複関係をもっており、4号溝を6号溝が切っている。埋没土から出土した遺物では4号溝が9世紀前半、6号溝が9世紀後半である。

4号溝の東側8mに、古墳時代の道と考えられる5号溝があり、この両溝はそれを引き継ぐ道であら

III 奈良・平安時代の遺構と遺物

う。また、周辺の住居分布との関係および出土遺物から、6世紀後半代には4号溝へ移行していたと考えられる(同報告書IV参照)。6世紀後半以後の住居分布は両溝と重複するものがなく、6号溝が埋没する9世紀後半以後、本地区には住居分布がほとんど見られなくなる。それとともに、本地区の南側台地へぬける溝は、しばらく途絶えたと考えられよう。

7 寺院跡

(第12図、第17図～第23図、
図229～図231)

天引A区台地東側縁辺に位置する。天引地区と東側に隣接する弧崎の台地との間には、三途川が南流する深い谷地があり、天引の台地とは比高差20mほどの崖で区切られる。寺院跡はこの谷地に面して細長く伸びる台地上にあり、主要居住域である天引C区の北側にあたる。

確認された遺構は、寺域を区切る長方形区画、コの字状にめぐる溝1カ所、落込み4カ所である。

長方形区画は、台地の伸びる方向に合わせて設定されており、台地平坦面を東西に2分して東半を寺

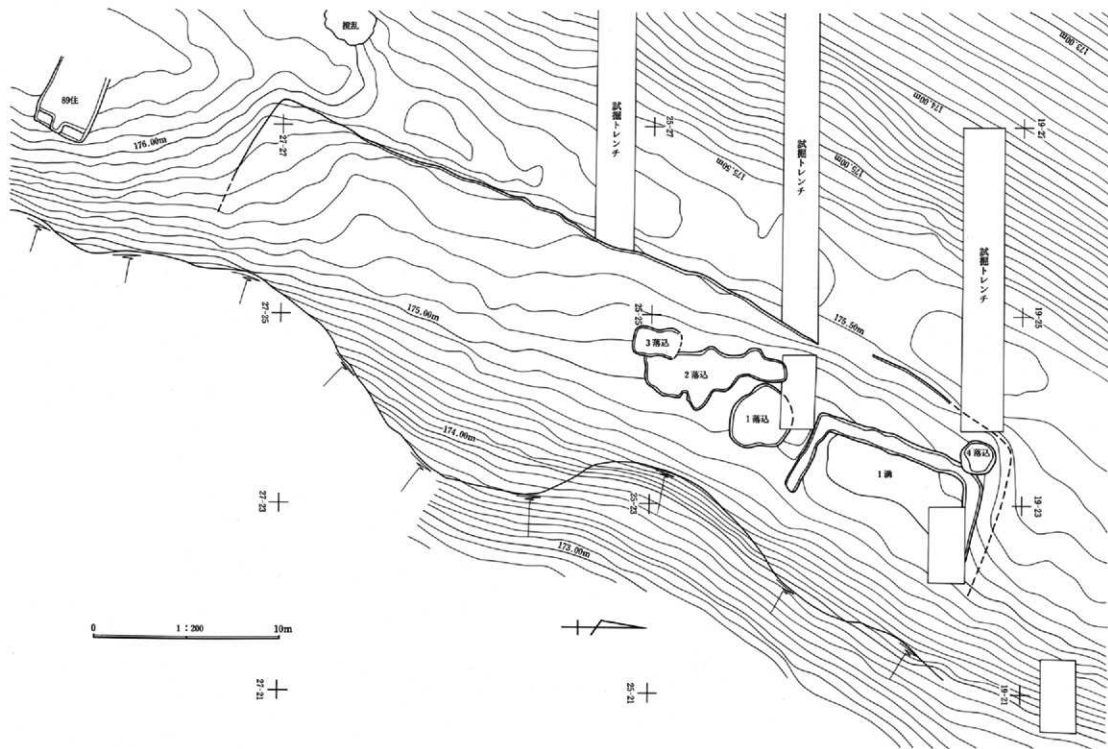
域にあて、南北方向44mの範囲を削平して平坦面を構築している。本地区台地面は土壌の流失や削平が著しく、黒色土はほとんど認められなかったため、削平による段差は南北方向の長辺で10～18cm、短辺では緩やかな傾斜面となっている。整地に伴って盛り土も施行されたと思われるが、残っていない。

コの字状にめぐる1号溝は寺域内北端部にあり、開放部を谷地に面する東側に向け、長方形区画より西へややふれた方向で設置されている。開放する東西方向の溝は東側へやや開いており、溝端部は南辺では浅く不明瞭となるが、北辺は試掘坑に切られており、本来は全周していたものか、東側へぬけた状態であったか、判然としない。溝区画内の距離は南北7.7m～推定8.5mほどである。溝は幅70～100cm、深さ10～20cmで、断面形は南北方向の部分では逆台形で底面が平坦であるが、東西方向の部分では鍋底状を呈する。遺物は溝内から9～10世紀代の土器24点、瓦10点が出土している。

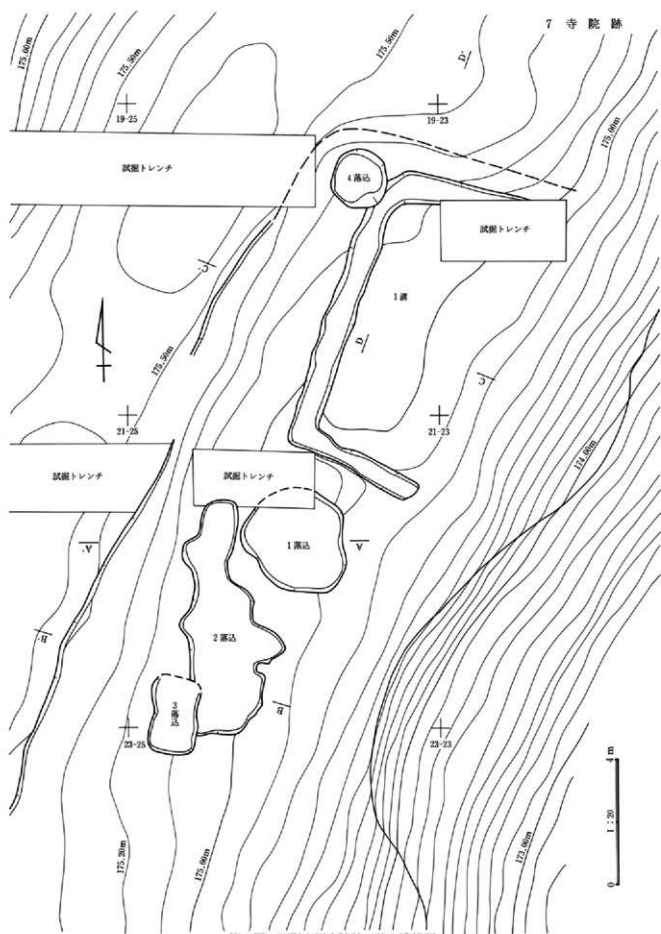
落込みは、1号溝の南側で3カ所(1～3号)、1



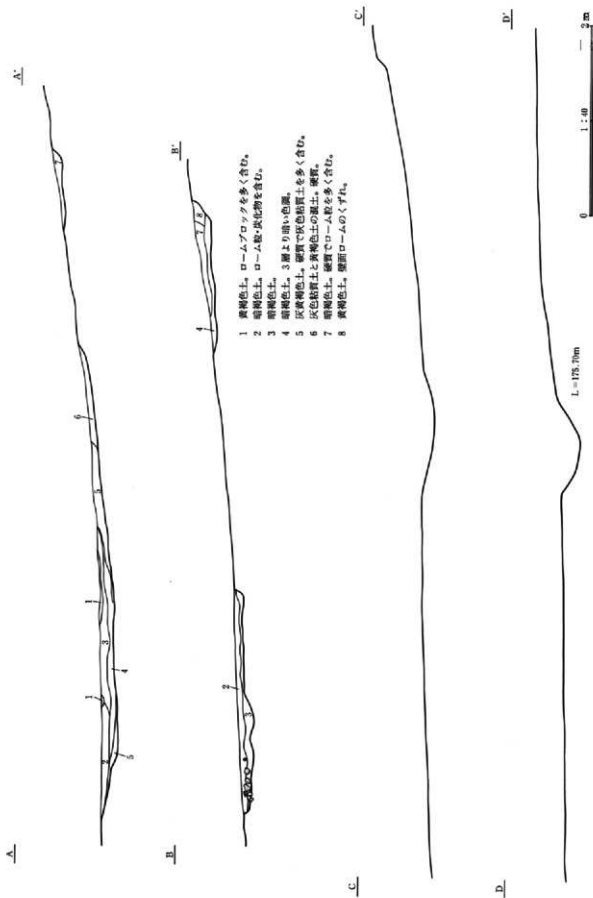
寺院跡の位置と周辺の地形(1万分の1)



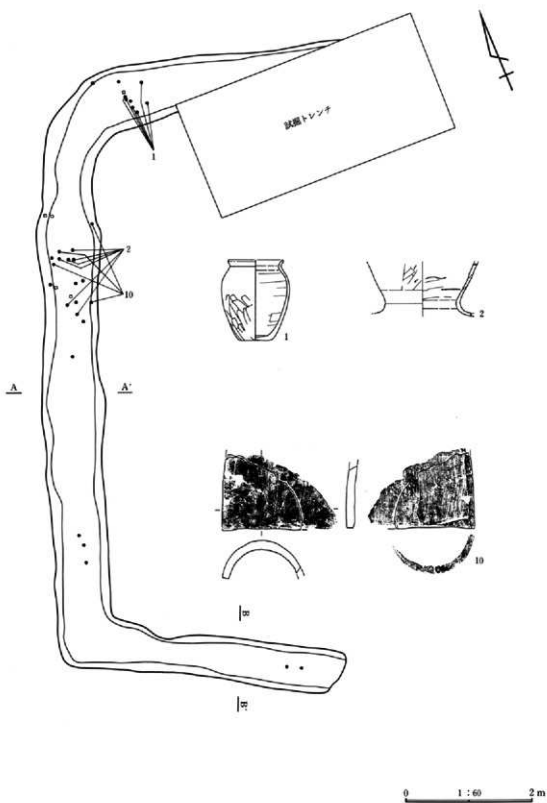
第17図 天引A区寺院跡全体図



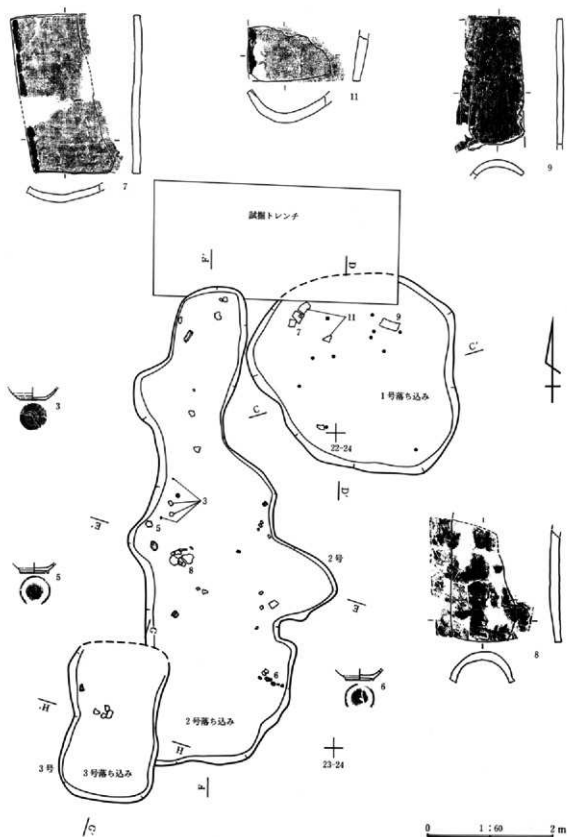
第18図 天引A区寺院跡に伴う遺構群



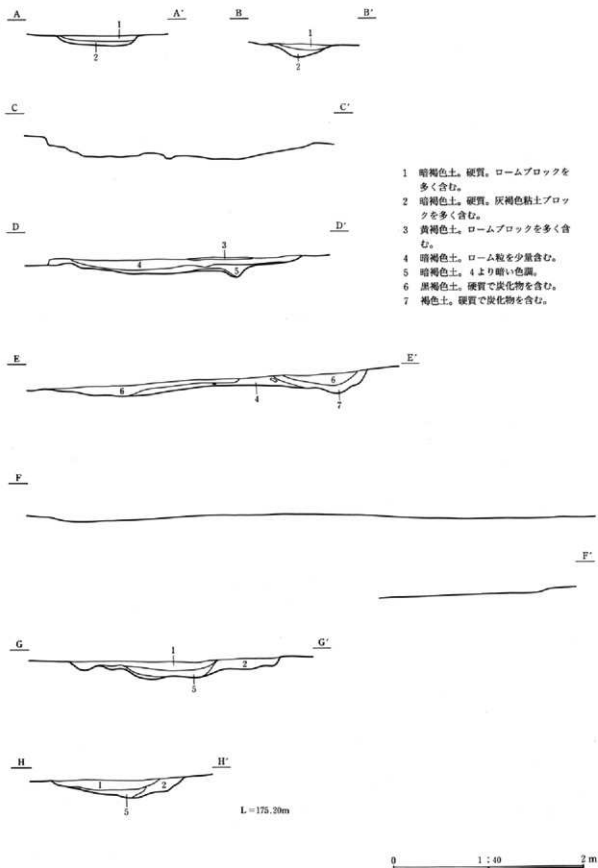
第19図 天引A区寺院跡断面図(1)



第20図 天引A区寺院跡1号溝

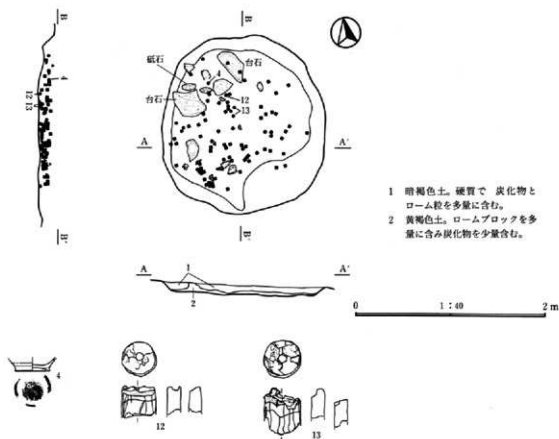


第21図 天引A区寺院跡1～3号落ち込み



第22図 天引A区寺院跡断面図(2)

III 奈良・平安時代の遺構と遺物



第23図 天引A区寺院跡4号落ち込み

号溝の北西隅に重複する1カ所(4号)を確認した。1～3号は近接し、3号が2号の一部に重複する。いずれも深さは15～25cmほどで、底面はほぼ水平であるが、部分的に凹凸も認められる。硬化した面は見られない。1号落ち込みは長軸3.45m、短軸3.30mの円形状を呈し、底面付近から9～10世紀代の土器片2点と瓦片12点が出土している。2号落ち込みは、長軸7.55m、幅1.13～3.02mの南北方向に細長い不定形を呈し、底面付近から9～10世紀代の土器片9点と瓦片18点が出土している。3号落ち込みは長軸推定2.55m、短軸1.52mの南北に長軸をもつ長方形を呈し、覆土中から瓦片2点が出土している。2号の南西隅に重複し、2号を切っている。

4号落ち込みは調査時に1号土坑とされていたもので、コの字状溝の北西隅に一部重複し、明らかに溝を切り込んでいる。長軸1.86m、短軸1.73mのほぼ円形を呈し、深さ10cmである。底面はほぼ平坦で、

一部に焼土化した部分が認められた。落ち込み内には、北西部に30cm以上の台石2点を据え置き、その一つの傍らには砥石が据えられていた。また両台石間の底面から羽口の先が2点(12・13)出土した。台石は上面を中心に被熱変色し、敲打痕が無数に認められる。なお、覆土中からは9～10世紀代の土器片6点、羽口片7点の他に多量の鉄滓片が出土している。

以上の遺構のうち、コの字状にめぐる1号溝は建物(堂宇)に伴う雨落ち溝と考えられる。その南側に隣接する1～3号落ち込みは性格がはっきりしないが、総体の規模が1号溝とほぼ一致しており、偶然とも思えない。ここにも1号溝を伴う建物とほぼ同規模の建物があったことを想定し、1～3号落ち込みはその地行と考えたい。4号落ち込みは、底面に焼土化した部分があり、作業台石、砥石、鰭羽口、鉄滓などが揃っていることから、鍛冶遺構として問題ないだろう。今回の調査では寺城南半部から手がかりが

発見できなかったが、この部分にも何らかの施設があったことが想定される。

寺域跡の年代は、出土遺物から9～10世紀代に比定できるが、遺跡内からは瓦を中心に寺院に関連する建物が数多く出土しており、それらとの関係はVI章でふれることにする。

8 焼土遺構 (第12図、図215、図226)

天引C区43-37グリッドに位置する。C区南東部の傾斜面にあたっており、平安時代遺構分布の限界ラインに近い。古墳時代の粘土探掘坑の上面で発見されたため、発掘時には粘土探掘坑に含まれていたが、焼土と遺物のレベルが一致しており、遺物の年代もほぼ一致することから、ここでは一連のものとして扱っておく。

焼土は、長軸1m、短軸50cmの楕円形を呈する浅い掘り込みの底面に部分的に認められ、遺物は掘り込みを中心に半径2mほどの範囲に、ほぼ同一レベルで散在している。出土遺物は10世紀前半代に比定される。

遺構の性格は想像の域を出ないが、平地住居等の居住施設を想定しておきたい。

9 畠 (第12図、図216)

天引B区は、天引C区台地北半部の中央に位置する谷地で、南から北に向かってかなりの傾斜があり、北端部は天引E区谷地につながっている。谷地との比高はあるが、北端部以外は水の湧出はなく、発掘以前も畠地として使用されていた。

谷地内には浅間B軽石で埋没した畝がとぎれとぎれに確認できた。畝の走行は傾斜に直交する南北方向を主体とし、一部ではみだれが生じている。谷地内は土壌の流失や削平が著しく、一部の確認にとどまったが、本来はほぼ全域が畠地化されていたと考えられる。

10 池・水場の調査 (第12図、第24図～第29図、図232～図241)

白倉地区の台地には南北に1本の谷地が入って

り、その谷頭は白倉B区の北西隅に達している。この谷地の北半部は「新井谷」という名が残っており、天引向原の北側の台地を指す字名「新屋」と接している。両者は大字が異なるが、読み方は同一である。本地区は1959年に合併して甘栗町になる以前は「新屋村」と言ったが、この「新屋」は「和名抄」に郷名として記載された古い地名である。

谷頭には表土下1.5mほどのレベルに、浅間B軽石(1108年降下)が10～15cmの厚さでプライマリーに堆積している(第25図)。その下位に、30～40cmの間層はさんで石積みの堰堤で囲われた池を発見。その下位には大量の土器と礫を含む包含層があり、その下で水場を発見した。水場には縄文時代以降の遺物が数多く散布しており、この谷頭は縄文時代から水場として機能していたと考えられる。基盤面までの深さは、調査区北面で3.8mである。

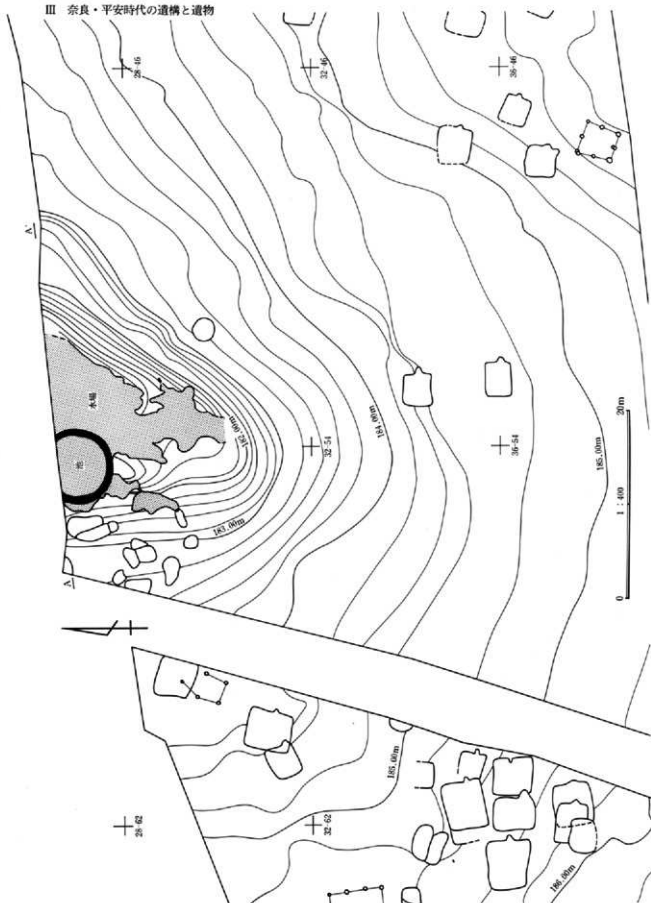
池の調査

池は谷頭の北西部に位置する。3号水場の上面にあたる。浅間B軽石下30～40cmで石積の上面が確認できた。直径7.2mの円形内を50cmほど掘り込み、その内側周辺に扁平な礫を4段階前後小口積みにして縁堤としている。使用された礫は長さ30cmほどのものが中心で、その間を小礫で根詰めしている。池は内側で直径6.5mである。池は西側と東側でかなりのレベル差があるが、これは池が谷地の西縁にあるため、その後の土圧で傾いたものと考えられる。なお、北側1/4ほどは調査区外のため全容は確認できないが、南側と北東側に石積みの途切れる部分がある。

ところで、この池が自噴で水がたまる池であったとは考えにくく、おそらく水場の改修に伴って構築された施設と思われる。つまり、湧水点は池の南側にあり、石積みの南側の切れ目は、そこからの水の取り入れ口であった可能性が考えられよう。北東側の切れ目は池内の水の流し口か、あるいは池廃絶後の攪乱などが想定される。

遺物は池内埋没土および周辺部から、8～9世紀代の土器や礫が少量出土している。

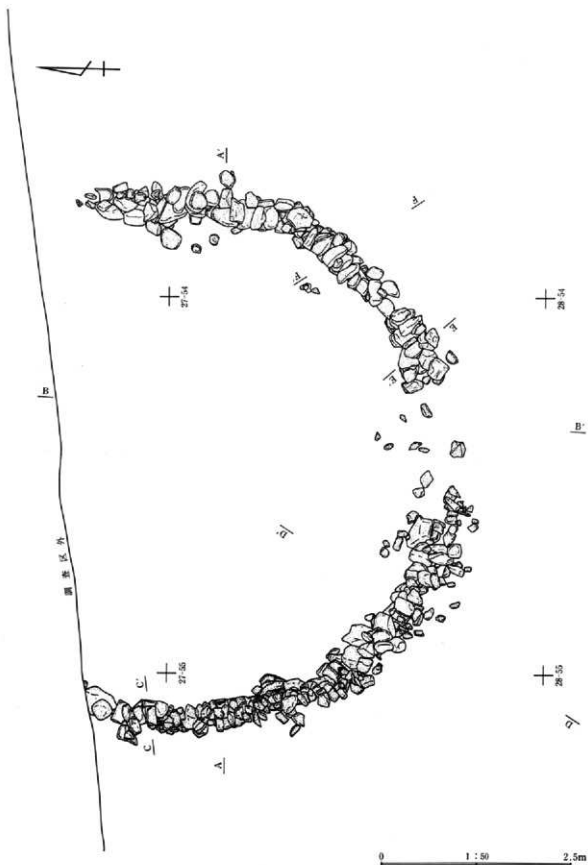
III 奈良・平安時代の遺構と遺物



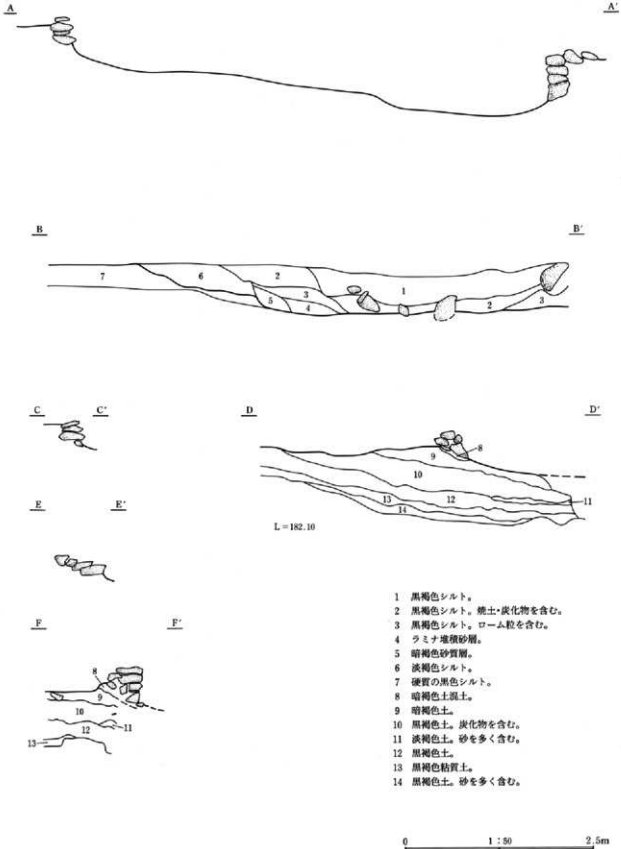
第24図 白倉B区谷全体図 (遺構は奈良、平安時代)



第25図 白倉B区谷土層断面図



第26図 白倉B区池



- 1 黒褐色シルト。
- 2 黒褐色シルト。焼土・炭化物を含む。
- 3 黒褐色シルト。ローム粒を含む。
- 4 ラミナ堆積砂層。
- 5 暗褐色砂質層。
- 6 淡褐色シルト。
- 7 硬質の黒色シルト。
- 8 暗褐色土混土。
- 9 暗褐色土。
- 10 黒褐色土。炭化物を含む。
- 11 淡褐色土。砂を多く含む。
- 12 黒褐色土。
- 13 黒褐色粘質土。
- 14 黒褐色土。砂を多く含む。

第27図 白倉B区池断面図

水場の調査

谷頭底面のほぼ全域に、人為的な削平と考えられる掘り込みが認められた。そのうち、東側に掘り込まれた最も長大なものを1号、中央部のものを2号、西側のものを3号とした。これらは明確な範囲が確定できた訳ではないが、埋没土の堆積状況、遺構の残存状況、出土遺物等の検討から、およそ東側から西側への変遷が把握できる。谷地に沿って伸びる溝状の掘り込みの先端には、カマド状の掘り込みが認められる。これが湧水点と考えられ、各水場には各々複数の湧水点が認められる。

1号水場は谷地の東縁に沿って溝状に掘り込まれており、南側の谷頭付近では不明瞭となっている。溝部の幅は4m以上と推定され、底面には段差が認められる。明瞭な湧水点は、深い溝部の先端と中間の東側へ拡張した部分の2カ所であるが、その南側の東縁が階段状になった部分や、北側の上段部分にならんだ2つのカマド状掘り込みも、湧水点であった可能性が高い。これに底面の段差を加えれば、東側の上段部から西側の下段部への変遷が想定される。

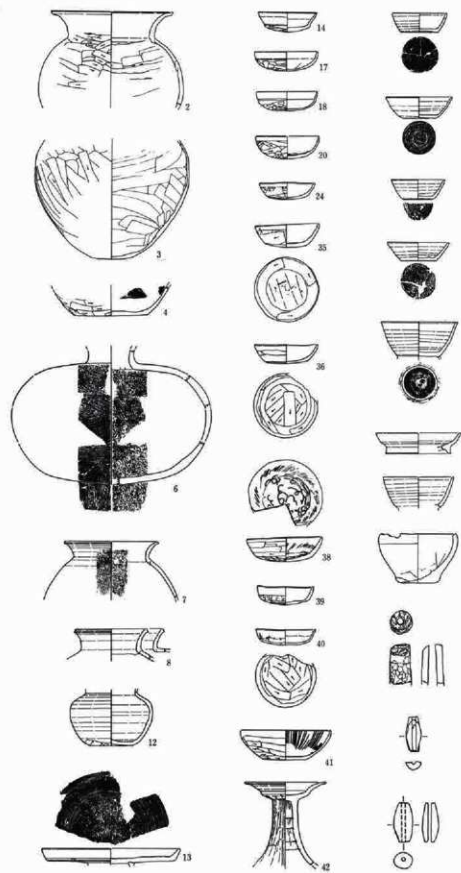
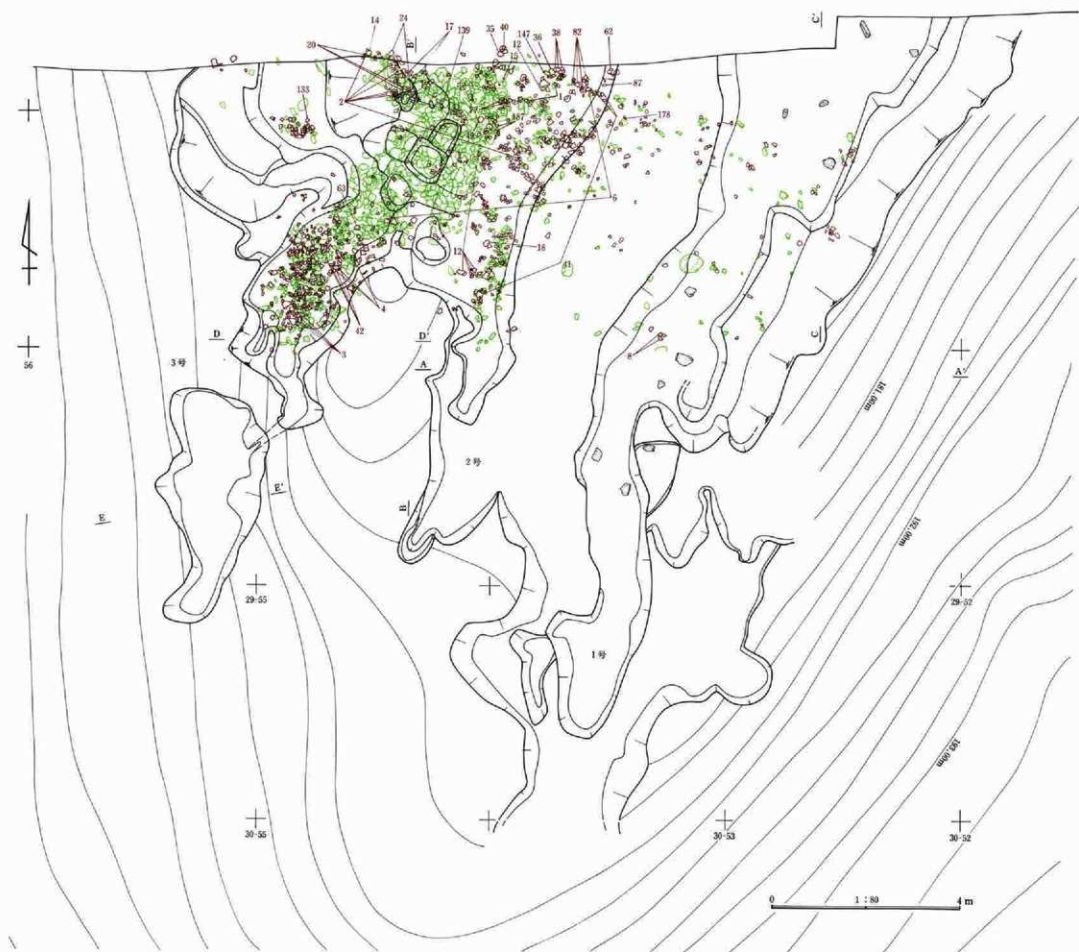
2号水場は谷地のほぼ中央部に位置する。埋没土の堆積状況から、1号水場より新しいことが伺える(断面図A-A')。溝部の範囲は不明瞭だが、先端部に段差をもった2つの湧水点が認められ、そのうちの下段面には土器や礫の分布が少量認められた。

3号水場は2号の西側にあり、北側では溝部を2号と共有する。溝部の先端には湧水点を示すカマド状掘り込みが横ならびで2つ確認された。湧水点を除く溝部には、約2mの幅で全面に礫が敷かれ、ややまばらとなる湧水点寄りの部分には、礫の間を埋めるように多量の土器片が敷き込まれていた。湧水点の南側には、70cmほどの掘り残しをはさんで長さ4.8m、幅2mの幅の延長部が続き、その間をトンネル状の溝でつないでいる。延長部の先端にもカマド状の湧水点が認められた。先述のように溝部の南側を2号と共有するが、礫敷きは3号に伴うものであり、2号を改修して3号を構築したと考えてよいだろう。以上の調査結果から、水場は東側の1号から2号へ、

さらに西側の3号へと変遷したと考えてよいだろう。先述のように谷頭からは縄文時代以降の遺物が多量に出土している。大まかな内訳は、縄文時代前期～後期土器484点、弥生時代土器54点、古墳時代後期から平安時代の土器4,649点、☆羽口2点、土鍬22点、玉類2点、鉄製品11点、弓その他の木製品数点の他に、大量の礫が出土している。このうち、縄文・弥生時代の土器は水場の全域に散存している。古墳時代の土器は7世紀代を主体としており、続く8・9世紀代の土器とともに、2号・3号水場に集中する傾向があり、1号水場のある東側でも少量散布が認められるが、これらは1号水場の埋没土上面に限られる。2号・3号水場の底面付近から出土した土器は、第28図に示したとおり、7世紀後半から9世紀前半代のもので、2号・3号水場はかなり長期にわたって使用された可能性が高い。また、両水場の埋没土中からは9世紀後半代の土器も出土しており、そのなかには墨書土器を中心に刻書・ヘラ書きを含む文字資料が数多く含まれていた。これらの文字資料の半数は、水場上面の池の調査時に取り上げられたものであるが、破片資料も多く、本来どちらに帰属するものか判然としない。いずれにしても9世紀後半以降の遺物の出土量はわずかであり、周辺の住居分布も9世紀後半以降はほとんど認められなくなる点を加味すれば、3号水場を改修して池を構築したのは9世紀後半であり、池の使用は短期で終息したと考えられよう。

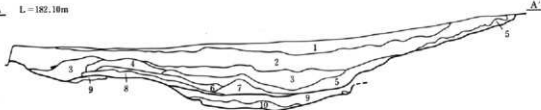
11 天引F区谷の調査 (図217、図228、図278～図282)

白倉A区と天引C区の両台地にはさまれた本地区には、浅間B軽石の堆積がわずかながら認められ、その下層に黒色粘質土が厚く堆積している。当初、B軽石下で水田の存在が想定されたが、確認できなかった。B軽石下黒色粘質土中には6～10世紀代の多量の土器が包含されており、それらとともに木製品と少量の石製模造品などが出土した。木製品は30～55グリッド付近に集中して認められ、そのなかには長さ6～10cmほどの楔状を呈する特異な形態のものが数多く含まれていた。



第28図 白倉B区1～3号水場と出土遺物 (茶色は石、緑色は土器)

A L=182.10m



- 1 暗褐色シルト。
- 2 暗褐色土。砂層を含む。
- 3 暗褐色土。焼土・炭化物を含む。
- 4 黒色粘質土。
- 5 暗褐色土。

B L=182.10m



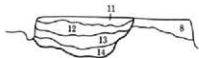
- 6 暗褐色シルト。
- 7 暗褐色粘質土。
- 8 暗褐色土。炭化物を含む。
- 9 灰黒褐色土。砂層を含む。
- 10 灰白色粘質土。
- 11 暗褐色土。
- 12 暗褐色シルト。砂層を含む。

C L=182.16m



- 13 黒褐色シルト。砂層を含む。
- 14 黒褐色粘質土。炭化物を含む。
- 15 暗褐色シルト。
- 16 暗褐色粘質土。粗砂を多く含む。
- 17 褐色粘質土。粗砂を多く含む。

D L=182.10m



D'

E L=182.50m



E'

0 1:80 2m

IV 中・近世の遺構と遺物

1 概要 (第30図、第31図)

本遺跡周辺には中世の遺構が数多く見られる。白倉の台地先端には麻場城と仁井屋城があり、その眼下を伝鎌倉街道が東西に走っている。南東側の倉内には倉内城と13世紀末の笠塔婆があり、その東の中宿にも14世紀初頭の笠塔婆が3基残されている。

一方本調査区で確認された中世の遺構は、白倉A区で墓が1基、溝2条、天引地区で土坑が1基と墓の確認にとどまるが、白倉A区および天引地区の遺構外から13世紀代の青磁碗5点と14世紀初頭の白磁碗1点が出土しており、本地区が中世の時期に活況を呈していたことを暗示している。特に白倉地区を東西、および南北に通する両側に溝を伴う道は、本地区の主要道として近世まで継続使用されたと考えられ、本遺跡は中世の主要地区の通過点にあたる地区だったと言える。

近世では溝、道、畠、水田などが中心で、白倉A区で居住域に伴う遺構が数カ所確認できた(第30図)。溝・道は浅間A軽石(1783年降下)以前のものと以後のものがあるが、その多くは現状で使用されている道や区画に一致している。畠・水田もほとんどが浅間A軽石下で発見されたもので、本地区の農地としての景観がほとんど変わってないことがわかる。

そのなかで白倉A区には、居住の場と想定される地点が4カ所認められた(第31図)。スクリーンゾーンで示したA～Dがそれで、いずれも平坦に整地されており、周辺に墓やトイレ遺構が伴う。A地点は道と考えられる10号溝に沿って立地し、北側に墓5基がある。B地点は建物と考えられる柱列が2組検出されており、西側に墓4基がある。C地点は東側に2つのトイレ遺構があることから想定したが、B地点と一連の可能性もある。D地点は現状で家があった場所で、東側にトイレ遺構が2つあり、北西

側の調査区外に墓地がある。

地元での聞き込み調査を怠っているため信憑性に乏しいが、各遺構の配置や整地の状況から以上のようなことが想定できる。

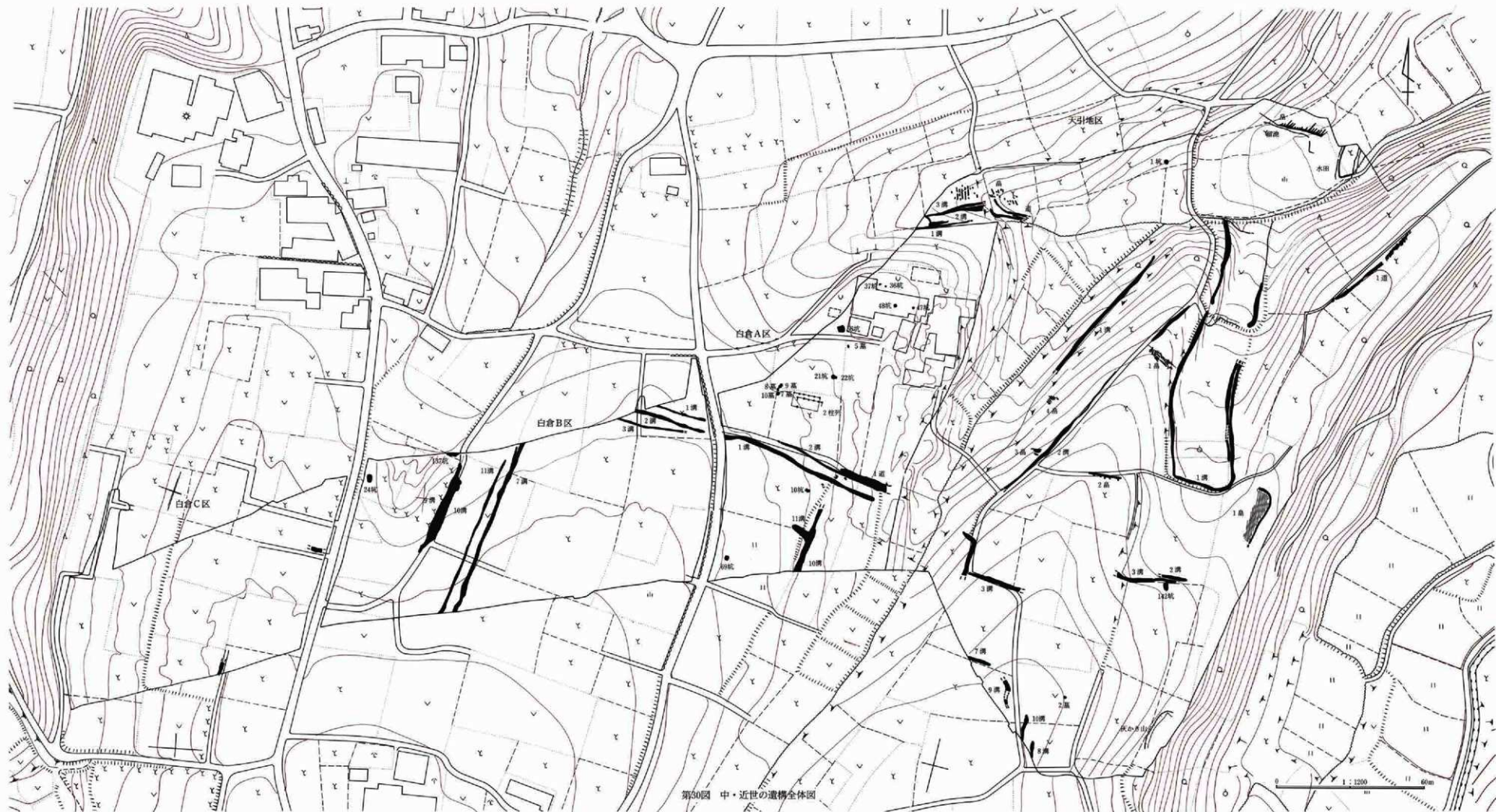
出土遺物は17世紀以降のものが発見されている。なお、墓から出土した寛永通宝のなかに、かなりの割合で鉄銭が含まれており、当時の流通貨幣の実態を示す興味深い資料となる。

2 柱列 (第31図、図242～図244、図270)

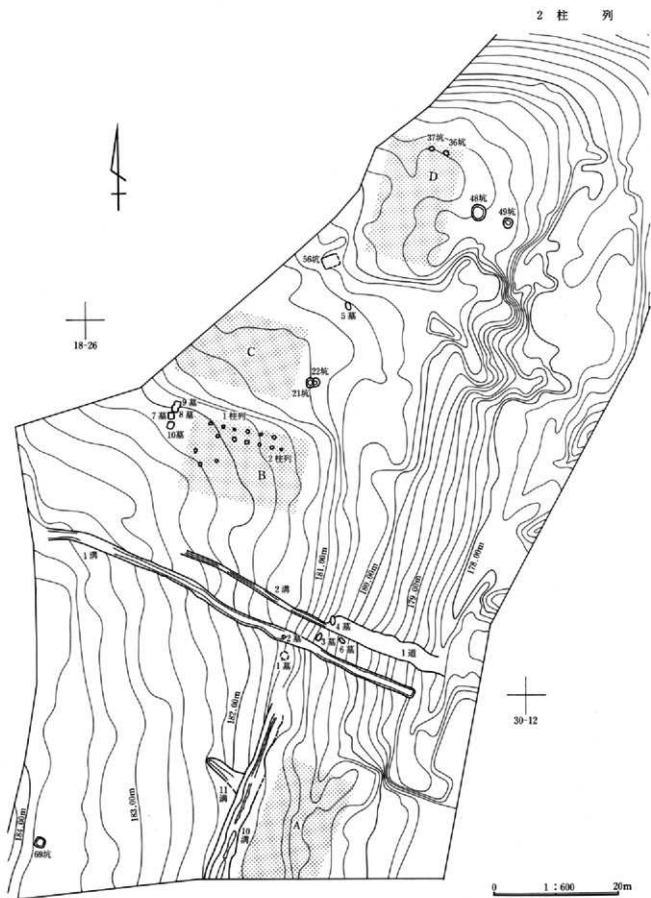
白倉A区のほぼ中央部で2列の平行する柱列を確認した。2号溝から北へ20mの位置にあり、西側5mに土坑墓4基、北東10mには土坑2基がある。柱列はいずれも東西方向に6本の柱が並んでおり、北側の列を1号、南側の列を2号とした。

1号柱列は、ほぼ2mの柱間で6本の柱が東西方向に並び、延長10.53mを計る。柱間は最短1.83m、最長2.30mである。柱の規模は、柱3以外はいずれも直径が45cmほどあり、深さは75～120cmほどである。このうち柱5には根詰めの際が認められた。柱3は直径30cm、深さ30cmと規模が小さい。なお、柱2の南側5.43mに、柱列と直交する位置に柱7が確認された。柱の規模は直径37cm、深さ70cmで、他の柱と大差はない。この柱が柱2に対応すると考えれば、東西10.53m、南北5.43mの建物が想定できる。各柱の規模は、建物をささえるのに十分な大きさであり、東西5間の建物を想定しておきたい。

2号柱列は、1号の南側1.7mに平行する状態で確認された。柱は東西方向に6本あり、柱2から柱5の間はほぼ2mの柱間で揃っているが、柱1と柱2の間は2.7mと広く、柱5と柱6の間は、1.2mとせまい。東西5間の距離は10.3mである。柱の規模は直径50～70cm、深さ70～80cmであるが、柱6はやや小さく、直径40cm、深さ65cmである。なお、柱4と柱5の上面に根詰めの際が検出された。



第30図 中・近世の遺構全体図



第31图 白舍A区中·近世遺構分布図

3 土 坑 (第30図、図245～248、 図270、図271)

白倉A区で9基、白倉B区で2基、天引C区で1基、天引E区で1基の、合計13基の土坑を確認した。

白倉A区の9基のうち、21号・22号・48号・49号の4基は土坑内に桶を埋設した「トイレ遺構」で、この地区が生活域にあたることを示している。平面形はいずれも円形で、桶の外周と底に防水用の粘土を貼っている。桶は腐食して残っていないが、粘土の内側にタガなどの痕跡を明瞭にとどめている。48号では覆土上面に浅間A軽石の混入が認められたが、その他は認められないことから、浅間A軽石降下以前の遺構と考えられる。なお、48号からは寛永銭2点とともに、18世紀後半～19世紀前半代の陶磁器類がまとめて出土している(図270・271)。

56号は方形の大型土坑で、南辺と西辺の内側に細い溝がめぐっている。南東隅から外側へつづく柱穴状の掘り込みと溝は、その後の擾乱であろう。この土坑は、その形態から「ムロ」と考えられる。覆

土は人為的に埋め戻されており、北東隅から明治～大正期の播り鉢(図271)が1点出土している。

36号・37号は円形の小型のもので、柱穴かもしれない。69号は方形のもので、人為的に埋め戻されている。

白倉B区24号は楕円形のやや大型の土坑で、掘り込みは浅く、覆土中から銭貨2点(図271)が出土している。137号土坑もほぼ同規模のもので、東側に別の掘り込みが重複している。覆土上面に浅間A軽石を含み、下層から17世紀前半代の陶器(図271)が出土している。

天引C区142号土坑は、楕円形の浅い掘り込み内に井戸状の深い部分をもつ特異な形態で、浅い掘り込み部分に多量の礫が投げ込まれていた。礫の間から軟質陶器鉢など(図271)が出土しており、中世までさかのぼる可能性がある。

天引E区1号土坑は、谷地に面した傾斜地で発見された。耕作地に伴う「トイレ遺構」と考えられる。覆土中に多量の礫が投げ込まれており、浅間A軽石を含む土で埋没している。

表5 中・近世土坑一覧(12基)

土坑番号	平面形	断面形	たて×よこ×深さ (cm)	重複関係	主な出土遺物、観察表	備 考
白倉A区 21号	円形	方形	86×86×34 (165×144×56)	22坑	—	
白倉A区 22号	円形	方形	56×47×10 (118×—×20)	21坑	縄～平6	
白倉A区 36号	円形	鍋底状	45×42×29	—	—(図270)	
白倉A区 37号	円形	方形	44×40×33	—	縄～平1、中近世3(図270)	
白倉A区 48号	円形	方形	83×82×34 (118×110×40)	—	縄～平1、中近世14、貝1、 フレイク1(図270・271)	覆土中から近世陶器・礫が多く出土。
白倉A区 49号	円形	方形	98×90×28 (148×140×42)	—	中近世1	
白倉A区 56号	方形	方形	250×243×56	—	中近世2(図271)	南壁・西壁に拍って、溝がめぐる。 底面にスジ状の痕跡あり。
白倉A区 69号	方形	方形	137×135×50	—	縄～平20	
白倉B区 24号	楕円形	逆台形	288×202×39	19坑、23坑	縄～平244、フレイク3、 羽口1、鉄牌2(図271)	
白倉B区 137号	楕円形か	逆台形	—×—×94	—	縄～平33、中近世1、瓦1、 フレイク1(図271)	大型で礫を多量に伴う。
天引C区 142号	不正楕円形	不定形	304×170×231	—	中近世2(図271)	井戸状の掘り込みがあり、その上面に多量の礫が伴う。
天引E区 1号	円形	方形	94×93×48 (186×172×62)	—	縄～平20、中近世1	

4 墓 (第30図、図249～図253、 図273～図275)

墓と認定したものは14基で、そのうちヒトを葬ったものが12基、ウマを葬ったものが2基である。概要は表6にまとめたとおりである。

ヒトの墓は、火葬墓が6基、土葬座棺が4基、土坑墓が2基で、それぞれで分布域が異なる。

火葬墓は白倉A区1号～6号が該当し、このうち5号以外は1・2号溝と10号溝の交点付近に集中している。いずれも焼跡と焼骨片を伴っており、3号・4号・6号では寛永銭や陶磁器などが出土している。この一群は1・2号溝や10号溝に切られていることから、それらに先行する江戸時代の墓で、A地点に伴う墓域の可能性が高い。5号はD地点の南側に位置する。焼跡は伴わないが、焼骨と明銭5枚が出土しており、中世に属す可能性が高い。なお、火葬墓としたものはいずれも焼骨片を伴うが、1体分が残っている例はなく、量もまちまちであることから、納骨の場合は別の所にあった可能性が高い。

表6 中・近世墓一覧 (15基)

墓番号	形 態	たて×よこ×深さ (cm)	骨 種	骨の遺存状況	伴 出 遺 物	備 考
白倉A区 1号墓	集石火葬墓		人骨	焼骨細片		大小数個が残存。
白倉A区 2号墓	長方形火葬墓	(167)×(70)×24	人骨	焼骨細片		方形の扁平大型鎌が上面に1個遺存。
白倉A区 3号墓	長楕円形集石火葬墓	130×(60)×28	人骨	焼骨細片	寛永銭15、鉄銭2	墓内に扁平な大型鎌多数を築積。窪下から焼骨片出土。
白倉A区 4号墓	長楕円形集石火葬墓	147×(80)×12	人骨	焼骨細片	陶磁器片数点	上面に10cm前後の焼跡が多数遺存。
白倉A区 5号墓	長楕円形集石火葬墓	120×(66)×20	人骨	焼骨細片	明銭5	礎はほとんど見られず。
白倉A区 6号墓	長楕円形集石火葬墓	103×(49)×24	人骨	焼骨細片	寛永銭5、陶磁器片、火打金1	墓内に扁平な大型鎌多数を築積。炭化材を伴う。
白倉A区 7号墓	方形座棺	95×93×100	人骨	1体分、前に倒れる。	キセル1、寛永銭4、鉄銭1 鉄釘1	熟年期後半～老年期の男性。
白倉A区 8号墓	方形座棺	90×87×94	人骨	1体分、前に倒れる。	寛永銭6～7	9号墓を切る。熟年期後半～老年期。
白倉A区 9号墓	方形座棺	95×84×60	人骨	1体分、前に倒れる。	砥石1、キセル1、すり鉢1 寛永銭5、鉄銭5	8号墓に切られる。老年期女性。断面にすり鉢をかぶる。
白倉A区 10号墓	方形座棺	110×84×94	人骨	1体分、前に倒れる。		骨は老年期。
白倉A区 11号墓	長方形土坑墓	182×(102)×22	馬骨	1体分、横位		
白倉A区 12号墓	方形土坑貯用墓	220×—×68	馬骨	1体分、土坑の隅に横転		
天引A区 1号墓	円形土坑墓	65×57×—	—	なし	銭数点と鎌3個を伴う。	
天引C区 2号墓	楕円形土坑墓	113×66×44	人歯	歯が数個ずつ3地点からまとまって出土	礎を数点伴う。	歯は壮年期を示す。

土葬座棺は7号～10号が該当する。これらは1・2号性列の西側に位置し、南北方向に並んだ状態で発見された。4基のうち、8号と9号は一部を重複しており、8号が9号を切っている。4基とも骨はほぼ原型をとどめており、北向きに座った状態で前に倒れている。このうち9号は頭骨が罫鉢内に落ち込んでおり、頭部に鉢をかぶせて埋葬したと考えられる。遺物は7号・8号・9号から寛永銭、鉄銭、キセルなどが出土しており、埋め土に浅間A区石を含まないことから、浅間A区石降下以前の墓で、B地点に伴う墓域と考えられる。

土坑墓2基は天引地区に位置する。A区1号は骨は残っていないが、寛永銭が数点付着した状態で出土した。C区2号は人歯がまとまって出土している。

ウマの墓はいずれも白倉A区で確認された。11号は体長に合った土坑に横位に埋葬されているが、12号は方形の大型土坑の片隅に埋葬されており、墓に転用したのであろう。

5 溝・道 (第30図、図254～図260、図268、図269、図271、図272)

溝・道は各地区で確認されており、その位置と概要は第30図および表7のとおりである。第30図で示したように、これらの多くは現行の農道や地割りに重複しており、基本となる区画はさほど変化していないようである。

溝の多くは地境や道に沿って設けられ、用途としては区画、根切り、雨水の排出などが考えられる。

白倉A区10号溝と白倉B区9号・10号溝は幅が広く、底面に砂を含んで著しく硬化しており、道としての特徴を明瞭に備えている。天引C区1号・2号溝も底面が平坦でやや硬化しており、道であった可能性が高い。

白倉A区1号・2号溝は一定の間隔で東西方向に併走し、西側で白倉B区1号・2号溝に延長する。同様に白倉B区7号・11号溝も、南北方向に併走している。これらは道の両側につく溝と考えられ、と

も本地区の主要道であったと思われる。白倉B区7号・11号溝は北側から入り込む谷地の東側に沿った道で、北側の延長上に現在もその一部が認められる。西側に併走する9号・10号溝は、谷地の埋没の経過に合わせて移行したものであろう。7号・11号溝は覆土に浅間A軽石を含まないことから、それ以前の道と考えられる。

古代では白倉B区谷地の中央部を同じ方向に縦断していたが、それが谷地に沿った7号・11号へ引き継がれ、さらに谷地の埋没後は9号・10号へ移動したのであろう。白倉A区1号・2号溝はそれに直行する道で、やはり覆土中に浅間A軽石を含まない。この東側に接する1号道は浅間A軽石を含むことから、1号・2号溝を伴う道は1号道へ移行したと思われる。

天引A区1号道は、浅間A軽石を多量に含んでおり、特に北半部では道の両側に畝の畝が入り込んでいた。

表7 中・近世溝一覽 (26条)

遺構名	規模(幅・深) cm	断面形状	走 向	長さ(m)	備 考
白倉A区1号	100~130・46	逆台形	東西方向にほぼ直進	67	白倉A区2号溝と並走。白倉B区2溝に連絡。
＃2号	50~90・12	＃	＃ にほぼ直進	50	東側に1号溝を伴う。白倉B区1号溝に連絡。
＃10号	210~・20	鍋底形	南北方向に直進	28	畑地の段差に伴う。1・2号溝に直行。
＃11号	200・50	＃	東西方向に進むであろう	8	10号溝の西側に直行。
白倉B区1号	90~100・30	逆台形	東西方向に直進	21	白倉A区2号溝の延長と考えられる。
＃2号	80~150・58	＃	＃ に直進	29	白倉B区1号溝に並走。
＃3号	60~100・34	鍋底形	＃ にほぼ直進	27	白倉B区2号溝とややズレながら並走。
＃7号	130~180・50	逆台形	南北方向に直進	75	11号溝と並走。
＃9号	100~180・30	＃	＃ に直進	40	10号溝の西側に重複し、それを切る。
＃10号	300~・40	＃	＃ に直進	27	9号溝に切られる。底面に礫多数を伴う。
＃11号	55~120・35	＃	＃ に直進	68	7号溝と並走。
天引B区1号	100~220・30	不定形	谷地縁辺をめぐる	244	谷地縁辺を囲す。天水の排水や根切りも含む。
＃2号	80~120・30	逆台形	東西方向	11	3号溝の北側に並走。
＃3号	150~175・35	＃	＃	25	2号溝と共に、B区谷道の段差に伴う。
天引C区1号	100~120・40	鍋底形	北東から南西に直進	62	台地縁辺の段差に伴う。
＃2号	50~160・42	＃	＃ に直進	106	1号溝の上段に並走する。
＃3号	150~180・30	逆台形	東西方向に直進	22	地割りに一致
＃7号	65~105・28	不定形	＃ に直進	10	
＃8号	60~115・38	方形状	南北方向	7	
＃9号	80~160・30	不定形	＃	10	
＃10号	60~150・83	不定形	＃	10	
天引E区1号	80~110・42	鍋台形	東西方向に直進	270	台地斜面下を囲す。
＃2号	70~150・35	＃	＃ に直進	245	3号溝を切る。
＃3号	100~140・44	＃	＃ に直進	245	1号溝と並走。



1 白倉A区1・2号溝と1号道（東から）



2 白倉A区1号道（北から）



3 同2 石垣の状態



4 同3 東半部（北から）



5 同3 西半部（北から）

6 畠・水田 (第30図、図258～図269、図275、図282～289)

畠と水田はいずれも天引地区で確認された。概要は第30図と表8に示した。

天引A区およびC区の台地上では、浅間A軽石で埋没した畠が5カ所で確認されている。このうちA区1号畠はA軽石をかき寄せた「灰かき山」の下で発見された。その北東に位置する1号道の両側でも、A軽石で埋没した畠の一部が残っており、この台地上は浅間A軽石が降下した時には、一面に畠がひろがっていたと考えられる。なお、A区1号畠の南80mでもう一つの「灰かき山」があったが、この下には畠はなかった。

天引D区低地では、ため池と水田および畠を確認した。ため池は全形を確認できなかったが、その東側につづく水田に用水を供給する水口が確認できた。畠はため池の北側微高地にひろがっており、浅間A軽石で埋没していた。ため池と水田は、A軽石降下後も継続して使用されていた。なお、ため池からは木製品が若干出土している。

天引E区では、浅間B軽石を動きこんだ畠が確認されている。

表8 中・近世畠一覧

遺構名	地形面	畝間長(cm)	畝の方向	埋没土	備考
天引A区1号	台地東縁平坦部	45～50	南北方向、傾斜に平行	浅間A軽石	北側と東側に根切り溝がめぐる。
# C区1号	東下がり急傾斜面	50～60	南北方向、傾斜に平行	#	東西12m、南北3.5mの範囲に残存。
# 2号	台地縁辺緩傾斜面	200～280	南北方向、傾斜に平行	#	各畝は東西方向の畝に連結する。
# 3号	台地西縁緩傾斜面	50	東西方向、傾斜に斜行	#	畝4条を確認。
# 4号	#	70～80	東西方向、傾斜に直行	#	各畝は傾斜に平行する畝に連結。
# D区1号	低地に面した微高地上	50	南北方向、傾斜に平行	#	微高地南側縁辺を畝で囲す。
# E区1号	谷地底面傾斜地	80～120	南北方向、傾斜に平行	浅間B軽石混土	

V 出土遺物の理科学的分析

1 竪穴住居跡出土炭化材の樹種分析

植田弥生 (パレオ・ラボ)

今回報告対象となった竪穴住居跡は150軒であるが、焼失住居の可能性のあるものは13軒であった。その中で、炭化材が良好に残存していたものを中心に樹種分析を行うことにした。当時の植生や住居構造材に関する基礎的データを提供できたものと思う。この中には屋根材や敷物の炭化材、さらに試料388(白A区63住16とした紡錘車の軸棒)も含まれておりその点からも重要であろう。分析結果は以下を参照して欲しいが表9(炭化材樹種同定一覧)に示した番号について説明をしておきたい。試料Noとは、分析した炭化材の通し番号で、遺構図にゴシック体で記載してある番号である。遺物番号は調査時における取り上げ番号である。(この部分のみ文責編集担当 木村)

1 はじめに

ここでは奈良・平安時代の9つの住居から出土した試料111点・白倉A地区6基の6点・白倉B地区谷から出土した2点、および平安時代の天引B地区1土坑から出土した1点の炭化材の樹種同定結果を報告する。ここでは組織学的な検討結果のみを記してあるので、産状については別章を参照されたい。

イネ科については愛知教育大学の渡邊幹男博士に御教示頂きました。

2 方法

まず炭化材を手で割り新鮮な横断面(木口)を作り実体顕微鏡で観察しおおよその特徴をとらえる。さらに詳細な観察をするために横断面・接線断面(板目)・放射断面(柁目)の電子顕微鏡用の試料を作成する。接線断面と放射断面は片刃の剃刀を軽くあて弾くように割り新鮮な面を出す。3断面の試料はそれぞれ直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定しその周囲を導電性ペーストで塗る。試料を充分に乾燥させた後、金蒸着を施し走査電子顕微鏡(日本電子製 JSM T-100型)で観察・撮影した。

3 結果

各試料の同定結果を表9に示した。なお一試料に異なる種類が含まれているものについては中点を打ち並記した。また遺構別の産出樹種を表10に示した。

住居から産出した試料は白倉A区12住の27点・63住の53点・118住の2点、白倉B区15住の2点・18住の1点、天引C区45住の3点・82住の1点・102住の7点・128住の10点である。使用されていた樹種は、針葉樹はイヌガヤ3点、モミ属1点の2分類群、落葉広葉樹はクリ32点、サクラ属29点、コナラ属クヌギ節8点、ケヤキ・エゴノキ属各3点、カツラ2点、マタタビ属・カエデ属・ケンボナシ属・トネリコ属が各1点の11分類群、常緑広葉樹はコナラ属アカガシ亜属17点の1分類群のみであった。このほか落葉性か常緑性か不明の広葉樹1点がある。以上の樹種の他に、不整中心性を持つ2種類のイネ科が、炭化材に混じり出土している。一つは稈が木質のいわゆるタケ・ササ類であるタケ亜科(No296・297・298・299・324)である。もう1種はヨシ属(a)で稈の直径約0.5cmの草本性でまだ若い稈のヨシ属(No310・328・329・335・372・374・377・387)と、稈は直

V 出土遺物の理科学的分析

径約0.8cmで木質、節部に1個の芽の痕が明瞭なかなり成長したヨシ属（b）(No.330)である。

白倉A地区6基の6点はすべてマツ属複雑管束亜属であった。マツ属複雑管束亜属には放射仮道管の内壁の肥厚が鋭い鋸歯状であるアカマツとゆるやかな鋸歯状であるクロマツがあるがいずれの試料も放射仮道管内壁の保存状態は良くなく種の識別ができる状況ではなかった。試料No.461は直径7cmあり根張りまたは節部の形状に似ていた。

白倉B区の谷から出土した2点はコナラ属コナラ亜属クヌギ節とトチノキであった。

天引B区1土坑から出土した1点はクヌギ節であった。

4 考 察

出土点数32点で最も多かったクリは白A118住と天C82住以外の住居から出土しており建築材として多用されていた。炭化していない12世紀前後の加工木の樹種同定結果もクリの使用点数多いことから選択的にクリが使用された結果の現れと思われる。

アカガシ亜属とサクラ属はクリについて出土点数が多かったがクリとは異なり、アカガシ亜属は白A63住のみから、サクラ属も大半は白A63住から出土していた。その他の樹種は各住居から散点的に出土していた。炭化材は脆くくだけ安いので焼成作用で消失し発掘され調査されるのは一部の残存したものであり、また一本の材がバラバラになって発掘され複数の試料として取り上げられる可能性もある。従って樹種同定結果の点数はそのまま当時の材の本数とはいえないが、クリ・アカガシ亜属・サクラ属が他の樹種に比べ際だって多く出土していることからこれらの材は主要な住居材であったと思われる。そしてこのほかに複数の落葉広葉樹を利用していたことがわかった。

関東地方の住居材は縄文時代はクリが多用され、弥生時代以降はクヌギ節やコナラ節の材に代わる傾向がまとめられている（山田 1993）。当地域周辺では奈良・平安時代の住居材でクリ・アカガシ亜属・サクラ属が多用されている報告例は知られていない。しかし前記の資料は低地や開析谷に位置する遺跡のものが多かったからであり、当遺跡の東方の吉井町に位置する9世紀初頭のヌカリ沢A竪址は富岡丘陵の開析谷の谷頭部に位置し燃料材の樹種はアカガシ亜属が主体であったことから丘陵地にはアカガシ亜属が生育していたと考えられている（藤根 1995）。奈良・平安時代の住居材の報告例は多いとは言えないので今後の資料の蓄積を待ち、クリ・アカガシ亜属・サクラ属の利用が奈良・平安時代の傾向であるのか、丘陵地という立地に基づく木材利用の結果であるのか検討する必要がある。なおクリ材は1年輪幅が8～10mmあり成長の良いものが多かった。

当遺跡の古墳時代後期の住居跡から出土した炭化材試料約238点の樹種が調べられておりその同定結果はアカガシ亜属が圧倒的に多くほとんどの住居跡から出土しており、一方クリは土坑から1点出土しただけで住居からは出土していない。また、クスノキ科・ツバキ属・サカキ・ヒサカキ・アオキの常緑広葉樹が落葉広葉樹と共に出土しているが奈良・平安時代からはこれらの常緑樹は出土していない。

古墳時代後期と奈良・平安時代では住居跡から出土した炭化材樹種がこのように大きく異なっていた。関東平野では古墳時代は農業技術の進歩による台地・丘陵の開発と窯業・製鉄産業の隆盛により台地・丘陵の森林植生に干渉が強まった時期である（辻、1993）。古墳時代後期と奈良・平安時代の住居材の変化はこのような生業活動との関連が考えられる。当遺跡のように一地域で時代ごとの変化を捉えた資料の蓄積をしてゆき今後の時代変化の要因を明らかにする必要がある。

墓から出土した炭化材はすべてマツ属複雑管束亜属であり、古墳時代後期の炭化材からは1点も出土していない。当遺跡の炭化していない加工木の樹種同定結果でも古墳時代後期にマツ属が1点出土しているだけであ

り、江戸時代以降の遺物で多くもちいられている。マツ属は奈良・平安時代以降から増加または利用されはじめたことが予測される。

4 記 載

モミ属 *Abies* マツ科 PL160 1a-1c (No314)

仮道管・放射組織からなり樹脂細胞はない針葉樹材。放射細胞の壁は数珠状に肥厚している。分野壁孔は小型で1から4個あり、炭化材では孔孔の大きさが不揃いでヒノキ型やスギ型が混在している。放射組織は比較的背が高い。

モミ属は常緑高木で暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの5種がある。いずれの材も有用であるが組織は類似しており区別することはできない。

マツ属複雑管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 PL160 2a-2c (No459)

垂直・水平樹脂がある針葉樹材。分野壁孔は窓状である。放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその内壁には鋸状の肥厚があることからマツ属の複雑管束亜属のアカマツまたはクロマツであることが判る。内壁の肥厚の形状により、アカマツは鋭利な鋸歯状をなすことで、クロマツは比較的ゆるやかな鋸歯状をなすことで区別できる。いずれの試料も鋸状の肥厚は顕著ではなく、それは壁が不朽しているようでもあり種まで判断することはできなかった。

アカマツは二次林の代表樹種である。自然分布ではアカマツは内陸部に、クロマツは海岸部に多いといわれている。

イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* K. Koch イヌガヤ科 PL160 3a-3c (302)

仮道管・放射組織・樹脂細胞からなる針葉樹材。樹脂細胞は年輪内に均一に散在している。仮道管の内壁にらせん肥厚がある。分野壁孔は小型のトウヒ型またはヒノキ型で、1分野に1～2個ある。

暖帯から温帯下部の山林の下に生育する常緑小高木である。種子からは油が取れるが悪臭がある。材は縄文時代から弓に用いられている。

クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus* カバノキ科 PL161 4a-4c (No412)

放射組織が集まった部分と2～数個の小型の管孔が放射方向に複合して配列している部分とがある放射孔材である。ビスフレックが見られた。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は単一である。放射組織は方形細胞が混じるがほぼ同性、1～3細胞幅、道管との壁孔はやや大きい。

暖帯および温帯の山地に生育する落葉高木または大形低木である。乾いた山稜に生育するイワシデ、山野に普通のイヌシデ・アカシデの3種があるが材からは種を区別できない。いずれの材も丈夫で有用である。

クマシデ属クマシデ節 *Carpinus* sect. *Distegocarpus* カバノキ科 PL165 17a-17c. (No388)

小型の管孔が単独または2～数個が放射方向に複合して散在し、年輪界は不明瞭な散孔材である。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は横棒の数が少なく10本前後の階段穿孔で、内壁には細いらせん肥厚が密にある。放射組織はほぼ同性、単列のものと4細胞幅の紡錘形のものが多い。当試料は直径5mmの軸であり、実体顕

V 出土遺物の理科学的分析

微鏡下で横断面を観察した結果は集合放射組織は観察されなかった。このような形質からクマシデ属のうちサワシバとクマシデを含むクマシデ節と同定した。現在でも器具柄・シャトル・荷棒などによく使われる材である。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 PL161 5a-5c (No334)

中型～小型の管孔が単独で放射方向や斜状に配列し、年輪界は不明瞭、広放射組織をもち、木部柔組織が接線状に配列し顕著な放射孔材である。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は単独である。放射組織はほぼ同性、単列のものと集合状・複合状の広放射組織があり、道管との壁孔は櫛状・交互状で口孔は大きい。

アカガシ亜属はコナラ属の中で常緑でドングリをつけるカシ類の仲間でもおに暖温帯に分布する。山野や山中に普通なアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジログシなどがある。

材は丈夫で弾性や耐湿性があり、農具として用いられている。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Q. subgen. Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 PL161 6a-6c (No390)

年輪の始めに大形の管孔が1～3層配列し、その後小型・厚壁の管孔が単独で放射方向に配列し広放射組織をもち、接線状・網状の柔組織が顕著な環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、チロースがある。放射組織は同性、単列のものと集合状のものがあり、道管との壁孔は櫛状である。

クヌギ節は落葉性のドングリの仲間でのうちのクヌギとアベマキが属する。いずれの種も暖帯の山林に普通の高木でクヌギは二次林に多く、関東ではクヌギ、瀬戸内海沿岸地方にはアベマキが多い。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 PL162 7a-7c (No393)

中型～大型の管孔が密に配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列し、柔組織が接線状に配列する環孔材である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性である。

暖帯～温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は耐朽性にすぐれ、縄文時代からは柱材の使用例が有名である。

ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科 PL162 8a-8c (No407)

年輪の始めに大型の管孔が1層並び、晩材部では薄壁・多角形の非常に小型の管孔が多数集合して接線状・斜状に配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管の内壁にらせん肥厚がある。放射組織は異性、8細胞幅のものが多く、上下端・縁辺に結晶細胞がある。

暖帯下部～温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材の用途は広く有用材である。

カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科 PL162 9a-9c (No316)

小型の管孔が年輪内に密に年輪内ではやや径を減じ、管孔の占有面積が多い散孔材である。道管の壁孔はまばらな交互状あるいは水平に開いた口孔の長さが不揃いの階段状、穿孔は横棒の数が多段階穿孔である。放射組織は異性、1～2細胞幅、多列部の上下端や中間に方形・直立細胞が単列で1～数層ある。道管と放射

組織との壁孔は階段状または交互状である。

北海道から九州の暖帯から温帯の渓谷に生育する落葉高木である。材は均質でやや軽軟、割裂性・切削性は良く、狂いは少ないが保存性はあまり良くない。

マタタビ属 *Actinidia* マタタビ科 PL163 10a-10c (No404)

年輪の始めに極めて大型の管孔が並び、晩材部は中～小型の管孔が分布し、管孔はほとんど単独で分布しており年輪界が不明の環孔材である。道管の壁孔は小型で密在しており口孔はレンズ状に開き全体に流れるように見え、穿孔は単一である。放射組織は異性、単列で10細胞幅前後のものとして8細胞幅の背の高い紡錘形のものがある。

暖帯上部～温帯に山中に生育する落葉性の藤本で、マタタビとサルナシが普通にある種でその果実は食べられ、蔓は籠の材料や材を縛るのに用いられる。かざら橋はサルナシを用いる。

サクラ属 *Prunus* バラ科 PL163 11a-11c (No331)

小型の管孔が年輪の始めにやや密に分布し、その後放射方向・接線方向・斜状に複合して全体的にうねるように分布している散孔材である。道管の壁孔は対列状または交互状、穿孔は単一、内腔に細いせん肥厚がある。放射組織は同性の試料と異性の試料があり、約5細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。

サクラ属は暖帯～温帯の山地に生育し、落葉広葉樹林の代表的な種で多くの種を含む。ほとんどの種が落葉性の高木であり、モモ・ウメなど果実が食べられるものが多い。材は粘り気があり強く保存性も高いので用途は広い。

カエデ属 *Acer* カエデ科 PL163 12a-12c (No413)

小型～中型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合し散在し、帯状の柔組織が顕著、年輪界は不明瞭な散孔材である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にせん肥厚がある。放射組織は同性、1～4細胞幅である。

暖帯～温帯上部の山地や谷筋に生育し、落葉広葉樹林の代表的な属で多くの種を含み、そのほとんどは落葉性である。材は有用で用途も広い。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 PL164 13a-13c (No465)

小型～中型の管孔が単独または2～数個が複合して散在する散孔材である。道管の壁孔は交互状に接合して配列、穿孔は単一、内腔にせん肥厚がある。放射組織は単列同性で層階状に配列している。道管と放射組織の壁孔はやや大きく、円形で交互状に密在する。

温帯の谷間に生育する落葉高木である。種子はアク抜きが必要だが食用となり、材は軽軟で緻密で加工し易く、材面は絹糸光沢がある。木理は不規則で耐久性は低く狂いがやすい。容器などによく使われている。

ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメドキ科 PL164 14a-14c (No411)

単独または放射方向に2～3個複合し、年輪の始めに中型の管孔が1～2層配列し、除々に径を減じてゆき、晩材部は非常に小型で厚壁の管孔が散在し、周囲状・翼状の柔組織が顕著な散孔材である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は異性、1～4細胞幅、上下端に方形細胞・直立細胞が単列で伸び、

V 出土遺物の理科学的分析

結晶細胞が顕著である。

暖帯の山中に生育する落葉高木である。本州・四国に分布するケンボンナシと北海道から九州に広く分布するケンボンナシがある。果実は食べられ、材質はよく、有用である。

エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 PL164 15a-15c (No409)

小型の管孔が単独または2~4個が複合して放射方向に配列散在し晩材部では径が減少する散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒が5~20本の階段穿孔である。放射組織は異性、1~4細胞幅、道管との壁孔は小型で交互状である。

暖帯~温帯下部の山地に生育する落葉高木である。エゴノキ・ハクウンボク・コハクウンボクがある。エゴノキは川辺にも普通にあり果皮はエゴサポニンを含み石鹸の代用になる。材は柄や器具に使われている。

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 PL165 16a-16c (No317)

中型~大型の管孔が2~3層配列し、単独または2個複合した小型で厚壁の管孔が散在する環孔材である。周囲状柔組織がある。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、1~2細胞幅である。

おもに温帯に生育する落葉高木でシオジ (*F. spaethiana*)・ヤチダモ (*F. mandshurica* Rupr. var. *japonica*)・トネリコ (*F. japonica*)・アオダモ (*F. serrata*) など約9種ある。材は重硬で弾力性があり折れ難く、機械類・板材・棒・柄などに使われる。遺跡からは建築材・板・枕・柄・碗などの使用例がありよく使用されている樹種である。

タケ亜科 *Gramineae* subfam. *Bambusoideae* イネ科 PL165 18a-18b (No296)

稈は木質で硬い。維管束が多数散在する不整中心柱である。維管束は原生木部とその左右に後生木部がありその間に節部があり、全体が繊維組織に囲まれている。この維管束鞘は非常に厚い。維管束の散在数は多い。稈の破片や組織のみからは属や種を識別することは難しい。

ヨシ属 *Phragmites* イネ科 PL166 19a-19b (No328) 20a-20b (No330)

稈の直径はNo330は直径0.8cmありそのほかの試料は直径0.5cmで、維管束が散在する不整中心柱である。維管束は原生木部とその左右に後生木部がありその間に節部があり、全体が繊維組織に囲まれている。稈の外縁の維管束鞘は厚いが、内部のものは少ない。

川岸や湿地に生育する大型の多年草でツルヨシ・ヨシ・セイタカヨシがある。稈の一部分では区別するのは難しい。

引用文献

- 藤根 久 (1995) ヌカリ沢A竈址出土炭化材の樹種 「ヌカリ沢A竈址発掘調査報告書」 p.59-61 群馬県多野郡吉井町教育委員会
辻 謙一郎 (1993) 植物と気候 「古墳時代の研究1」 p.105-122 雄山閣
山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史 242pp. 植生史研究会

表9. 出土炭化材樹種同一覧

試料No	遺物番号	樹種
296	白A12住一炭1	クリ・タケ壱科
297	白A12住一炭2	タケ壱科
298	白A12住一炭3	タケ壱科
299	白A12住一炭4	クリ・タケ壱科
300	白A12住一炭5	ク リ
301	白A12住一炭6	ク リ
302	白A12住一炭7	イヌガヤ
303	白A12住一炭8	ク リ
304	白A12住一炭9	ク リ
305	白A12住一炭10	ク リ
306	白A12住一炭11	ク リ
307	白A12住一炭12	ク リ
309	白A12住一炭14	サクラ属
310	白A12住一炭15	イヌガヤ・ヨシ属
312	白A12住一炭17	ク リ
313	白A12住一炭18	ク リ
314	白A12住一炭19	モミ属
315	白A12住一炭20	ク リ
316	白A12住一炭21	カ ツ ラ
317	白A12住一炭22	トネリコ属
318	白A12住一炭23	ク リ
319	白A12住一炭24	ク リ
320	白A12住一炭25	ク リ
321	白A12住一炭26	ク リ
322	白A12住一炭27	ク リ
323	白A12住一炭28	ク リ
324	白A12住一炭30	タケ壱科
325	白A12住一炭32	ク リ
326	白A12住一炭33	ク リ
327	白A12住一炭34	ク リ
328	白A12住一炭化材	ヨシ属
329	白A12住一炭炭カヤ	ヨシ属
330	白A12住一ヨシズ	ヨシ属
331	白A63住一炭3	サクラ属
332	白A63住一炭4	コナラ属アカガシ亜属
334	白A63住一炭6	コナラ属アカガシ亜属
335	白A63住一炭7	アカガシ亜属・ヨシ属
336	白A63住一炭8	サクラ属
337	白A63住一炭9	カ ツ ラ
473	白A63住一炭10	サクラ属
338	白A63住一炭11	サクラ属
339	白A63住一炭12	ケヤキ
340	白A63住一炭13	コナラ属アカガシ亜属
341	白A63住一炭14	コナラ属アカガシ亜属
342	白A63住一炭15	サクラ属
343	白A63住一炭16	ク リ
344	白A63住一炭17	コナラ属アカガシ亜属
345	白A63住一炭18	ク リ
346	白A63住一炭19	コナラ属アカガシ亜属
347	白A63住一炭20	コナラ属アカガシ亜属

試料No	遺物番号	樹種
348	白A63住一炭21	コナラ属アカガシ亜属
350	白A63住一炭23	サクラ属
351	白A63住一炭24	サクラ属
352	白A63住一炭25	サクラ属
353	白A63住一炭26	サクラ属
354	白A63住一炭27	サクラ属
355	白A63住一炭28	サクラ属
356	白A63住一炭29	サクラ属
357	白A63住一炭30	ク リ
358	白A63住一炭31	コナラ属アカガシ亜属
359	白A63住一炭32	ク リ
360	白A63住一炭33	ク リ
362	白A63住一炭35	サクラ属
363	白A63住一炭36	サクラ属
364	白A63住一炭37	サクラ属
365	白A63住一炭38	サクラ属
367	白A63住一炭40	サクラ属
368	白A63住一炭41	サクラ属
369	白A63住一炭42	コナラ属アカガシ亜属
370	白A63住一炭43	コナラ属アカガシ亜属
371	白A63住一炭44	コナラ属アカガシ亜属
372	白A63住一炭45	サクラ属・ヨシ属
373	白A63住一炭46	サクラ属
374	白A63住一炭47	アカガシ亜属・ヨシ属
375	白A63住一炭48	コナラ属アカガシ亜属
376	白A63住一炭49	コナラ属アカガシ亜属
377	白A63住一炭50	ヨシ属
378	白A63住一炭51	サクラ属
379	白A63住一炭52	サクラ属
380	白A63住一炭53	イヌガヤ
381	白A63住一炭54	サクラ属
382	白A63住一炭56	サクラ属
383	白A63住一炭57	サクラ属
384	白A63住一炭58	コナラ属アカガシ亜属
385	白A63住一炭59	サクラ属
386	白A63住一炭60	サクラ属
387	白A63住一P24の下の炭	ヨシ属
388	白A63住一S-41	広葉樹
389	白A118住一炭1カマド	ケヤキ
390	白A118住一炭2	コナラ属クヌギ節
391	白B15住一2	サクラ属
392	白B15住一3	ク リ
393	白B18住一42	ク リ
394	天C45住一炭1	コナラ属クヌギ節
395	天C45住一炭2	ク リ
396	天C45住一炭4	ク リ
474	天C82住一炭	コナラ属クヌギ節
397	天C102住一炭1	コナラ属クヌギ節
398	天C102住一炭2	コナラ属クヌギ節
399	天C102住一炭3	コナラ属クヌギ節

V 出土遺物の理科学的分析

試料No	遺物番号	樹種
400	天C102住一炭4	コナラ属クヌギ節
401	天C102住一炭5	ク リ
402	天C102住一炭6	コナラ属クヌギ節
403	天C102住一炭7	コナラ属クヌギ節
404	天C128住一炭1	マタタビ属
405	天C128住一炭2	エゴノキ属
406	天C128住一炭3	クマシデ属イヌシデ節
407	天C128住一炭4	ケヤキ
408	天C128住一炭5	ク リ
409	天C128住一炭6	エゴノキ属
410	天C128住一炭7	エゴノキ属
411	天C128住一炭8	ケンボナシ属
412	天C128住一炭9	クマシデ属イヌシデ節
413	天C128住一炭10	カエデ属
459	白A6基一炭1	マツ属複維管束亜属
460	白A6基一炭2	マツ属複維管束亜属
461	白A6基一炭3	マツ属複維管束亜属
462	白A6基一炭4	マツ属複維管束亜属
463	白A6基一炭5	マツ属複維管束亜属
464	白A6基一炭6	マツ属複維管束亜属
465	白B谷①-No.35	トチノキ
466	白B谷-No.1375	コナラ属クヌギ節
467	天B1土坑-P14	コナラ属クヌギ節

表10 遺構別出土樹種一覧

分類群\遺構	白A		白A	白B	白B	天C	天C	天C	天C	白A	白B	天B
	12住	63住	118住	15住	18住	45住	82住	102住	128住	6基	谷	1土坑
モミ属	1											
複維管束亜属										6		
イヌガヤ	2	1										
イヌシデ節									2			
クマシデ節		1										
アカガシ亜属		17										
クヌギ節			1			1	1	6			1	1
ク リ	21	5		1	1	2		1	1			
ケヤキ		1	1						1			
カツラ	1	1										
マタタビ属									1			
サクラ属	1	27		1								
カエデ属									1			
トチノキ											1	
ケンボナシ属									1			
エゴノキ属									3			
トネリコ属	1											
タケ亜科	5											
ヨシ属 (a)	3	5										
ヨシ属 (b)	1											
合 計	36	58	2	2	1	3	1	7	10	6	2	1

2 出土種実の分析

新山雅広 (バネオ・ラボ)

1. はじめに

ここで分析を行う種実とは、遺構覆土をフローテーションしたもの (No88~94) と木器とともに出土したもの (No95~100) からなる。各試料の出土位置は表11に示してあるので参照してほしい。

2. 出土した大型植物化石

試料はNo88 (奈良時代)、No90~93 (平安時代) が白倉下原遺跡から出土した大型植物化石であり、No89 (奈良時代)、No94~100 (中世?) が天引向原遺跡から出土した大型植物化石である。白倉下原遺跡から出土した大型植物化石は、木本ではモモ、草本ではイネ、アサである。天引向原遺跡から出土した大型植物化石は、木本ではオニグルミ、コナラ属、スモモ、モモ、草本ではオオムギ、コムギ、イネ、ササグ属である。これら両遺跡から出土した大型植物化石の一覧を表11に示す。

3. 栽培・利用植物について

白倉下原遺跡から出土した大型植物化石 (モモ、イネ、アサ) は全て栽培植物と考えられる。天引向原遺跡から出土した大型植物化石のうち、栽培植物と考えられるものはスモモ、モモ、オオムギ、コムギ、イネ、ササグ属 (アズキ、リュクトウの類) であり、ササグ属の中には吉崎(1992)によるリュクトウの仲間もみられた (試料95)。他に、遺跡周辺に生育していたものと思われるオニグルミ、コナラ属は食用となり、利用可能である。

4. 大型植物化石の記載

オニグルミ *Juglans ailanyhifolia* Carr. 炭化核

核は側面観は卵形から円形、先端は鋭頭、上面観は円形。表面は、縦に不規則な隆起があり、明瞭な1本の縫合線が縦に走る。

コナラ属 *Quercus* 炭化子葉

炭化した子葉が縦半分に割れた状態になっており、果皮は残っていない。

スモモ *Prunus salicina* Lindl. 炭化核

核はやや扁平な楕円形。表面は比較的滑らかで溝や孔のような明瞭なくぼみはない。

モモ *Prunus persica* (Linn.)Batsch 炭化核

核は扁平な楕円形。一方の側面には縫合線が発達する。表面には不規則な流れるような溝と孔がある。

オオムギ *Hordeum vulgare* Linn. 炭化胚乳

側面観は楕円形、上面観は扁平。

V 出土遺物の理科学的分析

コムギ *Triticum aestivum* Linn. 炭化胚乳

側面観は楕円形、上面観は偏平。

イネ *Oryza sativa* Linn. 炭化胚乳

側面観は楕円形、上面観は偏平。

アサ *Cannabis sativa* Linn. 炭化種子

アサの種子は楕円レンズ形で表面に血管状の模様があり、下端には肥厚したへそがあるが、出土した炭化種子は破損が著しい。

ササゲ属 *Vigna* 炭化種子

子葉の内面には、本葉につく長くて明瞭な柄の痕跡がみられる。なお、試料95のササゲ属の中には、子葉の内面の幼根と初出葉が確認できるものがみられ、幼根の立ち上がりの角度から吉崎(1992)によるリョクトウの仲間と思われる。

なお、同定にあたっては流通科学大学の南木睦彦助教授にご指導して頂いた。ここに感謝致します。

引用文献 吉崎昌一 「古代雑穀の検出」『考古学ジャーナル』No.355,1992

表11 出土種実一覧表

No	分類群と個数	出土位置
88	モモ、炭化核、1	白倉C区57号住居掘り方
89	モモ、炭化核、約2個分(完形1+破片多数)	天引66号住居床直
90	アサ、炭化種子、1	白倉A区9号土坑覆土
91	イネ、炭化胚乳、1	白倉A区9号土坑覆土
92	モモ、炭化核、(1)	白倉B区21号土坑覆土
93	モモ、炭化核、破片多数(約半分)	白倉B区136号土坑覆土
94	コナラ属、炭化子葉、(1)	天引C区4号井戸上層
95	コムギ、炭化胚乳、1、ササゲ属、炭化種子、8(うち1個はリョクトウの仲間)	天引E区畚土
96	オムギ、炭化胚乳、1、イネ、炭化胚乳、1	天引E区畚土
97	オニグルミ、核、(6)、スモモ、核、1、モモ、核、4、(8)、B2	天引F区B区石下
98	オニグルミ、核、1、モモ、核、2、(2)	天引F区B区石下
99	モモ、核、1、(3)、B4	天引F区B区石下
100	モモ、核、(1)、B2	天引F区B区石下

3 出土木製品の樹種分析

(株) パレオ・ラボ 松葉孔子

1. はじめに

今回調査した木質遺物は、出土地区、時代によって2大別される。F区(遺物番号1~78、計83点)出土の遺物は、浅間B軽石に覆われた水田付近から出土しており、12世紀前後と推定され、D区出土(遺物番号79~157、計73点)の遺物は浅間A軽石が堆積している溜池から出土したため江戸時代もしくはそれ以降と考えられる。これらの遺物は、谷筋にあたる一段低い場所にあり、同じ遺跡内であるが近接しておらず遺跡の西端と北東端に位置している。

調査した製品の中では杭や棒状製品など土木用材や半製品、木片が多く、調査点数は計156点である。これらの遺物の樹種を同定する事によって、植生変化と木材利用がどのように変化したかを明らかにする事の一環となる事を目的として樹種を同定した。

2. 方法と記載

同定には、木製品から直接片歯剃刀を用いて、木材組織切片を横断面(木口と同義・写真図版a)、接線断面(板目と同義・写真図版b)、放射断面(柀目と同義・写真図版c)の3方向作成した。これらの切片は、ガムクロラルにて封入し、乾燥させ永久標本とした。樹種の同定には、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。これらの内、各分類群を代表させる標本については写真図版を添付し、同定の証拠とするとともに同定根拠は後述する。結果は、表14 出土木製品の樹種同定結果に示す。

なお、木材組織プレパラートは、群馬県埋蔵文化財センターに保管されている。

同定根拠

モミ属 *Abies* sp. PINACEAE

写真PL160 1a~1c

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹。早材から晩材の移行は緩やかで、年輪界は明瞭。放射組織は柔細胞のみからなり単列。その水平壁には単穿孔が多く数珠状を呈す。分野壁孔はきわめて小型で、1分野に1~4個程度。

以上の形質より、マツ科のモミ属の材と同定した。モミ属にはモミを始めとして、5種が含まれる。いずれも、常緑高木の針葉樹である。

トウヒ属 *Picea* sp. PINACEAE

写真PL160 2a~2c

水平・垂直両樹脂道を共に持つ針葉樹材。樹脂道の周囲には6~8個のエピセリウム細胞が有る。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部は量が多い。放射組織は、放射柔細胞と放射仮道管と放射樹脂道からなり、単列のものと紡錘形のものがある。放射組織の上下端には放射仮道管があり、その内壁にしばしば歯状の突起と角張った有縁壁孔が見うけられる。放射柔細胞の垂直壁には単穿孔が数珠状を呈す。分野壁孔はごく小型のトウヒ型で、1分野に2~4個存在する。

以上の形質により、マツ科のトウヒ属の材と同定した。トウヒ属にはエゾマツを始めとして7種が知られている。いずれも常緑高木の針葉樹である。

V 出土遺物の理科学的分析

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. PINACEAE 写真PL160 3a~3c

水平・垂直両樹脂道をともに持つ針葉樹。樹脂道の周囲にはエビセリウム細胞が見られる。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭。放射組織は、放射柔細胞と放射仮道管と放射樹脂道からなり、単列と紡錘形のものがある。放射組織の上下端に放射仮道管があり、水平壁には鋭角な歯状の肥厚が著しい。分野壁孔は大型の窓状で、1分野に1~2個。

以上の形質から、マツ科のアカマツの材と同定した。常緑高木の針葉樹で、北海道~屋久島の温帯から暖帯にかけて分布し、材は脂分が多く重硬である。

ツガ属 *Tsuga* sp. PINACEAE 写真PL161 4a~4c

垂直・水平両樹脂道のいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材にかけての移行はやや急で、晩材部の量は多く、年輪界は明瞭。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管からなり、単列。放射組織の上下端に放射仮道管を持つ。放射柔組織の水平壁には単穿孔が著しく数珠状を呈す。分野壁孔はごく小型のトウヒ型で1分野に1~4個存在する。

以上の形質により、マツ科のツガ属の材と同定した。ツガ属にはツガとコマツガ2種が含まれるが、いずれも常緑高木の針葉樹である。

スギ *Cryptomeria japonica* (L. fil.) D. Don TAXODIACEAE 写真PL161 5a~5c

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて接線方向に散在する。放射組織は放射柔細胞のみからなり単列。分野壁孔は、大型のスギ型で、通常1分野あたり2個存在する。

以上の形質により、スギ科のスギの材と同定した。スギは、常緑の針葉樹で、本州~屋久島の温帯から暖帯、主として太平洋側に多く存在している。材は、木理が通直で、割裂性がよく加工しやすい。

ヒノキ属 *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. CUPRESSACEAE 写真PL161 6a~6c

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞が早材部と晩材部の境に接線状に散在しており、水平壁は結節状に肥厚している。放射組織は、放射柔組織のみからなり、単列。分野壁孔は中型のトウヒ~ヒノキ型で、1分野に1~3個。

以上の形質から、ヒノキ科のヒノキの材と同定した。ヒノキは、常緑高木の針葉樹で、福島県~屋久島の温帯に分布し、材は緻密で水湿に強く加工が容易な良材である。ヒノキ、サワラ両者の区別がつかないものは、はっきりしない為、ヒノキ属と同定した。

カヤ *Torreya nucifera* (L.) Sieb. et Zucc. TAXACEAE 写真PL162 7a~7c

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は緩やかであるが、年輪界は明瞭。樹脂細胞も欠き、放射組織は放射柔細胞のみからなり単列。分野壁孔は小型のヒノキ~トウヒ型。仮道管内壁に、顕著な対列状の螺旋肥厚がある。

以上の形質により、イチイ科のカヤの材と同定した。カヤは、宮城県~屋久島まで分布する常緑高木の針葉樹。種子から油が取れる。

ヤナギ属 *Salix* sp. SALICACEAE

写真PL162 8a~8c

やや小型で丸い管孔が、単独あるいは2~3個放射方向の複合して多数存在する散孔材。道管の直径は年輪界に向け徐々に減少する。道管の穿孔は単一。放射組織は単列の異性で、道管との壁孔は蜂の巣状を呈し密である。

以上の形質より、ヤナギ科のヤナギ属の材と同定した。日本に産するのヤナギ属には、34種あり、材の形質上これらをさらに細分する事はできない。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. FAGACEAE

写真PL162 9a~9c

年輪の始めに、やや放射方向に伸びた大型の丸い管孔が一列に並ぶ環孔材。晩材部では、小型で、薄壁の角張った管孔が、火炎状から放射状に配列する。道管の穿孔は単一。木部柔組織は、晩材部で接線状から単接線状。放射組織は単列同性で、道管との壁孔は、対列状を呈す。

以上の形質より、ブナ科のクリの材と同定した。クリは、北海道から九州までの温帯下部から暖帯にわたって広く分布する落葉性高木、あるいは中高木で、果実が食用とされる。材質は保存性に優れる為、建築材などに広く使用される。

コナラ亜属コナラ節 Subgen. *Quercus* Sect. *Prinus* FAGACEAE

写真PL163 10a~10c

大型で丸い道管が単独、時に複合して年輪界に一列に並ぶ環孔材。晩材部では急激に径を減じた多角で薄壁の道管が散在し火炎状を呈し、木部柔組織は接線状に配列する。放射組織は単列と大型の複合放射組織からなり、同性。道管放射組織間壁孔は楕円形の対列状~櫛状。

以上の形質より、ブナ科のコナラ節の材と同定した。コナラ節には、カシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシワ等が含まれ、いずれも落葉高木である。

アカガシ亜属 Subgen. *Cyclobalanopsis* sp. FAGACEAE

写真PL163 11a~11c

中型で厚壁の円形の道管が単独で、放射方向に幅を持って配列する放射孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は1~3細胞程度程度の接線方向の帯状を呈す。放射組織は、単列同性で、時に複合状となる。放射組織道管間の壁孔は櫛状を呈す。

以上の形質より、ブナ科コナラ属アカガシ亜属の材であると同定した。日本に産するアカガシ亜属には8種が含まれ、いずれも常緑高木。材質は、重硬で強靱であり弾性に富む。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ULMACEAE

写真PL163 12a~12c

年輪の始めに大型で丸い管孔が一列に並ぶ環孔材。晩材部では、薄壁の多角形の小道管が多数集合して接線方向~斜め接線方向に配列する管穿孔は単一、小道管内部には螺旋肥厚を持つ。木部柔組織は、周閉状~連合翼状を呈し、放射組織は1~8列程度の異性で、その上下端は時に大きめの結晶細胞が見られる。

以上の形質より、ニレ科のケヤキの材と同定した。ケヤキは、本州~九州の暖帯~温帯に広く分布する。材は、木目が美しく重硬で狂いが少なく、保存性が高い。

ヤマグワ *Morus australis* Poir. MORACEAE

写真PL164 13a~13c

年輪の始めに、大道管がならび、そこから順次径を減じた小道管が接線状~斜め接線状に配列する傾向を持

V 出土遺物の理科学的分析

つ環孔材。道管の穿孔は単一で、時にチロースを含む。小道管は螺旋肥厚をもち、木部柔組織は周囲状。放射組織は異性で、1～5細胞幅程度である。

以上の形質により、クワ科のヤマグワの材と同定した。ヤマグワは、高さ3～10mほどになる落葉低木で、分布は北海道・本州・四国・九州・琉球で、温帯から亜熱帯の低山地の林内に生える。性質は、中庸樹で、多く適潤またはやや湿気ある谷あいままたはこれに接する斜面などの肥沃な深層土を最も好み生育する。

クスノキ科 LAURACEAE sp.

写真PL164 14a～14c

中型で丸い道管が単独、あるいは2～3個複合して徐々に径を減じて散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は、顕著な周囲状でしばしば油細胞を持つ。放射組織は、数細胞幅の異性。

以上の形質から、クスノキ科の材と同定した。クスノキ科の材は更に区分できるが、状態が悪く放射組織の列、形状、壁孔などが観察できないため科の同定とした。

カエデ属 *Acer* sp. ACERACEAE

写真PL164 15a～15c

中型の丸い道管が単独もしくは複合して年輪内に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁には微細な螺旋肥厚が見受けられる。放射組織は単列同性で、1～4細胞幅。木部柔組織はしばしば年輪界付近で結晶を持つ。

以上の形質により、カエデ科のカエデ属の材と同定された。カエデ属は、日本に28種自生し、亜熱帯性のものを除けば落葉広葉樹である。

ヤマウルシ *Rhus trichocarpa* Miq. ANACARDIACEAE

写真PL165 16a～16c

中型で丸い管孔が単独あるいは2～3個年輪界に沿って配列し、晩材部では小型の管孔が単独あるいは放射方向に数個複合して散在する環孔材。道管の直径は年輪界に向けて緩やかに減少する。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁には螺旋肥厚がある。放射組織は異性で、1～2細胞幅程度で、道管との壁孔は大型の対列状。

以上の形質から、ウルシ科のヤマウルシの材と同定した。ヤマウルシは、北海道～九州の山地の林内に生える落葉小高木である。

ブドウ属 *Vitis* sp. VITACEAE

写真PL165 17a～17c

早材部に大型で丸いや放射方向に伸びた道管が、単独あるいは2、3個複合して3列ほど配列し、晩材部では急激に径を減少した小道管が散在する環孔材。道管の穿孔は単一で、道管相互壁孔は、階段状。放射組織は同性。直立細胞からなる単列のものと、背の高い大型の複合放射組織がある。時に、結晶細胞が見られる。

以上の形質より、ブドウ科のブドウ属の材と同定した。日本に自生するブドウ属の本木には、6種が含まれ、いずれもつる性落葉木本で、巻ひげにより上昇する。

ニワトコ *Sambucus sieboldiana* Blume CAPRIFOLIACEAE

写真PL165 18a～18c

早材部では小型の道管が単独もしくは数個複合して年輪界に並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が、斜め接線方向に配列する散孔材。年輪の終わりには、小道管が帯状に配列している。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で1～5細胞幅程度、鞘細胞を持つ。

以上の形質により、スイカズラ科のニワトコの材と同定した。ニワトコは、本州～九州の低地～低山地に分

布する落葉低木。

3. 考 察

1. はじめに述べたように、今回調査した遺物には、大別して12世紀前後の物（F区）と江戸時代以降と推定される（D区）遺物がある。時代も、出土地も違うので別々に考察したいと思う。

まず、F区の方であるが、表12のF区製品別樹種同定表を見ると、全体的にクリ材が多く、全体の約6割弱を占めている。これは、同遺跡で行われた古墳時代の結果とは異なる傾向である。古墳時代では、アカガシ亜属が半数弱を占めそれ以外には特に集中する樹種もなく、低木のいわゆる雑木的な樹種も多く含まれているのに対して、F区では針葉樹の割合が増え、雑木にあたる樹種が見られなくなる。

製品の傾向としては、板や板状木製品が増え、半製品である分割材や、加工の際の余分な加工屑を含む加工木片も増える。板を使用した製品が増えた事で、割裂性の良い針葉樹が計20点中7点まで占め、針葉樹材が全体的に増えている。しかし、硬く割裂困難なクリが、板材20点中13点もしめる。出土状況は塊状に木材がまとまって出土しており、その並び方に意図は感じられず製品が少ない事から、破棄された材であると考えられる。

前述したように、同遺跡の古墳時代に優占したアカガシ亜属の木材は、12世紀に入り激減し、クリ材が増える。浅間B経石後の植生は館林市の花粉分析によれば、古墳時代から変化せずコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クマシテ・アサダ・サワグルミ属による、落葉広葉樹林と照葉樹林が混じる植生である。クリが増える傾向は、同遺跡から出土する炭化材にも見受けられる。クヌギーコナラ群落には、確かにクリが含まれるが（環境庁自然保護局 1987）、それにしてはコナラ亜属材が少なく、花粉分析中のクリの割合が低い。クリの果実を食用にする為、局部的に管理していたとしても種実同定の結果には果皮が見受けられずその可能性は低い。アカガシ亜属材からクリ材を好む何らかの変化があったと考えられる。

D区の江戸時代以降の遺物では、全体的な樹種は針葉樹が急激に増える傾向がある。浅間A降下前後の植生は、それ以前に比べマツ属の漸増と優占とカバノキ属、ハンノキ属、クリ・シイノキ属、エノキ・ムクノキ属が増え、コナラ亜属や、アカガシ亜属が減少する（1986 辻ほか）。これらを反映して、本遺跡でも針葉樹が圧倒的に優占し全体の約7割弱を占め、特にスギ、マツ属が増える。

製品では、12世紀から増えてきた板がその個数がさらに増えすべてが針葉樹材で作られるようになる。それに対して、古墳時代、F区で多かった樺は数を減らしており、木材の利用が板材利用へと更に変化している。スギ等の針葉樹材が多くなっていく傾向に対しては、ほぞ穴付き木製品、鉤手状木製品やへら状木製品にはモミ属、そしてコナラ節、ケヤキ、ヤマグワなど、中世以前にも見られたような樹種選択も残存する。材質を選ばない、もしくは適材については従来と同様の選択していたようである。出土状況では、3箇所の木材の集積箇所が見られるが、木片や製品が混在した状態で出土していることからF区と同様な状況である。

引用文献

- 辻 誠一郎・南木睦彦・小杉正人、1986、茂林寺沼及び低地深源調査報告書 第2集 館林の池沼群と環境の変遷史。館林市教育委員会、110pp。
環境庁自然保護局編、1987、第3回自然環境保全基礎調査、79pp、日本野生生物研究センター、東京。

V 出土遺物の科学的分析

表12 F区製品別樹種同定表

	板	二又状 木製品	棒	木製品	分割材	加工 木片	木片	計
モミ属	5				3		3	11
ツグ属	1		2				1	4
スギ							1	1
ヒノキ属	1		1		1			3
カヤ					1			1
ヤナギ属		1	2		1			4
クリ	13		3		8	19	6	49
アカガシ亜属				1	1	1		3
ヤマグワ			1					1
カエデ属						1		1
ヤマウルシ			1					1
ニワトコ			2				1	3
微孔材			2					2
計	20	1	14	1	15	21	12	84

表13 D区製品別樹種同定表

	楕 側板	楕 底板	組み物	籠状 木製品	鉤手状 木製品	ホゾ穴 木製品	杖	板	棒	分割材	木製品	木片	枝	不明	計
モミ属															0
アカマツ				1			1	2		3	1				8
マツ属複数															0
管束亜属								5		2		1			8
マツ属								1							1
トウヒ属								1							1
ツグ属	2	2					1								5
スギ								11	1			1			13
ヒノキ属								5				1		1	7
カヤ								3							3
針葉樹								3					1		4
ヤナギ属															0
クリ							4			1		1			6
コナラ属						1									1
アカガシ亜属			1				1				1				3
ケヤキ						1							1		2
ヤマグワ					1							3			4
クスノキ科									1						1
ヤマウルシ										1		2			3
ブドウ属												1			1
ニワトコ													1		1
計	2	2	1	1	1	2	7	31	3	6	1	11	3	1	72

表14出土土製品の種類同定結果

番号	樹種	製品名	形状	時代
1	ヒノキ属	棒	角	12世紀前後
2	ツガ属	板		12世紀前後
3	ツガ属	木片		12世紀前後
4	クリ	木片	加工	12世紀前後
5	カエデ属	木片	加工	12世紀前後
6	クリ	木片	加工	12世紀前後
7	クリ	木片	加工	12世紀前後
8	アカガシ	木片	加工	12世紀前後
9	クリ	板片		12世紀前後
10	クリ	木片	加工	12世紀前後
11	クリ	木片	加工	12世紀前後
12	クリ	板片		12世紀前後
13	クリ	木片	加工	12世紀前後
14	クリ	板		12世紀前後
15	ヤマウル	棒	丸	12世紀前後
16	モミ属	木片		12世紀前後
17	クリ	板		12世紀前後
18	ニワトコ	木片		12世紀前後
19	クリ	木片		12世紀前後
20	モミ属	板		12世紀前後
21	クリ	板		12世紀前後
22	クリ	板		12世紀前後
23	モミ属	板		12世紀前後
24	スギ	木片		12世紀前後
25	ヒノキ属	分割材		12世紀前後
26	モミ属	板		12世紀前後
27	クリ	木片		12世紀前後
28	モミ属	板片		12世紀前後
29	モミ属	木片		12世紀前後
30	クリ	木片		12世紀前後
31	クリ	木片		12世紀前後
32	クリ	木片	加工	12世紀前後
33	クリ	棒	丸	12世紀前後
34	クリ	分割材		12世紀前後
35	クリ	木片		12世紀前後
36	クリ	木片	加工	12世紀前後
37	クリ	木片	加工	12世紀前後
38	ニワトコ	棒		12世紀前後
39	モミ属	分割材		12世紀前後
40	モミ属	木片		12世紀前後
41	モミ属	分割材		12世紀前後
42	クリ	分割材		12世紀前後
43	クリ	分割材		12世紀前後
44	ヒノキ	板片		12世紀前後
45	クリ	木片		12世紀前後
46	モミ属	板		12世紀前後
47	クリ	木片	加工	12世紀前後
48	散孔材	棒	丸	12世紀前後
49	クリ	分割材		12世紀前後
50	クリ	分割材		12世紀前後
51	クリ	木片	加工	12世紀前後
52	クリ	板		12世紀前後
53	クリ	木片	加工	12世紀前後
54	クリ	木片	加工	12世紀前後
55	クリ	木片	加工	12世紀前後
56	クリ	板		12世紀前後
57	クリ	木片	加工	12世紀前後
58	クリ	板		12世紀前後

番号	樹種	製品名	形状	時代
59	クリ	木片	加工	12世紀前後
60	クリ	板		12世紀前後
61	クリ	分割材		12世紀前後
62	クリ	板片		12世紀前後
63	クリ	分割材		12世紀前後
64	クリ	板片		12世紀前後
65	クリ	木片	加工	12世紀前後
66	クリ	木片	加工	12世紀前後
67	クリ	木片	加工	12世紀前後
68	クリ	分割材		12世紀前後
69	ヤナギ属	棒	丸	12世紀前後
70	クリ	棒	丸	12世紀前後
70	モミ属	分割材		12世紀前後
70	クリ	板		12世紀前後
71	アカガシ	木製品		12世紀前後
72	ヤナギ属	棒	丸	12世紀前後
73	ヤマグワ	棒状木製品		12世紀前後
73	クリ	棒状木製品		12世紀前後
73	ツガ属	棒状木製品		12世紀前後
74	散孔材	棒	丸	12世紀前後
74	ニワトコ	棒	丸	12世紀前後
75	カヤ	分割材		12世紀前後
76	アカガシ	分割材		12世紀前後
77	ヤナギ属	二又状木	製品	12世紀前後
78	ヤナギ属	分割材		12世紀前後
79	ヒノキ	板片		江戸時代以降
80	マツ属	板片		江戸時代以降
81	スギ	板		江戸時代以降
82	スギ	木片		江戸時代以降
83	アカマツ	筒状木製	品	江戸時代以降
84	アカガシ	木片		江戸時代以降
85	スギ	桶	底	江戸時代以降
86	ヒノキ属	木片		江戸時代以降
88	ヒノキ属			江戸時代以降
89	針葉樹	板		江戸時代以降
90	スギ	板		江戸時代以降
92	スギ	棒		江戸時代以降
93	ヒノキ属	板		江戸時代以降
94	ヤマウル	棒	丸	江戸時代以降
95	ヒノキ属	板		江戸時代以降
96	ヒノキ属	板		江戸時代以降
98	ヤナギ属	枝		江戸時代以降
99	ヤマグワ	枝		江戸時代以降
100	ヒノキ属	板		江戸時代以降
101	針葉樹	板		江戸時代以降
102	針葉樹	板		江戸時代以降
104	マツ属	複板片		江戸時代以降
105	スギ	板		江戸時代以降
106	アカガシ	組み物		江戸時代以降
107	スギ	桶	底	江戸時代以降
108	ケヤキ	ホゾ穴付き木製品		江戸時代以降
109	マツ属	木片		江戸時代以降
110	スギ	杭	丸	江戸時代以降
111	スギ	板		江戸時代以降
112	ヤマウル	木片		江戸時代以降
113	スギ	板		江戸時代以降
114	ヤマグワ	木片		江戸時代以降
115	マツ属	複板		江戸時代以降

V 出土遺物の理科学的分析

番号	樹 種	製 品 名	形状等	時 代
116	ブドウ属	木片		江戸時代以降
117	スギ	板		江戸時代以降
118	スギ	板		江戸時代以降
120	スギ	板		江戸時代以降
121	ヤマウルシ	木片		江戸時代以降
122	コナラ属	エゾ穴付き木製品		江戸時代以降
123	スギ	桶	側板	江戸時代以降
124	クリ	杭	丸	江戸時代以降
125	クリ	板		江戸時代以降
127	スギ	板		江戸時代以降
128	散孔材	枝		江戸時代以降
129	スギ	板		江戸時代以降
130	スギ	板		江戸時代以降
131	トウヒ属	板		江戸時代以降
132	ヤマグワ	筒手状木製品		江戸時代以降
133	カヤ	板		江戸時代以降
134	カヤ	板		江戸時代以降
135	ヤマグワ	木片		江戸時代以降
136	ヤマグワ	木片		江戸時代以降
137	マツ属	分割材	丸	江戸時代以降
138	クリ	杭		江戸時代以降
139	クリ	木片		江戸時代以降
140	アカマツ	分割材		江戸時代以降
141	クリ	杭	丸	江戸時代以降
142	ケヤキ	杭	丸	江戸時代以降
143	クリ	杭	丸	江戸時代以降
144	アカマツ	板		江戸時代以降
145	アカマツ	分割材		江戸時代以降
146	アカマツ	分割材		江戸時代以降
147	マツ属	板		江戸時代以降
148	マツ属	板		江戸時代以降
149	アカマツ	板		江戸時代以降
150	マツ属	分割材		江戸時代以降
151	マツ属	板		江戸時代以降
152	アカマツ	木製品		江戸時代以降
153	マツ属	杭	丸	江戸時代以降
154	クスノキ	棒	丸	江戸時代以降
155	クリ	分割材		江戸時代以降
156	スギ	桶	側板	江戸時代以降
157	カヤ	板		江戸時代以降

4 近世の出土人骨・獣骨について

宮崎重雄

本遺跡は群馬県甘楽郡甘楽町にある。今回の発掘調査によって、江戸時代の遺構から11個体分の人骨・人歯と、3個体分の馬骨・馬歯が発見された。これらのうち、観察可能な人骨・人歯7個体分と馬骨1個体分について観察結果を述べる。

1. 人骨・人歯

ここで扱う7個体分は、いずれも墓と考えられる遺構から出土したものである。以下、遺構別に述べるが、年齢区分は片山(1990)を用いている。

1. 土引C区2号墓(時代:江戸)

残存しているのは脳頭蓋片の一部と遊離歯14本である(表15)。

上顎では、左第3大白歯が部分的にエナメル質の咬耗を受け、右第1大白歯は2咬頭に象牙質の露出がある。下顎では右第3大白歯が部分的にエナメル質の咬耗を受け、左第1大白歯は3咬頭に象牙質が露出している。この咬耗度からみると、壮年期の個体であろう。

有意な性差を示す(植原・小泉:1979)犬歯、第1大白歯の計測値をみると、上顎犬歯の近遠心径7.3、下顎犬歯の近遠心径6.1mmと小さく、第1大白歯の近遠心径も上顎9.4mm、下顎10.7mmと小さい。女性のものであろう。

残存遊離歯で見ると、齶歯は観察されない。

2. 白倉A区3号墓(時代:江戸)

白色・灰白色・灰色・黒灰色を呈する焼人骨であるが、亀裂・歪みはない。

検出されている部位は、脳頭蓋片1、下顎骨片1、下顎臼歯1、上腕骨頭片2、中手骨または中足骨片1、末節骨1である。下顎頭幅は21.5mm、末節骨は骨長17.0mm、近位端幅9.1mm、近位端径6.4mm、遠位端幅5.9mmである。

4 近世の出土人骨・獣骨について

脳頭蓋片は縫合線できれいに分離していることから、まだ老年期までには至っていないようである。

1本検出された歯は下顎第3大白歯と思われ、咬合面に中心結節を持つ異状歯である。藤田(1979)によれば、下顎第3大白歯における中心結節の出現率は1.2%であり、極めて少ない。この歯の歯冠近遠心径は14.0mm、頬舌径は12.6mmと異状に大きく、これを第3大白歯だとすれば大ききの点でも奇形である。結節は中心になく、頬側または舌側に極端に片寄っている。

3. 白倉A区6号墓(時代:江戸)

人骨数片からなる。最大片は18.1~15.0mmである。

4. 白倉A区7号墓(時代:江戸)

クリーニングが完了せず、歯の計測値は得られる状況ではない。

外耳道およびその周辺部を含む頭蓋片、上顎歯・下顎歯、軸椎片、左右の上腕骨片、桃骨片、尺骨片、寛骨骨片、大腿骨片、左右の脛骨片、左右の腓骨片が残存する。

前頭幅(ft-ft)は推定で92.0mmである。鼻骨幅(57-2)は10.6mmあり、下顎のオトガイ高は33.0、オトガイ孔間幅は47.8mm、下顎筋突起間幅は99.2mmである。下顎突起間幅の値を井原(1950)の下顎骨の計測値による性別判定法に照らすと、男性相当である。

左上腕骨は保存全長が231.0+mm、骨体中央幅が16.2mm、同径が21.7mmである。大腿骨は左が保存全長325.0+mm、骨体中央幅27.1mm、同径30.1mmあり、右が保存全長313.0+mm、大腿骨頭幅43.4mm、同径42.1mm、骨体中央幅16.2mm、同径21.7mmある。

左脛骨は保存全長251.0mm、栄養孔における骨体幅21.2mm、同径32.7mm、骨体中央幅21.6mm、同径30.5mmである。脛指数は64.8で中脛に近い扁平脛骨である。また、腓骨の保存全長は133.2mm、骨体中央幅9.4mm、同径12.2mmである。

上顎骨は歯槽の海面質化が著しく、上顎の歯は左

V 出土遺物の理科学的分析

の中切歯・側切歯・第3大白歯は欠損し、右第1小白歯・第2小白歯。第1大白歯は脱落し、歯槽が閉鎖している。右では第2小白歯、第1大白歯は歯槽のみ残存し、第2大白歯は歯槽が残存したようであるがはっきりしない。第3大白歯の様子は不明である。咬耗度を見ると、右は中切歯、側切歯、犬歯、第2大白歯は咬合面の全面に象牙質が露出していて咬耗が極度に進んでいる。第3大白歯は咬合面のエナメル質が咬耗されている。また、左の歯の咬耗度を見ると犬歯が尖頭部に象牙質を露出させ、第1小白歯が舌側咬頭に象牙質を露出させている。第2小白歯と第1大白歯は歯槽のみが残存している。第2大白歯は歯槽が残存しているように見受けられる。左上顎犬歯と第1小白歯舌側には多量の歯石が付着している。左上顎犬歯の歯根がS字状に湾曲している。

下顎の歯についてみると、右中切歯は存在したか否かは不明で、右中切歯は脱落して歯槽だけが残存している。第3大白歯は左右とも歯槽の痕跡もなく崩出してなかったものと思われる。咬耗により象牙質が咬耗面の全面に露出しているのは左で第2切歯、犬歯、第2大白歯、右が側切歯、犬歯、第1小白歯、第1大白歯、第2大白歯である。第2小白歯は頬側半に象牙質の露出がある。第2大白歯は左右とも咬耗面が遠心に傾斜している。

齧蝕されている歯が5本あり(表16)、いずれも歯頸部が齧蝕されている。多量の歯石の付着している歯が観察されることから、それが齧蝕に影響しているようである。

脳頭蓋片には内板の縫合線が認められず、癒合度は4であり、少なくとも熟年期後半から老年期には至っている個体のものであろう。上記の歯の咬耗度上顎歯槽部の海面質化もこの年齢推定を支持している。

白倉下原A区8号墓(時代:江戸)

保存状況はきわめて劣悪ながら、岩椀部、乳椀突起などを含む頭蓋片、下顎骨片、右下顎第3大白歯を含む歯3本、右上腕骨片、橈骨片尺骨片、基節骨

片2、中節骨片7、末節骨片4、左右大腿骨片、左右脛骨片など身体の各部位が残存する。下顎第3大白歯の歯槽は閉鎖の途上であり、下顎第2、下顎第1後臼歯の歯槽は存在しない。脳頭蓋片は冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合とも外板の癒合度が1、内板の癒合度が4である。この個体も少なくとも熟年期後半から老年期に至っている個体と思われる。右大腿骨の全長は176.0mm、骨体中央横径26.4mm、同矢状径22.1mmで、前後に平たい骨体をしている。

白倉下原A区9号墓(時代:江戸)

ほぼ全身の部位が確認されるが、計測可能なものは限られている。脳頭蓋最大長は172.2mm、脳頭蓋最大幅は146.6mm、最小前頭幅101.6mm、前下顎幅44.7mm、オトガイ高28.1mm、下顎頭長20.3mmを計測できる。この個体には前頭縫合が確認され、頭蓋骨外板の癒合度は1で、縫合の半分以下に癒合が生じている程度である。右上腕骨の全長は180.4mmあり、左も小破片として存在する。橈骨・尺骨も左右とも確認され、尺骨の全長は142.0mm、中央横径は11.7mm、同矢状径は13.5mmである。左大腿骨の全長は261.0mmであり、骨体中央横径27.4mm、同矢状径27.5mmである。左脛骨は全長215.0mm、栄養孔での骨体横径は21.4mm、同矢状径は31.2mmで、骨体中央横径は20.8mm、同矢状径は25.7mmである。

末節骨には棘突起が生じている。末節骨に骨棘が生じていて、これも老人性の加齢現象である。この個体には前頭縫合が観察される。この縫合は1-2才で閉じてしまうのが通常である。乳椀突起の大きさ、上顎犬歯の近遠心径はは女性を思わせる。

女性とした場合、藤井(1960)の推定式を用いて身長を算出してみると、132.3mmとかなり小さく、当時としても最も小柄な方である。

6. 白倉A区10号墓(時代:江戸)

破片化しているものの、脳頭蓋片、下顎骨片、左右上腕骨片、橈骨片、尺骨片、左右大腿骨片、左右脛骨片など、ほぼ全身の部位が確認される。頭蓋骨

は破損し、計測は現状では不可能である。

頭蓋の縫合は進み、外板の縫合度は冠状縫合3、矢状縫合3、ラムダ縫合2である。内板の縫合は外板の縫合度は冠状縫合3～4、矢状縫合3～4、ラムダ縫合3である。

下顎に歯はなく、歯槽はすべて閉鎖している。前下顎幅は45.5mm、オトガイ高は24.8mmである。

左上腕骨の全長は214.7mm、同中央最大径21.9mm、中央最小径が17.3mmである。左大腿骨の全長は198.6mm、で栄養孔における骨体横径は29.9mm、同矢状径は26.6mmで、中央における骨体横径は29.0mm、同矢状径は28.7mmである。左脛骨は全長が182.0mm、栄養孔における骨体横径は25.5mm、同矢状径は28.6mmで、中央における骨体横径は21.6mm、同矢状径は24.6mmである。脛指数は89.2mmで広脛である。

下顎歯槽部のようす、頭蓋の縫合線の癒合度から老年期の個体と思われる。

引用文献

- 藤井 明 (1960) 四肢長骨の長さと同骨との関係に就いて、順天堂大学体育学部紀要, 3, 49-61.
 堀原和郎・小泉清隆 (1979) 歯冠近遠心径に基づく性別の判定一判別関数法による一、人類学雑誌, 87, 445-446.
 井原正安 (1950) 日本人下顎骨の人類学的研究、慈恵医大解剖学教室業績集, 第2冊, 11-72.
 片山一造 (1990) 「古人骨は語る」, 同朋社, 京都。

開いている。

歯の状況は、この個体が2-3才の幼令馬であることを示している。馬では性別判定の有力な手がかりとなる犬歯の萌出は4-5才であり(野村, 1986)、この個体はまだ萌出年齢に至っていないため性別判定ができない。

引用文献

- 野村晋一 (1986) 「概説馬学」, 西川書店, 東京。

2、馬骨・馬歯

白倉B区7号溝から馬の頭蓋骨が出土した。当初は馬体全身が埋存していたものと思われるが、腐食により消失し、頭蓋骨が部分的に残存している。

検出された歯(表18)は上顎・下顎とも第1乳白歯、第2乳白歯、第3乳歯、第1後白歯、第2後白歯である。第3後白歯は上顎・下顎とも未萌出である。乳白歯の歯根側には永久歯が埋伏しているのが観察され、そのうちの第4前白歯は歯冠高24.0+を計測できる。

第1後白歯は上顎では歯根が完成直前にあり、下顎では未完成で歯髓腔が大きく開いている。上顎後白歯の方が発達はやや進んでいる。第2後白歯は上顎・下顎とも歯根は未完成でやはり歯髓腔は大きく

V 出土遺物の理科学的分析

表15 天引C区2号墓出土人歯(単位はmm)

歯 種	近 遠 心 径	唇(側)舌径	歯 冠 長	咬 耗 部 位 ・ 咬 耗 度
上顎 ? 犬歯	7.3	7.5	7.0	頬側に象牙質1点露出
下顎 ? 犬歯	6.1	7.0	6.9	尖頭に象牙質線状に露出
上顎 右 第1 小白歯	7.0	8.7	4.8	舌側咬頭に象牙質点状に露出
下顎 ? 第2 小白歯	6.7	7.9	4.5	エナメルのみ咬耗
下顎 ? 第1 小白歯	6.7	7.6	6.7	頬側咬頭に象牙質点状に露出
下顎 ? 第1 小白歯	6.7	7.3	6.2	頬側咬頭に象牙質点状に露出
下顎 ? 第2 小白歯	6.7	7.8	4.5	エナメルのみ咬耗
上顎 右 第2 犬歯	9.0	11.0	5.1	エナメルのみ咬耗
上顎 右 第1 犬歯	9.4	11.3	4.9	2咬頭に象牙質露出
上顎 左 第3 犬歯	8.7	11.8		エナメルのみ部分的に咬耗
下顎 右 第3 犬歯	10.4	9.2	6.1	エナメルのみ部分的に咬耗
下顎 左 第2 犬歯	10.2	9.7	4.8	1咬頭に象牙質点状に露出
下顎 左 第1 犬歯	10.7	10.2	5.4	3咬頭に象牙質露出
下顎 左 第2 犬歯	10.1	9.9	5.2	エナメルのみ咬耗

表16 白倉A区7号墓出土人歯

		咬 耗 の よ う す 等	齧 蝕	歯 石
上顎	左 第3 犬歯	?		
	左 第2 犬歯	歯槽の痕跡がある。歯槽の海面質化顕著		
	左 第1 犬歯	舌側の歯槽残存。歯槽の海面質化顕著		
	左 第2 小白歯	歯槽残存。歯槽の海面質化顕著		
	左 第1 小白歯	歯が残存し、舌側咬頭に僅かに象牙質露出		
	左 犬歯	尖頭部に象牙質露出。歯根湾曲		唇側 唇側
	左 側 切歯	欠損		
	左 中 切歯	欠損		
	右 中 切歯	咬耗面全面象牙質露出		
	右 側 切歯	咬耗面全面象牙質露出・歯髄腔露出		
	右 犬歯	咬合面全面象牙質露出		
	右 第1 小白歯	脱落歯槽閉鎖		
	右 第2 小白歯	脱落歯槽閉鎖		
	右 第1 犬歯	脱落歯槽閉鎖		
	右 第2 犬歯	咬合面全面象牙質露出		
	右 第3 犬歯	咬合面エナメル質のみ咬耗		
下顎	左 第3 犬歯	歯槽なし		
	左 第2 犬歯	咬合面全面に象牙質露出。咬合面は遠心に傾斜		
	左 第1 犬歯	歯槽のみ		
	左 第2 小白歯	象牙質露出	C2 ; 大きな齧蝕	
	左 第1 小白歯	舌側咬頭に象牙質露出	なし	なし
	左 犬歯	咬耗面全面に象牙質露出	なし	近心歯頸部と舌側
	左 側 切歯	切縁全面に象牙質露出		
	左 中 切歯	?		
	右 中 切歯	脱落		
	右 側 切歯	咬耗面全面に象牙質露出	遠心歯頸部C1	
	右 犬歯	咬耗面全面に象牙質露出	遠心歯頸部C3, 近心歯頸部C1	
	右 第1 小白歯	咬耗面全面に象牙質露出	近心歯頸部C1	
	右 第2 小白歯	頬側半に象牙質露出		
	右 第1 犬歯	ほぼ全面に象牙質露出		
	右 第2 犬歯	咬耗面ほぼ全面に象牙質露出。咬耗面は遠心に傾斜	遠心歯頸部にC3, 頬側歯頸部にC1	
	右 第3 犬歯	歯槽なし		

表17 白倉A区9号墓出土人歯(単位はmm)

歯 種	近遠心径	唇(顎)舌径	歯冠長	全 長	咬耗部位・咬耗度	齧 蝕	備 考
上顎 右 第2 切歯	6.7	6.7		7.7	象牙質面状に露出	なし	
上顎 ? 犬歯	6.9	8.8		26.1	象牙質面状に露出	なし	
上顎 左 第1 小臼歯	7.1	9.7	8.4	21.1	頸側咬痕にわずかに象牙質露出	円心歯頸部C 2	頸側に大量の歯石付着

表18 白倉B区7号溝出土馬歯(単位はmm)

		第1乳臼歯	第2乳臼歯	第3乳臼歯	第1後臼歯	第2後臼歯
歯冠長	上顎	33.2+	27.2		29.5	27.4
#	下顎		28.0	28.1		
歯冠幅	上顎	20.0	23.1		24.5	23.0
#	下顎		13.0	13.8	13.6	12.9
原歯幅	上顎	6.8	8.0		11.7	13.9
歯冠高・唇面	上顎	9.0	11.7		80.5	71.8
#	下顎		8.0	14.5	76.0	61.8
歯冠高・舌側	上顎	5.5	12.7		64.0	67.9
#	下顎		5.1	16.0	78.2	62.9
咬合面の傾斜	上顎				78°	75°
#	下顎				70°	78°
中附歯幅	上顎	2.4	5.0		3.0	2.7
下後歯谷長	下顎		8.2	13.8	11.4	9.0
下内歯谷長	下顎		7.1	9.5	11.2	12.7
double knot 長	下顎		15.8	16.0	15.1	13.0
下内歯幅	下顎		5.6	5.1	4.8	4.3

VI 成果と問題点

1 土器の遺構間接合について

はじめに 今回の整理作業においては、土器の接合については遺構ごとに行っていた。しかしながら、個別遺構単位で土器接合が終了するわけではなく、遺構単位での接合作業が終了した段階においても土器片の状態のものや、多くの欠損部位をもつ個体が大半であることは実態として認知されているところであろう。近年の報告事例によっても、時代を問わず同一個体の遺物が発掘調査区において広範囲に分布することが明らかになっていることから、原則的には時間の許す限り、完形個体に近づける試みは行われるべきなのであろう。また、そのことによって個体の残存率を高めると同時に、接合関係によって想定される遺構の先後関係などの情報を得ることが重要なことである。一方、整理作業において接合作業にかけられる時間は限られており、遺構を越えて接合作業を行うことは遺構数と遺物量が多くなるに従って困難なものになっていってしまう。そこで、今回の接合作業では、重複関係にある遺構間については全てを試み、他の遺構については出土数量がある程度限定され、しかも個体識別が比較的容易な須恵器の大甕と灰軸陶器、瓦にのみ限って遺構間の接合作業を行ってみた。

そして、須恵器大甕の接合を中心に僅か11個体ではあるが遺構を越えた接合事例が認められた。特に、須恵器大甕の接合は興味深い事例といえよう。ここでは、これらの事例について想定される状況について考えてみたい。なお、接合事例によって得られる遺構の時間的關係に拘わる考え方については、『白倉下原・天引向原遺跡II』で参考文献も含め述べたので参考にしてほしい。

須恵器大甕の接合事例

今回の整理作業では、古墳時代後期と奈良時代以

降は併行して行っていたが、その過程で本来古墳時代後期の所産である須恵器大甕の破片が、奈良～平安時代の竪穴住居跡から出土し、逆に古墳時代の竪穴住居跡からは出土しないという現象が確認された。須恵器大甕が奈良時代以降に焼成されたのであれば不思議ではないが明らかに古墳時代の所産であり、また、古墳時代において当集落遺跡で須恵器大甕が用いられていたのであれば、後の時代の住居跡に混入する可能性は高いのであるが、その可能性はあまりないようである。須恵器大甕はカマド材として用いられている場合もあり、住居間で接合する場合もあった。住居間接合が確認できた須恵器大甕は4個体である。以下では、この4個体の事例について考えてみたい。

白倉B区67号住居と80号住居(第32図)

80号住居3とした須恵器大甕が67号住居(9世紀後半)と80号住居(9世紀後半)間で接合している。この須恵器は口径64.3cm、推定高115.0cmで県内でもこの種の甕としては最大級のもので、口縁～胴上部破片と胴下部～底部破片からなる。同一個体と認定できた破片は多いのだが、接合した破片数は第32図でも明らかのように16点である。

67号住居での出土位置(図32参照)はカマド材として利用されているものが殆どで、カマド掘り方や貯蔵穴からも出土している。一方80号住居内での出土位置(図36参照)も殆どがカマド材に用いられていた。この須恵器の破片数は多いのだが、実際に住居間で接合した破片は①と②だけで破片同士の接合面は新鮮であった。このことから①と②の破片が割られた後に、あまり時間を置かず2軒の住居カマド材に転用された状況が想定されるのではなかろうか。カマド材に用いられた時が近接するのだから、この2軒の住居は同時に存在していた可能性が高いといえよう。2軒の住居間距離は14mである。

白倉B区39号住居と44号住居と48号住居(第33図)

39号住居16は須恵器大甕の胴部破片である。上記3軒から出土しているが、大部分は39号住居の床面直上から出土した破片である。39号住居は8世紀後半に帰属し失火の可能性がある焼失住居である。このことから、大型破片の状態に住居に持ち込まれていた可能性が強いと思われる。一方、44号住居と48号住居はともに9世紀後半に帰属し、出土した須恵器破片は44号住居ではカマド材として用いられ、48号住居では床面から僅かに浮いた状態で出土している。39号住居の須恵器破片は、44号・48号住居居住時には既に土中に埋没していたのであるから、両住居(44号・48号)と39号住居の間に有機的な関連は想定できない。

44号住居と48号住居の関係であるが、44号住居のカマド材である須恵器破片と同じ個体が48号住居覆土下層から出土していることから、44号住居のカマド製作時においては48号住居は廃絶していた可能性が強いといえ、同じ9世紀後半の住居でありながら、48号住居が廃絶して早い段階に44号住居が作られた状況が想定されよう。2軒の住居間距離は約16mである。

天引64号住居と70号住居(第34図)

70号住居1は口縁部～胴上半部にかけての須恵器大甕である。口縁部径は48cmと大きい。さて、この70号住居であるが、当初は住居として調査したわけだが、70号住居の北側に住居の東西辺と同じ線上に67号土坑が検出されており、さらに当住居の南壁とこの土坑の北壁が平行関係にあることから一体の遺構(土坑)として理解すべきことがわかった。この土坑は真真中にブリッジ状の施設をもち、同じ形状のものが2基(白倉B区1号、7・8号土坑)見つかり、いずれも9世紀後半であった。天引70号住居(67号土坑も含む)はコの字状口縁の甕が出土していることから9世紀代の遺構である。

接合した須恵器大甕の各遺構における出土状態を見ると、64号住居は大半がカマド材として用いられ

ている。一方、70号住居(土坑)においては北壁中央付近にまとまって①が出土している。この遺構が廃絶してまもない頃の廃棄が想定されよう。このことから、64号住居においてカマドがつくられた際には70号住居(土坑)は廃絶後の早い段階であったといえよう。64号住居は9世紀後半であることから、70号住居(土坑)もほぼ同時期であったと想定される。このことは、他の70号住居(土坑)と同じ形状の土坑が9世紀後半であることや、70号住居(土坑)の出土遺物から想定される年代が9世紀代であることとも矛盾しない。

白倉C区45号住居と57号住居(第36図)

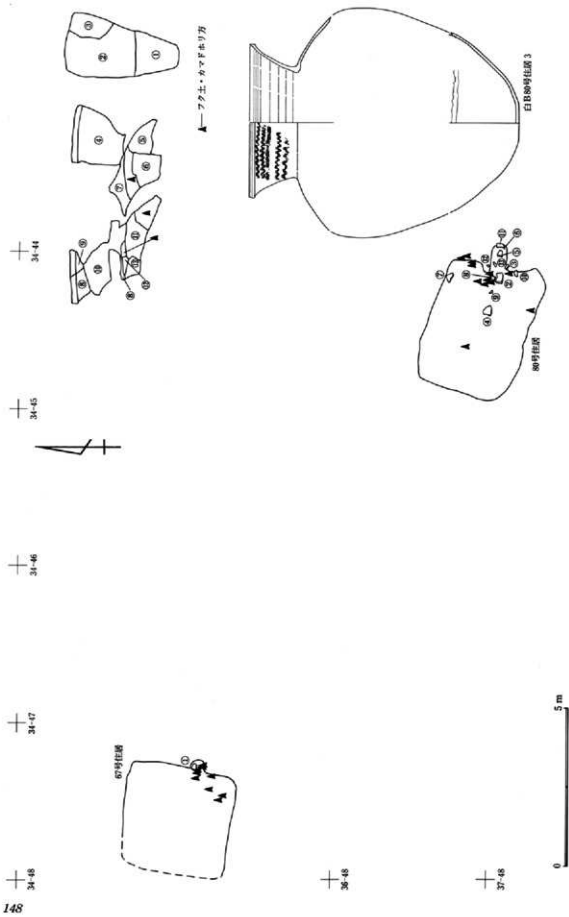
須恵器大甕の胴部破片が接合した(45号住居20)。両住居の出土位置はともに床面から僅かに浮いた段階での出土であることから、両住居の埋没がほぼ同じ程度での廃棄が想定される。住居の年代はともに8世紀後半であることから両住居が同時に存在したのかもしれない。両住居間距離は1.5mである。

以上、須恵器大甕の接合が確認できた4事例について述べてきた。大甕がカマド材として利用された場合、その破片は確実に住居居住時に伴っている。その同一破片が他の遺構覆土から出土した場合は、確実に住居よりも古い状況が想定される事から、通常の覆土同士の接合関係に比べて遺構の時間的關係の有力情報を提供してくれることが確認できた。

また、繰り返して述べていることであるが、古墳時代の所産である須恵器大甕が奈良時代以降に持ち込まれていることが大変興味深い現象といえる。今回示した事例からも須恵器大甕はカマド材として持ち込まれている可能性がきわめて高い。そこで、須恵器破片の入手先であるが、近辺で入手できる場所はおそらく古墳に供献されたものしかないのではなからうか。このことは、古墳に対する奈良時代以降の民衆意識も拘わる現象といえるのではなからうか。

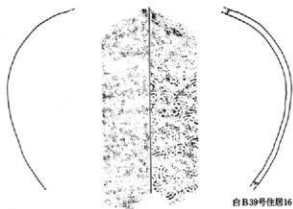
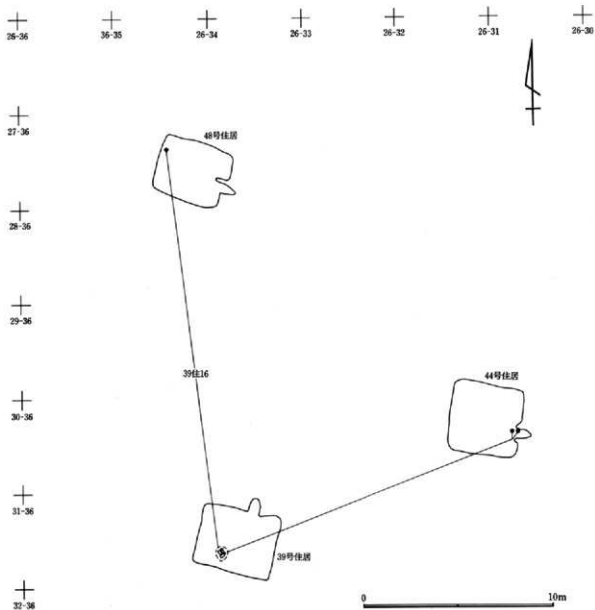
他の接合事例に触れる余裕がなくなってしまったが、それは第35～37図を参照してほしい。

IV 成果と問題点



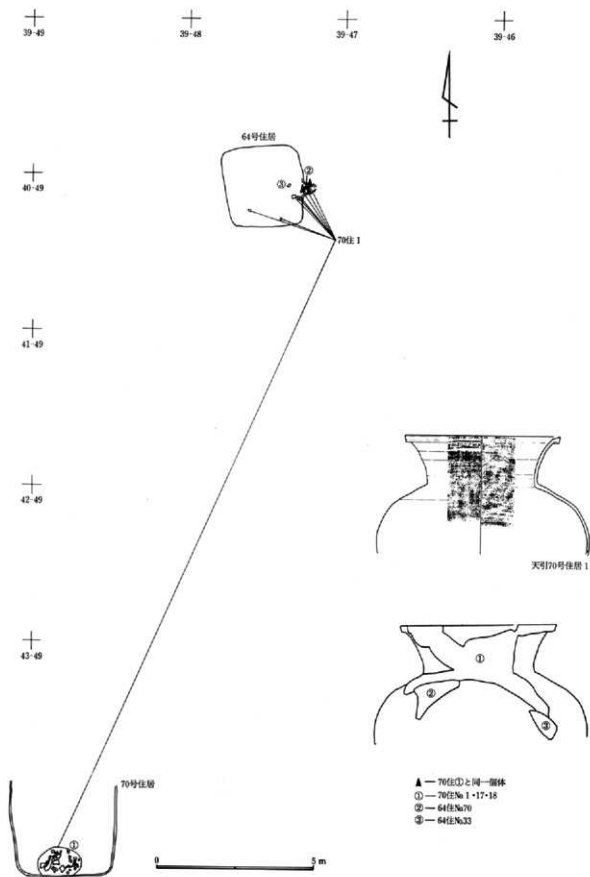
第32図 住居間接合(1)

1 土器の遺構間接合について



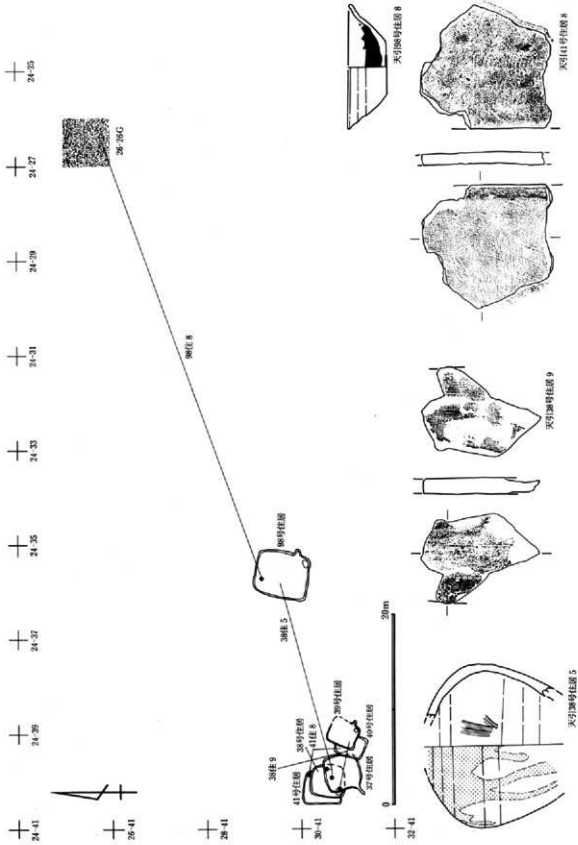
第33図 住居間接合(2)

IV 成果と問題点



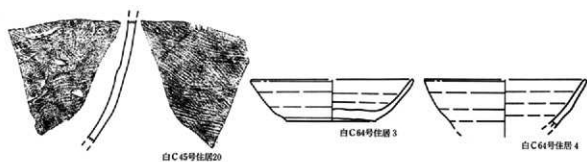
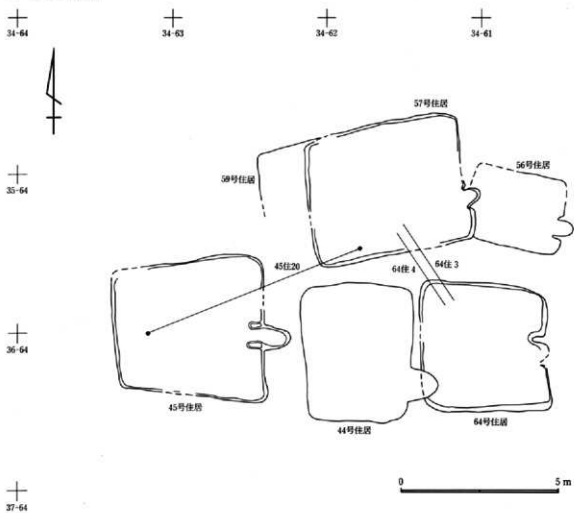
第34図 住居間接合(3)

1 土器の遺構間接合について



第35図 住居間接合(4)

IV 成果と問題点



第36図 住居間接合(5)

1 土器の遺構間接合について

+

31-44

+

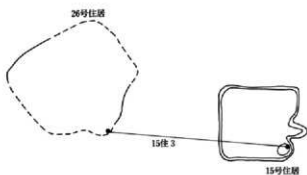
31-43

+

31-42

+

31-41



+

33-44

+

34-44



第37図 住居間接合(6)

2 土地利用変遷について

ここでは、奈良・平安時代における半世紀ごとの土地利用変遷について述べていきたい。遺構分布図(第38～44図)も半世紀ごとに示したがその場合、時期の特定が難しい土坑や掘建建物については分布図に示すことができなかった。竪穴住居跡については分布とは別に、住居時期別一覧表(表19)と面積時期別一覧表(表20)カマド位置時期別一覧表(表21)も作成したので併せて参照して欲しい。これらの表には%表示のものがあるが、面積では計測不能住居を、カマド位置では位置不明住居を含めているが、以下述べる際には、これらを除いた割合を示すことにしたい。

8世紀前半(第38図) 27軒の竪穴住居が見ついている。分布の中心は白倉A区を中心とした台地上で12軒が分布する。白倉B区で見つかった6軒も、基本的には白倉A区と同じ台地上である。この台地上では白倉B区4号溝(道状遺構)以東の分布といえよう。白倉C区では2軒、天引地区では7軒の住居が見ついている。天引16号住居と同67号住居は同時期でありながら重複関係にあることから8世紀前半の一時期の住居分布は図に示したよりは少なくなるようである。カマド位置は北カマドが主体で79%が北カマド、21%が東カマドである。

これらを7世紀後半(ⅡⅣ参照)の状況と比較すると、分布においては白倉C区で住居が検出されていないことと白倉B区で4号溝以西でもB区で住居が見ついていることが大きな違いである。また、分布の主体は同じ台地上である。カマド位置は北カマドが83%、東カマドが17%となる。カマド位置が漸的に北から東へ変化する状況が読み取れよう。

8世紀後半(第39図) 住居分布は基本的に8世紀前半の状況と同じである。検出された住居軒数が27軒から16軒と減少しているが、その中で白倉C区のみ2軒から5軒と増加している。白倉C区57号住居

と同59号住居は重複関係にあることから、一時期の住居軒数はさらに少なくなるようである。カマド位置は北カマドと東カマドの割合がほぼ等しくなっている。

9世紀前半(第40図) 見つかった住居軒数は18軒ときほど変化はないが分布は大きく異なり、白倉B区で4号溝以西においてまとまって検出されている。また、天引地区は僅かに1軒しか見つからない。天引地区の先端に寺院跡をマーキングしたが、いまのところ9世紀前半代において確実に寺院が存在した確証は得られていないが、可能性も含め示してある。住居規模は全て16㎡以下で小規模なものになっている。カマド位置も全て東カマドに移行した。

9世紀後半(第41図) 9世紀後半は寺院が確実に存在し、白倉B区北西部の水場が池に改修されたり4号溝(道状遺構)が6号溝(道状遺構)に移行したりと注目される時期である。さらに、当遺跡を特徴付ける文字資料(新井・午・牛・福天寺)もこの時期である。竪穴住居について見てみると住居軒数は28軒と多い。住居の分布傾向は前期を踏襲するようであるが、その中で天引地区が1軒から8軒に増加したことが同区寺院跡との関連で注目されよう。住居の重複も白倉C区とB区で各1例確認できる。また、先に遺構間接合事例でも述べたように白倉B区67号住居と80号住居は古墳時代の同一個体の須恵器大甕がカマド材としてともに再利用されており同時存在が想定されている。

10世紀(第42・43図) 10世紀になると、竪穴住居の分布傾向は大きく異なり、いままでも分布の中心であった白倉A・B区では殆ど住居が検出されず白倉C区と天引地区が分布の中心となる。

11世紀(第44図) 住居の分布は天引地区が中心となる。また、南西隅にカマドをもつ住居が5軒検出されているのも特徴であろう。

表19 整穴住居時期別一覧表

	白倉C区	白倉B区	白倉A区	天引地区
8C 前半 27軒	31・63 小計 2軒	1・2・ <u>15</u> ・32・36・41 小計 6軒	11・16・50・51・60・62・63・ 79・100・102・108・120 小計 12軒	3・8・9・66・67・76・145 小計 7軒
8C 後半 16軒	45・51・57・59・64 小計 5軒	6・31・ <u>39</u> 小計 3軒	9・ <u>12</u> ・18・56 小計 4軒	68・72・133・140 小計 4軒
9C 前半 18軒	26・44・46・54 小計 4軒	11・64・66・68・76・81・83・ 90・ <u>92</u> 小計 9軒	39・40・49・90 小計 4軒	15 小計 1軒
9C 後半 29軒	23・27・43・56・87 小計 5軒	4・8・18・19・44・48・53 57・60・67・ <u>77</u> ・79・80・95 小計 14軒	6・13 小計 2軒	14・33・49・64・82・89・95・ 139 小計 8軒
10C 前半 21軒	24・29・40・66・67・68・70 71・73・75・83・92 小計 12軒	小計 0軒	38・68 小計 2軒	<u>38</u> ・41・80・83・98・ <u>102</u> ・ 120 小計 7軒
10C 後半 12軒	10・22・41・93 小計 4軒	46 小計 1軒	70・118 小計 2軒	17・ <u>32</u> ・40・79・ <u>128</u> 小計 5軒
11C 17軒	69 小計 1軒	小計 0軒	75 小計 1軒	27・29・36・37・39・ <u>45</u> ・63・ 81・86・ <u>92</u> ・111・ <u>113</u> ・123・ 126・130 小計 15軒
時期 不明 10軒	20 小計 1軒	40 小計 1軒	69・71・98・119 小計 4軒	26・70・75・93 小計 4軒
合計 150軒	34軒	34軒	31軒	51軒

※一は焼失の可能性のある住居である

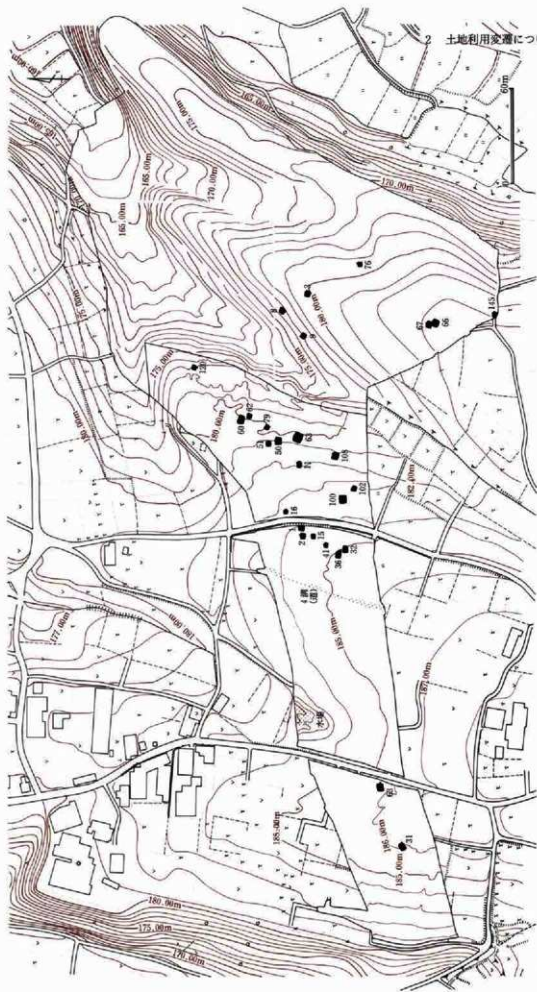
IV 成果と問題点

表20 整穴住居面積時期別一覧表

	小 (0~16㎡未満)	中 (16~25㎡未満)	大 (25~36㎡未満)	特大 (36㎡以上)	計測不可能	合 計
8 C 前半	15軒 (56%)	5軒 (19%)	1軒 (4%)	0軒 (0%)	6軒 (22%)	27軒
8 C 後半	10軒 (63%)	4軒 (25%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	2軒 (13%)	16軒
9 C 前半	13軒 (72%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	5軒 (28%)	18軒
9 C 後半	16軒 (55%)	3軒 (10%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	10軒 (34%)	29軒
10 C 前半	9軒 (43%)	0軒 (0%)	1軒 (5%)	0軒 (0%)	11軒 (52%)	21軒
10 C 後半	6軒 (50%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	6軒 (50%)	12軒
11 C	10軒 (59%)	2軒 (12%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	5軒 (29%)	17軒
時期 不明	2軒 (20%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	8軒 (80%)	10軒
	81軒 (54%)	14軒 (9%)	2軒 (1%)	0軒 (0%)	53軒 (35%)	150軒

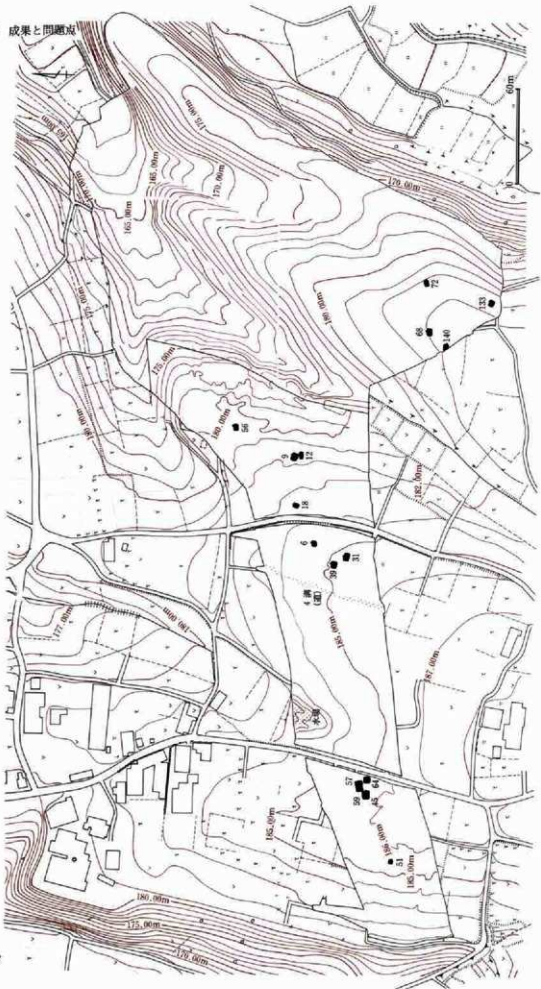
表21 カマド位置時期別一覧表

	北	東	南 東	南 西	北 東	不 明	合 計
8 C 前半	19軒 (70%)	5軒 (19%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	3軒 (11%)	27軒
8 C 後半	8軒 (50%)	7軒 (44%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	1軒 (6%)	16軒
9 C 前半	0軒 (0%)	17軒 (94%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	1軒 (6%)	18軒
9 C 後半	2軒 (7%)	26軒 (90%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	1軒 (3%)	29軒
10 C 前半	0軒 (0%)	15軒 (71%)	1軒 (5%)	1軒 (5%)	0軒 (0%)	4軒 (19%)	21軒
10 C 後半	1軒 (8%)	5軒 (42%)	2軒 (17%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	4軒 (33%)	12軒
11 C	0軒 (0%)	10軒 (59%)	0軒 (0%)	5軒 (29%)	0軒 (0%)	2軒 (12%)	17軒
時期 不明	0軒 (0%)	1軒 (10%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	9軒 (90%)	10軒
	30軒 (20%)	86軒 (57%)	3軒 (2%)	6軒 (4%)	0軒 (0%)	25軒 (17%)	150軒

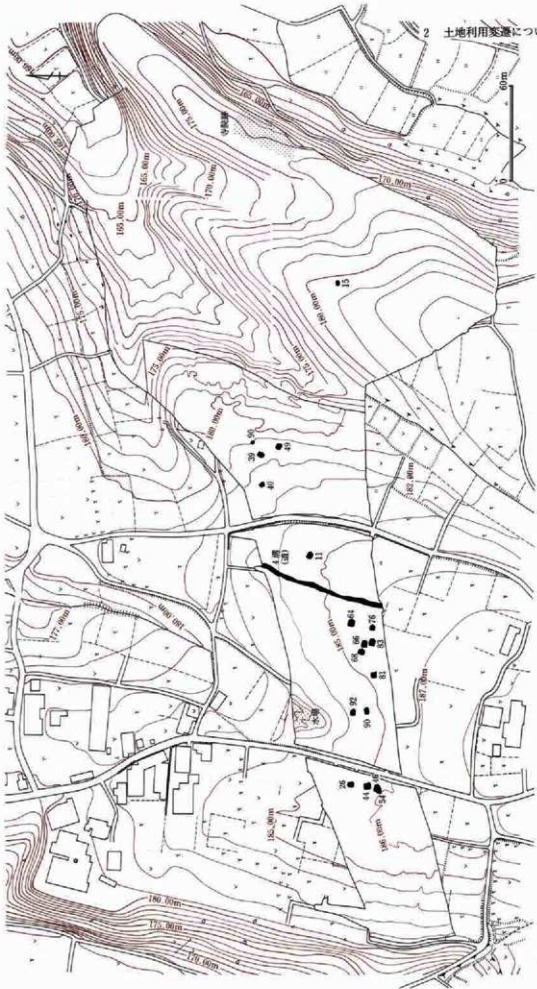


第38図 8世紀前半の遺構分布図

IV 成果と問題点

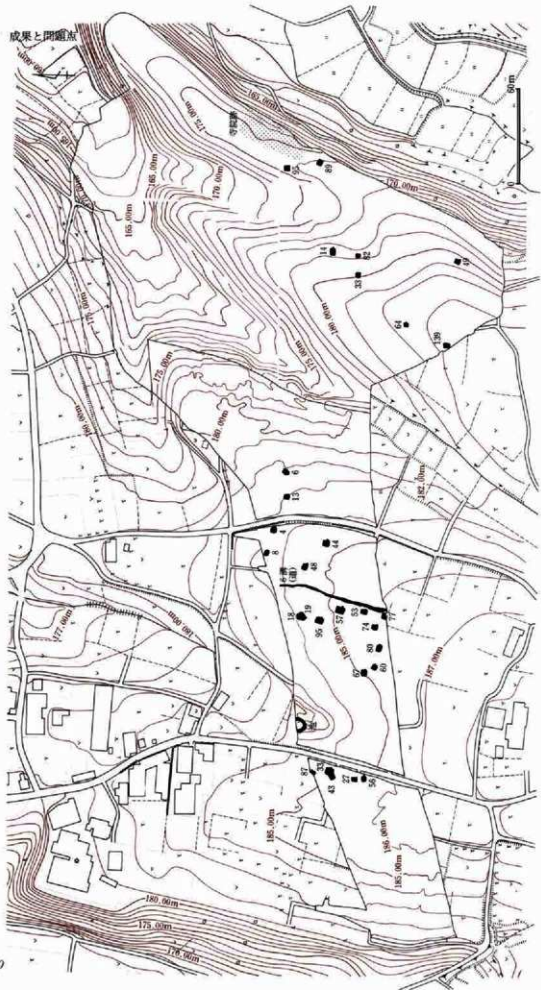


第39図 8世紀後半の遺構分布図



第40図 9世紀前半の遺構分布図

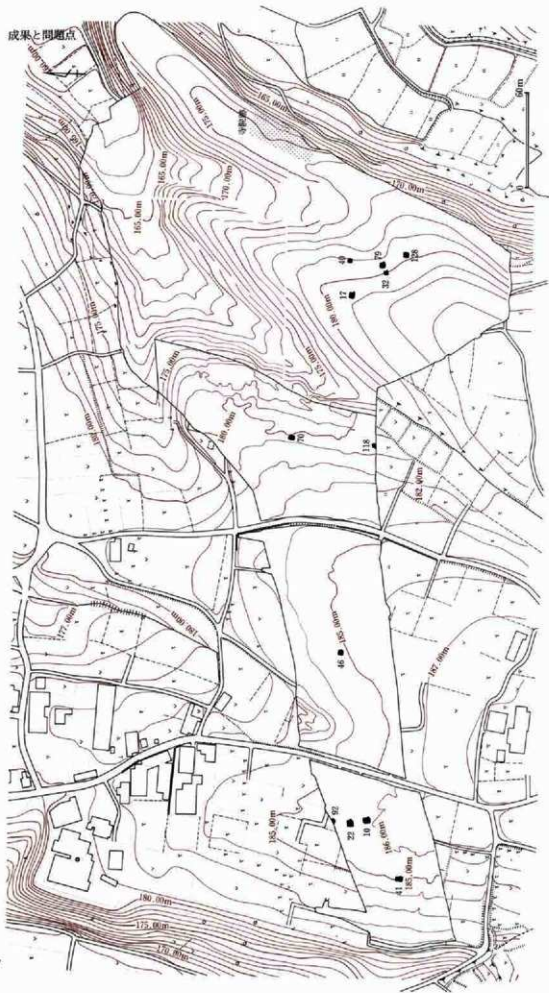
IV 成果と問題点



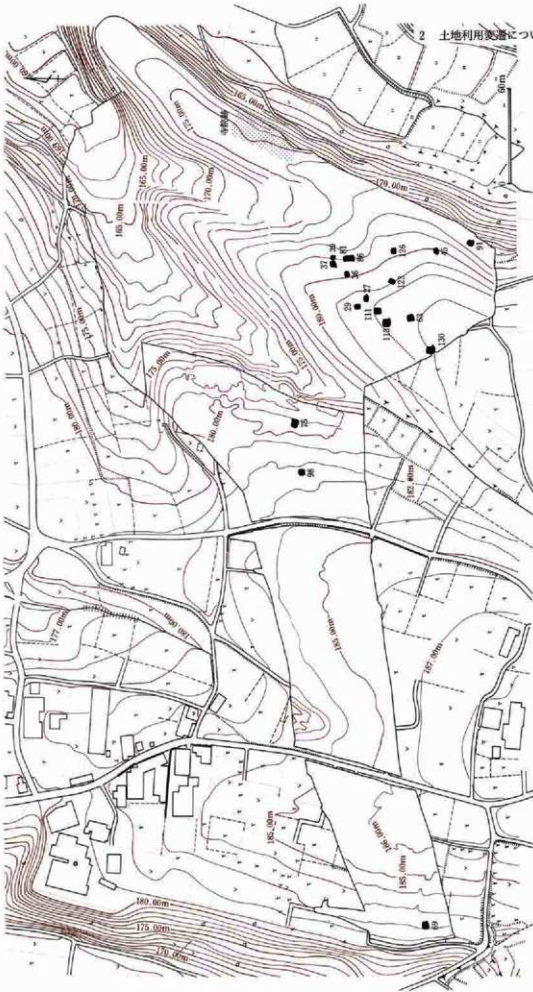
第41図 9世紀後半の遺構分布図



第42図 10世紀前半の遺構分布図



第43図 10世紀後半の遺構分布図



第44図 11世紀の遺構分布図

3 出土文字資料について

はじめに

当遺跡（ここでは白倉下原・天引向原両遺跡をさす）では、墨書土器を中心に総計141点の文字資料が出土した。内訳は、墨書土器124点、刻書土器8点、ヘラ書土器9点である。時期は48を除いて、9世紀後半を中心に、9世紀前半から10世紀前半の時間幅のなかにほぼおさまる。48は唯一土師器（8世紀前半）を使用したもので、坏の体部外面に文字らしき墨痕が認められるが、判然としない。出土点数は表22にまとめた。土器の種類は須恵器が圧倒的多数を占めており、ほかに黒色土器と灰釉陶器がある。器種では高台付碗が最も多く、坏、皿、蓋などがある。

文字の種類と特徴（表23～表25、図45～図52）

判読できたもののうち、使用された文字は28種類あり、そのうち墨書土器に24種類が含まれる。残る4種類は刻書土器にのみ使用されている。刻書土器8点のうち、4点は墨書土器と同じ文字であり、ヘラ書土器9点はすべて墨書土器と同じ文字を使用している。その他に、墨書と刻書を1文字づつ書いたものも1点だけ（第46図24）出土している。

また28種類のうち、1文字をかけたものが19種類、2文字のものが7種類、3文字のものが2種類あり、ほかに外面に数種の文字をかけたもの（第51図124）もある。

本遺跡で多用された文字は、「午」「牛」「𠂔」「合」「十」「可」などがある。このうち、「午」「牛」「𠂔」「十」は遺跡東半部から大半が出土しており、「合」は西半部にかたよっている。「可」は、西半部の天引C区5号土坑から9点が一括出土した、特殊な例である。「午」は本遺跡で最も多用されたと考えられる文字で、総数20点出土しており、刻書土器にも2例存在する。これに対して「牛」は9点出土しているが、うち8点はヘラ書土器で、刻書土器にはない。ヘラ書土器の「牛」は字体が特徴的であり、同一人による製作と考えられるが、製作依頼者から依頼さ

れた「午」を「牛」と誤って製作したのではないだろうか。と言うのは、両者とも白倉B区の谷頭を中心に出土しており、この水場を対象とした行為に関連すると考えられるからである。なお、記号のような「𠂔」にも同様のことが言える。

同じ文字を複数箇所に書いたものも多く、多様される「午」「合」「可」のほかに、「𠂔」「得万」がある。いずれも外面と内面に1文字づつ書いたものが多いが、「午」では内面2カ所と外面1カ所の、計3カ所に書いたものもある（第49図75）。内訳は、「午」が5例、「合」が4例、「可」が7例、「𠂔」と「得万」が各1例である。

名称を示す文字資料

文字資料には人名や地名、建造物などを表すものが知られているが、本遺跡でも想定されるものが出土している。

人名と想定されるものに「高羅」がある（第52図刻6）。これは白倉B区の谷から出土しており、坏の底部外面に、やや小さな文字で刻書されている。

地名と想定されるものに「新井」がある。これを「あらい」と読めば、現在では人名ともなるが、「にい」と読むのであろう。この文字は4例出土している。本遺跡の北側には「新屋」という地名があり、「和名類聚抄」にある「甘楽郡新屋郷」の比定地とされている。「新屋」は「高山寺本」では「新居」と書かれており、本遺跡出土の「新井」も同じものを

表22 出土文字資料の種類と器種

	総計	種類	点数	蓋	坏	皿	高台付碗
墨書土器	124	土師器	1		1		
		須恵器	116	1	74	1	40
		黒色土器	6				6
		灰釉陶器	1			1	
刻書土器	8	須恵器	7		4		3
		黒色土器	1				1
ヘラ書き土器	9	須恵器	9		5		4

表23 文字の種類と内訳

墨書土器の文字と器種

文字	点数	種類	坏	高台付機	皿	蓋	合計	文字数	体部外面	体部内面	底部外面	底部内面	合計
午	17	須恵器	13	4			17	1ヶ所	8	3	1	1	13
	1	黒色土器		1				1	2ヶ所 3ヶ所	2 4	1 5		1
牛	1	須恵器		1			1	1ヶ所	1				1
干	1	須恵器	1				1	1ヶ所		1			1
十	6	須恵器	6				6	1ヶ所	2	3			5
								2ヶ所	1	1		1	
合	14	須恵器	2	12			14	1ヶ所	2	5		1	8
								2ヶ所	5	5		5	
								3ヶ所	2	1		1	
十	13	須恵器	8	4	1		13	1ヶ所	11	2			13
甲	3	須恵器	2	1			3	1ヶ所	3				3
可	9	須恵器	9				9	1ヶ所	1	1			2
								2ヶ所	6	8		7	
木	1	須恵器		1			1	1ヶ所	1				1
上	1	須恵器		1			1	1ヶ所	1				1
吉	1	須恵器	1				1	1ヶ所	1				1
道	2	須恵器	1		1		2	1ヶ所			1		1
								2ヶ所	2			1	
三	1	須恵器	1				1	1ヶ所	1				1
合	1	須恵器		1			1	1ヶ所		1			1
仏	1	須恵器	1				1	1ヶ所	1				1
新	3	須恵器	2	1			3	1ヶ所	2				2
								2ヶ所	1		1	1	
新井	2	須恵器	1	1			2	1ヶ所	4				4
								黒色土器	2	2			
得万	3	須恵器	3				3	1ヶ所	3				3
上美	1	須恵器	1				1	1ヶ所		1			1
上依	1	須恵器	1				1	1ヶ所	1				1
物口	1	須恵器		1			1	1ヶ所		1			1
右酒充	1	須恵器				1	1	1ヶ所	1				1
福天寺	1	須恵器	1(坏)				1	1ヶ所				1	1

刻書土器の文字と器種

文字	点数	種類	坏	高台付機	皿	蓋	合計	文字数	体部外面	体部内面	底部外面	底部内面	合計
午	1	須恵器	1(1)				1	1ヶ所	1	(1)			1
	1	黒色土器		1				1	2ヶ所	1		1	
十	1	須恵器		1			1	1ヶ所				1	1
十	1	須恵器	(1)				1	1ヶ所	(1)				1
小	1	須恵器	1				1	2ヶ所	1	1			1
大	1	須恵器	1				1	1ヶ所	1				1
太	1	須恵器		1			1	1ヶ所		1			1
高藏	1	須恵器	1				1	1ヶ所			1		1

へう書き土器の文字と器種

文字	点数	種類	坏	高台付機	皿	蓋	合計	文字数	体部外面	体部内面	底部外面	底部内面	合計
牛	8	須恵器	4	4			8	1ヶ所			1	7	8
十	1	須恵器	1				1	1ヶ所	1				1

IV 成果と問題点

表24 遺構別出土文字一覧

白倉B区

遺構名	点数	文	字	時期
18号住居	4	□、□、□、[午]		9 C後半
57号住居	10	十、十、十、十、午、午、午、 新井、□、く		9 C後半
60号住居	1	□		9 C後半
67号住居	2	甲、(午)		9 C後半
92号住居	2	甲、十		9 C前半
95号住居	7	午、□、□、□、仏、[十]、新井、 新井		9 C後半
1土坑	5	新、□、□、新、十、十、□、□		9 C後半
21土坑	1	□		9 C後半
201土坑	1	午		9 C後半
233土坑	1	(午)		9 C後半
4溝	1	甲		9 C前半
6溝	4	十、十、□、午/午/午		9 C後半
谷	40	□/得万、上依、千、十、十、十、 三、午、午、午/午、午、午、 午、午、午、午、午、午、午、 □、□、□、□、□、□、□、 □、□、□、□、□、□、 十、十、十、十、十、十、 (午)、(午)、(午)、(午)		9 C代

白倉C区

遺構名	点数	文	字	時期
23号住居	2	得万、得万		9 C後半
28号住居	1	□		9 C前半
44号住居	1	右酒光		9 C前半
56号住居	1	□		9 C後半
66号住居	1	大		10 C前半
75号住居	1	十		10 C前半
7土坑	1	□/午		9 C後半
20土坑	1	□		9 C前半

白倉A区

遺構名	点数	文	字	時期
13号住居	1	午		9 C後半
38号住居	2	□、合		10 C前半
68号住居	1	合/合		10 C前半

天引B・C区

遺構名	点数	文	字	時期
15号住居	2	吉、[□]/[小]		9 C
17-20号住居	1	合		10 C後半
33号住居	3	上奥、木、上		9 C後半
49号住居	1	□/□		9 C後半
64号住居	9	合、合、合、合、合、□/合、 □/合、十、□		9 C後半
66号住居	1	黒旗		8 C前半
80号住居	2	十、□/□		10 C前半
81号住居	1	□		11 C
82号住居	4	□、□、合、[木]		9 C後半
83号住居	1	合		?
89号住居	3	福天寺、□、道		9 C後半
95号住居	1	□		9 C後半
98号住居	1	合/合		10 C前半
100号住居	1	□		10 C前半
137号住居	1	□		8 C後半
139号住居	1	新井		9 C後半
B5土坑	9	(可)/可、◎/可、(可)、(可)/可、 (可)/(可)、可/◎、(可)/(可)、 (可)/可、(可)		9 C後半
C6土坑	1	□		10 C前半
C28土坑	1	□		10 C前半
C33土坑	1	合		9 C後半
C35土坑	1	□		9 C後半
Cグット	3	道、□、合/合、新、□/□/□		

さしている可能性が高い。

この地区は以前「新屋村」であったが、合併によって甘楽町になってからは大字境が村を分断し、「新屋」は大字天引に属し、その西に接する大字白倉には新たに「新井谷」と言う字がつけられた。この「新井谷」は白倉B区に谷頭がある各地にあたっており、「新屋」はもともとこの水場を中心とする地域(ムラ)につけられた名称であった可能性もある。以上の想定が正しいとすれば、「新」もそれに加えて考えなければならない。

建造物を示すものに「福天寺」がある(第48図56)。これは、天引の台地東縁で調査した寺院跡の南側に隣接する89号住居(10世紀前半)から出土しており、その寺院の名称と考えられる。文字は、内面にタール状の付着物が著しい坯の底部内面に書かれている。また、同住居からは「道」と書かれた灰釉陶器

や、布目瓦などが出土している。

まとめ

土器に書かれた文字資料の出土量としては、本地域ではかなり多い遺跡例に入るが、文字資料の時期や器種については一般的な傾向と一致している。

文字が多様された9世紀後半は、本遺跡調査区内では特に住居が増加する時期にあっているわけでもないが、白倉地区では谷頭の水場が整備され、天引地区の東縁辺に寺院が造立された時期にあたと考えている。本地区が「新屋郷」にあたるこの前提にたてば、郷内の整備が行なわれた時期に、「新井」や「新」の文字が使われたことになる。また、「新屋」は上野九牧の一つである「新屋牧」にも比定されており、水場を中心に多量に出土している「午」「午」との関連も検討する必要がある。

表25 出土文字資料一覧 (124点)

番号	図番号	P.L.番号	出土位置	器種	墨書位置・方向	釈文	時期
1	図101	P.L.60	白倉A13住	2 須恵器 坏	底部内面	午	9世紀後半
2	図102	P.L.60	白倉A38住	5 須恵器高台付埴	体部内面	□	10世紀前半
3	図102	P.L.61	白倉A38住	6 須恵器高台付埴	体部内面	合	〃
4	図106	P.L.62	白倉A68住	3 須恵器高台付埴	体部内面、外面2ヶ所	合、合	10世紀前半
5	図113	P.L.64	白倉B18住	8 須恵器 坏	体部外面	□	9世紀後半
6	図113	P.L.64	白倉B18住	9 須恵器 坏	体部外面	□	〃
7	図113	P.L.64	白倉B18住	10 須恵器高台付埴	体部外面	□	〃
8	図120	P.L.67	白倉B57住	5 須恵器 坏	体部外面	十	9世紀後半
9	図120	P.L.67	白倉B57住	6 須恵器 坏	体部外面	十	〃
10	図121	P.L.67	白倉B57住	12 須恵器 坏	体部外面	新井	〃
11	図121	P.L.67	白倉B57住	14 須恵器 坏	体部外面	十	〃
12	図121	P.L.68	白倉B57住	15 須恵器 坏	体部内面、外面横位2ヶ所	午	〃
13	図121	P.L.67	白倉B57住	17 須恵器高台付埴	体部外面	十	〃
14	図121	P.L.67	白倉B57住	18 須恵器高台付埴	体部外面	午	〃
15	図121	P.L.68	白倉B57住	22 須恵器高台付埴	体部外面	□	〃
16	図121	P.L.68	白倉B57住	26 須恵器高台付埴	体部内面横位2ヶ所、外面	午	〃
17	図123	P.L.68	白倉B60住	4 黒色土器高台付埴	体部外面	□	〃
18	図125	P.L.69	白倉B67住	9 須恵器高台付埴	体部外面	甲	〃
19	図130	P.L.70	白倉B92住	4 須恵器 坏	体部外面	甲	9世紀前半
20	図130	P.L.71	白倉B92住	6 須恵器 坏	体部外面	十	〃
21	図131	P.L.71	白倉B95住	5 須恵器 坏	体部外面横位、底部内面	午	9世紀後半
22	図131	P.L.71	白倉B95住	7 須恵器 坏	体部外面	□	〃
23	図131	P.L.71	白倉B95住	8 須恵器 坏	体部内面	□	〃
24	図131	P.L.71	白倉B95住	9 須恵器 坏	体部外面墨書、刻書	墨書仏名、刻書十	〃
25	図131	P.L.71	白倉B95住	14 須恵器 坏	底部外面	□	〃
26	図131	P.L.71	白倉B95住	15 須恵器高台付埴	体部外面	新井	〃
27	図131	P.L.71	白倉B95住	19 黒色土器坏	体部外面	新井	〃
28	図135	P.L.73	白倉C23住	7 須恵器 坏	体部外面	得万	〃
29	図135	P.L.73	白倉C23住	13 須恵器 坏	体部外面	得万	〃
30	図136	P.L.73	白倉C26住	6 須恵器高台付埴	体部外面	□	9世紀前半
31	図139	P.L.75	白倉C44住	14 須恵器 蓋	体部外面	右置充	〃
32	図142	P.L.76	白倉C56住	2 須恵器高台付埴	底部内面	□	9世紀後半
33	図151	P.L.80	天引C15住	1 須恵器 坏	体部外面	吉	9世紀前半
34	図152	P.L.80	天引C17-28住	11 須恵器高台付埴	体部外面	合	10世紀後半
35	図154	P.L.81	天引C33住	4 須恵器 坏	体部内面	上奥	9世紀後半
36	図154	P.L.81	天引C33住	6 須恵器高台付埴	体部外面	木	〃
37	図154	P.L.81	天引C33住	8 須恵器高台付埴	体部外面	上	〃
38	図159	P.L.82	天引C49住	4 須恵器高台付埴	体部外面、底部内面	□、□	9世紀後半
39	図160	P.L.83	天引C64住	7 須恵器高台付埴	体部内面	合	〃
40	図160	P.L.83	天引C64住	8 須恵器高台付埴	体部内外面	合	〃
41	図160	P.L.83	天引C64住	9 須恵器高台付埴	体部内面	合	〃
42	図160	P.L.83	天引C64住	10 須恵器高台付埴	底部内面	合	〃
43	図160	P.L.83	天引C64住	11 須恵器高台付埴	体部内面	十	〃
44	図160	P.L.83	天引C64住	12 須恵器高台付埴	体部内面	合	〃
45	図160	P.L.83	天引C64住	13 須恵器高台付埴	体部内外面	内面□、外面合	〃
46	図160	P.L.83	天引C64住	14 須恵器高台付埴	体部内面	□	〃
47	図160	P.L.83	天引C64住	15 須恵器高台付埴	体部内外面	内面□、外面合	〃
48	図161	P.L.84	天引C66住	17 土器 坏	体部外面	墨痕	8世紀前半
49	図165	P.L.85	天引C80住	2 須恵器高台付埴	体部外面	十	10世紀前半
50	図165	P.L.85	天引C80住	4 須恵器 坏	体部内外面	内面□、外面□	〃
51	図165	P.L.85	天引C81住	4 須恵器 坏	体部内面	□	11世紀
52	図166	P.L.85	天引C82住	4 須恵器 坏	体部外面	□	9世紀後半
53	図166	P.L.85	天引C82住	5 須恵器高台付埴	体部内面	□	〃
54	図166	P.L.85	天引C82住	9 須恵器高台付埴	体部外面	合	〃
55	図167	P.L.130	天引C83住	13 須恵器 坏	体部内面	合	10世紀前半
56	図170	P.L.86	天引C89住	2 須恵器 坏・蓋	底部内面	福天寺	〃
57	図170	P.L.86	天引C89住	7 須恵器 坏	体部内面	□	9世紀後半
58	図170	P.L.86	天引C89住	8 瓦輪陶器高台付埴	底部外面	流	〃
59	図173	P.L.87	天引C96住	6 須恵器高台付埴	体部外面	□	〃
60	図174	P.L.86	天引C98住	9 須恵器高台付埴	体部内外面	合、合	10世紀前半

番号	図番号	P.L.番号	出土位置	器種	墨書位置・方向	釈文	時期
61	図180	P.L.89	天引C120住 6	黒色土器坏	体部外面	□	10世紀前半
62	図182	P.L.90	天引C133住 9	須惠器高台付埴	体部外面	□	9世紀?
63	図182	P.L.90	天引C139住 6	黒色土器坏	体部外面・横位	新井	9世紀後半
64	図220		白倉B1土坑 1	須惠器坏	体部外面、底部外面	新A、□	
65	図220	P.L.128	白倉B1土坑 3	須惠器高台付埴	体部外面	十A	
66	図220	P.L.128	白倉B1土坑 4	須惠器高台付埴	体部外面	新A	
67	図220		白倉B1土坑 5	須惠器高台付埴	体部外面	□	
68	図220	P.L.128	白倉B1土坑 10	須惠器高台付埴	体部外面	十	
69	図220	P.L.128	白倉B21土坑 2	須惠器坏	体部外面	□	
70	図221	P.L.128	白倉B201土坑 1	須惠器坏	体部外面	午	
71	図227	P.L.133	白倉B4溝 3	須惠器坏	体部外面	甲	9世紀前半
72	図228	P.L.133	白倉B6溝 2	須惠器坏	体部外面	十	9世紀後半
73	図228	P.L.133	白倉B6溝 3	須惠器坏	体部外面	□	
74	図228		白倉B6溝 4	須惠器坏	体部外面	十A	
75	図228	P.L.133	白倉B6溝 5	須惠器坏	体部内面2A所、外面	内面午、午A、外面午	
76	図237	P.L.137	白倉B谷 92	須惠器坏	体部内外面	内面□、外面等万A	
77	図237	P.L.137	白倉B谷 93	須惠器坏	底部外面	午	
78	図237	P.L.138	白倉B谷 94	須惠器坏	体部外面	上依	
79	図237	P.L.138	白倉B谷 95	須惠器坏	体部外面	□	
80	図237	P.L.138	白倉B谷 96	須惠器坏	体部外面	干	
81	図237	P.L.138	白倉B谷 97	須惠器坏	体部外面	十A	
82	図237	P.L.138	白倉B谷 98	須惠器坏	底部内面	□	
83	図237	P.L.138	白倉B谷 99	須惠器坏	体部外面	□	
84	図237	P.L.138	白倉B谷 100	須惠器坏	体部外面	午A	
85	図237	P.L.138	白倉B谷 101	須惠器坏	体部外面	□	
86	図237	P.L.138	白倉B谷 102	黒色土器坏	体部外面	□	
87	図237	P.L.138	白倉B谷 103	須惠器坏	体部外面	十A	
88	図237	P.L.138	白倉B谷 104	須惠器坏	体部内面刻書、外面墨書	内面午A、外面午A	
89	図237	P.L.138	白倉B谷 105	須惠器坏	体部内外面	内面午A、外面午A	
90	図237	P.L.138	白倉B谷 106	須惠器坏	体部内面	十A	
91	図237	P.L.138	白倉B谷 107	須惠器坏	体部内面	十A	
92	図237	P.L.138	白倉B谷 108	須惠器坏	体部外面	午	
93	図238	P.L.138	白倉B谷 109	須惠器坏	体部外面	午	
94	図238	P.L.138	白倉B谷 110	須惠器坏	体部内面	午A	
95	図238	P.L.138	白倉B谷 111	須惠器坏	体部外面	□	
96	図238	P.L.138	白倉B谷 112	須惠器坏	体部外面	十A	
97	図238	P.L.138	白倉B谷 114	須惠器坏	体部外面	三A	
98	図238	P.L.138	白倉B谷 115	須惠器坏	体部外面	午	
99	図238	P.L.138	白倉B谷 116	須惠器坏	体部内面	十	
100	図238	P.L.138	白倉B谷 117	須惠器坏	体部内面	□	
101	図238	P.L.138	白倉B谷 118	須惠器坏	体部内面	十A	
102	図238	P.L.139	白倉B谷 119	須惠器高台付埴	体部内外面	内面物□A、外面□	
103	図238	P.L.139	白倉B谷 120	黒色土器高台付埴	体部外面	午	
104	図238	P.L.139	白倉B谷 121	須惠器高台付埴	体部外面	午A	
105	図238	P.L.139	白倉B谷 122	須惠器高台付埴	体部内面	午	
106	図238	P.L.139	白倉B谷 123	須惠器高台付埴	体部内面	午	
107	図222		白倉C7土坑 2	須惠器坏	体部内外面2A所	内面□、外面十	
108	図222		白倉C20土坑 4	須惠器	体部外面	□	
109	図223	P.L.129	天引B5土坑 1	須惠器坏	体部内外面	内面(可)、外面可	9世紀後半
110	図223	P.L.129	天引B5土坑 2	須惠器坏	体部内外面	内面①、外面可	
111	図223	P.L.130	天引B5土坑 3	須惠器坏	体部内面	(可)	
112	図223	P.L.129	天引B5土坑 4	須惠器坏	体部内外面	内面(可)、外面可	
113	図223	P.L.129	天引B5土坑 5	須惠器坏	体部内外面	(可)、(可)	
114	図223	P.L.129	天引B5土坑 6	須惠器坏	体部内面2A所	可②	
115	図223	P.L.129	天引B5土坑 7	須惠器坏	体部内外面	(可)、(可)	
116	図223	P.L.130	天引B5土坑 8	須惠器坏	体部内外面	内面(可)、外面可	
117	図223	P.L.130	天引B5土坑 9	須惠器坏	体部外面	(可)	
118	図224	P.L.130	天引C6土坑 2	須惠器坏	体部内面	□	10世紀前半
119	図224	P.L.130	天引C28土坑 1	須惠器坏	体部内面	□	
120	図224	P.L.130	天引C33土坑 1	須惠器高台付埴	体部内面	合	9世紀後半
121	図224	P.L.130	天引C35土坑 2	須惠器坏	体部内面	□	

3 出土文字資料について

番号	図番号	PL番号	出土位置	器種	刻書位置・方向	釈文	時期
122	図241	P L 141	天引Cグリット	須恵器 坏	体部外面 2ヶ所	達々、□	#
123	図241	P L 141	天引Cグリット	須恵器 坏	体部内外面	合、合	10世紀前半
124	図241	P L 141	天引Cグリット	須恵器高台付埴	体部内外面に4文字以上あり	新、□、□、□	9世紀後半

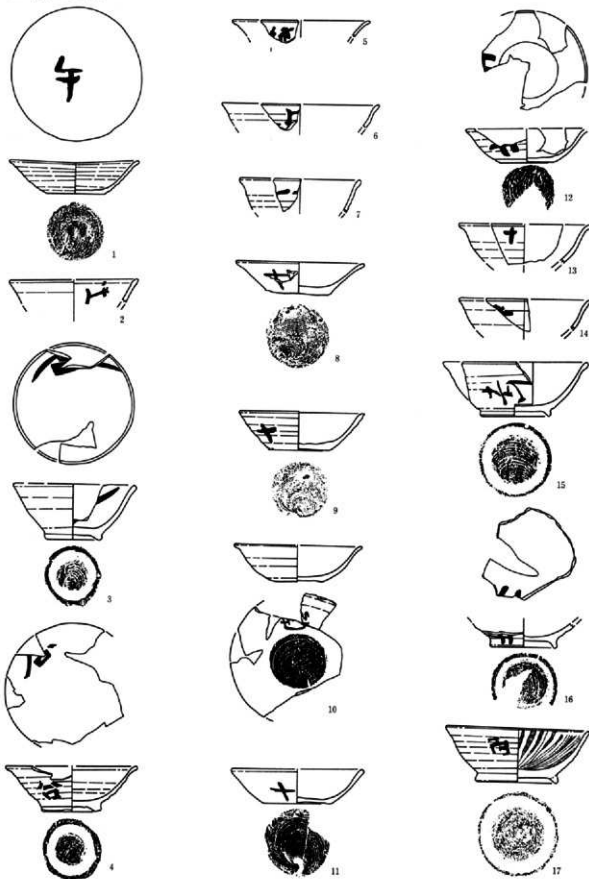
出土刻書土器一覧(8点)

番号	図番号	PL番号	出土位置	器種	刻書位置・方向	釈文	時期
1	図113	P L 64	白倉B18住 6	黒色土器高台付埴	体部外面、底部内面	午	9世紀後半
2	図151	P L 80	天引C15住 2	須恵器 坏	体部内外面 2ヶ所	内面□、外面小	9世紀前半
3	図144		白倉C66住 1	須恵器 坏	体部外面・正位	大 キ	#
4	図147		白倉C75住 3	須恵器高台付埴	底部内面・横位	大 キ	10世紀前半
5	図166	P L 85	天引C82住 6	須恵器高台付埴	底部内面	太々 高職	9世紀後半
6	図238	P L 139	白倉B谷 124	須恵器 坏	底部外面	高職	9世紀後半
7	図238	P L 139	白倉B谷 125	須恵器 坏	体部外面	午	#
8	図238	P L 139	白倉B谷 126	須恵器高台付埴	底部外面	□	#

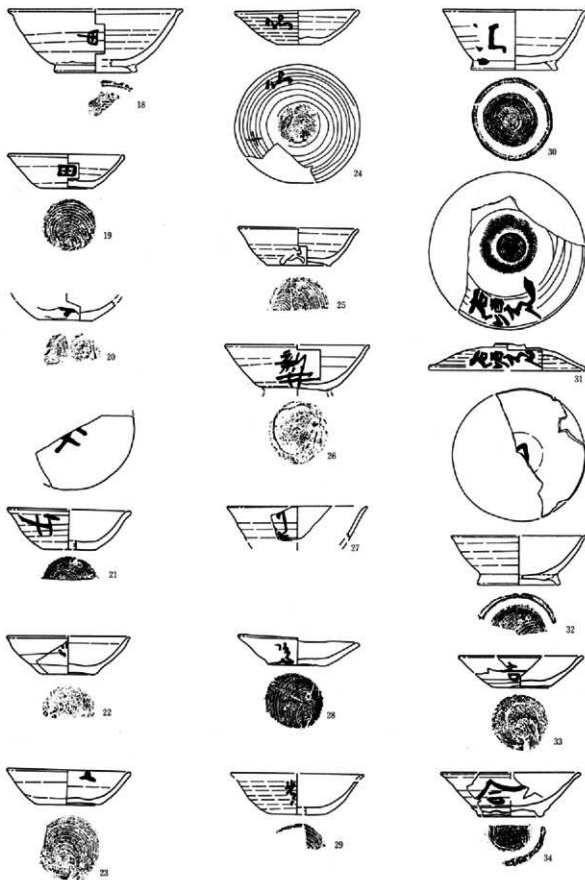
へら書き土器一覧(9点)

番号	図番号	PL番号	出土位置	器種	へら書き位置・方向	釈文	時期
1	図121	P L 67	白倉B57住 11	須恵器 坏	体部外面	十	9世紀後半
2	図125	P L 69	白倉B67住 5	須恵器 坏	底部内面	牛	#
3	図221	P L 128	白倉B233土坑 5	須恵器高台付埴	底部内面	牛	#
4	図238	P L 139	白倉B谷 127	須恵器高台付埴	底部外面	牛	#
5	図238	P L 139	白倉B谷 128	須恵器高台付埴	底部外面	牛	#
6	図238	P L 139	白倉B谷 129	須恵器高台付埴	底部内面	牛	#
7	図238	P L 139	白倉B谷 130	須恵器 坏	底部内面	牛	#
8	図238	P L 139	白倉B谷 131	須恵器 坏	底部内面	牛	#
9	図240	P L 140	白倉B谷 161	須恵器 坏	底部内面	牛	#

IV 成果と問題点

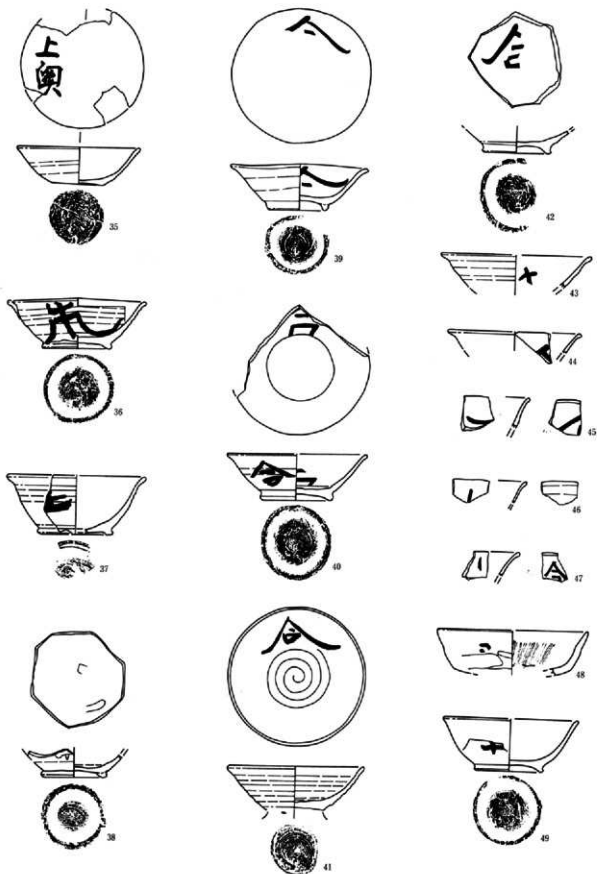


第45図 出土文字資料集成(1)

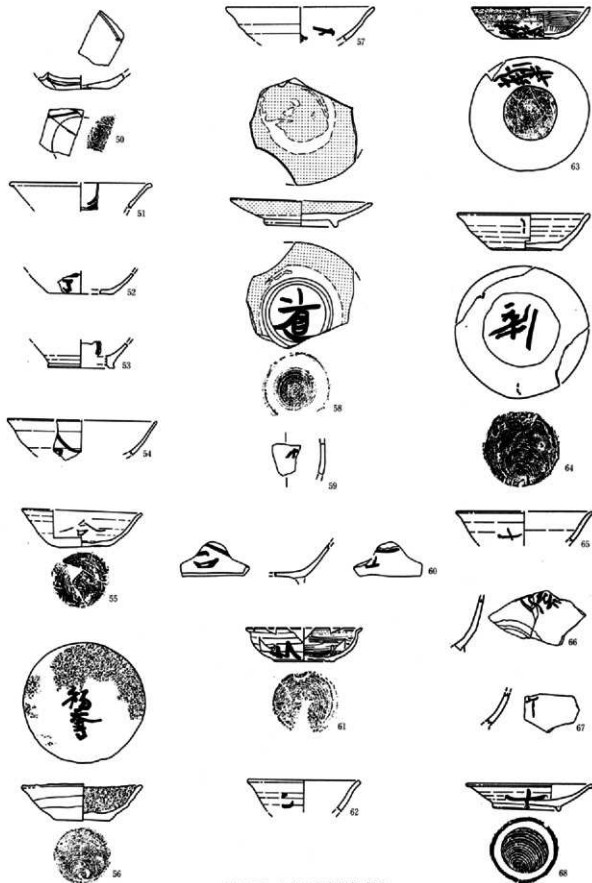


第46圖 出土文字資料集成(2)

IV 成果と問題点

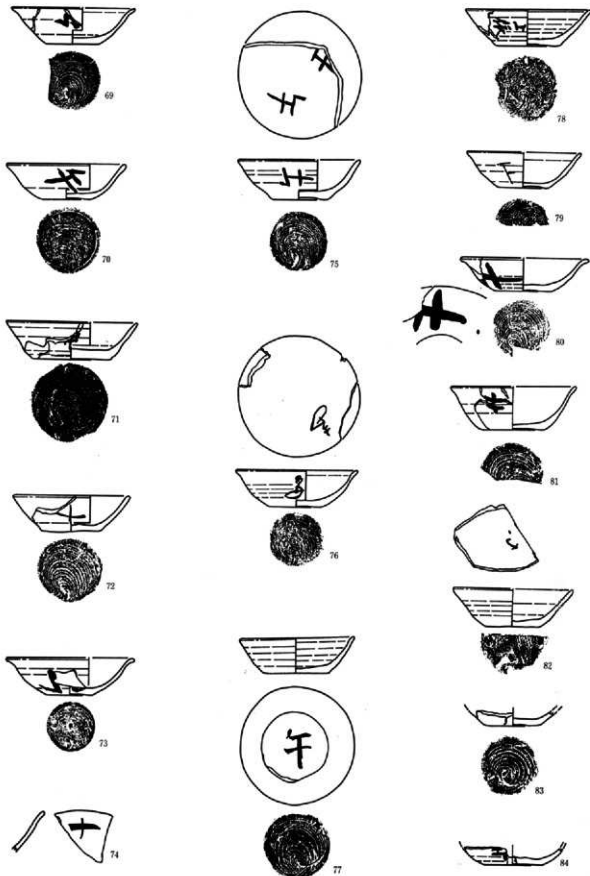


第47図 出土文字資料集成(3)



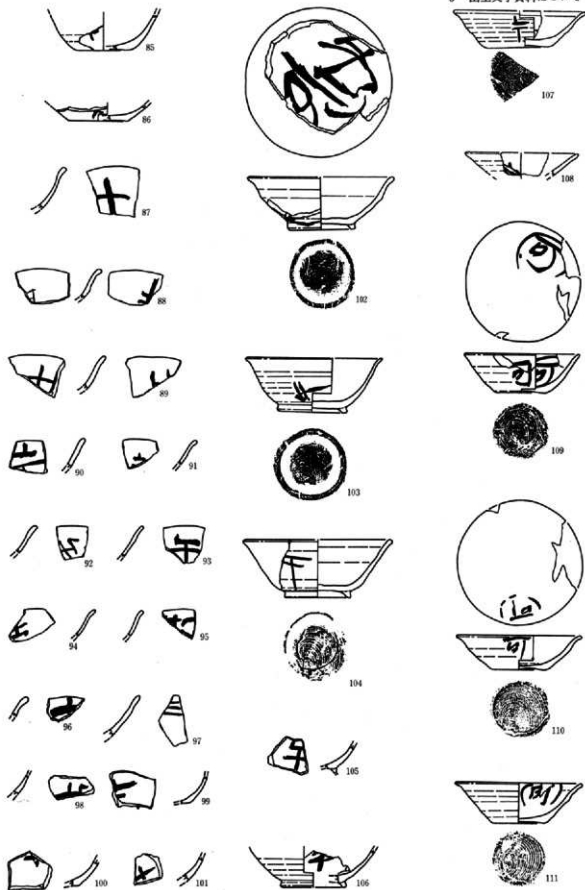
第48図 出土文字資料集成(4)

IV 成果と問題点



第49図 出土文字資料集成(5)

3 出土文字資料について



第50図 出土文字資料集成(6)

IV 成果と問題点



112



115



121



122



113



116



123



117



114



118



119



124



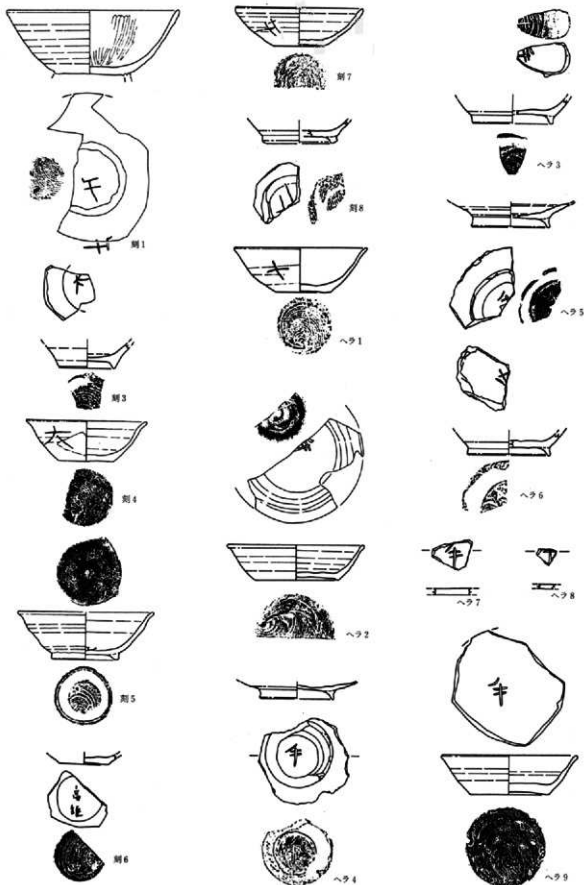
120



12

第51図 出土文字資料集成(7)

3 出土文字資料について



第52図 出土文字資料集成(8)

4 天引地区で確認した古代寺院について

はじめに

天引地区の東側を流下する三途川の谷に面した崖上で、古代の寺院跡と考えられる遺構を発見した(96~105ページ参照)。確認できた遺構は、長方形に削平された区画内に、雨落ち溝と考えられるコの字状の溝と、不定形な浅い落ち込み3カ所、および鍛冶に伴う土坑1カ所であった。溝や落ち込みからは、9~10世紀代の土器と布目瓦片42点が出土している。

以上の遺構・遺物のみで古代の寺院とするにはここもとなないので、ここでは遺跡内で出土した寺院に関連する遺物を紹介し、寺院の存在を補強しておきたい。

寺院関連の出土遺物

当遺跡からは布目瓦の他に、墨書土器、火舎、鉄鐸などが出土している。第53図に示したものがその代表例である。

布目瓦は寺院跡も含めて総計225点が出土している。瓦出土遺構は表26のとおりである。分布範囲は白倉B区にまでおよんでいるが、その多くは寺院跡のある天引地区に集中しており、当寺院の瓦であった可能性が高い。瓦出土遺構の時期は9世紀後半以降であり、当寺院の想定時期とも一致している。瓦当面がわかる例の出土は少ないが、全形が判る軒丸瓦が、寺院跡の南側に隣接する天引189号住居から出土している。

また、この住居からは、瓦のほかに墨書土器が2点出土しており、そのうちの1点に「福天寺」と書かれていた。この土器はやや小ぶりの須恵器杯で、内面にタール状の付着物が著しいことから、灯明に使用されたものであろう。時期は9世紀後半に比定される。状況から判断して、この土器は寺院で使われたものと考えられ、「福天寺」はこの寺院の名称としてよいだろう。

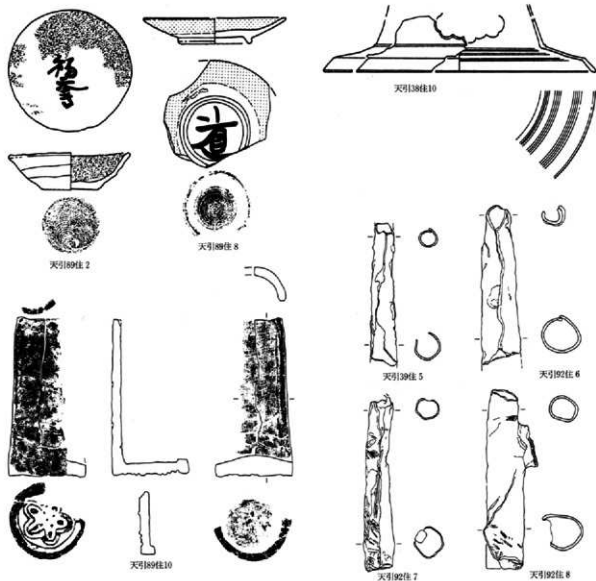
火舎は、寺院跡から西へ70mの位置にある天引38号住居から出土した。時期は出土土器から10世紀前半に比定される。小破片1点の出土であるが、稀少品であり、他の遺物と同様に寺院跡に近い位置から出土している点でも、重要である。

鉄鐸は、火舎が出土した38住に重複する天引39号住居から1点、寺院跡から南へ120mの位置にある天引92号住居から3点の、計4点が出土している。時期はいずれも11世紀代である。鉄鐸については次項で扱っているので、詳細は割愛するが、当寺院と関連する妥当性は強いと言ってよいだろう。

表26 布目瓦出土遺構一覧

遺構名	出土点数	出土状況	遺構の時期
白倉B区57号住居	3	カマド周辺	9世紀後半
白倉B区95号住居	1	カマド袖下掘り方	9世紀後半
白倉B区1号井戸	1	覆土中	8世紀後半
白倉B区1号土坑	1	#	9世紀後半
白倉C区24号住居	1	カマド前の床面	10世紀前半
白倉C区表探	1		
白倉C区3号溝	1	覆土中	近世~
天引B1号溝	1	#	近世~
天引C区37号住居	35	#	11世紀
天引C区38号住居	12	#	10世紀前半
天引C区39号住居	20	#	11世紀
天引C区40号住居	1	床面	10世紀後半
天引C区41号住居	12	覆土中	10世紀前半
天引C区45号住居	5	カマド内	11世紀
天引C区63号住居	3	カマド及び床面付近	11世紀
天引C区66号住居	1	覆土中	8世紀前半
天引C区75号住居	1	#	10世紀
天引C区76号住居	1	#	8世紀前半
天引C区80号住居	2	#	10世紀前半
天引C区81号住居	3	#	11世紀
天引C区82号住居	9	#	9世紀後半
天引C区83号住居	4	#	10世紀前半
天引C区86号住居	5	カマド内	11世紀
天引C区89号住居	13	カマド崩落土中	9世紀後半
天引C区92号住居	1	カマド内	11世紀
天引C区95号住居	1	カマド奥側	9世紀後半
天引C区98号住居	7	カマド奥辺と覆土中	10世紀前半
天引C区10号住居	13	カマド内と覆土中	11世紀
天引C区10号住居	3	カマド内~前	11世紀
天引C区10号住居	2	覆土中	11世紀
天引C区32号土坑	1	#	8世紀前半
天引C区90号土坑	7	#	9世紀後半
天引C区7号溝	1	#	近世~
総計点数	215		

4 天引地区で確認した古代寺院について



第53図 寺院関連の出土遺物

まとめ

以上、天引地区で確認した寺院跡及びそれと関連する出土遺物は、いずれも状況証拠に留まらざるを得ないが、瓦は寺院跡を中心とする量比で分散しており、その他の遺物はいずれも寺院跡に近い位置から出土している事は、これらの遺物が寺院跡から分

散したものである可能性が高いと言えよう。それらをまとめると、「この寺院は福天寺と言う名称で、9世紀後半かそれ以前に造立された。堂宇の規模は小さいが、屋根の一部は瓦葺きで、火舎などの仏具を供え、鉄錘を使用した修験とも関連があった」とものと想定される。

5 鉄鐸について

天引向原地区からは4点の鉄鐸が出土している。ここでは、この4点の特徴、出土状況、時代、その他についてまとめてみたい。なお、この4点については実測図を第54図(次頁)に再録したので参考にしてほしい。

4点の内1点は天引39号住居から出土し(39号5)他の3点は天引92号住居(92号住居6・7・8)から出土している。この4点の鐸本体はいずれも鉄板(1mm以下)を円錐の先端を切り取った台形錐(用語として存在しないと思うが、円錐の先端を切り取った形状を示す用語として使用する)状に丸めて鍛造されている。

天引39号住居5は、上下が一部欠損しているが、本来の形状と大差ないようである。残存長は7.5cmで上面径1.0cm、下面径は1.4cmで円柱に近い。内部は中空で舌は既になくなっていった。遺物の出土状態は竪穴住居壁際の床面直上である。カマドからは土釜が出土しており11世紀代に位置付けられる。

次に天引92号住居出土の3点について述べることにする。

天引92号住居6は、下端が一部欠損し中空である。ほぼ台形錐状を呈するが、上端部については背部から合わせ目方向に向かって斜めに切り落としたような形状となる。残存長は8.9cmで上面径は1.2cm、下面径は1.9cmである。内面は空洞で舌は残っていない。この鉄鐸については、実測段階では気付かなかった小孔(直径3~4mm)が上端背面にあることがX線撮影によって確認できた(第54図参照)。

この小孔については、栃木県日光男体山遺跡(1963『日光男体山』)出土の鉄鐸に類似例がある。その場合、舌が残る良好なものを見ると小孔には鉄製の円環(もしくは楕円環)がはまり、合わせて舌が懸垂している。この円環は鐸本体と舌の両方を懸垂する機能を持つようである。

天引92号住居7は、ほぼ完形の鉄鐸で、上面径が1.2cm、下面径が1.5cmで長さは8.9cmである。この鉄

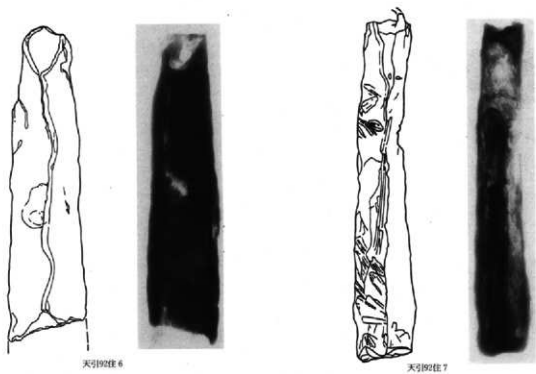
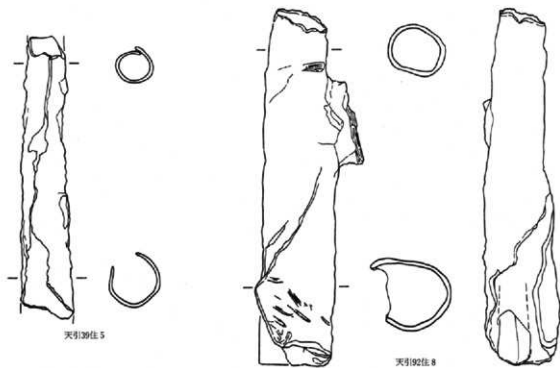
鐸内部はサビでつまっており、内部に舌が入っている。肉眼では下端部に僅かに断面方形の舌があることしかわからないが、X線撮影により、付け根の部分が蕨手状になっている舌がはっきりと確認できた(第54図次頁参照)。舌の長さは6.5cmであった。肉眼では上端に僅かに飛び出る棒があり、またX線写真では上端内部にカンヌキ状になっている様子が観察される。上端に飛び出る棒と内部カンヌキ状のものがどのような関係にあるのか今一つ不明である。内部にカンヌキ状のものがあればおそらく外面側面観察からも留め金としてわかると思われるが残念ながら確認できない。上端に飛び出る棒については、円環状金具の可能性もあろう。

天引92号住居8も内部にサビがつまり舌の一部が肉眼観察できる。舌は断面方形を呈している。この個体もX線撮影を行ったが新たな知見をうることができなかった。上面径は1.3cm、下面径は1.9cm、長さ9.4cmである。他の3個体の鉄鐸は鐸本体の鉄板合わせ目が明瞭であったが、この個体は腐食が著しく合わせ目がどこかよくわからない。

天引92号住居は焼失住居であり、その出土位置も居住時を反映している可能性がある。6は住居の壁が立ち上がりところより僅かに外側で出土している。また、7と8は貯蔵穴底面から並んで出土している。住居埋没中には浅間B軽石(1108年)が堆積し、出土土器は11世紀のものである。

以上4点の鉄鐸についての基礎資料をまとめたが、遺物の性格については触れる余裕がなくなってしまった。当遺跡以外に鉄鐸が出土した遺跡は、管見に触れた限りでは宮城県東山、栃木県日光男体山、群馬県万福寺、長野県吉田川西、同県くまのかわ、同県果町、同県小原、同県針塚、中原、同県御狩野、福岡県沖の島、同県かつて塚古墳の12遺跡にすぎない。鉄鐸が、祭祀的性格をもつことはおそらく異論のないところであろうが、その由来並びに使われ方などについては不明な点が多い。当遺跡で出土した鉄鐸は時代の特定できる貴重な事例を追加したといえよう。

5 鉄蹄について



0 5cm

第54図 出土した鉄蹄

6 白倉B区36号住居出土の鋸

鋸が出土した36号住居は、白倉B区の東寄りに位置する。この地点は当遺跡の中央部にあたり、台地を縦断する古代の道に隣接している。

鋸は住居内の西側縁辺の床面からやや浮いた状態で出土しており、目釘を装着した完全な状態で発見された。住居に伴う土器は8世紀前半であり、鋸もその年代をあたえてよいだろう。なお、住居の規模は普通で、鋸の他に目立った遺物は出土していない。

実測図と想定復元図を第55図に示した。鋸身が湾曲しているのは、土圧によるものであろう。また、表面の蕪様の圧痕は、住居の屋根材の圧痕と思われる。目釘の細いほうの端部が鍵の手状に曲がっているのは、柄が付いていたことを示しており、使用できる状態であったことがわかる。鋸歯は箱屋目で、アサリ・ナグシともに認められる。

この鋸の大きな特徴は背が厚いことで、特にもとは側はアサリの幅よりも厚いようにみえる。これでは歯道を進むことがむずかしい。良く切れる鋸は歯側が厚く、そこにアサリとナグシを加えて、歯道のとおりを良くしている。それに対して当遺跡出土の鋸は、歯道のとおりが悪く、使いづらいものであったと考えられる。これは、鋸身を長くするために必要な強度を、厚みで補った結果かもしれない。

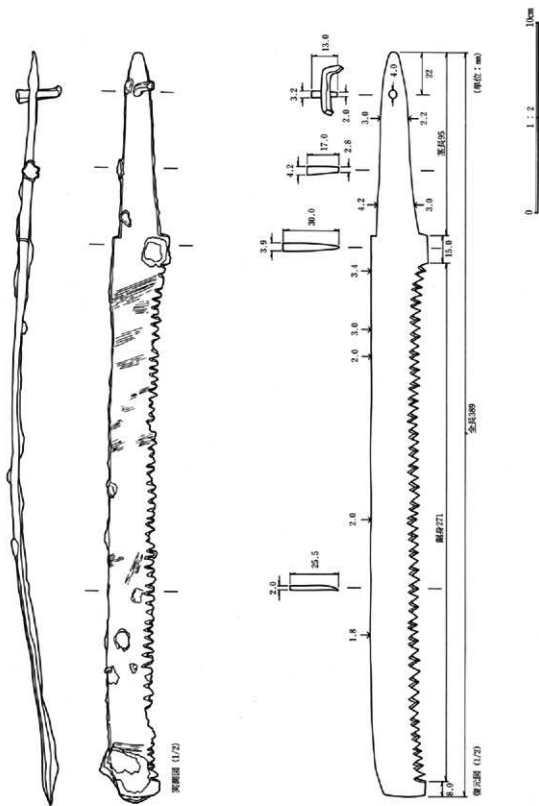
なお、参考として県内出土の古代鋸一覧を掲載しておく。このなかでは、冷水村東遺跡例がほぼ同じ形態だが、本遺跡例より薄手のつくりである。

表27 群馬県出土の古代鋸

遺跡名	出土遺構	時期	出土鋸の概要
1 愛宕山遺跡 (松井田町松井田)	A区4号住居	8世紀後半	鉄弓が付く弓張鋸。歯列が中央で反対になる縦挽き用のもの。鋸条31cm、鋸幅1.8cm、茎に木質が残る。
2 荒砥上川久保遺跡 (前橋市大室町)	B区8号住居	9世紀前半	もとを欠損するため歯・茎は不明。先端が鍵の手状に突出し、歯道はわずかに内湾する。歯はアサリ、ナグシがつく。現存部長さ13.1cm、幅1.7cm、厚み2.7mm。
3 鳥羽遺跡 (前橋市鳥羽町)	G区		小破片のため、詳細は不明。
4 赤井宮前遺跡 (沼和村赤井)	23号住居	10世紀後半	小破片のため詳細は不明。現存部長さ3.8cm、幅2.2cm、厚み2mm。
5 冷水村東遺跡 (群馬町冷水)	A区17号住居	8世紀	先端部を欠失するが状態は良好で、茎に木質が残る。歯道がゆるく内湾し、茎との間に歯間がつく。歯はアサリ、ナグシとも良好。現存部長さ30cm、幅2.9~2.2cm、厚み1.5~1.2mm。

〈文献〉

- 群馬県史編さん委員会編『群馬県史』資料編2 原始古代2 1986年
吉川金次『もとの人間の文化史・新』朝法政大学出版局 1976年
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥上川久保遺跡』1982年
- 『鳥羽遺跡』
- 『赤井宮前遺跡I』1985年
- 『年報』14 1995年



第55図 白倉B区36号住居出土鋸と想定復元図

VII 補 遺

本報告書をもって白倉下原・天引向原遺跡の報告書作成は終了するわけだが、以下については既刊部分である時代の補遺にあたる。1では遺構を、2では遺物を、3では縄文土器の分布を、4では出土炭化材の樹種分析について扱う。

1 縄文～古墳時代前期の土坑

図290～図293が該当する。縄文時代では、29基の土坑が新たに加わった。細別時期を特定できるものはほとんどない。遺物番号は補遺遺物の番号(図295～図305)に対応している。

弥生時代では4基の土坑が新たに加わった。この中で、天引A区2号土坑と9号土坑は前期～中期の所産である。出土遺物は図306に示してある。

古墳時代前期～中期では2基の土坑が新たに加わった。出土遺物は図306に示してある。

2 縄文～古墳時代前期の出土遺物

縄文時代の補遺遺物(図295～図305 1～81)は、縄文時代の遺構出土でありながら縄文時代の報告書を作成した段階では遺物が見つからず後に見つかったものと(20、22、27～62、71)、弥生時代以降の遺構出土や遺構外出土であるが希少性が高いもの(上記以外)について取り扱っている。「II」縄文時代編の中では縄文時代に帰属する天引地区の土坑出土石器は殆どが所在不明の状態であったのがこれで補完できたことになる。遺物観察表には遺物の出土地区は示したが出土遺構やグリッドなどの情報を記すのを遺漏したので、以下に繁雑ではあるが番号順に記載する。また、以下の番号にアンダーラインが示してあるものは縄文時代の遺構出土遺物である。

1 30号住居、2 36-31G、3 35-57G、4 36-61G、5 37-61G、6 34-60G、7 35-57G、8 谷、9 44-71G、10 53号住居、11 表面採集、12 133号住居、13 38-63G、14 47号住居、15 28-53G、16 35-36G、17 5号住居、18 39-71G、19 36-56G、20

57号土坑、21 表面採集、22 144号住居、23 10号住居、24 表面採集、25 39-56G、26 24-40G、27 166号土坑、28 170号土坑、29 82号土坑、30 61号土坑、31 150号土坑、32 93号土坑、33 150号土坑、34 139号土坑、35 116号土坑、36 165号土坑、37 94号土坑、38 278号土坑、39 139号土坑、40 141号土坑、41 147号住居、42 278号土坑、43 13号土坑、44 168号土坑、45 148号土坑、46 15号土坑、47 168号土坑、48 147号住居、49 94号土坑、50 94号土坑、51 21号住居、52 89号住居、53 71号土坑、54 170号土坑、55 138号土坑、56 139号土坑、57 158号土坑、58 170号土坑、59 97号住居、60 302号土坑、61 97号住居、62 139号土坑、63 29号住居、64 38-53G、65 69号住居、66 29号住居、67 29号住居、68 29-61G、69 37-71G、70 28-34G、71 81号住居、72 38-53G、73 151号土坑、74 137号土坑、75 35-57G、76 35-57G、77 34-56G、78 34-57G、79 34-57G、80 34-57G、81 34-57G。

この中で6と8は、「II」の報告書中遺構外出土遺物として破片を紹介したが、今回新たに接合した破片が増えたので再度接合実測を行った個体である。

また、17の人面装飾の土器片や23の土偶脚部は類似例が少なく貴重である。また、石器では63～66のミニチュア石皿と75～81の袂状耳飾及び未製品が目まされよう。袂状耳飾関連資料は出土位置がまとまっていることから工房跡があったのかも知れない。

弥生時代以降の補遺遺物(図306、307 1～18)は、殆どが弥生時代～古墳時代中期の遺構出土遺物であるが、唯一11のみ遺構外出土遺物である。本来「III」弥生～古墳時代編に掲載される予定であったものである。

3 縄文時代の土器分布

遺構外出土縄文土器と弥生時代以降の遺構から出土した縄文土器の出土量を、時期別に出土点数として今回ようやく付図にして示すことができた。「II」縄文時代編に示した時期別遺構分布と対応させて、ぜひとも見て欲しい。

4 出土種実の分析

新山雅広 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

補遺として縄文時代、弥生時代および古墳時代前期と考えられる大型植物化石についての検討を行った。なお、大型植物化石の同定にあたって、流通科学大学の南木睦彦助教にご指導して頂いた。ここに感謝致します。

2. 出土した大型植物化石

試料の時代は、Na101~115、118~122が弥生時代、Na116、117が縄文時代、Na123が古墳時代前期である。出土した大型植物化石は、木本ではオニグルミ、コナラ属、サンショウ属、草本ではコムギ、イネ、ササゲ属である。出土した大型植物化石の一覧を表28に示す。

3. 栽培・利用植物について

出土したもののうち、栽培植物と考えられるものはコムギ、イネ、ササゲ属（アズキ、リョクトウの類）である。また、遺跡周辺に生育していたものと思われるオニグルミ、コナラ属、サンショウ属は食用となり、利用可能である。コムギ、イネ、ササゲ属は弥生時代には既に栽培されていたと思われ、コムギに関しては縄文時代と考えられる土坑からも出土している。

4. 大型植物化石の記載

オニグルミ *Juglans ailanyhifolia* Carr. 炭化核

出土したものは全て破片であるが、完形であれば、核は側面観は卵形から円形、先端は鋭頭、上面観は円形。表面は、縦に不規則な隆起があり、明瞭な1本の縫合線が縦に走る。

コナラ属 *Quercus* 炭化子葉

炭化した子葉が縦半分に分れた状態になっており、果皮は残っていない。

サンショウ属 *Zanthoxylum* 炭化種子

種子は側面観は楕円形、上面観は卵形、表面には網目模様があり、一方の側面にはへそがある。

コムギ *Triticum aestivum* Linn. 炭化胚乳

側面観は楕円形、上面観は偏平。

イネ *Oryza sativa* Linn. 炭化穎果、炭化胚乳

側面観は楕円形、上面観は偏平。穎の表面には規則的に配列する独特の顆粒状突起がある。

ササゲ属 *Vigna* 炭化種子

子葉の内面には、本葉につく長くて明瞭な柄の痕跡がみられる。

VII 補 遺

表28 出土種実一覧表

No	分類群と個数	出土遺構
101	イネ、炭化胚乳、1	白倉C区14号住居柱穴
102	オニグルミ、炭化核、(1)	白倉C区14号住居柱穴
103	コムギ、炭化胚乳、1	白倉C区14号住居柱穴
104	オニグルミ、炭化核、(1)	白倉C区14号住居柱穴
105	ササゲ属、炭化種子、(1)	白倉C区2号土坑覆土
106	イネ、炭化胚乳、2	白倉C区2号土坑覆土
107	オニグルミ、炭化核、(1)	白倉C区2号土坑覆土
108	イネ、炭化胚乳、20	白倉C区2号土坑覆土
109	虫えい、1	白倉C区2号土坑覆土
110	オニグルミ、炭化核、(2)	白倉C区2号土坑覆土
111	イネ、炭化胚乳、1,炭化胚乳、5	白倉C区2号土坑覆土
112	オニグルミ、炭化核、破片多数(約1個分)	白倉C区3号土坑覆土
113	材、1	白倉C区5号土坑覆土
114	イネ、炭化胚乳、1,炭化胚乳、13	白倉C区5号土坑覆土
115	不明、1	白倉C区5号土坑覆土
116	不明、1	白倉C区14号土坑覆土
117	コムギ、炭化胚乳、1	白倉C区14号土坑覆土
118	サンショウ属、炭化種子、1	白倉C区15号土坑覆土
119	オニグルミ、炭化核、(1)	白倉C区15号土坑覆土
120	イネ、炭化胚乳、4	白倉C区15号土坑覆土
121	イネ、炭化胚乳、7	白倉C区16号土坑覆土
122	オニグルミ、炭化核、(5)	白倉C区16号土坑覆土
123	コナラ属、炭化子葉、(2)	天引31号住居覆土

数字は個数、()内は破片の数

5 出土した炭化材の樹種

植田弥生(パレオ・ラボ)

1 はじめに

既報告分の時代出土炭化材の樹種同定の結果を補遺として報告する。試料は縄文時代の白倉A地区96住居跡から出土した1点、弥生時代の天引C地区65住居跡および天引C地区116住居跡の各1点、古墳時代前期の天引C地区の13住居跡の8点・25住居跡の3点・28住居跡の3点・106住居跡の4点・107住居跡の1点・114住居跡の16点・122住居跡の3点、古墳時代中期の天引C地区10住居跡の1点である。

ヨシ属の同定に関しては愛知教育大学の渡邊幹男博士の御教示を受けました。

2 方 法

炭化材の3方向の破断面の組織を走査電子顕微鏡で観察し樹種同定を行った。横断面(木口)は炭化材を手で割り新鮮な面を出す。接線断面(板目)と放射断面(柎目)は片刃の剃刀を炭化材に軽くあて弾くように割り新鮮な面を出す。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子製 JSM T-100型)で観察・写真撮影をした。

3 結果と考察

表30に試料番号ごとの樹種同定結果を示す。なお一試料に異なる種類が含まれているものについては中点を打ち並記した。古墳時代前期の試料38点については、遺構ごとに産出樹種が判るように表29にまとめた。

縄文時代の白倉A地区96住居跡および弥生時代の天引C地区65住居跡から出土した各1点の柱材は両試料ともクリであった。天引C地区116住居跡から出土した弥生時代の板材はニレ属で年輪の詰まったヌカ目の材であった。また古墳時代中期の天引C地区10住居跡の柱材はアサダであった。

古墳時代前期の7つの住居跡からは12分類群が出土し、ケンボナシ属が114住居跡から15点と多く出土しているが他の樹種は1～3点が各住居跡から散点的に出土しており、特にかたよった樹種利用は見受けられない。出土した樹種は針葉樹がモミ属・カヤ、落葉広葉樹がオニグルミ・アサダ・ニレ属・ケンボナシ属・ミズキ・エゴノキ属・トネリコ属、常緑広葉樹がコナラ属アカガシ亜属・ヒサカキであり、クスノキ科は大部分は常緑であるがダンコウバイ・クロモジ・アブラチャンなど落葉性の樹種の可能性もある。このように針葉樹・落葉広葉樹・常緑広葉樹と様々な樹種が利用されていた。

天引C地区13住居跡から出土したNo425は直径0.9cmの稈でヨシ属であった。

関東地方の住居材は縄文時代はクリを、弥生時代以降はコナラ属のクスノギ節とコナラ節が圧倒的に多く利用されていた(山田 1993)。また当遺跡の北部の高崎市の新保遺跡(鈴木・能城、1986・1988)では弥生時代から古墳時代前期の農具や自然木の樹種が調査され、関東平野中央部では照葉樹林というよりはむしろ照葉樹林の要素をいくらか含んだ落葉広葉樹林の環境下であったといわれる。これはやや低地部に位置する遺跡の結果ではあるが、台地上に立地する当遺跡から出土した樹種も、新保遺跡と同様にアカガシ亜属やヒサカキなどの照葉樹林要素を含む落葉広葉樹林が周辺にありそこから木材を利用したと予想される。ただし新保遺跡と大きく異なるのはコナラ節とクスノギ節が出土していないことである。当遺跡の古墳時代後期の住居跡の樹種からもコナラ節が1点出土しただけである。この相違の原因は周辺域の同時期の資料の蓄積をすすめて究明する必要がある。

4 記 載

モミ属 *Abies* マツ科 PL175 3a-3c (No207) PL176 4a-4c (No140)

仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞はない針葉樹材である。早材から晩材への移行はゆるやかである。放射柔細胞の壁は厚く、放射断面において細胞壁に数珠状肥厚がみられ、上下端の細胞はときに山形になる。分野壁孔は小型で1から4個あり、炭化材では孔口の大きさが不揃いで、ヒノキ型やスギ型が混在する。接線断面において放射組織は比較的背が高い。

モミ属は常緑高木で暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの5種がある。いずれの材も有用であり、遺跡からは建築材としてよく出土する。組織は類似しており種の区別はできない。

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 PL175 1a-1c (No147)

仮道管・放射組織からなり樹脂細胞はない針葉樹材である。早材から晩材への移行はゆるやかである。仮道管に2本が対になる細いらせん肥厚があることからカヤと同定した。暖帯から温帯下部の山地に生育する針葉樹で、種子は食用になり、材は水湿に強く加工しやすい有用材である。

オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura PL175 3a-3c (No423)

単独あるいは2～3個が複合した中型の楕円形の管孔が除々に径を減しながら散在し、接線状の柔組織が顕著な散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、クロースが顕著である。放射組織はほぼ同性または上

VII 補 遺

下端部に方形細胞がある異性、3細胞幅が多い。暖帯から温帯のやや湿った所に生育する落葉高木である。種子は食用になり、材は加工しやすく狂いが少ない。

アサダ *Ostrya japonica* Sarg. PL176 4a-4c (No426)

小型の管孔が単独または2～数個が放射方向に複合して散在し、年輪界では径を減じる散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、2細胞幅である。

温帯の山地に生育する落葉高木で材質は堅く丈夫である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 PL176 5a-5c (No414)

中型～大型の管孔が密に配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火災状に配列し、柔組織が接線状に配列する環孔材である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性である。暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は耐朽性にすぐれ、縄文時代からは柱材の使用例が有名である。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 PL177 6a-6c (No427)

中型～小型の管孔が単独で放射方向や斜状に配列し、年輪界は不明瞭、広放射組織をもち、木部柔組織の接線状配列が顕著な放射孔材である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性、単列のものと集合状・複合状の広放射組織があり、道管との壁孔は櫛状・交互状で孔口は大きい。

アカガシ亜属は常緑でドングリをつけるカシ類の仲間であり、おもに暖温帯に分布する。山野や山中に普通なアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジログシなどがある。材は丈夫で弾性や耐湿性があり、農具として用いられる代表樹種である。

ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科 PL177 7a-7c (No458)

中型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合しまばらに分布し管孔の径は年輪界近くでやや減少し、晩材では帯状の柔組織が顕著な散孔材である。道管の壁孔は交互状で横に伸びた孔口はつながり流れ、穿孔は単一である。放射組織は異性、1～5細胞幅の紡錘形、上下端に方形細胞があり、結晶細胞がある。放射組織と道管との壁孔は交互状に密在する。暖帯の山野に普通に生育する落葉高木である。果実は食べられ、材は堅く丈夫である。

ニレ属 *Ulmus* ニレ科 PL177 8a-8c (No417)

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、その後小型の管孔が集合して配列している環孔材である。道管の穿孔は単一、小道管の内腔にらせん肥厚がある。放射組織は同性、8細胞幅の紡錘形である。ケヤキの組織にも似ているが、放射組織に結晶細胞がみられないので、ニレ属と判断した。ニレ属は北地の温帯に多いハルニレ・オヒョウ、暖帯の荒地や川岸に普通に見られるアキニレがあり、いずれも落葉高木である。材の用途は多く、樹皮の繊維も縄や織物に利用される。

クスノキ科 Lauraceae PL177 9a-9c (No434)

小型の管孔が単独または2〜3個が放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一のものと横棒が少ない階段穿孔があり、内腔に細かならせん肥厚がある。放射組織は異性、1〜2細胞幅、上下端に大きな油細胞が見られる。管孔が大きく油細胞の出現頻度の高いクスノキ以外の樹種であるがこれ以上は区別できなかった。暖帯に生育し多くは常緑の高木または低木である。葉や材に油細胞があるのが特徴である。

ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. ツバキ科 PL178 10a-10c (No437)

非常に小型で多角形の管孔が密に散在する散孔材である。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は横棒の数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、2細胞幅が多く、道管との壁孔は交互状・階段状である。暖帯の林下にきわめて普通の常緑の小高木である。材は小物器具や薪炭材につかわれる。

ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメド科 PL178 11a-11c (No455)

年輪の始めに中型の管孔が1〜2層配列し徐々に径を減じてゆき、晩材部は単独または放射方向に2〜3個複合した非常に小型で厚壁の管孔が散在し、周囲状・翼状の柔組織が顕著な環孔材である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は異性、1〜4細胞幅、上下端に方形細胞・直立細胞が単列で伸び、結晶細胞がある。暖帯の山中に生育する落葉高木である。本州・四国に分布するケンボナシと北海道から九州に広く分布するケンボナシがある。果実は食べられ、材質はよく、有用である。

ミズキ *Cornus controversa* Hemsl. ミズキ科 PL178 12-12c (No438)

小型の管孔が単独または放射方向に2〜3個接合して均一に分布する散孔材である。年輪の初めと終わりの管孔がやや小さい。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒の数が多く階段穿孔である。放射組織は異性、1〜3細胞幅、多列部は平伏細胞からなりその上下端に方形・直立細胞が単列で伸びればば一端の単列部のほうが細胞数が多くなる。暖帯から温帯の山地に普通の落葉広葉樹である。材は緻密で加工しやすい。

エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 PL179 13a-13c (No418)

小型から中型の管孔が単独または2〜4個が複合して放射方向に配列し、晩材部では径が減少する散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒が少ない階段穿孔である。放射組織は異性、1〜4細胞幅、道管との壁孔は小型で交互状である。暖帯から温帯下部の山地に生育する落葉高木である。エゴノキ・ハクウンボク・コハクウンボクがある。エゴノキは山野や川辺に普通にあり果皮はエゴサポニンを含み石鹼の代用になる。材は柄や器具に使われている。

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 PL179 14a-14c (No456)

年輪の始めに中型〜小型の管孔が不連続に配列し、その後単独または2個が複合した非常に小型で厚壁の管孔が散在し、周囲・接線状の柔組織が顕著な環孔材である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、1〜2細胞幅である。おもに温帯に生育する落葉高木でシオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約9種ある。材は重硬で弾力性があり折れ難い。遺跡からは建築材・板・枕・柄・碗などの使用例がありよく使用されている樹種である。